一橋大学審査学位論文

博士論文

オリンピックと日本のテレビ放送

—2016 年リオデジャネイロ・オリンピックの放送体制、番組編成、ニュースの内容分析を中心に—

山本夏生

一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程

SD161021

OLYMPIC GAMES AND JAPANESE TV BROADCASTS：

FOCUSING ON THE CONTENT ANALYSIS OF TV NEWS PROGRAM, PROGRAM ORGANIZATION AND BROADCASTING SYSTEM DURING THE 2016 RIO DE JANEIRO OLYMPICS

YAMAMOTO,Natsuki

Doctoral Dissertation
Graduate School of Social Sciences
Hitotsubashi University

私は、博士学位請求論文を作成するにあたり、「一橋大学における研究活動に係る行動規範」＊および、本研究科の「大学院生研究倫理規範」＊＊を遵守したことを、ここに宣誓します。

＊「一橋大学における研究活動に係る行動規範」（2007年7月4日）

＊＊「一橋大学大学院社会学研究科　大学院生研究倫理規範」（2015年11月11日）

2023 年 3 月 30 日

学位申請者(自署)：　山本 夏生

目次

序章　先行研究の整理と本論文の課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第１節　問題意識と先行研究　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
１．メディアスポーツに関する研究状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
２．日本におけるテレビのオリンピック放送に関する研究状況　・・・・・・・・・8
１）メッセージ研究　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
２）受け手に関する研究　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
３）送り手に関する研究　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
４）３つの領域を超えた総合的研究　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
第２節　先行研究の問題点と本論文の課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

第１章　日本におけるオリンピック放送体制と放送権　・・・・・・・・・・・・・18
本章の課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
第１節　オリンピック憲章と「放送権」　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
第２節　国内の放送体制と JC 発足　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
第３節　欧米と日本の比較　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
第４節　放送権料の高騰と日本の放送体制　・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
本章のまとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31

第２章　リオ大会のテレビ放送の全貌　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
本章の課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
第１節 リオ大会の概要および日本選手団の競技結果　・・・・・・・・・・・・・34
１．リオ大会の概要と実施競技　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
２．日本選手団の競技結果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
第２節　リオ大会の中継競技決定の実際と放送計画　・・・・・・・・・・・・・・40
１．実際に生中継された競技　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
２．NHK のリオ大会放送計画　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
３．民放のリオ大会放送計画　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
第３節　リオ大会の視聴率と大会期間中の番組編成の実態　・・・・・・・・・・・53
１．リオ大会の視聴率　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
２．リオ大会期間中の番組編成の全貌　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
本章のまとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・67

第３章　ニュース番組によるリオ大会報道（1）：番組構成、選手／競技の報道に関する量的内容分析　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
本章の課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
第１節 リオ大会報道の位置と比重　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・71
１．５つのニュース番組のデータ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・71
２．リオ大会の報道のための特別体制　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74

３．番組の中でのリオ大会報道の位置　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・75
４．番組の内容構成とリオ大会報道の比重　・・・・・・・・・・・・・・・・・・78
第２節　報じられた競技の実態　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・84
第３節　報じられた選手の実態　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・87
１．競技関係者の全貌　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・87
２．報道件数が多い〈選手〉の実態　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90
１）競技、メダルとの相関　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・94
２）ジェンダーとの相関　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・95
３）外国人選手の報道実態　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・99
第４節　〈選手〉報道の内実：３分類によるグラデーションの把握　・・・・・・・・105
１．「競技結果のみの報道」の内実　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・107
２．「競技結果＋α の報道」の内実　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・108
３．詳細に報じられた選手 60 人：その報道内容を構成する要素　・・・・・111
１）報道を構成する要素からみたジェンダー差　・・・・・・・・・・・・・119
２）報道を構成する要素からみた国籍の差　・・・・・・・・・・・・・・・120
本章のまとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・121

第４章　ニュース番組によるリオ大会報道（２）：選手／競技の報道に関する質的内容分析　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・125
本章の課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・125
第１節　家族と人間ドラマ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・127
１．選手を支え、選手が感謝すべきものとしての家族　・・・・・・・・・・・128
２．家族が指導者の場合　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・135
第２節　ジェンダー問題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・139
１．選手と監督・コーチの関係の報じ方　・・・・・・・・・・・・・・・・・139
２．選手のあだ名や愛称　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・143
３．選手のプライベート　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・145
４．性別役割分業　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・148
５．パワーやライバルという男性性の象徴　・・・・・・・・・・・・・・・・150
６．プロポーズと LGBTQ の扱われ方　・・・・・・・・・・・・・・・・・・152
第３節　外国人選手の表象　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・154
１．ヒーロー・ヒロインという描き方　・・・・・・・・・・・・・・・・・・154
２．ライバルという描き方　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・159
３．国を背負う外国人選手　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・161
第４節　日本選手の競技結果以外を主役にした報道　・・・・・・・・・・・・163
１．身体能力に着目した報道　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・163
２．「日本の戦い方」がクローズアップされた事例　・・・・・・・・・・・・165
３．競技力向上の理由に着目した報道　・・・・・・・・・・・・・・・・・・168
４．競技情報や独特な練習方法が報じられた事例　・・・・・・・・・・・・・172
５．「お家芸」として描かれた競技　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・173

６．監督を主役にした報道　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・178
１）柔道の井上康生監督　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・179
２）シンクロナイズドスイミングの井村雅代コーチ　・・・・・・・・・・・・・・184
第５節　オリンピック理念とニュース報道　・・・・・・・・・・・・・・・・・・186
１．日本選手のメダル獲得状況の伝え方　・・・・・・・・・・・・・・・・・・187
２．平和と難民選手団の扱われ方　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・191
３．リオ大会のネガティブな事件や問題の扱われ方　・・・・・・・・・・・・・・191
本章のまとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・192

終章　総括と今後の課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・196
第１節　総括　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・196
第２節　今後の課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・199

引用・参考文献　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・201

序章　先行研究の整理と本論文の課題

第１節　問題意識と先行研究

筆者にとってオリンピックは、憧れの舞台だった。幼いころから競泳に打ち込んでいた筆者は、ジュニアオリンピックに出場し、当たり前に「オリンピックに出場してメダルを獲ること」が人生の目標になっていた。小学生だった当時、競技の世界大会やオリンピック中継、ニュースだけでなく、アスリートが出演するバラエティ番組も隈なく見た。テレビが報じるオリンピックと出場選手たちは非常に輝いて見えた。

しかし、マスメディアやジャーナリズム、スポーツ社会学の研究対象としてオリンピックを考えた場合、そうしたまっすぐな思いだけでは到底捉えられない複雑な問題が山積している。筆者にオリンピックのテレビ放送の在り方に疑問を抱かせたのは、以下のような２つの実体験であり、これが本論文のテーマの伏線となっている。

一つ目が、2014 年 11 月に日本スポーツ振興センターのオリンピック選手の発掘をめざした合同トライアルに参加した体験、二つ目が、2015 年 4 月にマイナー競技であるフィンスイミングの第 2 回世界学生選手権大会でメダルを獲得した時の体験である。前者の合同トライアルはメディアの注目を浴び、ネットニュースやテレビ番組で「未来のオリンピック選手かも？」などと報じられ、私自身もニュースに取り上げられた。ただし私の場合は、私が東大の大学院生であるということ、つまり競技能力ではなく学歴自体がクローズアップされた。他方、フィンスイミングでのメダル獲得は、それが国際大会であるにもかかわらず、小さなネットニュースにすらならなかった。これらの実体験は筆者に、スポーツやオリンピックがニュースに報じられるとき、いったい何が重視されているのか、というテレビに対する素朴な疑問をまず抱かせた。そして、競技による差異はあるのか。あるとしたらどんな差異が生じているといえるのか。競技以外に情報の差異を生み出すものがあるなら何がそのバイアスとなっているのか。オリンピックがなぜこれほどまで特別扱いされるのか。こうした様々な問題意識を生むこととなったのである。

一方、メディアに対する信頼度は 2011 年東日本大震災を境に低下し、ネットニュースの台頭を経て人々の情報取得方法は分散されつつある（新聞通信調査会 2012）。夏季オリンピック・リオデジャネイロ大会（以下、リオ大会）が開催された 2016 年は、英オックスフォード出版社が最も注目された言葉として「post truth（ポスト真実）」を発表した年だ。ある情報が真実か嘘かを重要視せず、自分たちが信じたいものが真実であるという考え方が強まったとされる。インターネットによる情報爆発を経て人々は、自分自身がアクセスしたい情報のみを探し、獲得するようになった。自分自身が好む情報にしかアクセスしないため、得られる知識に偏りが生まれてしまっているのである。テレビをはじめとしたマスメディアは、そうした情報環境の中で、より一層多様な情報を提供し続ける必要があるが、2016 年に国際ジャーナリスト組織「国境なき記者団」（RSF、本部パリ）が発表した世界各国の報道自由度ランキングで、日本は 72 位（180 か国中、前年から 10 以上マイナス）を記録

した[1]。このランキングは、メディアの多元性、メディアの独立性、多様性、透明性、メディア環境と自己検閲、法的枠組み、透明性、ニュースと情報の生産を支えるインフラの質を評価基準とするものだが、2002 年のランキング作成以来、日本は年々順位を下げており、2016 年以降も 60 位台を低迷し、2022 年時点で日本は 71 位である。

本論文は、こうした放送の偏向性／多様性の問題が焦眉の課題となっているという問題意識にもとづき、日本における 2016 年リオ大会のテレビ放送を考察するものである。以下、本節では本論文の課題および研究上の位置を明確化するために先行研究を整理していく。

１．メディアスポーツに関する研究状況

リー・トンプソンが、「そもそもマスメディア抜きのスポーツを想定することは無理であろう。スポーツはマスメディアとともに発展してきたからである」（トンプソン 1998：144）と端的に表現しているように、スポーツとメディアはきわめて強固な関係を築いてきた（橋本［1988］2009：246 など）。

テレビの登場以降には、「制作のコストと効率という観点から、〔…中略…〕特にスポーツはニュース性、ドラマ性、オリジナリティーという TV ソフトに要求される要素を完全に兼ね備えた、コスト・パフォーマンスが高いソフトとして注目される」ようになった（広瀬 1997：13）。瞬く間にテレビのなかにスポーツやスポーツ選手が取り込まれ、情報として生産・消費されるようになったのである。

メディアがもたらすポジティブな影響として B Enos が指摘するのは、スポーツの発展と成長への貢献である。たとえば報道されることによって人々が多様なスポーツがあることに気づき、スポーツ人口が増えることでコーチとしての雇用が増え、また、サッカーのように人気の競技は他国への興味関心を人々に与え、クリケットのような競技はその国のイメージを他国と共有することができる(Enos 2022: Conclusion section,para.1-3)。

その一方で、ネガティブな影響についても多くの研究が積み重ねられている。Kinkema and Harris は、メディアスポーツ研究を、①国際、国家および地域性の影響、②人種差別、③性差別、④商業化の影響、⑤勝敗の影響、⑥薬物使用、⑦暴力の 7 つの領域に分類している（Kinkema＆Harris 1998:34）[2]。どの領域もネガティブな影響を追究するものとなっている。例えば、①の領域では、特にナショナリズムとの関係が中心をなしており、具体的には、視聴者の自国の成功に対する期待を煽り、番組への興味を持続させるための常套手段として、過去の勝利の映像を使用したりメダリストを解説者として登用していると指摘する

---

[1] 2016 年のランキングの理由に、日本のジャーナリストは厳格な法律によって『国家の秘密』（第一原発事故や皇室、国防など）の調査を自主規制させられていることや、ニュース番組の中でも圧力に臆さない発言を繰り返してきたキャスターら（国谷裕子、古舘伊知郎、岸井成格など）が一斉に降板した問題を取り上げ、「安倍晋三政権はメディア規制を強め、市民の知る権利を奪っている」と指摘している。（HUFFPOST 2016:第 3-4 段落）。なお 2022 年の日本の状況について、「議会制民主主義である日本は、一般的にメディアの自由と多元主義の原則を尊重していますが、伝統とビジネスの利益により、ジャーナリストは番犬としての役割を完全に果たすことができないことがよくあります」と評価され、71 位という順位となっている（Reporters without borders 2022）。

[2] Rowe,D. and Stevenson, D(1995)も、メディアスポーツの内容を対象とした多くの研究が、性や人種／民族による差別など、その内容に表れるイデオロギーを批判するものであると指摘している（トンプソン 1998:149）。

Farrel(1989)や、オリンピック放送でユニ・ラテラルカメラを使用して自国選手をクローズアップしているという実態を明らかにした Rowe & Lawrence(1986) などの研究がある（神原 2001:43-4）[3]。

他方、Lawrence A. Wenner は、21 世紀のメディアはスポーツによってますます浸食されるようになっているという。日刊紙やテレビ、ローカルニュースにおけるスポーツの報道量が増加する一方で、政治や地域ニュースが犠牲となっていると同時に、衛星放送やケーブルテレビがスポーツ番組の放送を新たな戦略とし、拡大しようとしているというのだ。こうした状況に対し、スポーツ研究、メディア研究、ジャーナリズム、そしてカルチュラルスタディーズなどの分野の主要な専門家がメディアスポーツの研究を重ねており、その視座として Wenner は、「スポーツのマーケティングと商品化」「ジェンダーや人種、スポーツのメディアの扱い方」「ナショナリズムとスポーツのグローバル化」「暴力、ファン研究、観客の体験」「ポストモダンにおけるスポーツとインターネットの媒介関係」の 5 つをあげ、こうした研究は、スポーツとコミュニケーションの世界との関係性に関する最新の考え方に重要な見通しを提供してくれるはずだと述べている（Wenner 1998:i）[4]。

トンプソンは、スポーツをスポーツ制度とスポーツをみる体験の２つに大きく区分したうえで、メディアがそれぞれに与える影響について、とくに議論が集中してきた問題に焦点を合わせて先行研究を整理している。前者は、メディアがスポーツのルールや観客数、実践者数へ与える影響、スポーツの商業化に関する研究である。後者の研究では、テレビのスポーツ放送の内容が、報道、娯楽、ドラマという番組制作の３つの基本的要素のうちのどれにウエートが置かれるかによって、映像の選択やパターンが異なること、また、これらの３要素の間での緊張やそれをめぐる議論が生み出されていることなどが紹介されている。さらに性や人種／民族による差別の問題を探究した内容分析研究、また、オリンピック放送の視聴を世俗宗教として解釈する Rothenbuhler,E(1989)など、メディアの受け手研究にも言及している（トンプソン 1998:138-56）。

以上のようなメディアスポーツ研究において、研究テーマとして大きな位置を占めているのがオリンピック放送である。そのうち放送の内容に関する研究で、蓄積がなされてきているのが、アメリカでオリンピックの放送権を持つ NBC の放送（中継やニュース）を対象とした一連の研究である。

Roxane Coche &C. A. Tuggle は、ジェンダーやマイナースポーツという観点からオリン

---

[3] なお、神原はこれらの 7 つの領域の研究について詳細な解説を行なっており（43-50）、本論文にとっても示唆に富む。

[4] なお、Wenner は研究方法について、メディアスポーツ研究が、伝統的なコミュニケーション研究と、カルチュラルスタディーズの両方で描かれたモデルを利用しながら、機関、テキスト、視聴者の 3 者の相互作用によって形作られてきたとしているが（Wenner 1989:8）、このような主張に対しては、日本でも議論がなされてきた。たとえば橋本政晴は、Wenner は「送り手→メッセージ→受け手」という直線的なコミュニケーションのプロセスの中でメディアスポーツを理解しようとしているが、3 つの領域間の関係性をとらえるためには、番組制作に用いられる技術・技法や、プロデューサーや記者たちが依拠している価値観などがどのようにテクストに反映されているのか、また、そのテクストは日常生活の中で経験するメディアスポーツをどのように枠づけているのかといった視点が必要であると指摘し、メディアスポーツを下支えしている人々や彼らの生活をもとらえる必要性について問題提起を行なっている（橋本［2002］2009:17-41）。大橋充典・西村秀樹も、Wenner の示した 3 つのカテゴリーではなく新たな分析視点も必要だとし、2000 年以降の日本のメディア・スポーツ研究を「媒体」「コンテンツ」「フレーム」を中心に検証している（大橋・西村 2020:48）。

ピックを分析し、多くの場合女性スポーツを含むマイナースポーツは、オリンピック競技の放送以外ではほとんどメディアの注目を浴びないため、オリンピック中継は、すべての女性スポーツを含むマイナースポーツの選手にとって特に重要であると主張する。そのうえで、NBC 放送のプライムタイムにおけるリオ大会放送を検証し、性差別はないが、放送のほとんどをスーパースター（フェルプス、バイルズ、ボルト、ケリー・ウォルシュなど）やユニークなストーリーや人物（ロクテの狂言事件や 74 歳の南アフリカのボタ監督など）に割いており、放送におけるスポーツの多様性が明らかに欠如していること、実際の放送の現実は、そうした役割を果たすものにはなっていないと結論づけている。（Coche and Tuggle 2017:199-217）。

トンプソンも、Billings et al.のオリンピック・ロンドン大会の NBC の報道分析を、以下のように紹介する。

> 2012 年ロンドン大会における NBC ゴールデンタイム放送の中で NBC 従業員（アナウンサー、解説者、レポーターなど）の発言を分析し、発言の半分以上（55.8%）はアメリカの選手を取り上げたことを明らかにした。ゴールデンタイムの放送で最も多く言及された選手 20 人のうちの 15 人（75%）はアメリカ人であったし、トップ 10 人中 8 人、トップ 4 人全員はアメリカ人との結果も出た。そして放送で取り上げられた外国選手の攻勢にもアメリカ選手への関心の偏りは見られた。言及された選手の 44.2%はアメリカ人ではない外国選手であったが、その大半はアメリカ選手と直接対決のある選手であった。（トンプソン 2017: 28）

オリンピック放送では特に他国をライバル扱いし、自国の選手であるアメリカ人選手に焦点が合うことで、他国のメダリストの存在が見えなくなるのである[5]。

リオ大会の NBC の報道に対して、CNN の Brian Lowry 記者は莫大な放送権料に理解を示しながらも、その内容がアメリカの選手の活躍に偏重しており、それもアメリカの選手を多く取り上げるだけでなく、報道よりも応援（cheerleading）になっていることを視聴者からも指摘されているとしたうえで、アメリカのオリンピックの評価は、自国の選手が良い結果を出すと確実に急上昇することも指摘している（Lowry 2016: Conclusion section,para.4）。

また、トンプソンは、アメリカにおけるオリンピック放送が、事前取材に基づいてどの選手が活躍しそうか、その選手に関する面白そうなエピソードなど有力なストーリーを集めた資料集を参考に制作スタッフが大会に臨んでいること[6]、また、昨今の米 NBC のオリン

---

[5] ロンドン大会競泳の 400m個人メドレーの決勝レースで、日本では「水の怪物」と呼ばれるマイケル・フェルプス選手が金メダルを逃し、同じアメリカ代表のライアン・ロクテが金メダルを獲得した。ロクテは米国代表選考会ではフェルプスを破っており、また世界選手権も 2 連覇中でまさしくフェルプスのライバル的存在で、ロンドン大会では金メダルを含む 5 つのメダルを獲得した。結果的に、銀メダルはブラジルのチアゴ・ペレイラ選手、銅メダルは日本の萩野公介選手が獲得したが、アメリカ人ではない彼らへの言及は 7 回と 5 回にとどまり、その会話のほとんどがアメリカ代表の 2 人が占めていたとされる（Billings et al. 2014: 112）。

[6] この点に関連して、NBC スポーツ会長だったエバーソルの「オーディエンスの圧倒的な多数は障害を

ピック放送に対する批判の多くが、競技をカットしてまでパッケージ化された「人情話」のストーリーを流していることにあるとし、選手が乗り越えなければならない試練を誇張した「競技以外の側面を報道すること」がスポーツ報道の大きな問題であると指摘している（トンプソン 2017:28）[7]。

以上のようなオリンピック放送をめぐる問題は、ピエール・ブルデューがベルリン哲学協会 1992 年次大会でスポーツ研究のために報告した「オリンピック――分析のためのプログラム」の中の以下のような研究課題を実証的に追究したものとしてとらえることができるだろう。オリンピックが国の代表者同士の対決を報じることとなることから、「オリンピックのテレビ映像は、スポット広告が載る媒体として市場の論理に従う商業生産物となる。それゆえ、可能な限り多数の視聴者に可能な限り長期間にわたり届き、視聴者を引き付けるべく考えられなければならない。すなわち、テレビ映像は、経済的に支配的な諸国のプライムタイムにあわせて提供されなければならず、視聴者の需要に従属しなければならない。つまり、特定のスポーツに対する各々の国の視聴者の好み、あるいは、その国民的なまたはナショナリズム的な期待に順応するために、自国民が勝って、視聴者のナショナリズムを満足させることのできる種目や試合を周到に配慮して選択するのである」（ブルデュー 2000＝2008: 141）[8]。

では、日本のメディアスポーツを対象とした研究はどのような状況にあるのか。

神原直幸は、社会的影響力が大きいマスメディアには高い水準の公共性が求められているが、日本におけるスポーツ自体の地位の低さゆえ、「スポーツ情報の偏り」が生じており、それが問題なのだと主張する。さらにスポーツの情報は、我々に到達するまでの段階で、すでに何段階もの修辞的回路を経ており、視聴者である私たちに至るまでメディアによる制約を受けているとし、メディアがどんな情報を送り出そうとしているのかに着目することの重要性を主張し、自身で、テレビで中継されたスポーツの「テレビ編成」、「テレビ映像」の分析、そして番組視聴に伴う心理的影響の 3 つのアプローチから実証的な研究を行なっている（神原 2001: 9-40）。

乗り越える人物のストーリーを聞くためにオリンピック放送にやってくる。スポーツ［だけ］を見るためにやってくる視聴者は、どのスポーツイベントにでも集まる」と発言している（Billings 2008: 40）。

[7] こうした送り手の事情について NBC の制作者らの貴重な証言をまとめたものが、Billings et al.の *Olympic Media: Inside the Biggest Show on Television* である。メディアの報道内容のラインナップについて決め手を持つのはプロデューサーらであり、オリンピックのテレビ放送（Olympic telecast）において、何を見せるか（選択）、何を多く見せるか（強調）、そして何を避けるか（除外）の 3 点からオリンピック素材の報道を判断し（Gitlin 1980）、高い視聴率を生み出すことに加えて最も完全なオリンピック体験をテレビ放送しようとしてきたとされている（Billing 2008:23）。NBC では、7 年前からテレビ放送の準備を行い、17 日間というオリンピック放送を成功させるための大枠を決めているとの記述もある（Billings 2008: 29）。

[8]神原は、1974 年以降 1996 年までの偶数年、そして 1997 から 1999 年の隔年に競技中継されたスポーツのテレビ編成を検証している。その結果スポーツ中継種目の選び方は、一定の視聴率が確実に期待される種目や対戦カードに過度に集中しており、人々の多様なスポーツが見たいという期待に応えるものとはなっていないと指摘する(神原 2001：58-98)。さらにオリンピックに限らず、世の中には多くのスポーツ種目、球団、選手が存在しているが、「メジャースポーツ」「人気球団」「スター選手」と呼ばれるものが、そのうちごく一部に集中している点について、スポーツに対する我々の知識のほとんどがメディアを通したものであることに起因すると考えられ、何の種目を見るか、どの角度で見るか、映像に乗せられる音声など、さまざまな要因が送り手によって規定されていると指摘している（神原 2001：40-2）。

また、「スポーツ情報の偏り」について阿部潔は、「私たちが日頃からどのようにしてスポーツに接しているかを振り返れば明らかなように、メディアによって取り上げられ／伝えられ／映し出されることで，現在のスポーツは知名度や人気を誇っているといっても過言ではない。逆にいえば、メディアの注目や関心を集めることのないスポーツは、たとえその競技内容がどれほど奥深いものであっても、多くの人びとに知られることがない。いわゆる『マイナー・スポーツ』とは、メディアが伝える報道／映像においてマイナー＝周縁的な位置に追いやられているスポーツにほかならない。逆にいえば、メディアが大々的に報じることで、それまでは比較的知られていなかった＝マイナーであったスポーツが、一気に人びとの興味・関心の的になる」（阿部 2008:2）と指摘している。阿部自身が試みたのは、ジェンダーやナショナリズム、政治など多様な視点からスポーツの表象を読み解くことであった。

競技だけでなく、人気選手に報道が偏る可能性について橋本純一は、力道山、長嶋茂雄、イチロー、中田英寿、松井秀喜、北島康介、浅田真央らの名前を挙げ、「われわれはそれぞれの社会において選ばれるに値する（適した）ヒーローを選んでいる。そして実質的に選んでいるのは、ほとんどのケースにおいてメディアである」と、テレビに取り上げられる選手の決定権が送り手にあると指摘している（橋本 2011: 22-5）。

こうしたメディアによる決定の問題の中でも、放送内容が競技自体から逸脱しすぎているといった批判は根強く、その最たるものが人間ドラマやヒューマンストーリー、人情話とされている（藤原 1988、森田 2009、滝口 2008、深沢 2009、大野 1996、稲垣 2017、トンプソン 2017）。例えば大野晃は、アトランタ大会での「史上最強の日本競泳女子陣」「メダルに接近女子マラソントリオ」「金確実のヤワラちゃん・田村」などの期待を煽る情緒的報道を指摘（大野 1996: 25-7）し、滝口隆司は、アテネ大会の浜口京子選手について、親が子を応援するシーンを撮影するために日本の取材陣が殺到し IOC が日本のメディアの行動を問題視したことなどをあげて、本来は勝負の中にあるべきドラマが勝負の外に出てしまうと、あらぬ方向に話が進み、選手との信頼関係も損なわれると指摘している（滝口 2008:22-4）。

なお、性差別の問題を探究した内容分析研究は、日本においても一定の蓄積がある。オリンピックのテレビ放送に関する研究は次節で取り上げることにし、ここではそれ以外のものをみておきたい。たとえば新聞の紙面の幅や内容を検証材料としたのが飯田貴子らによる研究である[9]。飯田は、オリンピックのシドニー大会をテーマに、女性選手の報道量の少なさや性別役割分業に押し込められる女性選手の姿を見出し、稲葉佳奈子もシドニー大会などを対象とし、女子マラソン・高橋尚子と小出監督、競泳・中村真衣と竹村コーチなどの「二人三脚」、競泳・田島泰子の「普通の女の子らしさ」、そしてモーグル・上村愛子の「アイドル」性などを具体例に、女性選手だからこそ描かれる「師弟」関係や、「アイドル性」、「普通の女の子らしさ」が繰り返し用いられ浸透し続けることによって、いつしか確固たる

[9]楢崎教子選手は 1996 年アトランタオリンピックで銅メダルを獲得（旧姓菅原）、その後結婚し 1999 年世界選手権優勝、2000 年シドニーオリンピックでは銀メダルを獲得した。飯田貴子は、1996 年時点では「女子 52kg 級」としか記述されていなかったのが、世界選手権では「ミセス楢崎」「世界一の妻」「奥さん王者」という既婚女性を表す言葉が見られたことについて、スポーツにおけるキャリアを矮小化するものであり、「妻となり母となる」女性性を構築していき、強く逞しい女性競技者を、従来のジェンダーの枠組みに閉じ込めようとする送り手の意図が見て取れると指摘している（飯田貴子 2003）。

「あるべき本質」であると認識されかねないと指摘している（稲葉 2001: 72-8）[10]。阿部も、スポーツ競技における男らしさや女らしさに着目し、女性選手を見つめる「男の眼差し」について、ビーチバレー競技の女性選手の事例から問題提起している(阿部 2008:24-31)。また、男性性の描き方にも着目し、男同士のライバル関係や友愛関係がスポーツにおける美しいものとして描かれるのに対して、女同士の絆は存在したとしてもスポーツのなかでは素晴らしいものとされにくいと指摘し、スポーツにおけるジェンダー描写の偏りを女性性の表現にとどまらず男性性の表現のパターン化にも切り込んで提起している（阿部 2008:60-4）。

日本のメディアにおける人種／民族による差別問題やナショナリズムに関する研究としては、トンプソンや阿部などによるものがあげられる。トンプソンは、日本のメディアにもっとも多い人種言説として、欧米で問題視される人種問題よりも、「日本人種」をあげる。「日本人種」とは、外国人選手と比較される際に、日本人の身体的特徴（体格が劣る）や戦い方（チームワークなど）に注目した描写のことで、この「日本人種」描写のステレオタイプ化が依然注目されていないことに警鐘を鳴らしている（トンプソン 2008：36）[11]。こうした日本人選手が取り上げられる機会が、オリンピックやワールドカップなどの世界的な大会に顕著であることから阿部は、4 年ごとに開催されるオリンピックでは、日ごろそれほどスポーツ競技に関心を持たない人でも、日本代表選手や日本チームの活躍に注目し、熱い声援を送ること、そこには同時に、各国のナショナリズムのぶつかり合いも見て取れるとし、日ごろナショナリズムとは無縁だと思っている人でも、オリンピックの熱狂のなかで「日本人／日本国」の活躍に一喜一憂している自分を見つけることは、けっして珍しくないだろうと指摘する（阿部 2008:134-5）[12]。

ごく少数であるが、送り手に関する研究もなされている。橋本政晴は、実際に放送局のテレビ中継の現場とスポーツニュース番組の現場で調査を行い、「メディア・テクノロジーによる強い支配があることから生まれた暗黙のマニュアル（制作の手法）の下で、テレビ・ス

---

[10] トニー・ブルースが明らかにした以下のようなスポーツウーマンのメディア表象 15 のルールは、日本のメディアスポーツを対象としたジェンダー研究においても重要であると思われる。①商品価値を低めた報道、②ジェンダー冠詞、③子ども扱い、④スポーツと無関係な側面、⑤男性スポーツとの比較、⑥スポーツウーマンは重要ではない、⑦異性愛の強制／あるべき女らしさ、⑧性的存在化、⑨両面性、⑩活動するアスリート、⑪本物のアスリート、⑫市民のモデル、⑬私たちと彼ら、⑭私たちの声（代弁）、⑮きれいかつパワフル。これらが誰によって作られ（男性か女性か）たのか、過去の報道傾向に強いものはどれか、継続して報じられているのか、現在の報道傾向として新しい・特筆すべきものなのかなどを検討している（ブルース 2017: 43）。

[11] なお森田浩之は、2002 年に日韓共同開催で行われたサッカーワールドカップの新聞報道を中心事例に、日本代表の決定力不足や、組織力といったステレオタイプな表現を「サッカー日本人論」と表現した（森田 2007:162-75）。さらに「世界レベル」「世界に挑む」「世界の舞台」などと、「世界」は「日本」にはないものをもっており、つねに格上の存在なので「日本」のパフォーマンスを評価する基準になっていることまでも指摘する。（森田 2007:153-7）

[12] 坂上康博も、スポーツの大会開催が国際平和につながる可能性があるにもかかわらず、日本のメディアは、オリンピックやW杯などがもつ“平和構築の力”について無自覚であり、実況中継や報道の在り方は、対戦相手に対するむき出しの敵愾心や自民族中心主義を煽り立てるほど悪質ではないが、それにかなり近い、とメディアの取り上げ方に疑問を投げかけている（坂上 2015: 14）。また、砂川浩慶は、「メディアは五輪をどう伝えるべきか」という論考の中で、「スポーツを報じる際、『戦』という言葉が普通に使われる」ことや国歌斉唱・国旗掲揚が行われることについて、国対国がクローズアップされるオリンピックでは、ナショナリズムが喚起されることを指摘している（砂川 2016: 13-4）。

ポーツが作り出されており、それがゆえに、スポーツ番組には共通した特定のパターンが生み出されていた」と指摘する。また、「いつ、だれが見ても面白く、分かり易い」番組を期待されていると制作者自身が感じており、視聴者たちの「ウケ」をイメージし意識することで、それに対して制作のメカニズムや手法が生み出され、結果として視聴者たちの期待に合致した番組が画面に映し出されているとした。これまでの「制作者たちからの一方的な視聴者たちへの伝達としてのテレビ・スポーツ」という見方に対し、テレビのテクノロジーや視聴者の存在を制作者が意識することで生じる「特定のパターン化」という問題を新たに提起した（橋本 1997：71-84）。これ以降、スポーツドキュメンタリー制作者のインタビューとその制作番組を分析した阿部（2008）[13]やスポーツバラエティ制作者に焦点を当てた山本（2018）があるが、送り手について深く追究した研究はほとんどない[14]。

メディアとスポーツとの関係性が強固になる中で引き起こされている放送権料の高騰やスポーツイベントの商業化、スポーツにエンタメ性が要求されるといった問題についても批判的な指摘がなされている（早川 2001、神原 2001、須藤 2005、ベズニエほか 2020、村瀬・冨田 2022）。中でも須藤は、メディアがスポーツを重要なものとして抱えこもうとすればするほど放送権の高騰を誘引し、また、放送権にスポーツ界が依存することで、テレビ局の経営状況にスポーツが左右される事態を引き起こす可能性をイギリスのデジタル放送局 ITV デジタルの事例から示唆するとともに、どのスポーツ中継がどのように編成されるかはひとえにメディア企業の戦略的判断にゆだねられていることに注意を促している（須藤 2005: 32-3）。

以上のように、スポーツがメディアとの強固な関係を築くようになったことから発生する諸問題について、メディア研究やジェンダー研究、スポーツ社会学研究、オリンピック研究などのさまざまな分野で研究が蓄積されてきた。研究の視座も、ナショナリズムや人種、ジェンダーなど多岐にわたり、スポーツ情報そのものの内容分析はもちろん、情報を送り出す送り手側の研究も一定の蓄積をみせている。

２．日本におけるテレビのオリンピック放送に関する研究状況

日本のメディアがオリンピックをどのように報じてきたのかという問題については、テレビの登場以前の新聞やラジオを対象とした浜田幸絵（2016）や坂上康博（1998）などがある。また、テレビの登場以降の新聞報道については、飯田（2003、2005、2008）のシドニー大会をはじめ、ソチ大会の内容分析（山本清文 2015、山本・武内 2016＝2017）、上杉・東山（2022）のコロナ禍のテレビと新聞報道を検証したもの、メディアから発信されるメッセージとスポンサーとの関係性に切り込んだ森津千尋（2022）など多岐にわたる視点で

---

[13] 阿部は、シドニー大会のマラソン女子のドキュメンタリー番組を事例に、番組の内容分析と制作者のインタビューから、スポーツドキュメンタリーで伝えられる選手の凄さの衝撃さえも剝き出しのまま伝えられるのではなく、感動の物語に取り込まれて伝えられることなどを明らかにしている（阿部 20008:121）。

[14] 山本（2018）以降、スポーツの番組の制作者らへの取材を行ってきたが、筆者自身、女性制作者には 3 名しか会えておらず、ほとんどが男性であることは明らかだと思われる。この問題についてはまたほかの機会に検証を行いたい。

検討されてきた。また、スポーツの新聞報道を担う記者自身による検証もなされており、自国の選手の報道量が増し、報道内容が人間ドラマに偏っている状況について、自戒の念を込めて「日本県版」（滝口 2008:5）、「メダル原稿優先主義」「国体紙面」（稲垣 2016:17）、などと批判を加えている。

ではテレビによるオリンピック放送に関する研究状況はどのようなものなのか。その多くがニュース番組を対象としたものであることが特徴的であるが 、ここでは、(1)メッセージ研究、(2)受け手研究、(3)送り手研究という３つの領域に研究群を区分したうえで、これらに包括できない複合的なものを、(4)３領域を超えた総合的な研究として別途区分し、先行研究を整理してみたい。

１）メッセージ研究

日本におけるオリンピック放送のメッセージ研究について、量的内容分析と質的内容分析に区分しながらみていきたい。

量的内容分析の手法は、先にみたような新聞を対象とした研究でも用いられているが、テレビ放送を対象とした研究は、とくに 2008 年北京大会以降に本格化した。オリンピック期間に放送されるテレビニュースの報道量に着目し、オリンピックニュース分数や比率の検証に加えて、競技間や選手間での報道量の偏り、ジェンダーバイアスの有無、外国人選手の報道の少なさなどが明らかにされてきた（稲葉 2001、飯田 2003、横山 2007、上瀬 2007、小玉ほか 2012、中ほか 2015、小林 2017,2019）[15]。この分析を牽引してきたのは、ニュース研究者、そしてジェンダー研究者らである。

小林直美は、国際テレビニュース研究会が行った 2012 年ロンドン大会の内容分析データを使用し、オリンピック選手のジェンダー表象について再コーディングを行っている。ロンドンオリンピック開催期間中のニュースの約９割は日本選手の報道で占められ、その内日本の女性選手が 424 回（48.8%）と最も多く取り上げられていた一方、他国の選手についての報道はわずか 76 回（9.0%）にとどまったとしている。また、ロンドン大会におけるメダル獲得のニュースの報道量について、日本がメダルを獲得した競技のニュースが全体の 81.6%を占めており、男性選手１位は水泳（10.2%）、女性選手１位はサッカー（12.9%）だった一方、まったくニュースで取り上げられなかった競技はボート、セーリング、自転車、近代五種、カヌー、テコンドーなど多くあったことなどを明らかにしている。このことから、ロンドンオリンピック開催期間中のオリンピックニュースは、日本選手（特にメダリスト）を取り上げた内容で席巻されていたことを明らかにした（小林 2017:31）。

小林はさらに、リオ大会を報じた２つのニュース番組（NHK「ニュースウオッチ９」と日テレ「NEWS ZERO」）を対象とした検討を行っている。オリンピック開催期間中のニュースはブラジルをニュースの発生地[16]とするスポーツニュースが約３割（27.0%）を占め１位だったこと、報道回数の男女差が、女性が 45.6%、男性が 53.6%という結果を導き出し、

---

[15] なお、報道量の具体的な分析を行った小玉ほか（2012）は、３つの領域を超えた総合的研究であるため、後述する。

[16] 「ニュースの発生地」とは、そのニュースが発生した国のこと。

選手の競技成績に比例したものであることを指摘した。選手のプライバシーに関しても「過去や未来」、「監督・コーチ」等選手の競技背景がわかる項目については男女同程度の言及であること、しかしそれ以外の項目において女性選手が「親・兄弟姉妹」に留まるのに対して男性選手は幅広い関係者が取り上げられる傾向にあったことを指摘している（小林 2019:15-25）。

上瀬由美子は、オリンピックとナショナリズムという視点から、2004 年アテネ大会、2006 年トリノ大会時にニュースに登場した外国人選手の国籍や種目、報道の内容について量的内容分析を行ない、アテネ、トリノともに多く登場した国のほとんどが日本の団体競技の対戦国、あるいは活躍した日本人選手のライバル国となっていること、個人名が提示される選手のほとんどが日本人選手のライバルとして登場していたことを明らかにした（上瀬 2007: 276-82）。

外国人選手の報道という論点はさらに小林によって引き継がれ、報道された選手の国籍は、ロンドン大会では 9 割以上（91.2%）を日本代表選手が占め、リオ大会でも約 9 割（89.6%）を占めており、外国人選手の報道は約 1 割（8.8%、10.5%）であったと指摘している（小林 2017:31,小林 2020:8）。

一方、上瀬は、量的内容分析に加えて、ライバルフレームを用いて他国の選手がどう描かれたのかを質的観点からも検討している。その結果、ニュースに占める外国関連ニュースの割合を見ると、オリンピックは外国情報に接する一つの機会となっている一方で、生中継でオリンピックの現地が映る場合でもオリンピックスタジアム一角のスタジオからの放送のため、外国人の姿が映りこむことは少なく、試合結果の紹介に日本人選手のアップしか映らない場合が多かったという。このことから、オリンピックを通して諸外国の姿を伝えるという意識の薄さを指摘している（上瀬 2007：284-6）。加えて、登場した外国・外国人選手の情報を分類すると半数以上が日本人の対戦相手すなわちライバルとしての文脈で語られていたことに触れ、外国人選手個人に着目したニュースは 3 割弱と少なく、外国人選手の登場が日本選手の価値を高めるために利用されていると結論付けている（上瀬 2007: 287）。この視点を引き継ぎ、リオ大会を伝えるニュース内の外国人選手の発言の翻訳に着目した太田眞希恵は、ウサイン・ボルト選手ら外国人選手がテレビニュースに登場する際に翻訳されたテロップに着目して、彼らが日本人選手の活躍を後押しする形に利用されていることを指摘し、日本選手の価値が外国人選手らの活躍によってさらに高められるようだと分析している（太田 2017:26-45）。

横山滋は、自国の選手がテレビニュースの大半を占める、報道の応援放送化を批判している。横山は、2006 年トリノ大会の報道を分析した結果、各局の主要なワイド・イブニング・ニュースが一様に日本の有力選手のメダル獲得を期待し、一喜一憂しながら応援する形になっていることを明らかにしたうえで、オリンピック関連ニュースが応援報道一辺倒になり、他のニュースに比べて感情移入が許されているような実態になっていること、つまり客観的であるべきニュースのなかに「番組」的演出を加えかねないことを問題視した（横山 2007：291-310）。

深沢弘樹は北京大会のテレビニュースを分析し、メディアにとっては、勝ち負けがはっきりしていて選手や関係者、観客の喜怒哀楽がストレートに表出されるスポーツは「感動」と容易に結びつくジャンルであるとして、スポーツ報道はとりわけ「物語」になりやすい要素

を持つこと、さらに北京大会で見られた「人間ドラマ」としての家族愛や師弟愛、あるいは困難を克服する「物語」が、社会の規範やあるべき姿として構築され、人びとの意識に埋め込まれることになることを指摘した（深沢 2009：156）。さらに深沢は、全体的な傾向としてスポーツを取り上げる際の物語化の傾向は、むしろニュース番組に多いと指摘する。その理由として、試合展開をダイジェストでわかりやすく伝えること、すでに終わった出来事を視聴者に興味を持ってもらうための工夫の一つとして送り手の取捨選択のもと「物語」を提示していることの 2 つが要因であるとしている（深沢 2009：155-70）。

これら選手に付与される物語が、ステレオタイプ化を招くだけでなく、バイアスによって、ステレオタイプ化が加速させられるという指摘もある。例えばジェンダーの視点からは、報道量と描写の男女差や、「家族」や「師弟」として描かれる関係性に偏りを生じさせるとしてオリンピックニュースの研究が継続されているほか、特に女性選手が、「男の眼差し」や「性別役割分業」という固定概念にさらされ、選手の業績が監督・コーチによって矮小化したり、「〇〇ちゃん」や「〇〇王子」といった愛称で選手が呼ばれる報道も後を絶たないことも指摘されている（飯田 2001、稲葉 2001、森田 2009、小林 2017、小林 2019、山田 2022）[17]。

2）受け手に関する研究

受け手研究は、1988 年ソウル大会に関する高木栄作・坂元章の研究を嚆矢として、オリンピック期間における主催国および外国人イメージを分析したものがある（高木・坂元 1991、村田 1999、向田ほか 2001、村田ほか 2005、高比良 2006、向田ほか 2008、黄・日吉 2011、佐久間ほか 2017、下窪 2021）。

これらのうち高木・坂元（1991）は、オリンピックは平和の祭典であり、スポーツ競技を通じて世界の人々が相互理解を深めあうものと考えられているが、同時に各国の威信をかけたメダルの争奪競争であり「疑似戦争」であるともいえるとして、社会心理学の立場から諸外国イメージ（ソ連、東ドイツ、アメリカ、韓国、西ドイツ、ルーマニア、中国、イギリス、日本、カナダの 10 か国）の変化を、日本人大学生を対象にパネル調査したものだ。高木・坂元は、オリンピックでの他国の勝利・自国の敗北に関して、自己防衛的な知覚を行い、その民族がそれほど優秀でないと解釈しようとし、解釈しきれない部分についてはその民族が「不正義な」「悪い」民族であると信じることで勝利の正当化をする傾向、およびオリンピック情報が外国イメージの構造空間を単純化し、民族間の偏見を促進している可能性を示唆しており、未知なる民族の情報を提供することが受け手に与える影響について重要

---

[17]こうしたバイアスやステレオタイプが発生することは、スポーツ報道自体の問題であるという見方もされている（高橋 2006、森田 2009）。例えば高橋徹は、スポーツニュースを「すでに終わってしまった楽しみ」と表現し、サウンド的（BGM や歓声の効果音、キャスターの声）にもヴィジュアル的にも、つまり構造的にそのほかのニュースよりも「騒がしい」ものとして一定のパターンでめまぐるしく変化する独自の感情をもつ記号空間であるとし、「連勝ストップ」や「番狂わせ」「大逆転」といった視聴者の理解のための「わかりやすい」枠組みが用意されていることを明らかにしている。また、選手に着目し、主人公が活躍する物語として語ることによってわかりやすい楽しみを生み出し、「感動した」「感動をありがとう」などのステレオタイプな解説を通じて「わかりやすい」物語が生産されていくことを指摘するなど、その「わかりやすさ」がスポーツニュースの特徴であることを示唆している（高橋 2006：103-23）。

な提起を行なっている（高木・坂元 1991:109）。

向田ほかも、高木の実証研究を踏まえ、ケーススタディを積み重ねることの重要性に言及し、1996 年アトランタ大会時の検討を行っているが、その中で各国イメージの変化とメディア接触の量の検証に加え、報道の質的側面も含めて検討することの必要性を指摘している（向田ほか 2001：168）。

村田ほかはこうした状況を踏まえ、2004 年アテネ大会について学生だけでなく一般市民にも調査の幅を広げ、ナショナリズムがいくつかの外国人イメージに否定的影響を及ぼしている可能性を示唆した（村田ほか 2004=2006）。

NHK の放送文化研究所による世論調査も、受け手研究のひとつにあげられるだろう。同研究所は、国民の東京オリンピック・パラリンピックへの関心や意識・価値観の変化（の有無）などを明らかにするため、2016 年から 2021 年まで毎年継続して世論調査を行っている（鶴島・斉藤 2017：2）[18]。この中でリオ大会の視聴頻度については、全体で「ほぼ毎日」が 49%とほぼ半数を占め、「週に 3，4 日」と合わせると 7 割近くがかなり高い頻度で見ていたことがわかった。全体としては「よく見られたオリンピックだった」と評価したうえで、年齢層によって差があることを明らかにしている（鶴島・斉藤 2017：10）[19]。視聴媒体は「テレビ」が最も多く、「テレビ」で見た 50%の人が「ほぼ毎日」、以降「スマートフォン・携帯電話」（14%）、「パソコン」（6%）「ラジオ」（4%）と続き、テレビの影響力の大きさが際立っている（鶴島・斉藤 2017：10-3）[20]。

この調査では、リオ大会の印象に関する質問項目もあり、回答の選択肢として挙げられているのが、「日本選手の活躍」「世界記録の達成や、演技の素晴らしさ」「大会準備の遅れや、運営の不備」「治安の問題など現地の混乱」「ドーピング問題」「その他」である。回答では、「日本選手の活躍」と答えた人が 82%と圧倒的に多く、その理由として、日本のメダル獲得数が史上最多の 41 個（金 12、銀 8、銅 21）となり、それにともなってメディアの扱いが大きくなったことを反映したものだと分析されている（鶴島・斉藤 2017：13-4）[21]。

その他の研究としては、1996 年アトランタ大会のマラソン実況放送が視聴者に与えた快・不快感について検討した三宅（1999）、TBS テレビ視聴者サービス部に寄せられた視聴者の

---

[18] 初回の調査では、東京大会に関する意識に加えて、リオ大会をめぐる人々の関心と視聴実態についても調査を行ったようだ。調査は 2016 年 10 月 8 日～10 月 16 日の 9 日間、住民基本台帳から無作為抽出した全国の 20 歳以上の男女 3600 人を対象とし、配布回収法で実施された。調査有効数（率）は 2524 人（70.1%）であった。

[19] 特に中高年層での視聴頻度が高く、なかでも女 40・50 代では 6 割近くにのぼる一方で、若年層の視聴頻度は低く「ほぼ毎日」が 4 割以下にとどまったほか、「ほとんど・まったく見聞きしなかった」人も 1 割前後に達した。

[20]テレビでの視聴頻度は高いが、50 代以下に着目するとテレビだけに限定されず視聴するメディアが多様化している。また、生中継、録画、ハイライト、競技以外の関連番組の 4 つに分けて視聴頻度を尋ねた結果、時差によって競技中継の時間帯が深夜や早朝に集中したことから、若中年層は長時間の生中継放送を頻繁に見ることが難しく、ハイライト番組の頻度があがったという。

[21] 年代別の特徴としては、男 20 代が「日本選手の活躍」と答えた数値が最も低く 70%となった一方で「世界記録の達成や、演技のすばらしさ」が 13%、「大会準備の遅れや、運営の不備」が 4%という数値を出したことから、若年層では「日本選手を応援すること」だけが視聴の動機になるわけではなく、関心の方向性も多様な傾向がありそうだ、と結論付けている。また、「2020 年東京オリンピック・パラリンピックへの期待と意識」と題して、視聴者らの関心や意識・価値観の変化の有無などを明らかにするための世論調査も行っている（鶴島・斉藤 2017 ほか）。

声を分析した藤田（2016）がある。藤田は、選手の活躍を見せてもらえた感謝、感動、そういったドラマが見たいという「人間ドラマ」への肯定的な意見もある一方で、メダル至上主義的な報道への疑問や、技術的な視点で踏み込んだ番組の必要性を訴える意見もあったとしている（藤田 2016：29）。

3）送り手に関する研究

制作者への「接近の困難さ」（井上 1975:6）という問題は、日本のオリンピック放送の研究にとっても同様であり、送り手研究の壁となっている[22]。

番組制作者に関する研究は、皆無に近い状態であり、日本におけるオリンピックのニュース番組の制作者へのインタビューを試みた小林直美のものがほぼ唯一であろう。小林は実際にリオ大会のニュース制作に関わった制作者へのインタビューにより、次のような点を明らかにした。テレビニュース制作者は、日本人がメダルを獲得するとニュースで取り上げるということで方針が一致していたこと。テレビニュースの放送順序に大きな影響を与える要素は、その日の競技結果や、競技や選手の注目度や選手の出演の有無、制作者の考えであり、メダルを獲得した選手がニュース番組に生中継で出演しインタビューを受ける際のとりまとめはジャパンコンソーシアム（以下 JC、JC =Japan Consortium）が行い、JC が日本オリンピック委員会（以下 JOC、JOC＝Japanese Olympic Committee）に連絡をとり、各放送局は JC と連絡をとりインタビューの調整を行っているが、リオ大会時には、選手の生出演が、日本での放送開始時間の早い（リオ現地では朝 9 時に放送開始する）NHK の「ニュースウオッチ 9」から始まり、その後各番組に出演し、選手のインタビュー時間やその日の競技結果を考慮して、ニュースをどのような順番で放送するか考えていたことである（小林 2019:26）[23]。このように小林は、ニュース番組の構成を規定している要因や放送体制の一端を明らかにした。

放送体制を左右するものとして、欠くことができないものが放送権である。本橋春紀は、日本の場合はオリンピックの放送権自体を明確に保護する法律はなく、オリンピック憲章自体も国際条約でもないため法的拘束力はないが、放送権の獲得なしには、各競技の国際映像や実況中継を行うアナウンス席や独自のカメラポジション、選手へのインタビューなどを行うための映像取材許可証の発行などの権利を一切受けられないものだと説明している（本橋 2016：6）。

放送権に基づく日本の放送体制の問題点について、示唆的な発言を行なったのが砂川浩慶であり、JC 方式によってテレビ全局がオリンピック放送にコミットし、挙国一致的なオリンピック報道となっていることが、「巨大化した五輪の問題点を批判的に伝える」といっ

---

[22] 稲葉三千男は、送り手の構造の軽視と送り手の意識の軽視があること(稲葉 1964:27)、井上宏は、研究者側から送り手への「接近の困難さ」(井上 1975:6)によって、テレビ研究そのものにおける「送り手」研究が不足していると指摘している（松山 2017:52-3)。制作者の意識等に接近する方法としては、たとえば制作者が雑誌に寄稿した論稿などを分析するという方法もあるだろう。2021 年の東京大会の放送については、JC や各局ユニの制作者らが放送の技術的側面についてまとめた記事が見受けられる（松本・稲川 2022、岡田ほか 2022、古寺 2022、八木 2022、三浦ほか 2022、松本 2022)。

[23] 森田浩之は、スポーツニュースを伝えるのは若い女性であることが多いことを指摘しているが、この問題はたなざらしのままである（森田 2007:10）

たジャーナリズムとしての機能を弱体化していると指摘している（砂川 2016:13-4）[24]。

4）3つの領域を超えた総合的研究

メタデータをもとにメッセージの量的内容分析および受け手研究という2つの手法によって1つの大会のニュースを丸ごと捉えなおす試みが、NHK放送文化研究所によってなされている。この研究は、2021年東京大会の検討をメインに据えながらも、比較のために2012年ロンドン大会、2016年リオ大会にまでさかのぼり、8つのテレビニュース番組と、全国紙3紙の1面の分析から、報道量やニュースの優先順位（オリンピックがトップニュースとなった割合など）を検討し、東京大会はコロナ禍という特殊な状況下から、トップニュースの一位がオリンピックからコロナに置き換わったが、東京大会の報道量は、ロンドン大会、リオ大会と比べて同じか増加していることなどを明らかにしている（上杉・東山 2022: 5-18）[25]。受け手に関しては、Twitterの投稿数分析やテレビ各局・新聞各社が実施した世論調査のデータを検討し、開催前のTwitterの投稿数がリオ大会時よりも5～8倍に増加したこと、世論調査からオリンピック開催を肯定的に受け止める答えが多かったと指摘しながらも、コロナ禍の五輪報道を受け手がどう評価したかまでにはたどり着けなかったとしている（上杉・東山 2022:22-8）。メタデータ研究の普及により、このような一研究者には到底たどり着けない規模の検討も行われるようになっている。

そして、3つの領域すべて包括した研究が、小玉美意子が研究代表として行った「北京オリンピック報道」である[26]。この研究では、中国メディア（中国中央電視台）へのインタビュー調査（＝送り手）、日本のテレビニュース（NHK「ニュース7」、日テレ「NEWS ZERO」、テレ朝「報道ステーション」、TBS「NEWS23」、フジ「ニュースJAPAN」「すぽると！」）の内容分析調査（＝メッセージ）、そして中国イメージの大会前後の変化の検討にアンケートやフォーカスグループインタビュー調査（＝受け手）が用いられている。それらによって、どのような報道がなされ、テレビニュースは何を伝え、オーディエンスにどのような影響を与えたのかを、明らかにしようとしたものである。

---

[24] なお砂川は新聞においても「東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会」のオフィシャルパートナーに朝日、読売、毎日、日経の全国4紙が決まっていることも指摘している。このような新聞については、森津（2022）が対象とした大会は2020東京大会で、かつ新聞各社ではあるが、オリンピックに対する論調にスポンサーかそうでないかで差異が生じ、言論機関としての主体性があいまいであったと導き出している。この視点は、テレビに置き換えればリオ大会時に一部の関係者らが言及したテレビ放送権批評とも結びつくであろう（本橋 2016、砂川 2016）。また砂川は、2022年冬季オリンピックの北京大会の際に、2012年ロンドン大会以降民放が赤字を記録しながらも放送権を得ている理由について、「五輪が終わると、メダリストや人気選手たちは、バラエティー番組にたくさん出演します。競技人生に密着したドキュメンタリー番組なども数多く制作されます。テレビ局側は、やはり五輪出場時の競技映像や感動の名場面をふんだんに盛り込んで番組を作りたいところです。そうした『アーカイブ映像』の使用権も、五輪の放送権には含まれます。コンソーシアムを抜けた放送局は、これを使えなくなってしまうのが痛いのです」と指摘している（砂川 2022: 3）

[25] なおニュースの中で、NHK「ニュースウオッチ9」は東京大会で30分番組に短縮し、そのあとのリオ大会を伝える番組が新設されたことから、東京大会ではこれまでの研究の比較としてNHK「ニュースウオッチ9」を取り上げることはできないと推測される。

[26] なお新聞の研究では、柔道・楢崎教子選手のアトランタ大会、シドニー大会の報道を分析した飯田（2003、2005、2008）が、3つの観点からオリンピック報道に迫っている。

この研究の中で、中正樹は、オリンピック期間中（前後 4 日間を含める）の各局の夜のニュース番組の総放送時間数や扱われたニュースのジャンルから、中国をニュースの発生地とするスポーツニュースの報道量が明らかに増加し、北京大会が中国に関する中心的な情報となり、それ以外の中国関連ニュースを周縁的な小さな情報に位置付けたこと、日本選手の活躍に応援を送り、祝祭としてのオリンピックに触れ続けることになったことを明らかにしている（中 2012:37-54）。また、小林直美は、開会式や競技がどう伝えられたのかなど、ニュースを質的内容分析で検討した結果、オリンピックの競技ニュースは自国選手中心の内容であったこと、シンクロナイズドスイミングが日本対中国のように国レベルでの対決構図で報じられたことなどを明らかにしたうえで、さらなる研究課題として、海外選手らがどのような文脈で報道されたかの分析、分析視点にステレオタイプやジェンダーを取り入れることをあげている（小林 2011: 55-65）。黄・日吉は、大会前に「中国のイメージに関するアンケート」、大会後に「北京オリンピックの報道に関する調査」をインターネット上で行い、テレビ視聴者が北京大会以前に持っていた中国に関する知識、イメージが、オリンピック関連報道によりどのように変化したかを明らかにした（黄・日吉 2011: 6-21）。黄・日吉の調査には、報道内容に関する質問も含まれており、「取り上げられた競技種目に偏りがあった」42.7%、「選手のプライベートな側面が多く報道された」22.4%、「女子選手のアイドル化が目立った」17.8%、「男子選手のアイドル化が目立った」8.6%という回答を得ている（黄・日吉 2011：18）。

この試みは、日吉昭彦、中正樹、小林直美が引き継ぎ、東京五輪までの 4 大会（北京、ロンドン、リオ、東京）の検証を続けている。これ以降、1 つの大会についてこの 3 つの視点を完全網羅する研究はなく、メッセージであればその一つを継続して研究しているほか、送り手とメッセージの 2 つを対象とした研究が蓄積されている。

第 2 節　先行研究の問題点と本論文の課題

「限られた研究者によって細々と海外の動向やそれに準じた研究が推進されてきたにすぎなかった」（橋本 2002：ⅱ）という日本の研究状況は、この 20 年ほどで大きく変化し、オリンピックのテレビ放送に関しても、本格的な研究が進められるようになってきた。しかし、これまでの研究にはさらに乗り越えるべきいくつかの問題点が存在している。

第 1 に、送り手の研究の欠落である。確かに番組制作者への「接近の困難さ」という壁を超えることは容易ではない。しかし、ブルデューが指摘した番組制作者らが「組み込まれている客観的な関係のネットワークによって課される拘束の圧力」（ブルデュー2000：144）を明らかにすることは可能ではないか。そもそも日本国内でオリンピックを放送するには、IOC に高額の放送権料を支払って放送権を獲得しなければならない。2012 年のロンドン大会以降民放ではオリンピック放送の赤字が続き、国際スポーツ大会における放送権が議論の的となりつつあり、放送内容への影響についても言及されるようになってきている（砂川 2016、2022）[27]。こうしたオリンピック放送を取り巻く全体状況が、日本国内の放送体制を

[27] なお森津（2022）も新聞を研究対象として、オリンピックのスポンサーであるかどうかで報道内容に

規定し、番組制作者らに圧力を与えている実態に迫ることは可能ではないか。

また、「特定のスポーツに対する各々の国の視聴者の好み、あるいは、その国民的なまたはナショナリズム的な期待に順応するために、自国民が勝って、視聴者のナショナリズムを満足させることのできる種目や試合を周到に配慮して選択する」（同上 : 142）というブルデューの研究課題の提起に対しても、たとえば番組編成の実態を、それが決定されていく経緯も含めて追跡していくことによって解明できる面があるはずである。

以上のような点を解明することによって、「拘束の圧力」の下で番組制作者たちが抱えざるを得ない葛藤や彼らの矜持に間接的ながら迫ることも可能ではないだろうか。

第 2 に、メッセージ研究においては、競技の報道量の偏りやジェンダーバイアス、自国の選手に偏重し、外国人選手との情報量の差異が顕著であることなどが大会ごとに明らかにされてきたが、いずれの研究も量的内容分析あるいは質的内容分析のどちらか一方の手法によってなされているため、実態の解明に不十分さを残していることである。とくに質的内容分析の場合は、分析対象が局限されており、恣意的な対象の選択による分析という問題を逃れられない。報道が「人間ドラマ」に偏重しているという批判を例にとるならば、そのような内容の報道がどれほどなされているのかの量的な把握がなされておらず、特に情緒的な「人間ドラマ」となっている映像を恣意的に選び批判している側面も否めない。こうした研究状況を克服するためには、そうした映像が本当に過剰に報じられていたのかどうか、報道の全貌についての量的な把握をふまえたうえでの質的内容分析を行なうこと、つまり量的・質的両側面から検証を行うことが必要であろう。

たとえば 1998 年長野大会のテレビ放送について、東京放送（現 TBS テレビ）の社史には、「選手、家族、関係者にはりついて“ドラマ”を探し出し、競技シーンに挿入することで“人間の戦い”の感動を高めた」（東京放送編 2002 : 617）と記述がある[28]。その選手の競技人生にまつわるドラマは、メダル獲得などの競技シーンだけでは決して得ることができない感動を視聴者にもたらす。それを番組の興味を持続させるためのテレビの常套手段として批判するのは簡単だが、視聴者がそれを求めているのも事実である。それが本来の報道から逸脱している、あるいは過剰であると判断するための具体的な根拠となる放送の実態を量的および質的に把握する必要があるだろう。

本章の冒頭で示した放送の偏向性／多様性という問題意識と、以上のような先行研究の状況をふまえて、本論文では、以下の 3 つを課題として設定する。

第 1 に、日本のテレビ放送局がいかにしてオリンピックの放送権を獲得しているのか、それが国内の放送体制をいかに規定しているのかを欧米との比較も交えながら検討することである（第 1 章）。

第 2 に、テレビのオリンピック・リオ大会に関する番組編成の実態をその決定過程も含

変化が生じることを実証している。マスメディアと放送権、スポンサーの関係性に研究分野から切り込みが入り始めた兆しであるともいえる。

[28] 新聞記者の稲垣康介は、長野大会のモーグル女子・里谷多英選手を例に挙げ、「日本人金メダリストが誕生すると、1 面、社会面、スポーツ面で大展開するのが定番化したのは長野だった。1 面は蔵出しのエピソードに勝負のあやを織り交ぜ、社会面は支えた家族やコーチを盛り込んだヒューマンストーリー、スポーツ面ではスポーツ専門記者が本領を発揮する勝因分析や技術論という棲み分けが、今も踏襲されている」と述べている（稲垣 2016: 15-23）。テレビ制作者の長野大会への言及も含め、こうした報道の傾向が自国開催である 1998 年長野大会以降行われてきているのである。

めて検討することである。いつの段階でどのような競技が中継対象に選ばれたのか、実際にどの競技が中継されたのか、それらは日本選手の競技結果にどれほど対応しているのか。また、テレビ放送全体に占めるオリンピック放送の比重がどのくらいであったのかを明らかにする（第 2 章）。

以上の 2 つの課題の検討によって、日本のテレビのオリンピック放送の内容を規定していると考えられる「拘束の圧力」の一端に迫りたい。

第 3 に、テレビの夜のニュース報道番組におけるリオ大会の報道実態を量的および質的内容分析によって検討することである[29]。具体的には、NHK「ニュースウオッチ 9」、日本テレビ「NEWS ZERO」、テレビ朝日「報道ステーション」、TBS テレビ「NEWS23」、フジテレビ「ユアタイム」の 5 つの地上波放送の夜のニュース報道番組を対象とし、ニュース全体の分野別の報道量をふまえた上で、オリンピック報道の問題点とされてきた特定の競技への報道の偏りやジェンダーバイアス、自国選手への偏重、外国人選手の報道の在り方といった問題をまず量的内容分析の手法で分析する。さらに「人間ドラマ」化の要素である「家族」などを含めた選手報道を構成する全要素とそれぞれの分量を独自の手法で計測し、その実態を明らかにする（第 3 章）。

次に、量的内容分析の結果を踏まえたうえで、これらの問題について質的内容分析を試みる（第 4 章）。テレビニュースのナレーションやキャスターによる言葉、選手の言葉、さらにテロップや映像表現を分析の対象とし、量的分析によって明らかにした問題をさらに深掘りする。その際、「人間ドラマ」で一くくりにされがちな選手の「家族」について詳細な分析を試みるとともに、ジェンダーバイアスや外国人選手の描写、日本選手の競技結果以外を主役にした報道について検討する。また、オリンピック理念との関連での検討も試みる。

なお、これらの課題にかかわる直接的な先行研究のうち重要なものについては、各章で改めて取り上げることにしたい。

---

[29] 橋本政晴は、アメリカのフェミニストであるダッダリオが、1992 年冬季大会のテレビ中継のテクスト分析を行ったところ、競技映像については女性選手を少数派として囲い込み男らしさのヘゲモニーの達成に貢献している（Daddario 1994）としたが、中継番組内で選手のプロフィール紹介や関係者へのインタビューが行われるなど物語性が高いことから、番組構成が男性だけでなく多くの女性視聴者をも惹きつけており女性を排他的に扱った番組ではなかったと結論付けたこと（Daddario 1997）を例に挙げ、テキスト分析が、研究者が用いる枠組みによって同一のテクストでも肯定的にも否定的にも評価されるこがあることを指摘している（橋本［2002］2009:35）。さらに、量的、質的内容分析は、他者による再生の難しさなどがこれまで批判されてきたが、近年では、それぞれの調査の長短所を理解することで、互いに補完しあう関係へと変化してきており、一つの研究のなかで両方の調査方法を適用するケースも増えてきている（金山 2008：85）。

第１章　日本におけるオリンピック放送体制と放送権

本章の課題

本章の課題は、放送権の獲得を前提に確立されている日本におけるオリンピックの放送体制をその歴史的な経緯および欧米との比較も交えながら検討することである。

1990 年代以降、新自由主義政策下での民放間での競争の激化を背景に重要なスポーツイベントの放送権料が劇的に上昇していったが（ニコ・ベズニエほか 2020: 289-90）、オリンピックの放送権料については、とくに 2012 年ロンドン大会以降、日本においても高騰化問題が表面化し、放送権そのものの議論が活発になり、放送体制に及ぼす影響も指摘され始めている（本橋 2016、砂川 2016、松瀬・冨田 2022）。2016 年リオ大会を前に砂川浩慶は、「アメリカでは NBC、イギリスでは BBC が放送権保有事業者としてオリンピックを放送するが、それ以外の局は映像素材を使えない」が、「日本では、テレビ・新聞が挙国一致的にオリンピックを伝えるメディア体制ができあがっている」（砂川 2016:13）と日本の特徴について発言している。

放送権料高騰化の複合的な要因を探るには、IOC とテレビ局、視聴者などとの利害関係、及びスポーツ界を取りまく社会構造の変容を明らかにする必要があるとし、放送権交渉の内実を探るためメディア及び IOC 関係者への半構造化インタビューを行っているのが松瀬・冨田である。この研究では、高騰する放送権料を支払うために NHK と日本民間放送連盟（以下、民放連）の共同組織であるジャパンコンソーシアム方式（ジャパンプール方式の改称、通称 JC、以下、JC）を立ち上げて体制を整えてきたことにも言及している（松瀬・冨田 2022: 111-2）。

本章では、以上のような研究状況をふまえつつ、日本ではオリンピックの放送権を誰がどのように獲得し、どのような放送体制を構築してきたのか。また、そこにいかなる問題があるのかを、欧米との比較もふまえて検討する。

放送権とは、broadcast rights の訳語であり、テレビやラジオ、携帯、インターネットなどのプラットフォームで流れるすべての放送に関する権利のことをいう[30]。テレビ放送の場合は、映像の放送であるため放映権と呼ぶことが多いが、議論の混乱を避けるために本論文では、より一般的な放送権[31]と表記することとする。

第 1 節では、オリンピック憲章が定める放送権の内容および放送権料の推移を確認する。第 2 節では、日本が独自に編み出した JC 方式というオリンピックやサッカー・ワールドカップなどの国際大会に合わせた放送体制の歴史とその実態について明らかにする。第 3 節では、欧米では放送権に基づいてどのような放送体制が構築されているのかを把握した上で、それとの比較によって日本の放送体制の特徴を明らかにする。第 4 節では、放送権料の

---

[30] 昨今では 21 世紀以降加速したインターネット配信も含め、「メディア権契約」として結ばれており、多くの国での若者のテレビ離れを懸念した IOC バッハ会長は、大会期間外でもオリンピックに触れることのできるオリンピックチャンネルを、デジタルメディアを中心に展開すべく準備を進めている最中だという（本橋 2016:12）。

[31] 「放送権」という用語の使用例として、笹川スポーツ財団「放送権料とスポーツ」などがある(藤原 2016 ほか)。

高騰化が日本のオリンピック放送に与えている影響を、特に赤字が続く民放側の視点から把握する。

第１節　オリンピック憲章と「放送権」

1. IOC はオリンピック競技大会のために、さまざまなメディアによるできる限り広範囲な取材・中継、および世界中の可能な限り多くの人々による視聴を保証するため、必要なあらゆる措置をとる。
2. メディアによるオリンピック競技大会の取材・中継に関しては、IOC がすべて決定権を有する。

これはオリンピック憲章（2021 年版）の規則 48「オリンピック競技大会のメディアによる取材・中継」に関する規定である[32]。オリンピックに関する取材・中継の決定権を IOC がすべて所有していることを明言している。その本来の目的は、上記のオリンピック憲章規定が示唆しているように、「さまざまなメディアによるできる限り広範囲な取材・中継、および世界中の可能な限り多くの人々による視聴を保証するため」であるはずである。しかし近年、放送権に関する IOC の対応は、ひたすら収入源としてこれを利用するという面が際立っており、多くの批判を浴びている。IOC は自らをスポーツを通じてより良い世界を構築することを目的とする非営利団体であるとしているが、2017 年から 2021 年まで（2018 年平昌大会と 2021 年東京大会を含む）の収益のうちの 61%を放送権に依拠している[33]。

IOC を支える放送権料は、1948 年のロンドン大会で、テレビ中継を担当した英国放送協会（BBC）が中継カメラを観客席に持ち込み、座席占有料の名の下で大会組織委員会に 3000 ドルを支払ったことが始まりだったとされる（笹川スポーツ財団 2020）。1958 年に IOC はオリンピック憲章に「放送権」を明記し、1960 年ローマ大会で 120 万ドルの放送権料収入を得た。オリンピック夏季大会の放送権料の推移は下記の通りである。

表 1－1　オリンピック夏季大会の放送権料の推移

大会	放送権料（前年比率）
1960　ローマ	120 万ドル
1964　東京	160 万ドル（133%）
1968　メキシコシティー	980 万ドル（613%）
1972　ミュンヘン	1,780 万ドル（182%）
1976　モントリオール	3,490 万ドル（196%）
1980　モスクワ	8,800 万ドル（252%）

[32] 日本オリンピック委員会，2021，「オリンピック憲章」，（2022 年 12 月 30 日取得，https://www.joc.or.jp/olympism/charter/pdf/olympiccharter2021.pdf）．なお、本論文が対象とするリオ大会開催時の 2016 年版オリンピック憲章の規定も同じである。
[33] International Olympic Committee，2021，「FUNDING」，（2023 年 1 月 10 日取得，https://olympics.com/ioc/funding）．

1984　ロサンゼルス	2 億 8,690 万ドル（326%）
1988　ソウル	4 億 0,260 万ドル（140%）
1992　バルセロナ	6 億 3,610 万ドル（157%）
1996　アトランタ	8 億 9,830 万ドル（142%）
2000　シドニー	13 億 3,160 万ドル（148%）
2004　アテネ	14 億 9,400 万ドル（109%）
2008　北京	17 億 3,900 万ドル（120%）
2012　ロンドン	25 億 6,900 万ドル（148%）
2016　リオデジャネイロ	28 億 6,800 万ドル（104%）

（本橋 2022：9 より摘出・作成）

1960 年ローマ大会以降、放送権料は一度も値下がりすることなく、右肩上がりに高騰をつづけているのである。

オリンピック憲章の規則 7「オリンピック競技大会とオリンピック資産に関する権利」では、放送権の内容について詳細に定めている。

> オリンピック競技大会は IOC の独占的な資産であり、IOC はオリンピック競技大会に関するすべての権利を所有する。特に(ⅰ)オリンピック競技大会の組織運営、活用、マーケティング、（ⅱ）メディアが使用するためのオリンピック競技大会の静止画像と動画の撮影を許可すること、（ⅲ）オリンピック競技大会の音声・映像での収録を登録すること、（ⅳ）放送、送信、再送信、再生、表示、伝播、現存するものであれ将来開発されるものであれ、いかなる方法においてもオリンピック競技大会を音声・映像の登録または収録の具体化による作品や信号を一般の人々に提供すること、あるいは一般の人々に連絡すること。IOC のオリンピック競技大会に関する権利はそれらに限定されない。（国際オリンピック委員会 2021:20）

このようにメディアによる広範囲な取材・中継に関する IOC の権利について、日本民間放送連盟の本橋春紀は、以下のように指摘している。

> オリンピック憲章自体は国際条約でもないので、法的拘束力はないが、IOC はこれをもとに、放送権を獲得した放送事業者に、当該エリア内におけるオリンピック放送の独占的な放送権を与えるとともに、放送の実施の前提となるさまざまなサービスを供与している。具体的には、IOC が制作した各競技の国際映像の提供、実況中継を行うためのアナウンス席や独自のカメラポジション、選手へのインタビューなどを行うための映像取材許可証の発行などのサービスがあげられる。（本橋 2016:6-7）

このように放送権とは、オリンピック放送の実施に関する全ての権利のことであり、丸ごと購入することが求められる。特定の競技、体操や競泳だけの放送権を購入するといったこともできない。また、放送権が制定された当初は、1 つの国の 1 つの局で放送することと定

められていた。つまり現在の日本のように、複数の局でオリンピックが放送されることはなかったのである。

また、当初は 1 つの大会ごとに放送権を獲得する必要があったが、放送権料の高騰化にともなって、一定数の大会の放送権をまとめて獲得できるようになった。きっかけはオーストラリアが 2000 年シドニー大会の放送権獲得の際に、1996 年アトランタ大会の放送権をセットで獲得したことである。自国開催の放送権料を他国開催のものとセットで購入することで、高騰を抑えることが目的だった。その後、日本やアメリカ、ヨーロッパも同様に、冬季夏季の 2 大会分の放送権をまとめて購入する複数大会契約が可能となった。本橋は、この放送権の購入先や契約方法について、2000 年代に入ってから大きな変化がみられると指摘する。2004 年と 2014 年を比較してみると、地域単位の国際放送連合が徐々に姿を消していき、放送権保有事業者が様変わりした。ヨーロッパ地域では、ヨーロッパ放送連合（EBU）が獲得していた放送権を、ソチ、リオの 2 大会については Sportfive というスポーツエージェンシーが獲得し（フランス、ドイツ、イタリア、スペイン、トルコ、イギリスを除く）、さらに 2020 年から 2024 年までの放送権をユーロスポーツ（米ディスカバリー系）が獲得した。またアジア･太平洋放送連合（ABU）に代わり、電通がソチ大会から 2024 年パリ大会までのアジア地域 22 カ国（日中韓を除く）の放送権を獲得している。上記のように放送局以外が放送権を獲得することも可能となったなかで、米 NBC や日本の JC は、放送権を継続して獲得しているテレビ局であることから、世界的にみると例外的な存在であるといえる（本橋 2016: 8-10）[34]。

買い手の形態に変化が生じる一方で、長期契約がなされるようになったことから、IOC の財政基盤は安定性を増したことは改めて指摘するまでもないだろう。では、世界的にも稀有な存在だとされる JC とは何なのか。その誕生のきっかけについて、本橋は 1980 年モスクワ大会をあげる。

> 日本のオリンピック放送権は現在、NHK と日本民間放送連盟（民放連）で構成する JC が保持している。歴史的に見ると、テレビ中継が始まった 60 年のローマ大会以来、日本のオリンピック放送権は NHK が独占していたが、80 年のモスクワ大会でその構図が崩れた。テレビ朝日（当時は日本教育テレビ）が 77 年 3 月に単独で放送権を獲得したからだ。モスクワ大会はソ連のアフガニスタン侵攻により、日本を含む西側諸国などが不参加となったが、テレビ朝日は 44 時間 24 分の放送を実施した。
>
> これをきっかけに、公共放送としてオリンピックを放送してきた自負がある NHK は、放送権料高騰への対応もあり、民放連に対して共同の権利獲得と共同制作を内容とする「ジャパンプール方式」を提案してきた。民放連は 79 年 10 月にこの提案を受け入れることを機関決定し、この方式が現在まで継続されている（なお、ジャパンプールという呼称は 96 年のアトランタ大会からジャパンコンソーシアムに変更）。（本橋 2016:10）

[34] 放送権を付与する相手先が公共放送・国営放送を中心とした地域単位の放送連合から、スポーツエージェンシーや通信事業者などに変わり、商業性が高まっていることも影響を与えていくとされている。

このように日本は、1979 年 10 月以降、NHK と民放各局がタッグを組み、JC 方式で、膨大な放送権料を支払いながら放送権を獲得し続けてきたわけである。JC が放送権を獲得することで、現在ではテレビラジオ放送のほか、インターネットやモバイル端末など、日本国内における全てのメディアで大会を一般視聴者に届ける権利を有している[35]。JC がこれまでに支払った放送権料の推移を、購入した複数大会の合計額によってみてみたい。

表 1－2　日本の放送権料の推移

大会	2006 トリノ 2008 北京	2010 バンクーバー 2012 ロンドン	2014 ソチ 2016 リオ	2018 平昌 2020 東京	2022 北京 2024 パリ
金額	2 億 1850 万ドル （260 億円[36]）	325 億円	360 億円	660 億円	440 億円

（本橋 2016:9 より摘出・作成）

JC が支払ったソチ大会とリオ大会の放送権料は 2 大会併せて 360 億円[37]、そして 2018 年平昌大会から 2024 年パリ大会までの 4 大会分については、1100 億円（平昌・東京で 660 億円、北京・パリで 440 億円）と報告されている[38]。なお、JC による支払いの内訳については非公表であるが、NHK と民放の折半比率が 7：3 であるとの報道がなされている[39]。

このように日本では、NHK と民放 5 局で構成する JC という、日本が独自に編み出した放送体制によって膨大な放送権料を支払い、オリンピック放送を行なってきたのである。

第 2 節　国内の放送体制と JC 発足

そもそも、NHK と民放ではその成り立ちが異なる。戦後の日本の放送体制は、公共放送としての NHK と民間放送の 2 本立てとなった。なぜ放送が、社会的責任を持つ文化であり事業であるとされてきたのかというと、使用できる電波に限りがあり、その電波を使用できる限られた存在として、放送内容、放送文化がとらえられてきたからである。NHK という全国を網羅する単一事業体と、地域を基盤とする民間放送によってその活動が担われてきたのである（黒田 2005:2）。『民間放送十年史』には、民間放送の草創期における合言葉は「聞かせる放送から聞く放送へ」であり、スポンサーを開拓しなければならない民放という

---

[35] インターネット権の行使を JC が始めたのは、北京大会から。NHK、民放連がそれぞれ、「NHK スポーツ」や「gorin.jp」といった携帯アプリケーションなどを配信している。
[36] 当時の米ドル、日本円のレートが 100 円から 130 円ほどの推移をたどっていたため、日本円を 120 円として計算した。
[37] NHK 広報局，2012，「2014 年・2016 年オリンピック放送権の合意について」，日本放送協会，（2022 年 12 月 30 日取得，https://www.nhk.or.jp/pr/keiei/otherpress/120203.html）.
[38] 日本民間放送連盟，2014，「（報道発表）2018 年～2024 年のオリンピック放送権の獲得について」，日本民間放送連盟ホームページ，（2022 年 12 月 30 日取得，https://j-ba.or.jp/category/topics/jba101364）.
[39] 読売新聞オンライン，「北京 2022 オリンピック『得するのはＮＨＫだけ』と五輪を嘆く人気アナ…民放はいつか活路を見いだせるのか」，読売新聞オンラインホームページ，2022 年 3 月 9 日 11 時 15 分，（2022 年 12 月 30 日取得，https://www.yomiuri.co.jp/olympic/2022/20220308-OYT1T50192/3/）.

特徴柄、大衆に喜んで聴取される番組を編成しなければならなかったとされている（日本民間放送連盟 1961:127）。

こうしたなかで、1956 年メルボルン大会で実は一度 NHK と民放のオリンピック放送の在り方を示唆する事件が起きている。物議を醸したのは、大会の報道に際し、ニッポン放送と文化放送（どちらもラジオ放送であると思われる）が、NHK 提供のクレジットを入れること、スポンサーをつけてはいけないことの 2 つの条件付きで、NHK 取材の素材を受け放送する事態が起きたからである。民放は商業番組を経営の骨格としており、スポンサーの提供という基本事項を自ら否定してまでオリンピック素材の提供に甘んじるべきであったかどうかという問題を残したケースであった（日本民間放送連盟 1961:117）。民放がオリンピック放送権を得ていなかったために起きた、放送法をも揺るがした事件だった。

放送の体制が整い、やがてスポーツ中継が大きなウェイトを占め始めた 1970 年代に、オリンピック放送の体制が大きく変わった。オリンピックの放送権料と国内放送体制については『民間放送 50 年史』に詳しい。先の本橋の指摘とも重なるが、以下、抄出しておこう。

放送権料高騰の打開策として、前述のとおり 1979 年に NHK と民放が共同で放送権契約を行うことを機関決定した。すると取材体制も共同となり、「ロサンゼルス・オリンピック放送ジャパン・プール（LAOC）」という名の放送機関が設立された。当時オリンピックの国内放送権は「1 か国 1 放送機関」と定められていた制限を、「ジャパン・プール」といういわばオリンピック放送のための臨時の放送機関を立ち上げることによってクリアしたわけである。その一方で、自主的で柔軟な番組編成が可能な NHK に対し、民放は放送枠のセールスという点においても決定的なハンディキャップを背負っていたため、これを解消する方策として、民放では広告主に対するセールスの「目玉」となるような人気種目の放送が必要であったとされる。この民放側の意向を受けて 1983 年 8 月に民放と NHK との間で交わされた確認事項には「民放の放送に当たっては、民放が自由に放送種目を選択でき、同時間に NHK はオリンピック放送を行わない『民放単独枠』を 8 枠設定する」と定められたのだ（日本民間放送連盟 2001:157-8）。

翌 1984 年 2 月に締結された「協定書」では、ロサンゼルス大会における民放・NHK の協力体制を「ロサンゼルス方式と呼称し、今後のオリンピック夏季大会の放送に適用する」として、以下の「基本原則」が定められた。

① 放送権取得は、NHK、民放連の共同交渉による。
② オリンピック放送番組は、共同制作を原則とする。
③ 一部単独放送方式を認める。
④ 放送権料、これに付随する諸権利取得のための料金および共同番組制作に関する経費は、両者が協議して分担する。（日本民間放送連盟 2001:159）

この基本原則に基づき NHK・民放双方が協議しながら放送権の獲得、放送枠の決定を行なってきたが、1996 年のアトランタ大会で問題が表面化した。女子バレーボールの日本対韓国戦の終了後、民放側が過去の大会実績に基づきこの録画中継を放送したことに対し、生中継の権利を持つ NHK が「ルール違反」と反発し、対抗措置として民放の優先放送試合である日本対ウクライナ戦を同時間帯で生中継したのである。また、NHK と民放の間に「選

択競技」「独占放送枠」という取り決めがあったが、野球の日本対キューバ戦が試合途中で打ち切られてしまい、決勝戦が地上波で放送されないなど、試合が放送時間枠に収まらない場合の対応が課題として浮かび上がったのである（日本民間放送連盟 2001:352-3）[40]。

そもそも、オリンピックの映像はどのように日本の放送波に乗るのか。日本国内における全てのメディアの権利を、JC が IOC から購入したことは先にみたとおりである。その映像を制作するのは、オリンピック放送機構（Olympic Broadcasting Services 以下、OBS）だ。OBS とは、競技映像（国際信号）を制作するもので、専属部隊が各競技の映像を撮影しており、OBS 撮影の映像が、各国の放送局に配られている[41]。

ロンドン大会での技術概要をまとめた北原・橋本の図解を参考に掲げておこう。

図 1−1　JC と IOC、OBS、LOCOG との関係

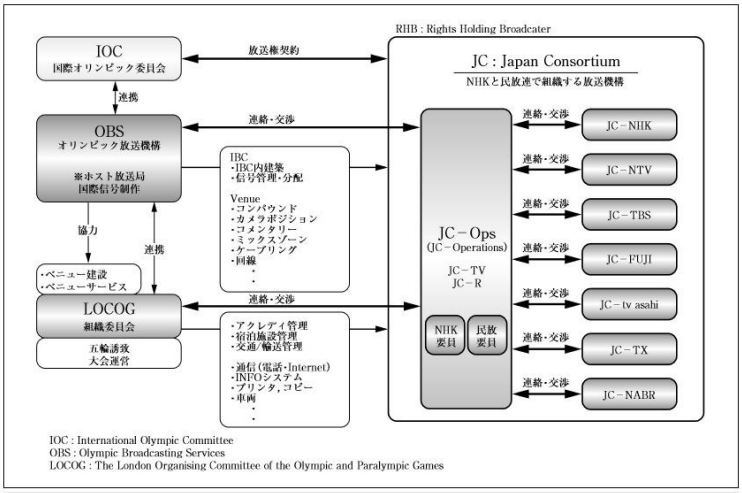


図2　JCとIOC, OBS, LOCOGとの関係

（北原・橋本 2012:1017）

そして、ロンドン大会における JC の動きについて、以下のように報告している。

> JC はロンドン大会開催 2 年前より JC-Ops（JC-Operations）を組織し、組織委員会：LOCOG（The London Organising Committee of the Olympic Games and

---

[40] なお現在は、放送権の交渉が NHK と民放の代表が共同で IOC と行われているものの、どの競技を NHK・民放のどちらが放送するかは両者の協議により決定しており非公開である。さらに、放送権の分担比率なども長く公表されてこなかった。1996 年のアトランタ大会での衝突があったが、1998 年冬季長野大会は、国際信号（映像・音声）制作において NHK・民放が協議して行う画期的な大会だった。冬季大会については 1977 年の段階で民放各局が NHK に取材を一任して、映像分岐を希望する社は分岐を受ける形とし、雑感取材などには民放も参加するというスタイルを踏襲していた。しかし、長野大会は 27 年ぶりの国内開催のため、民放にとっては初めて映像制作を行う競技も多かったが結果的に質の高い映像を送出することに成功したとされている。

[41] かつては、日本は柔道、中国はバドミントン、スウェーデンは陸上といったように、各競技の割り振りが決められていたが、現在は、各国に割り振るのではなく全ての競技の撮影を OBS が管轄している。

Paralympic Games Limited）および国際オリンピック委員会（IOC）傘下のホストブロードキャスターであるオリンピック放送機構：OBS（Olympic Broadcasting Services）との交渉窓口の役割を担った。また、大会期間中は JC 独自中継クルーによる日本選手や注目選手の撮影を行うとともに、国際信号に日本語コメンタリー（実況音声）付加作業を行うなどの日本向けの競技中継を制作し、NHK と在京民放への伝送を行った。（北原・橋本 2012:1017）

図 1－1 にあるように、JC の中でも JC-Ops 以外に 7 つの組織が放送に関係しているが、それが、日本向けの競技中継を送り届けるために組織された JC-Operations（以下、JC-Ops）および各局ユニ（各放送局）である JC-NHK、JC-NTV、JC-TBS、JC-FUJI、JC-tvasahi、JC-TX、JC-NABR（民放ラジオ）である。JC-Ops とは、国際信号に独自映像や実況、解説を付与し、試合映像（JC プログラム）を制作する部隊のことを指している。各局ユニが現地入りし、スタジオを置くことで、日本の NHK や民放各局が放送するニュース、情報番組の準備ができるのである。

つまり、テレビをとおして私たちが見ているオリンピック競技の生中継や録画中継などの映像は、全て OBS が撮影している映像であり、競技結果をうけて各局が朝昼夕夜と、情報番組や報道番組で放送している映像は、OBS の映像に各局ユニが解説や実況を加えたものだ。そして、各局ユニ独自の映像は、競技が始まる前のスタジオや、会場近くの風景などを撮影したもので、この映像も日本のお茶の間に届けられていると考えられるだろう。

このように OBS による世界共通の映像に加えて各局ユニによる独自の映像も加わることで、日本のオリンピック映像が形成されていく。他国に比べて NHK と民放 5 局、ラジオも派遣できる日本の状況はきわめて例外的なものといっていいだろう。日本のオリンピックニュースなどでは、こうしたオリンピック現地取材に加えて、日本国内での独自の取材映像や選手の過去の映像などが加わり、伝えられる。こうして日本におけるオリンピック放送は、いかに多くの取材がオリンピックを機になされているかを私たちに示すものとなっているのである。

第３節　欧米と日本の比較

世界的に例外的な存在であるとされる日本の JC による放送権の獲得方法と、それに基づく放送体制の特徴をより鮮明にするために、本節では欧米の状況や特徴を把握し、日本との比較を試みたい。

アメリカの事情についてはトンプソンの研究に詳しい。アメリカの放送局が支払う放送権料の額は他の国を大きく引き離しているとして、北米（アメリカとカナダを指すが大部分がアメリカの放送局の負担）の放送権料が全体の 60％前後を構成してきたと指摘する（トンプソン 2017:23-4）。近年のアメリカは NBC ユニバーサル（NBCUniversal Media）が放送権を所有しており、アメリカの古参 3 大ネットワークの一つである National Broadcasting Company（以下、NBC）を傘下にする。リオ大会は NBC にとっては 15 回

目のオリンピック放送となり、アメリカの放送局の中では最多数となった[42]。

こうしたオリンピックの放送権料は NBC にとって大きな投資であり資産である。他方、IOC の収入の半分以上が放送権料であり、さらにその半分を占めるのがアメリカであることから、トンプソンは「IOC に対する発言力が大きいとすれば、それなりの根拠がある」と指摘する（トンプソン 2017:24-5）。アメリカのスポーツシーズンに合わせたオリンピック時期の決定や、各競技の決勝の時間帯をアメリカのゴールデン帯にするといった、季節・時間的制約がアメリカありきで決定されていることは、2021 年東京大会で「競泳、北京以来の午前決勝　米 NBC がゴールデンタイム放送希望」といった報道に象徴されているように、北京大会以降周知の事実となっている（木村 2021:第 2 段落）。

次に、ウィーンに駐在するジャーナリスト・稲木せつ子氏への聞き取り調査から判明した事実を基にしながら、ヨーロッパの現状についてまとめておきたい[43]。

> 長年欧州は、EBU（欧州放送連合）が各国の公共放送を代表してライツの交渉にあたり、放送権を獲得していました。ちょっと複雑なのですが、EBU は公共放送だけでなく、民放もメンバーだったりするのですが、この五輪に関してはその国の公共放送が基本的に放送をしています。五輪の場合は、国際信号を OBS が作っていますので、ここの信号を放送センターから欧州まで繋いで、各国の公共放送に配信する仕事を EBU(Eurovision)が請け負っていました。また、試合によっては、EBU が窓口になり国際信号にユニカメラ（国際信号とは別に個別にカメラポジションをもらって撮影・中継する）の映像を合わせたプロダクションを行ったり、加盟社の撮影素材を伝送してあげたりということもします。五輪の時に放送センターに入るのは、EBU の職員に加え、各国の公共放送からサポートが入る混合チームでプロダクションをします。

OBS から欧州までつなぎ、各国の公共放送に配信するという一連の流れと、実際にオリンピック放送センターに入るのは EBU 職員に加えた各国公共放送のサポートチームであるという点は、先にみた日本の体制とほぼ同様であるといえる。この EBU が日本で言えば JC に該当し、各国のチームという部分が日本の場合は NHK とキー局ということになろう。それらを基本としながら欧州では、さらに細かな取り決めがあるという。

> これが基本ですが、EBU の加盟社の中では大手とそれ以外で別の取り決めになります。シンプルなのは規模が小さい国の公共放送などは、EBU の基本サービスに頼ります。ただし、多くの場合中継部分だけは解説者や中継アナウンサーらが現地入りして、試合をみながら会場から中継を行い、音声部分を国際信号と一緒に本国に送ります。また、自国の選手でメダル候補がいる競技があれば、候補選手を独自カメラ（※稲木注ユ

---

[42] NBC のリオ大会の放送実績については、Total Audience Delivery（TAD）によるプライムタイムの平均視聴者数が 2750 万人で、前回大会の 3030 万人には及ばなかったが、デジタルサービスのユニークユーザーが 1 億人を超え前回大会より 29%増し、広告の売り上げが 12 億ドル（約 1300 億円）以上とロンドン大会以上の利益が期待できるとの見方が示されている（日本民間放送連盟 2017:199）。

[43] 2016 年 8 月のリオ大会後に欧州のオリンピック放送権事情についてメールで聞き取り調査を行った。2016 年 9 月 10 日実施。

ニカメラ）で撮影・中継したり、試合の前後を ENG 取材してその素材を EBU 回線を使って本国に送ったりもします。EBU はこれまでは常に、かなり大きなワークスペースを持ち、加盟社が小規模のチームを派遣してイベントを放送します。

ただし、イギリスの BBC やドイツの ARD/ZDF などは、会社の規模が大きく、両国ともメダル候補も多い国なので、放送権も IOC と別に交渉しています。また、毎回独自で放送センターの中に大きな放送スタジオを作っています。また、独自の中継車、別アングルのユニカメラを手配して国際映像とユニ映像を中継車でミックスして、現地に派遣された中継アナウンサーやコメンテーターの音声と合わせて、五輪放送を現場で制作し、独自回線を使って本国に送ります。加えて、これらの大きい国は放送センターがある街の中にも中継ポイントを持っていることが多く、ここからの中継映像を放送センター内の BBC や ZDF の技術マスターで切り替えて本国に送ることもしています。

本橋は、20 年から 24 年の夏季大会のヨーロッパ地域の放送権をユーロスポーツ（米ディスカバリー系）が獲得して衝撃を与えたと述べていたが、このことについて稲木も、「ユーロスポーツが今後の五輪の放送権を買ったことにより、今後のオリンピック放送がこれまでと変わるものになるだろう」という。なぜなら欧州の場合、ほとんどの国がナショナルイベントは全市民が視聴できるよう無料放送されることになっているからだ。つまりオリンピックの決勝で自国の選手が残っている場合は「ナショナルイベント」となるため、今後もユーロスポーツでオリンピック中継が行われていたとしても、自国の選手が活躍し「ナショナルイベント」扱いになった場合は、各国の公共放送が無料放送できる形がとられるのではないか、という見通しを立てている。逆に言えば、BBC（イギリス）や ARD/ZDF[44]（ドイツ）以外の欧州の現状は、自国の選手の活躍だけを見たい場合や、特定の競技だけ放送する権利が欲しくても、それは全くできないのだ。

このように日本と欧米では大きな差異がある。米の NBC や、公共放送の英 BBC、独 ARD/ZDF と、欧米では限られた局でしか競技中継などが放送できず、他欧州では自国の選手の決勝進出など、特別な場合のみナショナルイベントとしての放送が可能となる。それに対して、JC 方式をとる日本では、公共放送の NHK を合わせて民放キー局とその系列局でも放送が可能である。たとえば NBC のリオ大会報道では、女子体操の生中継がなされなかったことについて批判が殺到したが（トンプソン 2017:28-31）、放送が一局に限定されている場合にはこうした問題が避けられず、その局に競技中継の取捨選択が任されるのである[45]。

それに対して日本では、実施しようとすれば 7 競技もの同時中継も可能であり、視聴者

---

[44] ARD（ Arbeitsgemeinschaft der öffentlich-rechtlichen Rundfunkanstalten der Bundesrepublik Deutschland）と ZDF（Zweites Deutsches Fernsehen）はどちらもドイツの公共放送で、ARD が第 1 ドイツテレビ、ZDF が第 2 ドイツテレビを運営している。

[45] こうした状況についてトンプソンは、NBC は、主流の無料放送では競技とその結果を詳しく伝えるよりもスポーツに特に関心のない人情話を挿入する一方、競技の詳しい報道については有料放送のチャンネルや有料ストリーミングでの配信に誘導することで収益を最大化しようとしている、とオリンピック中継の有料放送の可能性についても指摘している（トンプソン 2017:30）。なお、リオ大会の競技をすべて中継したとされる NHK BS の放送は、同様のことが日本でも現実化していたことを示している。

の多様なニーズにも対応が可能なのだ。ブルデュー（2000＝2008）は、「特定のスポーツに対する各々の国の視聴者の好み、あるいは、その国民的なまたはナショナリズム的な期待に順応するために、自国民が勝って、視聴者のナショナリズムを満足させることのできる種目や試合を周到に配慮して選択する」（同上：142）と指摘しているが、そのように選択された競技種目や試合を放送できる条件が、欧米と日本とで大きく違っており、日本の場合にはオリンピックのほとんどを放送できる条件が揃っているのである。

日本では、NHK と民放 5 局が JC として挙国一致体制を形成し、6 つのテレビ局がオリンピックを放送することができるだけでなく、大会期間中に中継以外の番組でもオリンピックの映像を使用することができる。しかし、そのことはブルデューが指摘する「組み込まれている客観的な関係のネットワークによって課される拘束の圧力」（ブルデュー2000：144）がどのテレビ局にも及んでいるということをも意味する。この点に関して示唆的なのは、砂川の以下のような指摘である[46]。

> スポーツをジャーナリズムがどう伝えるべきか。永遠の課題とも言われる。特に、巨大化した五輪の問題点を批判的に伝えることは主要なテレビ・新聞が挙国一致（オールジャパン）体制でコミットした日本においては、難しい。本橋論考〈筆者注：『Journarism』pp6-13〉にあるように、放送界はＪＣ（ジャパンコンソーシアム）というかたちで、ＮＨＫ・民放テレビ局がすべてオリンピック放送にコミットしてしまい、第三者の視点でジャーナリスティックな報道を展開しにくい体制となっている。〔･･･中略…〕新聞においても、日本の場合、「東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会」のオフィシャルパートナーに朝日、読売、毎日、日経の全国 4 紙が決まっている。つまり、日本では、テレビ・新聞が挙国一致的にオリンピックを伝えるメディア体制ができあがっている。本来、観察者であるべきメディアが当事者となることに、その危うさを非常に感じる。巨大化する五輪、高騰する放送権料について、ジャーナリズムの指摘が弱いと感じるのも、この“当事者”性ゆえではないか。(砂川 2016:13)[47]

砂川が述べている新聞の挙国一致体制化は、東京 2020 大会に向けてのものであるが、リオ大会の開幕前、2016 年 1 月にすでに確立していた。オリンピックを伝える主要メディアであるテレビの場合は、それ以前から JC による挙国一致体制を構築しており、それによってジャーナリズムの本来的な機能が弱体化している、と砂川は指摘しているのである。また砂川は、客観性を取り戻すには、NHK のみが放送権を獲得し、赤字の民放は撤退することが考えられていい時期だと具体的な解決策について提案したが、関係者は皆、首を横にふる

---

[46] 砂川は、1986 年に民間放送連盟、2006 年まで放送制度、著作権、機関紙記者、地上デジタル放送を担当し現在は立教大学で教鞭をとっている。民放連での勤務やオリンピック経験をふまえた発言である。

[47]さらに高騰する放送権料への対応について、2016 年 5 月にフランスの検察が東京五輪招致についてシンガポールのコンサルタント会社に約 2 億 3 千万円が支払われたことを汚職の対象として捜査していると報じられた件に触れ、ネットで既存のテレビ・新聞の追求が甘いとの論評が目立ったことから、客観性が疑われる事態を憂慮している。

反応を示したとしている（砂川 2016:14）[48]。

第４節　放送権料の高騰と日本の放送体制

先にみた砂川の「赤字の民放は撤退する」（砂川 2016：14）という提案は、2012 年ロンドン大会以降の民放のオリンピック放送が赤字となっているという実態をふまえなされたものであった。オリンピック放送が赤字に転じたのは、2012 年ロンドン大会時であり、JC として民放と NHK が合同で IOC から放送権を購入するようになった 1984 年ロサンゼルス大会以降、初の出来事だった。2012 年ロンドン大会の総括の中で、当時の民放連会長井上弘氏（TBS テレビ会長）は、「今後も放送権料は下がらないし、苦しくなっていく。ただ、五輪放送は意義があり、我々としては赤字が出ないようがんばる」と発言し、ニュースとなった[49]。民放連の資料によってその詳細をみてみよう。

> 記者：ロンドンオリンピックを振り返って、全体的な所感をうかがいたい。
>
> 井上会長：今回のオリンピックは、たいへんな盛り上がりだったと思う。民放テレビの放送時間数は、地上放送が 224 時間 2 分、BS 放送が 48 時間で、NHK とともに過去最大となった。ラジオは 5 本の民放ラジオ統一番組を全社 100 局で放送したほか、男女のサッカーとマラソンを生中継した。視聴率については、北京大会と比べて時差が大きかったことが不利に働いたと思う。収支については、時差の関係や放送権料がさらに高くなったこともあり、民放連として取り組んだオリンピック放送で初めて赤字になった。視聴者・国民の皆さんにオリンピックの感動を伝えることができてよかったと思うが、民間企業である以上、ビジネスとしても成り立つよう、今後検討したい。また、今回は、民放テレビ共同公式動画サイト「gorin.jp」（ゴリン・ドット・ジェイピー）の本格運用に取り組んだ。まだビジネスベースにはほど遠いが、アクセス数は前回よりも増えている。次回以降、ネットとの共存関係をさらに考えていきたい。[50]

放送権料や番組制作費などの民放負担分の総額が、スポンサーからの CM 収入の総額を上回ったために収支が赤字となったわけだが、その理由として井上会長があげているのは、時差と放送権料の高騰である。2001 年時点で民放連は、「高騰する放送権料の抑制と、メディア間競争が激化するなかで、オリンピックというキラーコンテンツを長期間にわたり安定的に視聴者に届けるのが放送局の使命である」と述べていた（日本民間放送連盟 2001:353）。すでにこの時点で、オリンピックがキラーコンテンツではあるものの、放送権料の高騰とメディア間の競争の激化によって、民放によるオリンピック放送が厳しい状況に置かれていたのである。2012 年ロンドン大会では、さらなる放送権料の高騰、そして時

---

[48] 森田もまた、招致を巡る不透明な送金の問題を日本メディアが追求しないことについて、オリンピックにとってマイナスのニュースは、ほどほどにしておこうというえもいわれぬ空気があること、無意識の自己規制があることを指摘する（森田 2016:24-31）。

[49] 朝日新聞デジタル「ロンドン五輪、民放全体で初の赤字　放送権料高騰響く」（2012 年 9 月 21 日 0 時 13 分配信）

[50] 日本民間放送連盟ホームページ、報道資料、井上会長会見、日時平成 24 年 9 月 20 日（木）午後 2 時 15 分～2 時 55 分、場所民放連会議室。

差による視聴率の低調によって、ついに赤字に転じた。「視聴者・国民の皆さんにオリンピックの感動を伝えることができてよかったと思うが、民間企業である以上、ビジネスとしても成り立つよう、今後検討したい」という井上会長のコメントは、民放がかつてない苦境に置かれていることを物語っている。

井上会長のコメントには、赤字脱出の決意も示されているが、その 4 年後に開催された 2016 年リオ大会でも状況を好転させることはできず、民放は夏季オリンピック 2 大会連続の赤字となった。ニュースでは赤字の理由として、放送権料の高騰や現地の治安対策でセキュリティー費がかかったことなどが挙げられ、井上会長は「何とかしたいが、厳しい状況は変わらない」としながらも、「東京五輪もぜひ成功させたいし、われわれも参加したい」と発言したと報道されている[51]。民放連発表の資料でその詳細をみてみよう。

記者：リオデジャネイロ・オリンピックの放送について、総括をお願いしたい。

井上会長：今回のオリンピックは、過去最多 41 個のメダルを獲得するなど、日本選手の活躍が著しく、現地のインタビュー対応も忙しかったようだ。日本のスポーツ界にとっても大変喜ばしいことだし、応援された視聴者・聴取者の皆さんも、おおいに盛り上がったのではないか。

民放テレビでは、地上テレビ放送で約 245 時間、BS 放送で 48 時間にわたって熱戦をお伝えした。また、ラジオは、大会前と大会期間に合計 6 つの民放ラジオ統一番組を全 101 局で放送した。放送以外でも、インターネット配信サイト「gorin.jp」でライブ配信を大幅に拡充した。

それに加え、各局のニュース・情報番組でも、オリンピックに関する話題を多角的に取り上げ、大会の盛り上げに一役買えたように思う。

また、今回は特に現地の治安や準備の遅れが懸念されていたが、関係者が一丸となって努力した結果、無事に放送を実施することができた。すべての関係者の皆さんに敬意を表したい。

収支については、セールス収入でメディア権料や番組制作費などを含めた費用の総額を賄うことはかなわず、赤字となった。具体的な数字は公表しかねる。

支出の大部分を占めるメディア権料が高騰しており、根本的な改善策はいますぐには浮かばない。厳しい状況であることは理解している。

この後には、平昌（ピョンチャン）大会、そして東京大会が控えている。これまでの経験と実績を活かし、世界に発信できるよう準備を進めて行きたい。

〔…中略…〕

記者：競技中継の視聴率の上位を NHK が占めているが、中継する競技の見直しは考えないのか。

井上会長：どの競技が注目を集めるか、事前に予測はできない。私見だが、編成面や民放局同士の連携など、工夫できるところはあるのかもしれないと思う。今後、オリ

[51] スポニチ 2016 年 9 月 15 日 16 時 56 分配信「リオ五輪民放収支は赤字、2 大会連続 放送権料高騰や治安対策で」。

ンピック放送等委員会を中心に、関係者で検討することになると思う。[52]

ここで赤字の理由として指摘されているのは、放送権料の高騰のみである。ロンドン大会と同様に時差が視聴率に影響したことは確実だと思われるが、この点についての言及はない。また、中継の視聴率上位を NHK が占めているという状況を変えるために各局の中継競技を見直すという考えに対しても同意を示さず、民放内での工夫という現状維持的なコメントに終始している。その背景には、JC による支払いの折半比率が NHK と民放で 7 : 3 といった報道がなされているような NHK への依存度の高さがあると考えられる。それが足枷となって、民放側が、高い視聴率を獲得できる、つまり人気の高い中継競技を選択することがほとんどできず、「根本的な改善策」もないという「厳しい状況」が生み出されていると読み取れる。

井上会長は、民放によるリオ大会放送の意義について、第 1 に、民放地上テレビ放送で約 245 時間、BS 放送で 48 時間、計 6 つの民放ラジオ統一番組を全 101 局で放送し、インターネット配信も大幅に拡充して、視聴者に「熱戦」を届けたこと、第 2 に、各局のニュース・情報番組でもオリンピックに関する話題を多角的に取り上げ、「大会の盛り上げ」に一役買ったことをあげているが、こうした民放 5 局の放送の実情もまた、JC という「組み込まれている客観的な関係のネットワークによって課される拘束の圧力」（ブルデュー）の下でなされたものととらえる必要があるだろう。

本章のまとめ

IOC が定める放送権とは、その名の通りオリンピックを中継・取材し、放送できる権利のことである。この放送権は、オリンピックの映像を丸ごと購入することが前提であることから、オリンピックで行われる競技のうちどれか一つの競技が突出して強い国であっても、その競技中継の権利のみを得ることはできず、さらには、突然オリンピックで注目すべき選手が現れたとしても、後からその選手の全ての競技を報じることは難しい。そしてこの権利を、各国は、「1 国 1 放送機関」、つまり 1 か国につき 1 つのテレビ局のみが保有してきた。

一方、日本は 1979 年 10 月に NHK と民放が共同で放送権契約を行うことを機関決定して以降、取材体制も共同となり、「ロサンゼルス・オリンピック放送ジャパン・プール（LAOC）」という名の放送体制が設立され、「1 国 1 放送機関」と定められていた制限を、「ジャパン・プール」といういわばオリンピック放送のための臨時の放送機関を立ち上げることによってクリアしてきた。これが現在も継続している JC 方式である。このような独自の体制によって、放送権料の高騰化に対応しつつ、オリンピック映像をどの局でも使用できる許可をも得てきたのだ。

欧米との比較によって明らかになったのは、オリンピック期間中に地上波すべての局のチャンネルで、自国選手が出場しているか否かにかかわらずオリンピックの競技中継が見られるのは日本だけに起きている現象である、ということである。欧米諸国とは全く異なる

[52] 日本民間放送連盟 HP、報道資料、井上会長会見、日時平成 28 年 9 月 15 日（木）午後 2 時～2 時 30 分、場所民放連 3 階会議室。

視聴環境が構築されてきたのだ。競技中継だけではない。日本では、NHK と民放各局で、ニュースや情報番組、ドキュメンタリー、バラエティ番組でさえも、各選手のオリンピック映像を放送することができるのである。これは、放送権を JC 方式で手に入れている日本の放送体制の最大の特徴であろう。

放送権料は大会を経るごとに高騰し、現在も高止まりしている。こうした中、民放はロンドン大会から 2 大会連続で赤字が続き、「NHK のみが放送権を獲得してはどうか」という問題提起もなされている。そのような放送体制の転換が起きた場合には、日本も欧米と同様の「1 国 1 放送機関」による放送に切り替わることになるが、民放がオリンピック放送権を手放す気配は今のところない。

このような世界的に異例な日本のオリンピック放送体制の問題として重要だと思われるのは、「巨大化した五輪の問題点を批判的に伝えることは主要なテレビ・新聞が挙国一致（オールジャパン）体制でコミットした日本においては、難しい」という砂川の指摘であろう。砂川が問題視するジャーナリズムとしての機能の弱体化を実証的に検討するためには、オリンピック関係の報道から排除されたり、追及が浅いケース等を掘り起こす必要があるが、本論文では第 4 章第 5 節でそれに関する若干の追究を試みたい。また、第 2 章のテレビによる競技中継の全貌、第 3 章および 4 章のニュース番組のリオ大会報道の実態の分析から、この問題について間接的ながら迫ることにしたい。

第２章　リオ大会のテレビ放送の全貌

本章の課題

本章の課題は、世界的にも例外的な放送体制の下でのリオ大会のテレビ放送の実態を番組編成の決定過程も含めて検討することである。

第１章で明らかにしたように、日本におけるオリンピック放送は欧米とは大きく異なり、JC 方式によって、NHK と民放合わせて６つのテレビ局が、オリンピック競技を中継し、オリンピックの映像を使用したニュース・情報番組などを放送することが可能である。このことは、「特定のスポーツに対する各々の国の視聴者の好み、あるいは、その国民的なまたはナショナリズム的な期待に順応するために、自国民が勝って、視聴者のナショナリズムを満足させることのできる種目や試合を周到に配慮して選択する」（ブルデュー 2000=2008:144）ことが日本では格段に容易であるということ、そのためオリンピック開催期間中に各局が通常の番組編成を大きく変更し、「オリンピック体制」と呼ばれるようなオリンピック中心の番組編成となり、テレビ放送全体がオリンピック一色となってしまう可能性があるということを意味する。

テレビ放送の「オリンピック体制」化の問題は、1964 年の東京大会の時点ですでに指摘されていた。たとえば放送記者クラブの桑原宏らによる座談会では、東京大会の開催前に NHK が番組編成を変更したことが論点となり、夜 7 時台のニュースと教養番組、8 時台の娯楽番組をそっくり外し、オリンピックのメインイベントである水泳などの実況中継に切り替えられるようにしていると考えられることや多くのプロデューサーがオリンピック要員として動員されることなどを「オリンピック体制」だと批判する意見もあがっていた（白井ほか 1964:6）。実際の NHK の放送は、中継だけでも総時間量が 146 時間 20 分、一日平均 10 時間におよんだが（浜田 2018:238）、こうした日本におけるテレビのオリンピック放送の実態をテーマにした研究は、今日に至るまでなされていない。

神原直幸は、1974 年から 1998 年のオリンピックの年間放送時間の推移を明らかにしており、オリンピックの夏季・冬季分散開催となった 1994 年以降に年間放送時間が減少したが、その一方で 1992 年より NHK BS による放送が始まり、BS の年間放送時間が NHK および民放の合計を上回っているといった事実を明らかにしているが（神原 2001:67-8）、オリンピック放送の実態に踏み込んだ検討は行っていない。

そこで本章では、いつの段階でどのような競技がリオ大会の中継の対象に選ばれたのか、実際にはどの競技が中継されたのか、それらは日本選手の競技結果にどれほど対応しているのか。また、中継以外のオリンピック関連番組も含めた放送が、全体の番組編成の中にどのように組み込まれ、どれほどの比重を占めているのかを明らかにし、世界的にも例外的な 6 つのテレビ局によるオリンピック放送の全貌に迫りたい[53]。

---

[53] 後藤和彦は 1960 年代前半に、メディア批評が番組批評（ドラマ、ドキュメンタリー、音楽の中でも特にドラマ）に偏っている実態を踏まえて、その番組がなぜそうした形でその時間に置かれているのか、つまり、枠そのものに対する批判の眼が欠けていること、時間の流れのなかで一定の位置に特定の番組をおくことの意味を問うべきだとしている（後藤 a 1963:3）。また、この編成批評は、番組欄からカテゴリ別

第 1 節では、リオ大会の日本選手団の出場競技と、競技結果をまとめる。第 2 節では、オリンピックで実施された 39 競技[54]のなかでどの競技や種目を中継したのか、読売新聞縮刷版のテレビ欄によって明らかにする。また、中継競技の決定過程については、当時発表された NHK と日本民間放送連盟の報道資料によって可能な限り追跡する[55]。第 3 節では、リオ大会の視聴率を既存の調査結果から抽出・整理したうえで、実際のオリンピック期間中のテレビ地上波（NHK、民放 5 局）の番組編成を検討し、オリンピックの競技中継が 18 日間の番組編成全体の中にどのように組み込まれ、どれほどの比重を占めたのかを 6 局全体および局別に明らかにする。

第 1 節 リオ大会の概要および日本選手団の競技結果

1．リオ大会の概要と実施競技

五輪史上初めての南米開催となった 2016 年のリオ大会は、ブラジルのリオデジャネイロ市を中心に 8 月 5 日の開会式から 21 日の閉会式まで 17 日間開催された[56]。参加選手は 207 の国と地域から 11,238 人と、参加国・地域数、参加人数ともにこれまでの夏季オリンピックで最多となった。実施されたのは計 28 競技（306 種目）[57]。メダル獲得国・地域数は 87

に番組を抽出・分類し、量的割合を材料にして批評的発言をするだけに留まらず、具体的な番組内容の把握の上に展開されるべきであるとしている（後藤 b 1963:3）。松山秀明は、日本のテレビ研究の現在地を、放送局による番組の整備・公開によって 2000 年代後半以降「アーカイブ論」全盛の時代を迎え、多くの研究者たちがテレビを検証する時代となった一方、番組の「編成」を問う研究の少なさを指摘している（松山 2017:44-6）。本章は、こうしたテレビ研究の要請にオリンピック放送を対象にして応えようとするものである。

[54] オリンピックでは競技、種別、種目の 3 つのレベルの区分が用いられている。競技（sports）とは、陸上や水泳、卓球といったものを指し、オリンピックの 28 競技の実施とはこのことを指している。種別（discipline）は競技をさらに細分化した一つの部門で、例えば水泳の競泳、シンクロ、飛び込みなどを指す。さらに細分化されたのが種目（events）で、競技、種別のなかの一つの部門のことを指し、水泳の競泳であれば 100m 自由形、200m 平泳ぎ、400m リレー、陸上であれば 100m や走高跳などのことを指すという（川本 1984:180）。

[55] 報道資料は、事前に中継種目と放送日時、放送局の決定を知らせる資料である。すなわち「テレビ側が事前にリオ大会における期待種目を提示した」といえるだろう。NHK は、2016 年 6 月 22 日に HP にアップした「リオデジャネイロオリンピックの放送計画」に「主な中継種目」を掲載。民間放送連盟は、2015 年 12 月、2016 年 7 月に報道資料を発表している。これらの報道資料は「どの種目をどの局が放送するか」視聴者が初めて触れる資料だ。さらにリオ大会の注目ポイントも書かれていることから、日本の視聴者にテレビ側が期待するリオ大会の方向性を示すことができるだろう。

[56] リオ 2016 パラリンピック競技大会（第 15 回夏季大会）、通称リオパラリンピックは 9 月 7 日から 18 日までの 12 日間の日程で行われた。パラリンピックの参加選手は 160 か国以上から約 4350 人で、22 競技・528 種目が行われた。日本パラリンピック委員会，2016，「大会概要 リオ 2016 パラリンピック競技大会概要」，日本パラリンピック委員会ホームページ，（2022 年 10 月 31 日取得，https://www.parasports.or.jp/paralympic/rio/info/outline.html）

[57] International Olympic Committee，2023，「Olympic Games Rio 2016 」（2022 年 10 月 31 日取得，https://www.olympic.org/rio-2016）．なお 28 競技をすべて記述すると、陸上競技、水泳、サッカー、テニス、ボート、ホッケー、ボクシング、バレーボール、体操、バスケットボール、レスリング、セーリング、ウェイトリフティング、ハンドボール、自転車競技、卓球、馬術、フェンシング、柔道、バドミントン、射撃、近代五種、カヌー、アーチェリー、テコンドー、トライアスロン、ゴルフ、ラグビーフットボ

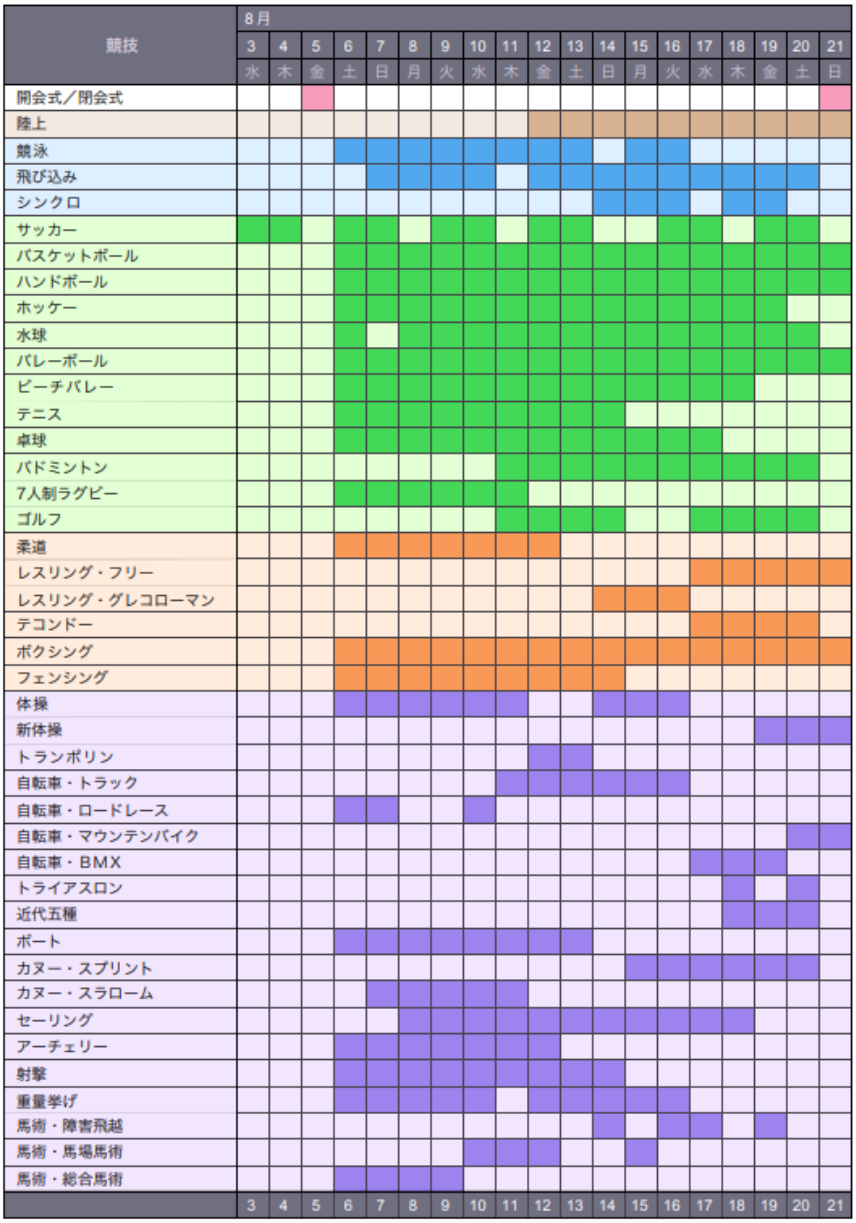
で、うちフィジー、ヨルダン、コソボの 3 か国は初めてのメダル（いずれも金メダル）獲得となった。IOC が発表した *Marketing Report Rio2016* によれば、リオ大会はネット配信も含めると、世界の約半数の人々が見たオリンピックであり、視聴者にとって、テレビ放送だけでなく、ネット配信という新たなプラットフォームでオリンピックをいつでも見られる形が定着した大会だったのではないかと分析されている（IOC 2017:23）。

競技日程は、開会式（8 月 5 日開催）以前の 8 月 3 日にサッカー予選が始まり、開会式以降、アーチェリー、水泳や柔道、自転車、射撃など計 28 競技（306 種目）が 21 日の閉会式まで連日実施された[58]。

ールである。スポーツ庁，2023,「2016 年リオデジャネイロオリンピック・パラリンピック競技大会の結果等について」（2023 年 1 月 22 日取得,
https://www.kantei.go.jp/jp/singi/tokyo2020_suishin_honbu/kaigi/dai5/sankou2.pdf）

[58] 例えばサッカーは、2012 年のロンドン大会でも開会式以前に予選が行われたように、参加国が多く、予選でグループごとの総当たり戦を行ったのちトーナメント戦となるバレーボールやバスケットボールのような団体競技は必然的に日程が長くなる。また陸上や競泳のように、種目数が多く予選、準決勝、決勝と複数回出場機会のあるものも日程が長くなる。ほかには、フェンシングや卓球といった、シングルと団体戦どちらもある競技も競技日程が長くなる傾向にある。8 月 12 日には、全 39 競技のうち 25 が実施され、8 月 21 日の閉会式当日にも 8 つが決勝戦を行っており、言わずもがなであるがオリンピック期間中は競技が行われない日はない。

表 2－1　競技日程（読売新聞デジタルより引用[59]）



このように膨大な数の競技を 17 日間で実施するという日程は、テレビ側からみれば、各国の視聴者のニーズに合わせて必要な部分を毎日自由に切り取り、編成して放送することができる使い勝手のいいコンテンツであるといえるだろう。そして日本ではそれが他国に比べて容易にできる環境であることは第 1 章で明らかにしたとおりである。

なお、正式には 28 競技（306 種目）であるが、大会のホームページや新聞などの競技日程、競技結果を示す表記では、39 のマークが描かれ、競技名が表記されている。陸上、競

[59] 読売新聞オンライン，2016，「リオ五輪特集　日程表（現地時間）」，（2022 年 11 月 23 日取得，https://www.yomiuri.co.jp/olympic/2016/results/）

泳、飛び込み、シンクロ、水球、オープンウォーター、アーチェリー、バドミントン、バスケットボール、ボクシング、カヌースプリント、カヌースラローム、自転車 BMXD、自転車マウンテンバイク、自転車ロード、自転車トラック、馬術、フェンシング、サッカー、ゴルフ、体操、新体操、トランポリン、ハンドボール、ホッケー、柔道、近代五種、ボート、7 人制ラグビー、セーリング、射撃、卓球、テコンドー、テニス、トライアスロン、ビーチバレー、バレーボール、重量挙げ、レスリングの計 39 がそれである。こちらの方が一般的な表記といえるが、これは「競技」の下位の区分である「種別」までを入れたものある[60]。そこで、以下では主に 28 競技ではなく、39 競技という区分を用いて検討を進めていきたい（両者の違いについては表 2－1 を参照されたい）。

2．日本選手団の競技結果

日本選手団の競技結果はどうだったのか。日本からリオ大会に派遣された日本代表選手団は計 338 人[61]。男性選手 174 人、女性選手 164 人で、男女比はほぼ半々であった。日本選手団はリオ大会で行われた競技 39（306 種目）のうち、今回出場権を獲得できなかったハンドボール、ビーチバレー以外の競技全てに参加している[62]。もっとも多く派遣された競技は水泳で 61 人。続いて多かったのは陸上の 52 人である。これは水泳、陸上ともに競技における種目数が多いため必然的な結果であろう[63]。この実態を、紫が男女ともに出場、オレンジが女性のみ出場、青が男性のみ出場した競技として示したのが表 2－2 である。

---

[60] 本論文における競技の表記については、注 54 に示したとおりである。
[61] 公益財団法人日本オリンピック委員会の第 31 回オリンピック競技大会（2016 リオデジャネイロ）。(2022 年 12 月 29 日取得, https://www.joc.or.jp/games/olympic/riodejaneiro/japan/)
[62] 日本不参加の競技・種別はビーチバレー、ハンドボール以外に性別で見ると、男性はホッケー、バレーボール、バスケットボール、テコンドー、クレー射撃に参加しておらず（シンクロナイズドスイミングと新体操はそもそも男性競技が行われていない）、女性はサッカー、ボクシング、水球に参加していない。
[63] 派遣人数の多さで 3 番目に多いのが今大会初採用となった 7 人制ラグビーで、男女 12 人ずつ合わせて 24 人が派遣されている。団体競技や、階級がある競技は必然的に派遣選手数が多くなっている。

表 2－2　日本人出場競技（男女）

日本人出場競技（男女）	
競技（28）	種別・競技表記含め（39）
陸上競技	陸上
水泳	競泳
	飛び込み
	シンクロ
	水球
	オープンウォーター
アーチェリー	アーチェリー
バドミントン	バドミントン
バスケットボール	バスケットボール
ボクシング	ボクシング
カヌー	カヌー　スプリント
	カヌー　スラローム
自転車競技	自転車BMX
	自転車マウンテンバイク
	自転車ロード
	自転車トラック
馬術	馬術
フェンシング	フェンシング
サッカー	サッカー
ゴルフ	ゴルフ
体操	体操
	新体操
	トランポリン
ハンドボール	ハンドボール
ホッケー	ホッケー
柔道	柔道
近代五種	近代五種
ボート	ボート
ラグビーフットボール	7人制ラグビー
セーリング	セーリング
射撃	射撃
卓球	卓球
テコンドー	テコンドー
テニス	テニス
トライアスロン	トライアスロン
バレーボール	ビーチバレー
	バレーボール
ウェイトリフティング	重量挙げ
レスリング	レスリング

では、出場した日本選手 338 人中、どの競技・種目で何人の者がメダルを獲得できたのであろうか。それを集計したのが次の表 2－3 である。

表 2－3　日本選手のメダル獲得競技一覧

日本選手のメダル獲得状況				
競技（28）	種別（競技含め39）	種目／階級（金）	種目／階級（銀）	種目／階級（銅）
陸上競技	陸上		男子4×100リレー	男子50km競歩
水泳	競泳	男子400m個人メドレー 女子200m平泳ぎ	男子200mバタフライ 男子200m個人メドレー	男子400m個人メドレー 男子4×200リレー 女子200mバタフライ
	飛び込み			
	シンクロ			チーム デュエット
	水球			
	オープンウォーター			
アーチェリー	アーチェリー			
バドミントン	バドミントン	女子ダブルス		女子シングルス
バスケットボール	バスケットボール			
ボクシング	ボクシング			
カヌー	カヌー　スプリント			
	カヌー　スラローム			スラローム男子カナディアンシングル
自転車競技	自転車BMX			
	自転車マウンテンバイク			
	自転車ロード			
	自転車トラック			
馬術	馬術			
フェンシング	フェンシング			
サッカー	サッカー			
ゴルフ	ゴルフ			
体操	体操	男子団体 男子個人総合		男子種目別跳馬
	新体操			
	トランポリン			
ハンドボール	ハンドボール			
ホッケー	ホッケー			
柔道	柔道	男子73kg級 男子90kg級 女子70kg級	男子100kg超級	男子60kg級 男子66kg級 男子81kg級 男子100kg級 女子48kg級 女子52kg級 女子57kg級 女子78kg級超級
近代五種	近代五種			
ボート	ボート			
ラグビーフットボール	7人制ラグビー			
セーリング	セーリング			
射撃	射撃			
卓球	卓球		男子団体	男子シングルス 女子団体
テコンドー	テコンドー			
テニス	テニス			男子シングルス
トライアスロン	トライアスロン			
バレーボール	ビーチバレー			
	バレーボール			
ウェイトリフティング	重量挙げ			女子48kg級
レスリング	レスリング	女子フリースタイル48kg級 女子フリースタイル58kg級 女子フリースタイル63kg級 女子フリースタイル69kg級	男子フリースタイル57kg級 男子グレコローマンスタイル59kg級 女子フリースタイル53kg級	

（公共財団法人日本オリンピック委員会の HP より作成）

日本選手のメダル獲得総数は史上最多の 41 で、うち金メダルが 12、銀メダル 8、銅メダル 21 だった。競技としてメダルを獲得したのは 39 競技中 10 競技（25.6%）である。ただし、団体競技や種目でのメダル獲得者がいるので、メダリストの総計はそれよりも多く計 58

人となり、うち複数のメダルを獲得したのが競泳の萩野公介選手、体操の内村航平選手、白井健三選手、卓球の水谷隼選手、シンクロナイズドスイミングの乾友紀子選手、三井梨沙子選手である。日本選手のメダル獲得率は 17.1%であった。

また日本選手が入賞した競技と人数は、計 18 競技（106 人）、うち 4 位が 7 競技（24 人）、5 位が 9 競技（31 人）、6 位が 4 競技（5 人）、7 位が 4 競技（7 人）、8 位が 7 競技（39 人）であった。先にみたメダル獲得者とこれらの入賞者を合わせると 164 人となり、日本選手の 48.4%、約半数もの選手が入賞したことになる。実に多くの日本選手が活躍した大会であったのだ。それに加えてリオ大会は、競技として初めてメダルを獲得したカヌースラロームや陸上競歩、卓球男子、そして初めての金メダル獲得となったバドミントン、96 年ぶりのメダルとなったテニス、52 年ぶりの競泳 800mリレー銅メダル獲得、2 選手の 4 連覇がかかった女子レスリングなど、メダル獲得に関する話題性も多かったといえる。

第２節　リオ大会の中継競技決定の実際と放送計画

テレビはリオ大会の何を伝えたのか。ここでは実際に中継された競技が何であるのかをみてみたい。

１．実際に生中継された競技

まずは、日本の地上波で中継された競技についてみてみよう。

表２－４　地上波で中継された競技とメダル獲得状況

39競技の放送事情	日本人の出場状況	メダル獲得状況	決勝		準決勝・3位決定戦		予選or表記ナシ	
性別	性別	性別	女子	男子	女子	男子	女子	男子
陸上	陸上	陸上	女子100m 女子マラソン 女子三段跳び 女子ハンマー投げ 女子3000m障害 女子1500m 女子200m 女子100mハードル 女子走り幅跳び 女子やり投げ 女子400mハードル 女子棒高跳び 女子5000m 女子1600mリレー	男子20キロ競歩 男子円盤投げ 男子100m 男子400m 男子棒高跳び 男子800m 男子三段跳び 男子走高跳 男子110mハードル 男子10種 男子砲丸投げ 男子200m 男子400mリレー 男子1600mリレー 男子やり投げ 男子1500m 男子5000m 男子マラソン ※男子50キロ競歩	女子10000m 女子100m 女子400m 女子1500m 女子200m 女子400mハードル 女子800m	男子400m 男子800m 男子100m 男子400mハードル 男子200m 男子1500m	女子砲丸投げ 女子100m 女子1500m 女子三段跳び 女子3000m障害 女子400m 女子7種・走り幅跳び 女子200m 女子400mハードル 女子5000m 女子100mハードル 女子やり投げ 女子走り幅跳び	男子円盤投げ 男子800m 男子400m 男子100m 男子棒高跳び 男子三段跳び 男子3000m障害 男子400mハードル 男子110mハードル 男子200m 男子10種 男子やり投げ 男子400mリレー
競泳	競泳	競泳	女子100mバタフライ 女子100m背泳ぎ 女子100m平泳ぎ 女子200m個人メドレー 女子200mバタフライ 女子800mリレー 女子200m平泳ぎ 女子200m背泳ぎ 女子50m自由形 女子400mメドレーリレー	男子400m個人メドレー 男子100m平泳ぎ 男子400mリレー 男子200m自由形 男子100m背泳ぎ 男子200mバタフライ 男子800mリレー 男子200m平泳ぎ 男子100m自由形 男子200m背泳ぎ 男子200m個人メドレー 男子800m自由形 男子100mバタフライ 男子50m自由形 男子1500m自由形 男子400mメドレーリレー	女子100mバタフライ 女子50m		女子400m個人メドレー 女子100mバタフライ 女子100m平泳ぎ 女子200m個人メドレー 女子200mバタフライ 女子100m自由形 女子200m平泳ぎ 女子200m背泳ぎ 女子400mメドレーリレー	男子400m個人メドレー 男子100m平泳ぎ 男子200自由形 男子100m背泳ぎ 男子200mバタフライ 男子200m平泳ぎ 男子800mリレー 男子200m背泳ぎ 男子200m個人メドレー 男子100mバタフライ 男子50m自由形 男子400mメドレーリレー
飛び込み	飛び込み	飛び込み						男子板飛び込み
シンクロ	シンクロ	シンクロ	デュエットフリー チームテクニカル チームフリー				デュエットフリー予選 デュエットテクニカル	
水球	水球	水球						男子日本×ギリシャ 男子日本×ハンガリー
オープンウォーター	オープンウォーター	オープンウォーター	女子10キロマラソン					
アーチェリー	アーチェリー	アーチェリー						
バドミントン	バドミントン	バドミントン	女子ダブルス 女子シングルス	男子ダブルス	女子ダブルス準決勝 女子シングルス準決勝 女子シングルス3位決定戦	男子ダブルス準決勝 男子シングルス準決勝	女子ダブルス 女子シングルス 女子ダブルス準々決勝 女子シングルス準々決勝	男子ダブルス 男子シングルス 男子ダブルス準々決勝
バスケットボール	バスケットボール	バスケットボール		男子セルビア×アメリカ			女子バスケットボール	
ボクシング	ボクシング	ボクシング	女子ミドル級	男子Sヘビー級				
カヌー　スプリント	カヌー　スプリント	カヌー　スプリント						
カヌー　スラローム	カヌー　スラローム	カヌー　スラローム						
自転車BMX	自転車BMX	自転車BMX						
自転車マウンテンバイク	自転車マウンテンバイク	自転車マウンテンバイク						
自転車ロード	自転車ロード	自転車ロード						
自転車トラック	自転車トラック	自転車トラック						
馬術	馬術	馬術						
フェンシング	フェンシング	フェンシング						男子フルーレ個人 男子エペ個人
サッカー	サッカー	サッカー		男子ブラジル×ドイツ	女子準決勝ブラジル×スウェーデン	男子準決勝ブラジル×ホンジュラス		日本×ナイジェリア スウェーデン×コロンビア ブラジル×南アフリカ 日本×スウェーデン
ゴルフ	ゴルフ	ゴルフ	女子1日目、2日目、3日目、最終日	男子1日目、3日目、最終日				
体操	体操	体操	女子団体 女子種目別平均台 女子種目別ゆか	男子団体 男子個人総合 男子種目別ゆか 男子種目別吊り輪 男子種目別跳馬 男子種目別平行棒 男子種目別鉄棒				男子団体
新体操	新体操	新体操	個人総合 団体				個人総合 団体（リボン、クラブ＆フープ）	
トランポリン	トランポリン	トランポリン						男子予選
ハンドボール	ハンドボール	ハンドボール						
ホッケー	ホッケー	ホッケー					女子日本×インド	
柔道	柔道	柔道	女子48g級 女子52kg級 女子57kg級 女子63kg級 女子70kg級 女子78kg級 女子78kg超級	男子60kg級 男子66kg級 男子73kg級 男子81kg級 男子90kg級 男子100kg級 男子100kg超級			女子48g級 女子52kg級 女子57kg級 女子63kg級 女子70kg級 女子78kg級 女子78kg超級	男子60kg級 男子66kg級 男子73kg級 男子81kg級 男子90kg級 男子100kg級 男子100kg超級
近代五種	近代五種	近代五種						
ボート	ボート	ボート						
7人制ラグビー	7人制ラグビー	7人制ラグビー				男子	女子予選リーグ	男子日本×イギリス
セーリング	セーリング	セーリング						
射撃	射撃	射撃		男子エアピストル				
卓球	卓球	卓球		男子シングルス 男子団体日本×中国	女子シングルス準決勝 女子団体準決勝日本×ドイツ 女子団体3位決定戦	男子シングルス準決勝 男子シングルス3位決定戦 男子団体準決勝日本×ドイツ	女子シングルス3回戦 女子シングルス4回戦 女子シングルス準々決勝 女子団体1回戦日本×ポーランド 女子団体準々決勝日本×オーストリア	男子シングルス3回戦 男子シングルス4回戦 男子シングルス準々決勝 男子団体1回戦日本×ポーランド 男子団体準々決勝
テコンドー	テコンドー	テコンドー	女子57kg級		女子57kg級3位決定戦			
テニス	テニス	テニス				男子シングルス3位決定戦	テニス（不明）	テニス（不明）
トライアスロン	トライアスロン	トライアスロン	女子トライアスロン				トライアスロン（不明）	トライアスロン（不明）
ビーチバレー	ビーチバレー	ビーチバレー						
バレーボール	バレーボール	バレーボール	女子中国×セルビア	男子イタリア×ブラジル			女子日本×韓国 女子日本×カメルーン 女子日本×ブラジル 女子日本×ロシア 女子日本×アルゼンチン 女子準々決勝日本×アメリカ	
重量挙げ	重量挙げ	重量挙げ	女子48kg級 女子53kg級				女子48kg級	
レスリング	レスリング	レスリング	女子フリー48kg級 女子フリー58kg級 女子フリー69kg級 女子フリー53kg級 女子フリー63kg級 女子フリー75kg級	男子グレコローマン66kg級 男子グレコローマン98kg級 男子フリー57kg級 男子フリー74kg級 ※男子グレコローマン59kg級	女子フリー48kg級 女子フリー58kg級 女子フリー69kg級 女子フリー53kg級 女子フリー63kg級 女子フリー75kg級	男子グレコローマン66kg級 男子グレコローマン98kg級 男子フリー57kg級 男子フリー74kg級 ※男子グレコローマン59kg級	女子フリー48g級 女子フリー58kg級 女子フリー69kg級 女子フリー53g級 女子フリー63kg級 女子フリー75kg級	男子グレコローマン59kg級 男子フリー57kg級 男子フリー74kg級 男子フリー65kg級 男子フリー97kg級

（読売新聞縮刷版首都圏のテレビ欄と番組録画データより摘出・作成）

地上波で生中継された競技をまとめたのが表 2－4 である[64]。左から、「39 競技の放送事情」「日本人の出場状況（性別）」「メダル獲得状況」「決勝」「準決勝・3 位決定戦」「予選 or 表記ナシ」という項目で整理した。

NHK、民放各局が地上波で中継したのは 39 競技中 26 競技（66.7%）と、かなり幅広い競技が中継されたといえる。そこには射撃や水球、テコンドーなど普段の人気がさほど高くないマイナーな競技も含まれており、この点でオリンピック放送は、普段はメディア露出がほとんどないマイナースポーツにも光の当たる機会を与えたと評価できよう。

中継された競技をさらに詳しく見てみると、日本選手が出場していないハンドボールやビーチバレーは中継されなかったことがわかる。また、日本選手は 39 競技中 36 競技（92.3%）に出場したが、それら出場競技のすべてが中継されたわけではなく、自転車、近代五種、ボート、セーリングなどは中継されなかった。その一方で、バスケットボールやバレーボール、サッカーなど人気が高いメジャーな競技は、日本選手が不在であってもその決勝戦が中継された。

中継のひとつの重点が、日本のメダル獲得競技に置かれていたことは明白である。実際のメダルの獲得は、39 競技中 11 競技（28.2%）で計 41 個であったが、カヌー以外のすべての競技が中継され、40 個のメダル獲得の瞬間が放送された。なぜこのようなことができたのか。前提条件として、JC 体制下で全局が中継を行なうことができる点がまず指摘できるだろう。さらにテレビ局側が予め日本選手がメダルを獲得できる競技を予測していることもあげられる。

例えば、男子 50km 競歩は読売新聞縮刷版のテレビ欄には掲載されていなかったが、NHK が事前に発表した放送計画には記載があった。そこで実際の放送シーンを録画で調べたところ、レスリング・フリースタイルの生中継の合間に、「動きがあったようなんです、メダル争いに加わっている、残り 2 キロを切ったところ」というスタジオのコメントが入り、画面が切り替わって生中継が始まった。同じく男子グレコローマン 59kg 級も、予選から生中継が行われるとだけテレビ欄に記載されていたが、実際の録画で確認してみたところ、準決勝、決勝まで生中継されていた。これらはテレビ局が予め予想を立て、実際にメダル獲得の可能性が出たところで中継に切り替えた例である。

メダル獲得の瞬間を中継できなかった唯一のケースがカヌーの羽根田選手による銅メダルだったが、これは当日 5 時 30 分の単発のニュースの中で速報として、柔道の男子 81 キロ級銅メダル獲得、女子 63 キロ級 3 位決定戦はメダルを逃すというニュースとともに伝えられた。ニュースの中では、柔道会場に画面が切り替わった後、「カヌースラローム男子カナディアンシングル決勝レースの模様を振り返ります」とキャスターが話し、中継の録画映像を放送した。カヌーでの日本選手のメダル獲得は今までになく、羽根田選手は予選 5 位、準決勝 6 位だったため、決勝で銅メダルを獲得することをテレビ局側が予測できなかったと考えられる。

---

[64] 突発的に中継が挟まる可能性もあるため、読売新聞縮刷版のテレビ欄からはそうした情報は残念ながら得ることができなかったが、おおむね中継された競技は網羅できたと言えるだろう。

ではこれらの競技中継は、いつどのように決定されていったのか。NHK、民放の報道資料から可能な限り追跡していきたい。

2．NHK のリオ大会放送計画

NHK 広報局は、「リオデジャネイロオリンピックの放送計画」をリオ大会の 1 カ月前、2016 年 6 月 22 日に発表した。複数の放送波を持つ NHK の「放送計画」の内容は次のようなものである。

総合テレビでは、「期待の日本選手の活躍を余すところなく」放送するとして、日本時間夜 10 時から始まる予選、早朝から午前中いっぱい行われる決勝まで、日本選手の出場競技をライブで放送するほか、昼のニュースの放送時間を拡大し、1 日の競技結果を速報、夜の時間帯には「ニュース 7」、ハイライト枠も編成し感動シーンの振り返りとそのあとの見どころを伝えるとしている。「期待の日本選手の活躍」を不可欠のものとして位置付け、番組編成がなされているのである[65]。

NHK の「放送計画」には「主な中継種目」が記載されている。これが NHK にとって「期待の日本選手の活躍」の中で最も注目度が高いコンテンツであることが予測される。それが開会式、閉会式と以下の 7 種目だ。

表 2－5　NHK の「放送計画」の「主な中継種目」

競技（種目）	放送日時（日本時間）
サッカー／男子予選「日本 vs ナイジェリア」	8/5・9：45～
水泳／決勝（男子 400 個人メドレー）	8/7・9：55～
体操／決勝（男子団体）	8/9・4：00～
卓球／3 位決定戦・決勝（女子シングルス）	8/11・8：30～
レスリング／決勝（女子 58kg 級）	8/18・4：00～
バドミントン／準決勝（女子シングルス）決勝（女子ダブルス）	8/18・20：30～
陸上／男子マラソン	8/21・21：30～

（NHK 広報局「リオデジャネイロオリンピックの放送計画」2016 年 6 月 22 日発表より摘出・作成。黄色マーカは実際のメダル獲得競技種目）

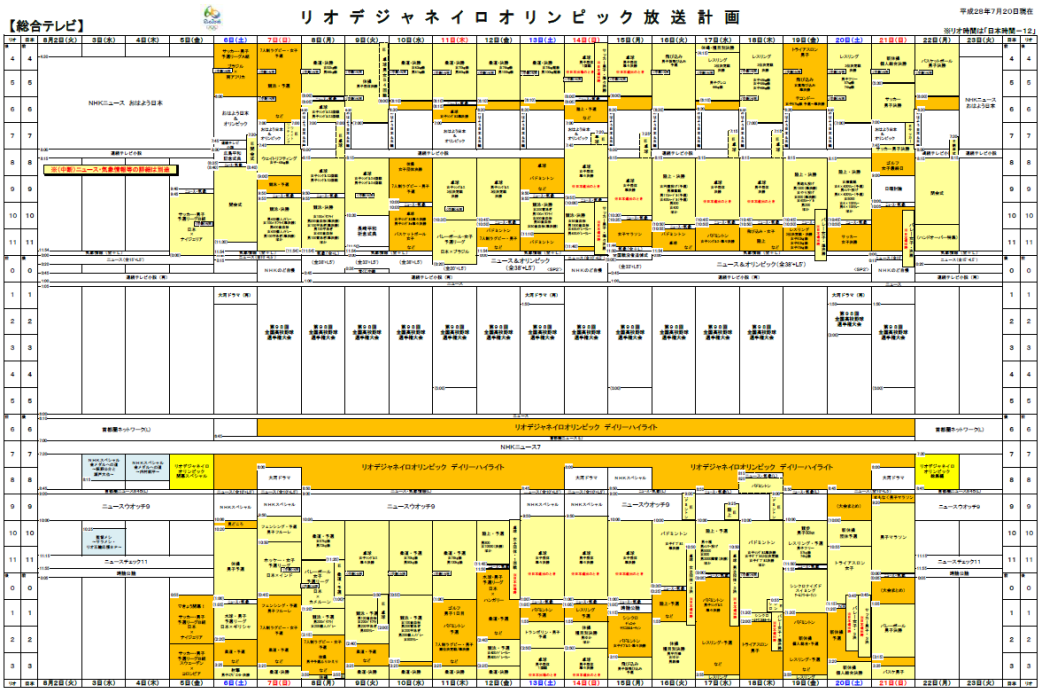
それぞれの競技について、次のようなタイトルがつけられている。水泳は「萩野公介 vs 瀬戸大也選手で金メダル第 1 号なるか？」、体操は「アテネオリンピック以来の団体・金メダルなるか？」、卓球は「石川佳純選手、個人でのメダルなるか？」、レスリングは「伊調馨選手、五輪 4 連覇なるか？」、バドミントンは、「奥原希望選手、メダルなるか？　世界ランク 1 位髙橋・松友ペアに期待！」、マラソンは「日本勢の入賞は？」である。７つのうち６つがメダル獲得への期待を視聴者に訴えかけるものである。男子マラソンはメダル獲得で

[65] また、BS1 では生中継と録画で全競技を放送するとしており、現地で競技が行われていない時間帯にも「見逃し・録画ゾーン」として丸 1 日オリンピックを放送するとしている。

はなく入賞への期待であるが、これは日本におけるマラソン人気の高さを考慮したものだと思われる。なおサッカーにはコメントはない。

こうした NHK のメダル獲得および入賞の期待と実際の競技結果とが食い違ったのは、卓球の石川佳純選手がシングルスでメダルを獲得できなかったことと、男子マラソンが入賞を逃したことの２つで、あとの５つは期待通りの結果だった。なお、男子マラソンは入賞を逃したが、視聴率ではリオ大会の放送の中で最高の番組平均世帯視聴率 23.7%を記録した。以上のような７競技を中心に「期待の日本選手の活躍」を不可欠のものとして位置付ける NHK の番組編成の詳細は、7 月 20 日に「リオデジャネイロオリンピック放送計画」として公表された[66]。

図２−１　リオデジャネイロオリンピック放送計画（NHK 総合テレビ）



NHK は地上波だけでなく、BS を含めて、大会期間中、膨大な放送枠をリオ大会にあてた。そのうち総合テレビにおける競技中継枠もしくはオリンピックに関連する番組（ハイライト等）が、図２−１の「放送計画」のなかの、オレンジ色と黄色に塗られているところである。これを見れば一目瞭然だが、リオ大会の期間中、NHK のメインチャンネルである総合テレビのほとんどがオリンピック中継や関連番組で占められているのである。現地リオと昼夜逆転の時差が 12 時間あったことから、総合テレビにおける競技中継枠は、競技が行

66 全貌を把握できるようにするため縮小して掲載した。日本放送協会，2016,「リオデジャネイロオリンピック放送計画」2016 年 7 月 20 日，（2018 年 4 月 1 日取得，https://www.nhk.or.jp/pr/keiei/shiryou/soukyoku/2016/07/008-1.pdf）

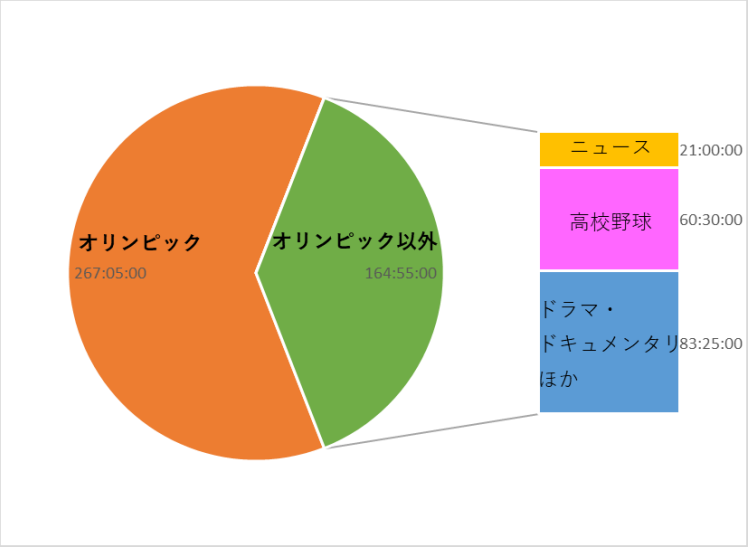
われる午後 10 時から翌日昼にかけて編成され、日本選手の活躍や現地の熱気をライブで伝えることが可能であった。

さらにオリンピック関連番組として、ニュースの「おはよう日本」には「&オリンピック」と記載されており、オリンピック情報が必ず流れる計画だったことが伺える。なお夜のニュース・報道番組である「ニュース 7」と「ニュースウオッチ 9」には「&オリンピック」の表記は見られないが、実際に番組を見てみると、ふんだんにオリンピック情報が伝えられている。とくに午後 6 時～8 時台に放送された「ニュース 7」の次に「ハイライト枠」があることで生中継を見逃しても「日本選手の活躍をまとめてチェックできる」「このあとの見どころがすぐにわかる」放送を目指したとされる（日本放送協会 2017:78）。

先にも述べたように、ニュース番組の中でもオリンピックに触れる時間が多く存在するのであり、オリンピックに一切ふれない番組は、番組表中央の放送枠（13 時から 17 時）にある「第 98 回全国高校野球選手権」（8 月 7 日から 18 日まで連日中継）、そしてドラマ枠の朝の「連続テレビ小説」と、日曜夜の「大河ドラマ」、ドキュメンタリー枠の「NHK スペシャル」のみであるといえる。それらの放送時間を集計したものが図 2－2 である。

図 2－2　NHK 総合テレビのオリンピック報道（オリンピック期間中）

単位：時間



NHK 総合テレビの予定総放送時間は、リオ大会期間中（18 日間）の 432 時間のうち、267 時間 5 分、実に 61.8%がオリンピック中継および関連番組で占められている[67]。オリン

[67] 8 月 5 日から 22 日までの放送時間を対象に計算した。オリンピック関連番組として、中継と、「おはよう日本&オリンピック」を集計した。それ以外の夜のニュース・報道番組、高校野球、ドラマ、ドキュメンタリーなどはオリンピック以外となる。全 18 日間のうち、初日の 5 日と最終日の 22 日はあまりオリンピック中継や関連番組がないため、1 日に占めるオリンピック関連放送時間は、5 日が 33.68%、22 日

ピック開幕以前に、日本の公共放送である NHK は、放送内容をオリンピックに特化することを決めていたのである。また、高校野球が 60 時間 30 分で全体の 14.0%を占めているため、これらを単純に合計すると放送の 75.8%がスポーツで占められていることになる。驚異的な値である。なおニュースの総放送時間は 21 時間（4.86%）と比率的には大きくはないものの、この中でもオリンピックの情報がそれなりの比重を占めており、これを含めると 80%を超える値となるだろう。

なお、中継予定競技については、上記の図 2－2 では競技名が小さすぎて読み取りが困難だと思われるので改めて下記に掲載する。

表 2－6　リオデジャネイロオリンピック放送計画（NHK 総合テレビ）に記載された中継予定競技一覧

5 日	サッカー男子／予選リーグ B 組日本×ナイジェリア、スウェーデン×コロンビア
6 日	サッカー予選リーグ A 組ブラジル×南アフリカ、開会式（E テレ→総合）、体操男子予選、水球・男子予選リーグ日本×ギリシャ、柔道予選など、射撃男子エアピストル決勝
7 日	7 人制ラグビー女子予選、競泳予選など、ウェイトリフティング女子 48 キロ級（E→総合）、競泳決勝（男 400 個人メドレー、女 100mバタフライ準決勝、男 400 自由形、女 400 個人メドレー、男 100 平泳ぎ準決勝ほか）、フェンシング予選男子フルーレ、ホッケー女子予選リーグ日本×インド、柔道予選など、決勝
8 日	柔道決勝（女 52 キロ級、男 66 キロ級）、卓球（女子シングルス 3 回戦、男子シングルス 3 回戦、総合→E テレ→総合）、競泳決勝（女 100 バタフライ、男 200 自由形準決勝、女 100 平泳ぎ準決勝、男 100 平泳ぎ、女 400 自由形、男 100 背泳ぎ準決勝ほか）、柔道予選（女 57 キロ級、男 73 キロ級、総合→E テレ）、バレーボール女子予選リーグ日本×カメルーン、競泳予選（男 200 バタフライ、女 200 個人メドレー）、7 人制ラグビー女子予選、体操（男子予選ふりかえり）など
9 日	体操男子団体決勝、卓球男女 S4 回戦（E テレ→総合）、卓球シングルス準々決勝（総合→E テレ）、競泳予選（男 100 自由形、女 200 バタフライ、男 200 平泳ぎ、男 800 リレー）、柔道予選、柔道決勝
10 日	柔道決勝（女 63 キロ級、男 81 キロ級）、体操女子団体決勝、7 人制ラグビー男子予選、卓球（女子シングルス準々決勝、男子シングルス準々決勝）、バスケットボール女子など、柔道予選（女 70 キロ級、男 90 キロ級）、競泳予選（女 100 自由形、男 200 背泳ぎ、女 200 平泳ぎ、男 200 個人メドレー、女 800 リレー）、柔道決勝
11 日	柔道決勝（女 70 キロ級、男 90 キロ級）、卓球女子シングルス準決勝、卓球女子シングルス 3 位決定戦、決勝、バレーボール女子予選リーグ日本×ブラジル、柔道予選（女 78 キロ級、男 100 キロ級）、ゴルフ男子 1 日目、バドミントン予選、7 人制ラグビー男子順位決定戦、準決勝、柔

が 43.33%である。しかし、6 日から競技が本格的に始まるとオリンピック関連時間が一気に増加し 60%から最高で 73.96%（8 月 20 日の放送予定）となり、実に一日の 4 分の 3 の時間をオリンピックに割いていることとなる。

	道決勝
12 日	柔道決勝（女 78 キロ級、男 100 キロ級）卓球男子シングルス 3 位決定戦、決勝、バドミントン、7 人制ラグビー男子など、陸上予選（男 800、女 10000 決勝ほか）、卓球女子団体 1 回戦※日本出場時、水球男子予選リーグ日本×ハンガリー、柔道予選など、競泳予選（女 400 メドレーリレー、男 400 メドレーリレー）、柔道決勝
13 日	柔道決勝（女 78 キロ超級、男 100 キロ超級）、卓球、バドミントンなど、競泳決勝（女 200 背泳ぎ、男 100 バタフライ、女 800 自由形、男 50 自由形、女 50 自由形準決勝）、卓球女子団体準々決勝※日本進出の時、バドミントン予選、トランポリン男子予選、卓球男子団体 1 回戦※日本出場のとき
14 日	卓球男子団体 1 回戦※日本出場のとき、サッカー男子準々決勝※日本進出の時、陸上予選など、卓球女子団体準々決勝※日本進出のとき、競泳決勝（女 50 自由形、男 1500 自由形、女 400 メドレーリレー、男 400 メドレーリレー）、サッカー男子準々決勝※日本進出時、卓球男子団体準々決勝※日本進出の時、レスリング予選、体操種目別決勝（男ゆかほか）、卓球男子団体準々決勝※日本進出の時
15 日	卓球男子団体準々決勝※日本進出の時、卓球女子団体準決勝※日本進出の時、女子マラソン、シンクロ（デュエット、テクニカルルーティン）、バドミントン女子ダブルス準々決勝、飛び込み男子板飛び込み予選
16 日	飛び込み男子板飛び込み予選、陸上決勝（女円盤投げ予選、男棒高跳、男 110 ハードル予選、女 400 ハードル予選、男 800、女 400 ほか）、バドミントン、卓球など、バドミントン女子ダブルス準決勝、卓球女子団体 3 決※日本進出時、陸上予選など、体操種目別決勝（男平行棒、女ゆか、男鉄棒）
17 日	体操種目別決勝、レスリング 3 位決定戦決勝（男子グレコ 66 キロ級）、卓球女性団体決勝※日本進出のとき、バドミントン（女子シングルス準々決勝）、陸上予選（男十種、男ハンマー投げ、男 5000、女 800、男 3000 障害決勝ほか）、卓球男子団体 3 決※日本進出時、バドミントン男子シングルス準々決勝、レスリング予選など
18 日	レスリング 3 位決定戦決勝（女子 48 キロ級、58 キロ級、69 キロ級）、卓球男子団体決勝※日本進出のとき、飛び込み女子、陸上など、バドミントン（女子シングルス準決勝、女子ダブルス 3 位決定戦、女子ダブルス決勝ほか）、シンクロ（チームテクニカルルーティン E テレ→総合）、バレー女子準決勝※日本進出時、トライアスロン男子
19 日	トライアスロン男子、飛び込み（女高飛び込み準決勝）、テコンドー（女子 57 キロ級予選～準決勝）、陸上決勝（男砲丸投げ、男 1500 準決勝、女やり投げ、女 800 準決勝、女 400 ハードル、男 200 ほか）、バレー女子準決勝※日本進出時、レスリング 3 位決定戦・決勝（女子 53 キロ級、63 キロ級、75 キロ級）、競歩男子 50 キロ、レスリング予選（男子フリー57 キロ級、74 キロ級）、シンクロナイズドスイミング（チームフリールーティン）、バドミントン、新体操個人総合予選、レスリング予選など
20 日	レスリング 3 位決定戦・決勝（男子フリー57 キロ級、74 キロ級）、陸上決勝（女棒高跳、女 4×400 リレー予選、男ハンマー投げ、男 4×400 リレー予選、女 5000、女 4×100 リレー、男 4×100 リレーほか）、サッカー女子決勝、新体操団体予選、トライアスロン女子、バレー女子 3 決※日本進出時、サッカー男子 3 決※日本進出時、新体操個人総合決勝

21 日	新体操個人総合決勝、サッカー男子決勝（総合→E テレ→総合）ゴルフ女子最終日、バレー女子決勝※日本進出時、男子マラソン、バレーボール男子決勝、バスケ男子
22 日	バスケットボール男子決勝、閉会式（E テレ→総合）

（リオデジャネイロオリンピック放送計画より摘出・作成。黄色マーカは実際のメダル獲得競技種目）

上記の中継予定競技を、先にみた表 2－4 と重ねてみると、7 つの「主な中継種目」以外でもメダル獲得が期待される競技を NHK が予め中継できるようになっていたことがわかる[68]。また NHK にとっては、リオとの時差が幸いしたともいえるだろう。8 月 7 日から 21 日の 13 時から 18 時までほぼ毎日高校野球の放送が予定されているが（図 2－2）、それは時差のためオリンピック中継が入らない時間帯だったのだ。リオ大会期間中に NHK がスポーツチャンネル化することは、このようにリオ大会の開催前から決定されていたのである。

3．民放のリオ大会放送計画

民放連が最初に発表したリオ大会の放送計画は、2015 年 12 月 17 日発表の「リオデジャネイロオリンピック　民放テレビの主要中継種目について」である[69]。

「来夏開催のリオデジャネイロオリンピックにおける、民放テレビ各系列の主要な中継種目が、別紙のとおり決定しましたので、お知らせいたします。なお、民放 BS 放送を含めた最終的な放送枠は、来年 7 月上旬ごろに決定する予定です。その際、あらためてお知らせいたします」として、ハイライトや総集編などは放送時間未定であること、男女サッカー、男女バレーボールといった、オリンピック直前まで出場するか不明な競技については組み合わせ抽選会終了後の決定であること、そのほかの競技も中継検討中であること、中継種目及び競技スケジュール変更の可能性があることが記載されている。

表 2－7　日本民間放送連盟が提示した中継競技（2015 年 12 月時点）

局	競技（種目）	日時（日本時間）
TBS テレビ系	柔道／決勝（男子 73ｋｇ級　女子 57ｋｇ級）	8／9・3：30～6：30
	水泳／決勝（女子 200m平泳ぎ　男子 200m背泳ぎ　男子 200m個人メドレー　他）	8／12・10：00～11：55
	陸上／女子マラソン	8／14・21：00～24：30
	陸上／予選(男子 200m　女子 5000m　女子棒高跳び　他)	8／16・21：30～24：40
	陸上／決勝（男女 4×400mリレー　男子やり投げ　他）	8／21・8：10～11：00
日本テレビ系	水泳／決勝（女子 100m平泳ぎ　男子 200m自由形　男子	8／9・10：00～12：00

[68] なおこの時点では、卓球やバレー、サッカーといったトーナメント制の競技は「※日本が進出した時」という注意書きがなされている。
[69] 日本民間放送連盟，2015，「リオデジャネイロオリンピック　民放テレビの主要中継種目について」，2015 年 12 月 17 日，（2018 年 4 月 1 日取得，https://j-ba.or.jp/category/topics/jba101643）

	100m 背泳ぎ　他）	
	水泳／決勝（男子 200m平泳ぎ　女子 200mバタフライ　他）	8／11・10：00～12：25
	体操／個人・団体ダイジェスト	（未定）
	ゴルフ／男子予選　および　陸上／予選（男子 100m　他）	8／13・19：30～28：00
	レスリング／決勝（女子 53ｋｇ級　他）	8／19・4：00～7：00
テレビ朝日系	開会式／閉会式ハイライト	8／6　8／22
	柔道／予選（男子 66ｋｇ級　女子 52ｋｇ級）	8／7・22：00～25：00
	水泳／決勝（女子 200m個人メドレー　男子 200mバタフライ　他）	8／10・10：00～12：10
	サッカー／女子準決勝	8／17・1：00～3：00・4：00～6：00
	レスリング／予選（女子 48ｋｇ級　女子 58ｋｇ級　女子 69ｋｇ級）	8／17・22：00～25：00
フジテレビ系	柔道／決勝（男子 60ｋｇ級　女子 48ｋｇ級）	8／7・3：30～6：30
	体操／決勝（男子個人総合）	8／11・4：00～7：00
	陸上／決勝（女子 100m　他）	8／14・8：00～11：15
	陸上／決勝（男子 100m　男子 400m　他）	8／15・8：15～10：30
	総集編	8／22（未定）
テレビ東京系	卓球／女子シングルス準決勝	8／10・22：00～24：00
	柔道／予選（男子 100ｋｇ超級　女子 78ｋｇ超級）	8／12・22：00～25：00
	陸上／男子競歩 20ｋｍ	8／13・2：30～4：10
	卓球／男子団体準決勝	8／16・3：00～6：00・7：30～10：30
	陸上／男子 200m準決勝　女子 200m決勝　他	8／18・5：45～11：05

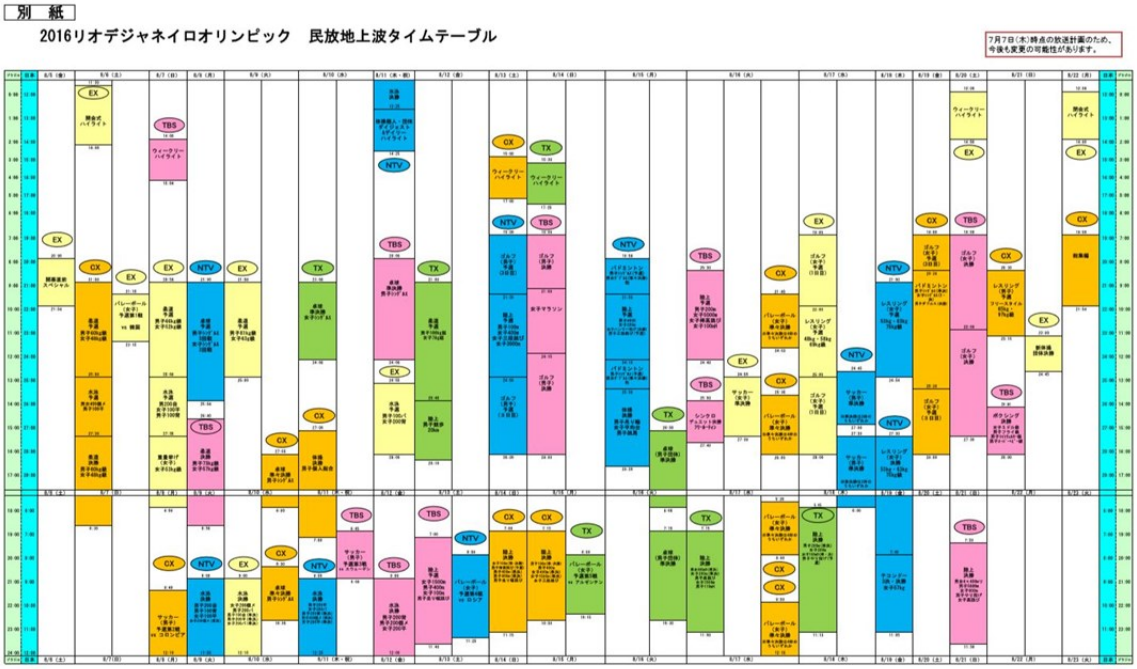
（「リオデジャネイロオリンピック　民放テレビの主要中継種目について」より筆者作成。黄色マーカはメダル獲得競技種目）

表 2－4 に示したメダル獲得種目と重ね合わせてみれば明らかなように、リオ大会の前年で、出場選手が未定の競技が多いなかでも、民放各局もメダル獲得が期待できる競技を中心に据えた放送計画を作成していたことがわかる。予選も合わせれば、17 個のメダル獲得に絡むシーンの中継ができたといえる（41.5%）。唯一大きく予測が外れたのが、テレビ朝日系が獲得した「女子サッカー準決勝」の枠である。日本女子サッカーはオリンピック出場を逃してしまったからである。

次の報道資料は、「2016 リオデジャネイロオリンピック　民放地上波タイムテーブル」

で、開幕を約１カ月後に控えた 2016 年７月７日に発表された[70]。

図 2−3　2016 リオデジャネイロオリンピック　民放地上波タイムテーブル



水色が日テレ（NTV）、クリーム色がテレ朝（EX）、ピンクが TBS、緑がテレ東（TX）、そしてオレンジがフジ（CX）である。注目されるのは、民放地上波の中継が、日替わりで一つの局が複数の競技を長時間放送するというスタイルを導入したことである[71]。これによって生中継自体はとても見やすくなったが、ニュース番組やドラマ、バラエティ番組などが休みとなったり時間帯が変わるなど、普段のタイムスケジュールが大幅に変わることもあった。

実際に中継された競技について、局ごとに整理したのが表 2−8 であるが、1 カ月前の段階でほとんどの競技の放送枠が細かに決定されていることがわかる。

---

70 日本民間放送連盟，2016，「（報道発表）リオデジャネイロオリンピック　民放テレビ放送の概要および共同ＰＲ展開について」，2016 年７月７日，（2018 年４月１日取得，https://www.j-ba.or.jp/category/topics/jba101909）

71 民放連は、それによって視聴者がチャンネルを探す手間が省けて見やすくなったと評価している（日本民間放送連盟 2017:82）。このような民放地上波の新たなオリンピック中継スタイルの確立は、局同士の垣根を越える取り組みでもあったと思われる。

表２−８　民放地上波タイムテーブルの競技詳細

局名	競技・種目・性別、段階
日本テレビ	卓球男女シングルス３回戦、水泳（男 200 自、男 100 背、女 100 平）決勝、（女 200 個メ）準決勝、水泳（男 200 平、女 200 バ）決勝、（男 200 背、男 200 個メ、女 200 平）準決勝、水泳決勝、体操個人・団体ダイジェスト&デイリーハイライト、バレーボール女子予選第 4 戦 vs ロシア、ゴルフ男子予選 3 日目、陸上（男 100m、女 400m、女三段跳び、女 3000m）予選、バドミントン（男子シングルス）予選、（男女ダブルス）準々決勝ほか、陸上（女子ハンマー投げ）決勝（男 400mH、女 200m、男三段跳び）予選、体操（男子つり輪、女子平均台、男子跳馬）決勝
テレビ朝日	開幕直前スペシャル、開会式ハイライト、バレーボール女子予選第一組 vs 韓国、柔道（男子 66ｋｇ級女子 52ｋｇ級）予選、水泳（男 200 自、女 100 平、男 100 背）予選、重量挙げ女子 53ｋｇ級、柔道（男子 81ｋｇ級、女子 63ｋｇ級）予選、水泳（女 200 個メ、男 200 バ）決勝、（男 100 自、男 200 平、女 200 バ）準決勝、水泳（男 100 バ、女 200 背）予選、サッカー女子準決勝、ゴルフ女子予選 1 日目、レスリング女子（48ｋｇ58ｋｇ69ｋｇ級）予選、サッカー男子準決勝、レスリング（53ｋｇ63ｋｇ75ｋｇ級）予選決勝、テコンドー女子 57ｋｇ3 決・決勝、ウェークリーハイライト、新体操団体決勝、閉会式ハイライト
TBS テレビ	ウィークイーハイライト、柔道（男子 73ｋｇ級女子 57ｋｇ級）決勝、サッカー男子予選第 3 戦 vs スウェーデン、卓球男子シングルス準決勝、水泳（男 200 背、男 200 個メ、女 200 平）決勝、陸上（女 1500m、男 400m、女 100m、男走り幅跳び）予選、ゴルフ男子決勝、女子マラソン、陸上（男 200m、女 5000m、女棒高跳び、女 100mH）予選、シンクロデュエットフリールーティン決勝、ゴルフ女子決勝、陸上（男女 4×400m リレー、男 5000m、女 800m、男やり投げ、女高跳び）決勝、ボクシング（女ミドル級、男フライ級、男ライトウェルター級、男スーパーヘビー級）決勝
テレビ東京	卓球女子シングルス準決勝、柔道（男子 100ｋｇ超、女子 78ｋｇ超）予選、陸上男子競歩 20ｋｍ、ウィークリーハイライト、バレーボール女子予選第 5 戦 vs アルゼンチン、卓球男子団体準決勝、陸上（男高跳び、女 1500m、男 110mH）決勝（男女 400mH、女 200m）準決勝、陸上（女 200m、女 100mH）決勝（男 200m、女 100mH）準決勝（男やり投げ）予選、
フジテレビ	柔道（男子 60ｋｇ級女子 48ｋｇ級）予選&決勝、水泳（男女 400 個メ、男子 100 平）、サッカー男子予選第 2 戦ｖｓコロンビア、卓球男シングルス準々決勝、体操男子個人総合決勝、ウィークリーハイライト、陸上（女 100m、男走り幅跳び）決勝、（女 100m、男 400m、男 800m）準決勝、（男棒高跳び）予選、陸上（男 100m、男 400m、女三段跳び）決勝、（男 100m、女 400m、女 1500m）準決勝、バレーボール女子準々決勝、ゴルフ女子予選 3 日目、バドミントン（男子ダブルス、女子シングルス）決勝、（男子シングルス）準決勝、（女子シングルス）３[72]、レスリング男子（フリースタイル 65ｋｇ97ｋｇ級）予選、総集編

[72] ３位決定戦のことと読み取れる。

（民放地上波タイムテーブルより摘出・作成。黄色マーカは実際のメダル獲得競技種目）

さらに「【報道関係資料】リオデジャネイロオリンピック 民放テレビ放送の概要および共同 PR 展開について」という資料には、地上波放送の特徴として過去最大規模の総放送時間である 240 時間となることが強調されているほか、「各局の主な注目番組」についての記載があり、競技と選手の情報が非常に詳しく掲載されている。「各局の主な注目番組」の記載を以下に抄出する。

日本テレビは、「バドミントン・男女ダブルス準々決勝／陸上・女子 200m／体操種目別決勝・男跳馬他／レスリング女子／テコンドー女子」で、注目選手は、「バドミントン・高橋礼華松友美佐紀、早川賢一遠藤大由／陸上・福島千里、長谷川大悟／体操・白井健三、内村航平／レスリング・吉田沙保里、川井梨紗子、渡利璃穏／テコンドー・濱田真由」である。注目理由には「世界ランキング」「金メダルに期待」「お家芸の復活」「強豪に挑む」といった言葉が並ぶ。

テレビ朝日は、「バレーボール女子予選／水泳決勝」で、注目選手は、「バレーボール・木村沙織、キム・ヨンギョン／水泳・萩野公介、松田丈志、瀬戸大也、坂井聖人、寺村美穂、今井月」である。注目理由は「メダルを狙う」「宿命のライバル」「メダル圏内」「W 表彰台」「メダルの期待」。

TBS テレビは、「陸上・女子マラソン／ゴルフ男子最終ラウンド／陸上男子 200m予選、女子 5000m予選他」で、注目選手は、「陸上・福士加代子、伊藤舞、田中智美、ウサイン・ボルト、ジャスティン・ガトリン、飯塚翔太、鈴木亜由子、尾西美咲」である。注目理由は「アテネ以来のメダル」「112 年ぶりの五輪王者」「歴代最速の布陣」「アトランタ以来の入賞」。

テレビ東京は、「卓球・女子シングルス準決勝／柔道男女最重量級予選／陸上・男子競歩 20ｋｍ決勝」で、注目選手は、「卓球・福原愛、石川佳純／柔道・原沢久喜、リネール、山部佳苗」である。注目理由は「悲願のオリンピック卓球個人でのメダル」「お家芸」「金メダルへの戦い」「今季世界ランク 1 位～3 位」「ニッポン黄金時代」。

フジテレビは、「柔道・予選決勝軽量級／競泳・予選／体操・男子個人総合／陸上」で、注目選手は「柔道・高藤直寿、近藤亜美／競泳・萩野公介、瀬戸大也、池江璃花子、体操・内村航平、ベルニャエフ、ラデュエト、加藤凌平、田中佑典／陸上・ウサイン・ボルト、ケンブリッジ飛鳥、桐生祥秀、山縣亮太」である。注目理由は、「お家芸の伝統階級」「世界選手権優勝」「若い力」「2 連覇の偉業達成目指す」「世界のライバル」「ダブルメダル獲得」「人類初の 3 連覇」。

このように「各局の主な注目番組」は、いずれも日本選手のメダル獲得の期待がかかったものである。競泳の萩野、瀬戸、体操の内村、外国人選手では陸上のボルトらが重複して注目を集めており、彼らは実際にメダリストとなっている。注目している選手の中でメダルを実際に獲得した選手は 26 人である。そして民放の場合には、NHK の放送計画が日本選手に偏っているのに対して、バレーのキム・ヨンギョン（韓国）や陸上のジャスティン・ガトリン（アメリカ）、体操のオレグ・ベルニャエフ（ウクライナ）などの海外選手にも注目していることも特徴といえよう。

この注目理由には、お家芸、ライバル、〇〇以来のメダル、といった競技の歴史や人間ド

ラマに依拠したものがみられ、ここからメダル獲得の際にテレビ局側がどのような物語を付与しようと想定していたのかを伺い知ることができる。

民放の中継でトップバッターを切るフジテレビは、初日から 9 時間半の生中継を予定したほか、「感謝」をテーマにリオ大会を放送するという点を全面に押し出す TBS、メインキャスター松岡修造の膨大な取材量を武器とするテレ朝など、各局のカラーも見出せる。

中継競技決定のプロセスについては公表されていないが、筆者によるインタビューの中で、あるテレビ局関係者は、「基本的に放送したい競技の希望を伝え、民放連と NHK とでとりまとめて決定に至る」「NHK は団体競技を選択する傾向にあるが、交渉で調整を行った」と語っている[73]。中継競技決定について NHK が強い権限を有している中で、民放側は、広告主に対するセールスの「目玉」となるような人気種目の獲得をめざして（日本民間放送連盟 2001:353）、交渉が繰り広げられるのであり、その結果がこのような番組編成を生み出しているのである。そこでの「目玉」とは、「どの競技の選手が活躍するか」であり、民放各局は世界選手権大会やさまざまなスポーツ中継の実績や経験をふまえてそれらを予測し、選手を強調した中継を展開するのだ[74]。

第３節　リオ大会の視聴率と大会期間中の番組編成の実態

先にみたようにリオ大会の生中継競技は、日本選手の活躍の予想に基づいてテレビ局が事前に選択し、放送していた。このテレビ局の戦略は、どのような効果をあげたのか。

2016 年においてテレビの総世帯視聴率が最も高かった日が、リオ五輪の閉会式が生中継された 8 月 22 日（月）である[75]。この日は、強い台風 9 号が 11 年ぶりに巻頭に上陸し、東日本・北日本を北上したため台風関連のニュースなどがよく視聴されたことも、高視聴率の理由としてあげられている（日本民間放送連盟 2017:153）。リオ大会の実際の視聴率はどのようなものだったのか。本節ではこの点を最初に確認したうえで、実際のオリンピック期間中のテレビの番組編成を検討し、オリンピック関連番組が 18 日間の番組編成全体の中にどのように組み込まれ、どれほどの比重を占めたのかを 6 局全体および局別に明らかにする。テレビの番組編成全体を見渡し、リオ大会を報じた時間枠を可能な限り正確に、明らかにしていきたい。

１．リオ大会の視聴率

JC 体制下で放送されたリオ大会の視聴率を、ビデオリサーチ社が計測した報告データに

---

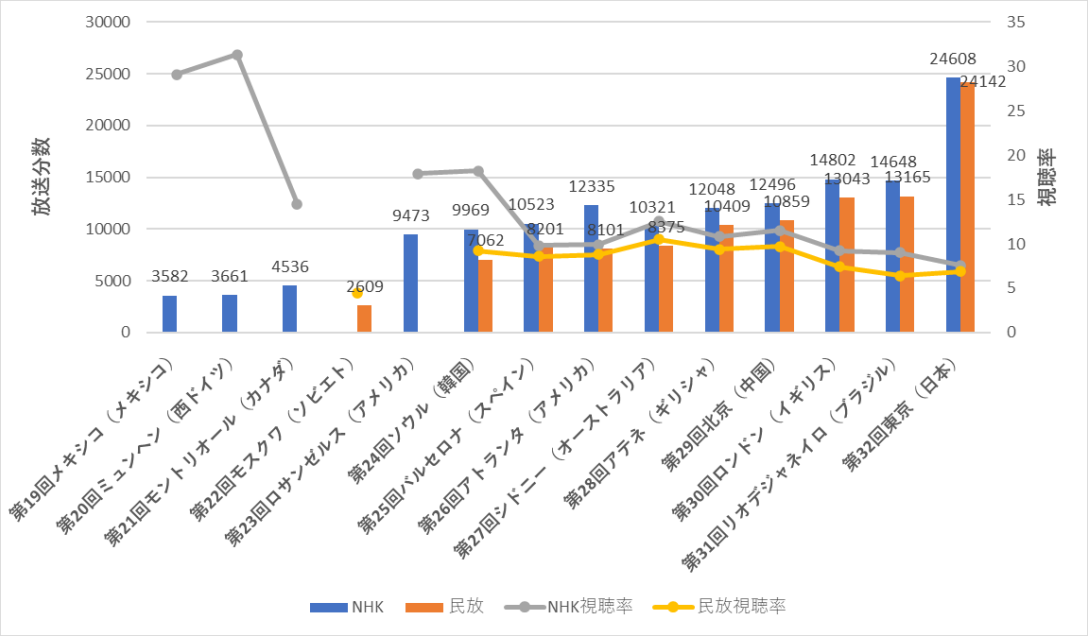
[73] 対面にて、2018 年 6 月 5 日都内で実施。

[74] なお民放連は、リオ大会の結果に対して、「日本選手が過去最多 41 個のメダルを獲得し、前評判を覆す盛り上がりを見せた。時差の関係で視聴率は過去大会に比べ突出するものではなかったが、総集編がよく見られた。一方で、民放公式サイト gorin.jp や NHK 特設サイトでのライブ配信、見逃し配信は 4 年前より拡大し、オリンピックはテレビだけのコンテンツではなくなった」と総括している。（日本民間放送連盟 2017:77）。

[75] 関東地区の全日（6 時から 24 時）の総世帯視聴率（HUT）が最も高く、50%を記録した。

よってみておきたい[76]。オリンピックの平均視聴率は、1968 年のメキシコ大会から把握することが可能である[77]。1968 年以降のデータを元にグラフ化したのが図 2－4 である。

図 2－4　歴代夏季オリンピック平均視聴率（関東地区）



（夏季大会歴代平均【関東地区】データより作成）

図 2－4 から、総放送時間は日本を含む西側諸国がボイコットした 1980 年のモスクワ大会（NHK ではなくテレビ朝日のみが放送権を獲得）および 2000 年のシドニー大会をのぞいて、ほぼ大会毎に増加し、2012 年のロンドン大会で一度ピークを迎えたことがわかる。ロンドン大会とリオ大会で比べると、NHK が微減、民放が微増し、リオ大会のほうが 32 分間、放送時間が少なかった（ロンドン大会は NHK14,802 分、民放 13,043 分、合計 27,845 分、リオ大会は NHK14,648 分、民放 13,165 分、合計 27,813 分）。なお自国開催の東京大

---

76 なお、基本的に日本で視聴率と言ったとき、それを提示しているのはビデオリサーチ社のデータである。1953 年にテレビ放送がスタートした日本での視聴率は 1961 年 4 月にアメリカの調査会社 AC ニールセン社によって開始。これに対して、「日本の資本による調査会社による視聴率調査を」という要望を受け、電通と東芝がテレビ受像器にメータを取り付けて測定する技術を開発。この 2 社と全国主要民間放送局 18 社の計 20 社が出資し、1962 年 9 月にビデオリサーチが第三者機関の調査会社として設立されたという。Video Research,2023,「沿革」（2019 年 4 月 20 日取得, https://www.videor.co.jp/company/history.html#06）.

77平均集計の対象となる番組は、地上波で放送された全競技中継番組及びハイライト番組(15 分以下の番組も含む）で、開会式放送日から閉会式放送日の期間で算出し、大会終了後に放送された総集編などは除かれている。また、開会式前に放送された競技中継関連番組は含む。モスクワ大会はテレビ朝日のみで放送された特徴があり、メキシコ～ロサンゼルスは NHK のみが集計・掲載されていたりと、実際に NHK（NHK 総合と NHKE テレ）と民放 5 局という現在のような形での集計が始まったのは 1988 年第 24 回ソウル大会から。Video Research，2023,「夏季オリンピック大会平均」（2022 年 12 月 30 日取得, https://www.videor.co.jp/tvrating/past_tvrating/sport/olympic-summer/03/post-9.html）

会は視聴率は横ばいであるが放送時間が突出している。

視聴率は、NHK が独占的に放送していた 1972 年ミュンヘン大会の 31.3%が最も高く、NHK・民放の両者での放送が始まった 1988 年のソウル大会以降、放送時間は増加しているが、視聴率は NHK、民放ともに 10%前後で推移し、横ばいないし低下傾向である。民放連は、リオ大会の視聴率がロンドン大会よりも低下した理由を「ロンドン大会は時差が 8 時間で、リオ大会より見やすい時間帯に注目競技の中継があったためと思われる」と分析している（日本民間放送連盟 2017:155）。リオ大会の時差は 12 時間である。時差の問題は、ロンドン大会の視聴率が北京大会よりも低下した理由にもなるだろう[78]。深夜や早朝の競技中継で視聴率を上げることは困難であり、それがロンドン大会以降利用が本格化した SNS 以上に影響を与えたと考えられる。

リオ大会の実際の視聴媒体は、「テレビ」50%と最も多く、「スマートフォン・携帯電話」14%、「パソコン」6%、「ラジオ」4%と続く（鶴島・斉藤 2017: 10-3）。オリンピックの視聴は依然としてテレビ中心であり、平均視聴率が 10%前後とは昨今のニュースやスポーツ番組、ドラマなどの視聴率が軒並み 10%以下に低下しているという状況をふまえると高止まりしていると評価できる。

次に、2016 年の年間高世帯視聴率番組 30（関東地区）[79]からリオ大会の視聴状況をみてみよう。

表 2－9　2016 年年間高世帯視聴率番組 30（関東地区）

1 位「第 67 回 NHK 紅白歌合戦」12 月 31 日放送（NHK 総合）40.2%
2 位「第 67 回 NHK 紅白歌合戦」12 月 31 日放送（NHK 総合）35.1%
3 位「SMAP×SMAP」1 月 18 日放送（フジテレビ）31.2%
4 位「笑点」5 月 29 日放送（日本テレビ）28.1%
5 位「第 92 回東京箱根間往復大学駅伝競走往路」1 月 2 日放送（日本テレビ）28.0%
6 位「第 92 回東京箱根間往復大学駅伝競走復路」1 月 3 日放送（日本テレビ）27.8%
7 位「連続テレビ小説・あさが来た・最終回」4 月 2 日放送（NHK 総合）27.0%
8 位「FIFA クラブワールドカップ決勝　レアル・マドリード×鹿島アントラーズ」12 月 18 日放送（日本テレビ）26.8%
9 位「連続テレビ小説・とと姉ちゃん」8 月 17 日放送（NHK 総合）25.9
10 位「24 時間テレビ 39 愛は地球を救う PART10 」8 月 28 日放送（日本テレビ）25.8%
11 位「2016 プロ野球日本シリーズ 広島×日本ハム・第 6 戦」10 月 29 日放送（日本テレビ）25.1%
12 位「NHK ニュースおはよう日本・首都圏」2 月 5 日放送（NHK 総合）24.9%
13 位「木曜ドラマドクターX・外科医・大門未知子」10 月 27 日放送（テレビ朝日）24.3%
14 位「ニュース（12:00）」8 月 22 日放送（NHK 総合）24.1%
15 位「大相撲初場所・千秋楽」1 月 24 日放送（NHK 総合）24.0%

[78] 1 章で引用した民放連会長の指摘にもあるように。

[79] Video Research，2023，「2016 年年間高世帯視聴率番組 30（関東地区）」（2022 年 12 月 30 日取得，https://www.videor.co.jp/tvrating/past_tvrating/top30/201630.html）

同 15 位「中居正広の金曜日のスマイルたちへ」5 月 13 日放送（TBS）24.0%
17 位「リオデジャネイロオリンピック」8 月 21 日放送（NHK 総合）23.7%
18 位「リオデジャネイロオリンピック・開会式」8 月 6 日放送（NHK 総合）23.6%
19 位「24 時間テレビ 39 愛は地球を救う PART9」8 月 28 日放送（日本テレビ）23.2%
20 位「ダッグアウト」10 月 29 日放送（日本テレビ）22.9%
21 位「リオデジャネイロオリンピック 2016」8 月 14 日放送（TBS）22.6%
同 21 位「NHK ニュース 7 」8 月 20 日放送（NHK 総合）22.6%
23 位「ニュース・気象情報（21：00）」8 月 21 日放送（NHK 総合）22.4%
24 位「世界の果てまでイッテ Q！」11 月 13 日放送（日本テレビ）22.2%
同 24 位「連続テレビ小説・べっぴんさん」12 月 22 日放送（NHK 総合）22.2%
26 位「日曜エンタ ドクターX・外科医・大門未知子・スペシャル」7 月 3 日放送（テレビ朝日）22.0%
同 26 位「リオデジャネイロオリンピック」8 月 7 日放送（NHK 総合）22.0%
28 位「2018FIFA ワールドカップロシアアジア地区最終予選 日本×サウジアラビア」11 月 15 日放送（テレビ朝日）21.8%
同 28 位「ニュース（6：03）」11 月 22 日放送（NHK 総合）21.8%
30 位「ニュースウオッチ 9 」5 月 16 日放送（NHK 総合）21.5%

（出典：ビデオリサーチ　2016 年　年間高世帯視聴率番組 30（関東地区））

この年、平均視聴率が最も高かったのは、「第 67 回 NHK 紅白歌合戦」で、前半が 1 位、後半が 2 位である。3 位が 1 月 18 日放送のフジテレビ「SMAP×SMAP」だが、これは SMAP の解散報道を受けて行われた生放送での会見である[80]。4 位から 15 位までは、「駅伝」や「W 杯」といったスポーツ中継や、NHK 朝の連続テレビ小説などが入っている。

リオ大会でもっとも高い視聴率を獲得したのは 17 位「リオデジャネイロオリンピック」（NHK）の 23.7%で、8 月 21 日の 21 時開始の男子マラソンの放送だった。18 位が「リオデジャネイロオリンピック・開会式」（NHK）で 23.6%。21 位の「リオデジャネイロオリンピック」（TBS）は 8 月 14 日の放送で、女子マラソンの中継で 22.6%だった。リオ大会の競技中継のトップの視聴率は、男子と女子のマラソンであった。同じく 21 位の 8 月 20 日放送の「ニュース 7」（NHK）22.6%は、テレビ欄で確認すると「注目の陸上男子 400m リレー日本勢のメダル獲得は」とある。実際に銀メダルを獲得したこの種目のニュース報道に注目が集まったものとみられる。26 位は 8 月 7 日放送の「リオデジャネイロオリンピック」（NHK）で 22.0%。重量挙げ女子 48kg 級、競泳 400m 個人メドレー決勝が中継された。日曜日の午前中でかつメダル獲得の可能性が高い種目が連続し、実際にメダルラッシュと

[80] なおリオ大会期間中も SMAP 騒動は尾をひき、錦織選手の試合中継中に速報が流れるなど話題が耐えなかった。そのほか、近年ますます視聴率を上昇させている通称箱根駅伝が 5 位と 6 位にランクインし（「第 92 回東京箱根間往復大学駅伝競走往路・復路」）、8 位には「FIFA クラブワールドカップ決勝 レアル・マドリード×鹿島アントラーズ」、11 位には「2016 プロ野球日本シリーズ 広島×日本ハム・第 6 戦」、15 位に「大相撲初場所・千秋楽」が入るように、サッカー、野球、相撲のスポーツイベント中継が入っている。

なったことが高視聴率につながったのだろう[81]。

なお、2008 年のランキングを見てみると、2 位に北京大会開会式（NHK 総合）が入り 37.3%と高視聴率を記録している。それ以外にも北京大会関連のものが 7 つ 30 位以内にランクインしているが、ほとんどが NHK 総合で、唯一 8 位に日本テレビがランクインするが、競技の詳細はわからない。また、2012 年のランキングでも、6 位の高順位にロンドン大会が入っており、サッカー女子予選（日本×スウェーデン、視聴率 30.8%）である。前年に W 杯優勝の日本女子サッカーが銀メダルを獲得したことに加え、2014FIFA ワールドカップアジア地区最終予選があったこともあり、2012 年はサッカーという競技自体への関心が高まっていたことが伺える。そのため、ロンドン大会での男女サッカー7 番組、サッカー国際親善試合を含め FIFA 関連で 6 番組がランクインし、30 位のうち約半数がサッカーで占められた特徴的な年であるといえる。なお、ロンドン大会でサッカー以外に視聴率 30 位までにランクインしたのは開会式と、男子マラソン、「NHK ニュースおはよう日本&オリンピック」の 3 番組だった。ロンドン大会で視聴率上位の番組もほとんどが NHK であったが、唯一 25 位にサッカー男子準々決勝を放送した日本テレビがランクインしている。

上記の 2 大会とリオ大会と比較すると、リオ大会では競技中継がランクインしたのはごくわずかで、時差の影響が如実に現れているといえる。一方で、2012 年の NHK「ニュースおはよう日本」、2016 年の NHK「ニュース 7」がランクインしている。これはそれぞれの大会が 8 時間と 12 時間という時差がある中で、競技結果や競技の模様をいち早く知りたいという視聴者のニーズに応えるものがニュースであったということ、また、勤務時間等によって競技の生中継を視聴できない視聴者にとっても、ニュース番組は重要な存在となっていたことを示していると考えられる。

２．リオ大会期間中の番組編成の全貌

では、日本のテレビはリオ大会をどれほど放送したのか。そのためにどのような番組編成を行なったのか。

まず、公表されているデータによってリオ大会の放送時間量を確認したい。最初に取り上

[81]なお IOC の調査では各国（地域）ごとの視聴者数の分析もなされている。例えばブラジルではサッカー（ブラジル vs ドイツ）の視聴者数が 4710 万人と、2006 年に視聴者数を調査し始めてから最大のスポーツイベントの視聴者数を記録したほか、イギリスはヨーロッパのなかで最も高い視聴者を記録し、BBC の視聴者数は 4524 万人で、女子競輪や男子ゴルフなどが高い視聴者数だったようだ。日本への評価は、2020 年東京大会を控えていることからロンドン大会時よりも視聴者数が多かったとされ、3 つの注目種目の全てが女子種目だったとする。TBS テレビの女子マラソンには 2780 万人の視聴者がおり、視聴率 22.6%を記録。また最大視聴率は 38.1%を記録した（比較として TBS の平均視聴率は 13.5%）。またテレビ朝日が放送した女子バレーボールの日韓戦は 1700 万人が視聴し、視聴率は 22.6%を記録した（これはテレビ朝日が放送したロンドン大会の柔道と比べて倍の多さである）とする。中国も高い視聴者数を記録、男子バドミントンが注目を浴びた。なお、アジアの中で最もリオ大会を放送したのは韓国（KBS,SBS&MBC）で、それ以前のオリンピック放送量 1371 時間（ロンドン）を上回る 1495 時間を放送し、韓国の最大視聴者数は 336 万人で、注目種目は女子ゴルフだったという。IOC が着目した「視聴者数」という視点からリオ大会を見ると、必ずしもメダルにつながる競技（種目）が視聴を集めるわけではない可能性が見えてくる。

げるのは、競技中継番組の総放送時間に関するニホンモニターによる調査である[82]。

図 2－5　リオ大会の競技中継総放送時間（ニホンモニター）

ニホンモニターの調査では、8 月 5 日から 22 日までの 18 日間の間の競技中継の総時間は、NHK（総合・E テレ）と民放 5 局（日本テレビ・テレビ朝日・TBS テレビ・テレビ東京・フジテレビ）を合わせて約 425 時間である。このうち NHK は 218 時間 30 分で、全体の 5 割を占めている。民放はテレビ東京が 28 時間であるが、それ以外の 4 局は約 40～48 時間の放送である。

NHK と民放 5 局の計 6 局（チャンネルは計 7 つ）の 18 日間の総放送時間が 3,024 時間だとすると、そのうちの 425 時間、つまり 14.1%がオリンピックの競技中継に費やされたことになる。膨大な放送時間であるが、これはリオ大会の競技中継番組のみを計測したものであり、それ以外のリオ大会関係の番組を含んでいない。実際のテレビによるリオ大会の放送時間はそれ以上ということになる。

次に NHK と民放がそれぞれ公表しているデータをみてみることにしたい。まず『NHK 年鑑』によって、NHK の放送時間をみてみよう。

表 2－10　NHK のリオ大会放送時間

	オリンピックの放送時間
総合	254 時間 55 分
Ｅテレ	17 時間 51 分
ＢＳ１	354 時間 11 分

[82] ニホンモニター，2016，「リオ大会の競技中継総放送時間」（2018 年 4 月 20 日取得，http://www.n-monitor.co.jp/pressreiease/2016/0825.html）.

ＢＳＰ（プレミアム）	―
Ｒ１（ラジオ・一部ＦＭ）	109 時間 35 分
合計	736 時間 32 分
スーパーハイビジョン（試験放送）	150 時間 56 分

（『NHK 年鑑 2017』p.79 より摘出・作成 ）

NHK は、表 2－10 のように、通常の地上波の 2 番組、BS１、ラジオ放送に加えて、スーパーハイビジョンの試験放送も実施している。このうち地上波（総合、E テレ）の放送時間は計 272 時間 46 分であるが、E テレは 17 時間 51 分と極端に少ない。実際の放送を新聞のテレビ番組欄で確認したところ、E テレでの放送は、NHK 総合での放送が困難な際の緊急避難的な役割での放送であることが判明した。つまり E テレは、基本的にリオ大会期間中も通常の放送内容を維持し、リオ大会放送の担当チャンネルにはならなかったのである。したがって、本論文においては E テレを分析の対象からはずすことにする。

NHK の放送でリオ大会のテレビ放送の主軸となったのは、総合テレビと BS1 である。総合テレビでは､競技が行われる午後 10 時から翌日昼にかけての時間帯に中継枠を編成し、BS1 は、地上波で放送しない種目などを中継で伝えるとともに、現地で競技が行われていない午後から夜にかけての時間帯を「見逃し・録画ゾーン」として 1 日約 22 時間にも及ぶ時間をかけて実施された競技の全てを放送したため 354 時間 11 分と地上波放送時間よりも長時間を記録した（NHK 年鑑 2017: 78-9)。

なお、NHK 総合と E テレの放送時間は、上記のように計 272 時間 46 分であるが、先にみたニホンモニターの調査では計 218 時間 30 分となっており、54 時間 16 分多い。その理由として、ニホンモニターが競技中継だけを計測しているのに対し、『NHK 年鑑』はそれ以外のオリンピック関連番組を含めているといったことが考えられるが、こうした点についての記載がないため詳細は不明である。

次に民放についてであるが､『日本民間放送年鑑 2017』には、民放 5 局を合わせて「過去最大の約 245 時間 29 分の番組を編成」したとある（日本民間放送連盟 2017:32）[83]この総放送時間は、上記の NHK 総合の総放送時間にほぼ匹敵する。なお、ニホンモニターの調査では、民放 5 局の総放送時間が計 206 時間 30 分であり、約 39 時間少ない。計測期間および対象の差がもたらしたものであると考えられるが､『日本民間放送年鑑 2017』に記載がないので不明である。

以上のようなデータの中から、NHK 総合と民放 5 局の放送時間を取り出して合計すると、500 時間 24 分になる。これが放送局側が公表したデータから判明した地上波 6 局の総放送時間である。リオ大会の開催期間の 18 日間の 6 局の全放送時間を 2,592 時間（各局 1 日 24 時間放送）とすると、その 19.3%がリオ大会の放送に費やされたことになる。

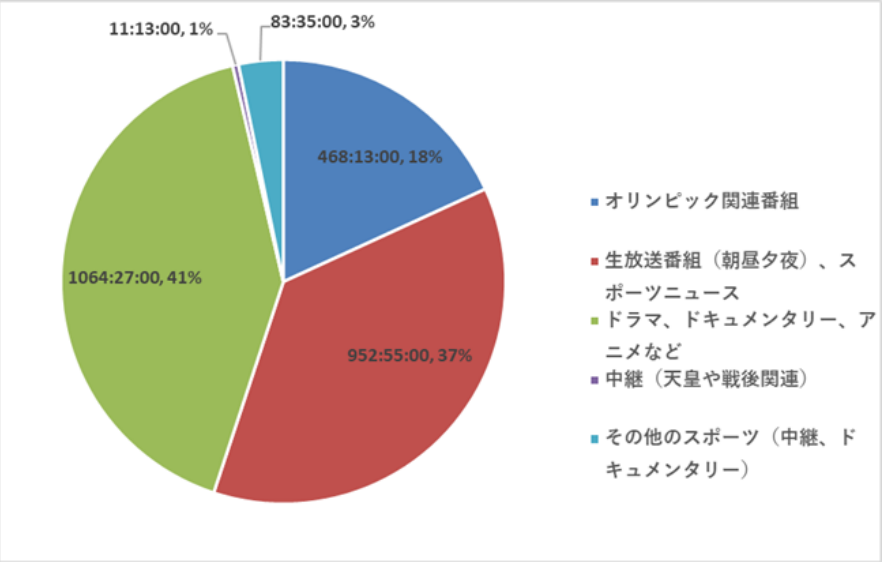
ただし、このデータは上記のとおり計測期間および対象が明確ではなく、競技中継番組のみを対象としたニホンモニターの集計、425 時間よりも 75 時間以上多いものとなっている

[83] 8 月 5～21 日まで開催されたリオ五輪の取材・放送のため、民放と NHK の共同組織であるジャパン・コンソーシアムを組織して対応し、日本選手の活躍を伝えたとの記述もある（日本民間放送連盟 2017:32)。

[84]。

公表されているデータに上記のような問題が含まれていること、また、リオ大会放送がテレビの番組編成全体の中でどのような位置を占めているのかも不明であるため、ここでは地上波 6 チャンネルによるリオ大会の放送およびそれを含めたテレビ番組の全体編成に関する新たな集計を試みることにしたい。対象とするのは、2016 年 8 月 5 日から 22 日までの 18 日間の NHK と民放（NHK 総合、日本テレビ、テレビ朝日、TBS テレビ、テレビ東京、フジテレビ）の 6 チャンネル分で、リオ大会の競技中継だけではなく、開会式・閉会式、ハイライト、事前番組、総集編といった番組も含む。これら「オリンピック関連番組」を読売新聞首都圏版から集計し、その際、競技中継の集計については、中継時間を延長する可能性が備考として記載されている場合には、最大延長の場合の時間帯でカウントした。それらをまとめたものが下記の図 2－6 である。

図 2－6　リオ大会期間中のテレビ 6 局の放送の全体構成（時間，%）



地上波 6 チャンネル分のリオ大会関連番組の総放送時間は、468 時間 13 分となる。これは地上波 6 チャンネルによる放送全体の 18%、約 2 割を占める 。テレビ番組の全体編成に目を向けてみよう。全体で最も多い割合を占めたのが、ドラマやドキュメンタリー、バラエティ、アニメなど、いわゆるパッケージ物の番組群で計 41%を占めている。次が、各局が平日の朝昼夕夜に放送している生放送のニュース・情報番組、土日に放送される報道番組、スポーツニュースで 37%である。中継（天皇や戦後関連）は、終戦の日の追悼などの生中継を指す。8 月は通常広島や長崎の原爆投下、終戦の日に追悼の生中継が行われるためその割合を示すために設けた項目であり、ここには当時の天皇（現上皇）が生前退位の意向を明

[84] 例えば NHK では、リオ大会以前にも以後にも、NHK スペシャルなどのドキュメンタリー番組などオリンピック関連番組を放送している。こうした 8 月 5 日～22 日の期間を超えたものもリオ大会の放送としてカウントしている可能性もある。

らかにした際の中継も加えた。これらの放送時間は全体のわずか 1%にとどまっている[85]。その他、オリンピック期間中にも、ゴルフや野球（高校野球、プロ野球）、テニスの競技中継が行われており、その割合が 3%であった。

オリンピック開催期間中の 6 つのチャンネルでは、オリンピック関連番組が全体の 18%を占めており、それ自体で通常のテレビ放送の全体構成を大きく変容させるものとなっているが、オリンピック関連の放送はそれだけではない。上記の集計で 37%を占めているニュース・情報番組でも、その多くがオリンピックを朝から夜まで繰り返し報じているのである。上杉・杉山は、8 つのニュース番組（NHK「おはよう日本」「ニュース 7」「NW9」、日テレ「ZERO」、テレ朝「報ステ」、TBS「N23」、テレ東「WBS」、フジ「ユア」）におけるリオ大会報道の比重を計測している（上杉・杉山 2022:14-6）[86]。その平均を算出すると 46%となり、これをニュース・情報番組に占めるリオ大会報道の比重であると仮定し、全放送時間に占める比重を算出すると 17%となる。これは先に見たリオ大会関連番組の 18%に匹敵するものである。これを加算すると、リオ大会開催期間中のテレビ放送全体の実に 35%がオリンピック放送だったことになる[87]。三分の一強という比重は、世界的に異例な JC 方式による日本のテレビ放送の特異性を示すものに他ならない。

これまでリオ大会期間中のテレビ放送の全体構成を 6 つのチャンネルによる放送時間の合計から検討してきたが、その内訳についてもここで示しておきたい。それを日ごとに局別に集計したものが表 2－11 である。これによって、オリンピックの競技中継を連日放送したのは NHK のみであり、しかも他局より多くの時間を費やしていること、テレ朝は 8 月 14 日のみ競技中継を放送していないが、オリンピック関連番組（夜 23 時 10 分から 10 分間の「リオ五輪 2016 応援宣言」）を連日放送していたことなど、当該期における放送実態および視聴者が置かれていたメディア状況をよりリアルに把握することができるだろう。

---

[85] 主に NHK が放送し、民放各局は同時刻の生放送のニュースの中などで伝えた。

[86] 8 つのニュース番組におけるリオ大会報道の比率は以下のとおりである。NHK「おはよう日本」55%、「ニュース 7」45%、「NW9」48%、日テレ「ZERO」70%、テレ朝「報ステ」44%、TBS「N23」43%、テレ東「WBS」10%、フジ「ユア」54%（上杉・杉山 2022:14-6）。

[87] 先にみた放送局側の公表データに加算するとこの数値はさらに上がり、36.3%となる。

表２－11　番組ジャンルごとの放送実態（8 月 5 日～13 日）

月日	局	オリンピック	生放送番組、土日スポーツニュース	収録やパッケージ番組	中継（天皇・戦争）	その他のスポーツ	オリンピック放送の割合（%）	放送時間
8月5日	NHK	7:35	11:35	5:20			31.0%	24:30:00
	日テレ		15:15	9:35			0.0%	24:50:00
	テレ朝	1:54	16:01	7:05			7.6%	25:00:00
	TBS		14:50	9:10			0.0%	24:00:00
	テレ東		7:57	16:05			0.0%	24:02:00
	フジ		15:57	8:55			0.0%	24:52:00
8月6日	NHK	11:55	5:10	7:15	0:40		47.7%	25:00:00
	日テレ		5:35	16:30			0.0%	22:05:00
	テレ朝	4:30	6:00	13:30			18.8%	24:00:00
	TBS		12:22	11:38			0.0%	24:00:00
	テレ東		1:55	22:42			0.0%	24:37:00
	フジ	9:30	5:25	10:43			37.1%	25:38:00
8月7日	NHK	14:10	1:30	2:55		4:55:00	60.3%	23:30:00
	日テレ		4:50	17:30			0.0%	22:20:00
	テレ朝	9:02	2:50	12:38		0:30	36.1%	25:00:00
	TBS	2:00	9:45	10:30			9.0%	22:15:00
	テレ東		0:36	23:34			0.0%	24:10:00
	フジ		4:45	15:20		1:25	0.0%	21:30:00
8月8日	NHK	13:00	4:35	1:30	2:00	2:55	54.2%	24:00:00
	日テレ	6:24	14:11	2:30	0:55		26.7%	24:00:00
	テレ朝	0:10	12:16	9:04		0:30	0.8%	22:00:00
	TBS	3:50	14:18	5:19	3:03		14.5%	26:30:00
	テレ東		7:21	13:29	2:05		0.0%	22:55:00
	フジ	2:30	13:35	7:55			10.4%	24:00:00
8月9日	NHK	13:00	3:58	0:37	1:30	4:55	54.2%	24:00:00
	日テレ	4:00	12:15	7:45			16.7%	24:00:00
	テレ朝	4:00	10:10	9:15		0:35	16.7%	24:00:00
	TBS		12:45	8:45			0.0%	21:30:00
	テレ東		8:13	15:04			0.0%	23:17:00
	フジ	2:15	16:05	7:50			8.6%	26:10:00
8月10日	NHK	15:05	4:00	0:30		4:55	61.6%	24:30:00
	日テレ		16:15	7:45			0.0%	24:00:00
	テレ朝	3:40	9:01	10:49		0:30	15.3%	24:00:00
	TBS		15:21	8:39			0.0%	24:00:00
	テレ東	3:54	7:25	12:51			16.1%	24:10:00
	フジ	6:10	11:55	6:55			24.7%	25:00:00
8月11日	NHK	14:35	3:30	1:30		3:55	62.1%	23:30:00
	日テレ	5:25	10:50	7:45			22.6%	24:00:00
	テレ朝	3:15	11:26	8:49		0:30	13.5%	24:00:00
	TBS	6:30	12:35	4:55			27.1%	24:00:00
	テレ東		4:37	18:01			0.0%	22:38:00
	フジ		13:05	7:55			0.0%	21:00:00
8月12日	NHK	14:30	4:05	0:30		4:55	60.4%	24:00:00
	日テレ		15:55	9:35			0.0%	25:30:00
	テレ朝	0:10	12:26	11:54	0:30		0.7%	25:00:00
	TBS	3:00	12:55	8:05			12.5%	24:00:00
	テレ東	7:40	5:06	11:36			31.5%	24:22:00
	フジ		16:07	8:45			0.0%	24:52:00
8月13日	NHK	14:55	3:15	2:10		4:10	60.9%	24:30:00
	日テレ	14:25	3:00	7:05			58.8%	24:30:00
	テレ朝	0:40	5:00	17:50		0:30	2.8%	24:00:00
	TBS	4:59	6:58	12:03			20.8%	24:00:00
	テレ東		1:55	21:10		1:15	0.0%	24:20:00
	フジ	2:00	6:15	15:08		0:55	8.2%	24:18:00

（読売新聞縮刷版首都圏のテレビ欄から筆者作成）

表２－12　番組ジャンルごとの放送実態（8 月 14 日から 22 日）

8月14日	NHK	14:10	1:50	2:35		4:55	60.3%	23:30:00
	日テレ		4:30	18:00			0.0%	22:30:00
	テレ朝		3:25	16:50		2:45	0.0%	23:00:00
	TBS	9:00	8:15	6:45			37.5%	24:00:00
	テレ東	2:00	0:36	19:34			9.0%	22:10:00
	フジ	4:15	3:50	13:15		1:30	18.6%	22:50:00
8月15日	NHK	13:05	4:05	2:25	0:30	3:55	54.5%	24:00:00
	日テレ	9:24	15:00	0:56			37.1%	25:20:00
	テレ朝	0:10	11:26	11:54		0:30	0.7%	24:00:00
	TBS		15:21	8:39			0.0%	24:00:00
	テレ東	5:25	4:54	14:31			21.8%	24:50:00
	フジ	3:35	12:30	7:55			14.9%	24:00:00
8月16日	NHK	14:30	4:05	0:30		4:55	60.4%	24:00:00
	日テレ		15:55	7:45			0.0%	23:40:00
	テレ朝	3:15	11:26	8:49		0:30	13.5%	24:00:00
	TBS	6:20	14:10	3:30			26.4%	24:00:00
	テレ東	3:15	4:24	13:56			15.1%	21:35:00
	フジ	2:25	16:05	5:30			10.1%	24:00:00
8月17日	NHK	14:30	4:05	0:30		4:55	60.4%	24:00:00
	日テレ	3:20	16:15	4:30:00			13.8%	24:05:00
	テレ朝	9:00	10:10	4:50			37.5%	24:00:00
	TBS		15:15	8:45			0.0%	24:00:00
	テレ東	3:45	6:06	14:14			15.6%	24:05:00
	フジ		16:05	7:55			0.0%	24:00:00
8月18日	NHK	14:30	4:05	0:30		4:55	60.4%	24:00:00
	日テレ	4:34	15:06	3:50			19.4%	23:30:00
	テレ朝	0:10	11:26	11:24		1:00	0.7%	24:00:00
	TBS		15:15	8:45			0.0%	24:00:00
	テレ東	5:28	4:31	13:56			22.9%	23:55:00
	フジ		16:05	7:00		0:55	0.0%	24:00:00
8月19日	NHK	14:30	4:05	5:25			60.4%	24:00:00
	日テレ	8:00	8:40	9:20			30.8%	26:00:00
	テレ朝	0:10	12:26	12:24			0.7%	25:00:00
	TBS		14:50	9:10			0.0%	24:00:00
	テレ東		6:28	17:34			0.0%	24:02:00
	フジ	9:00	15:00				37.5%	24:00:00
8月20日	NHK	14:55	3:20	5:05		1:10	60.9%	24:30:00
	日テレ		5:35	16:05		2:00	0.0%	23:40:00
	テレ朝	2:00	5:00	16:30		0:30	8.3%	24:00:00
	TBS	8:30	8:55	6:35			35.4%	24:00:00
	テレ東		0:55	23:42			0.0%	24:37:00
	フジ		6:15	18:03			0.0%	24:18:00
8月21日	NHK	14:00	1:45	4:35		3:10	59.6%	23:30:00
	日テレ		4:50	15:50		2:10	0.0%	22:50:00
	テレ朝	1:45	2:20	14:50		4:05	7.6%	23:00:00
	TBS	6:00	6:45	11:15			25.0%	24:00:00
	テレ東		0:36	21:34			0.0%	22:10:00
	フジ	2:45	4:00	16:05			12.0%	22:50:00
8月22日	NHK	5:00	7:35	7:25		2:20	22.4%	22:20:00
	日テレ		15:59	8:01			0.0%	24:00:00
	テレ朝	2:00	9:56	11:59		0:05	8.3%	24:00:00
	TBS		15:11	8:49			0.0%	24:00:00
	テレ東		5:26	17:19			0.0%	22:45:00
	フジ	2:54	15:55	5:11			12.1%	24:00:00

（読売新聞縮刷版首都圏のテレビ欄から作成）

次に、リオ大会放送の局ごとの傾向を明らかにするために、各局の総放送時間とその平均

値、中央値を見てみたい[88]。

表 2－13　各局のオリンピック放送時間と平均値、中央値

局	総放送時間	最大放送時間	最大放送割合	平均値	中央値
NHK	237 時間 55 分	15 時間 5 分（8 月 10 日）	62.1%（8 月 11 日）	55.1%	60.4%
日テレ	55 時間 32 分	14 時間 25 分（8 月 13 日）	58.8%（8 月 13 日）	12.5%	0.0%
テレ朝	43 時間 57 分	9 時間 2 分（8 月 7 日）	37.5%（8 月 17 日）	10.5%	8.0%
TBS	50 時間 9 分	9 時間（8 月 14 日）	37.5%（8 月 14 日）	11.6%	4.5%
テレ東	31 時間 27 分	7 時間 40 分（8 月 12 日）	31.5%（8 月 12 日）	7.3%	0.0%
フジ	47 時間 19 分	9 時間 30 分（8 月 6 日）	37.5%（8 月 19 日）	10.8%	9.3%

NHK のオリンピック放送の総放送時間は 237 時間 55 分と突出している。1 日の最大放送時間が 15 時間超え、62%超えの日もある。平均値も 55．1%であり、中央値では 60.4%で、実に 1 日の 6 割以上の時間をオリンピックに割いていたのである。他局と比べて圧倒的な報道量である。

中央値が 0%だったのが日テレとテレ東である。日テレは特にオリンピック関連番組の放送の多かったのが 8 月 13 日だが、18 日間のうち 10 日間競技中継に携わっていない。テレ東も 8 月 12 日の 7 時間 40 分が最も多かったが、11 日間は競技中継を行っていない。その他のテレ朝、TBS、フジでは平均値で 10%を超えるオリンピック関連番組の時間があったことが判明した。

次に、各局の特徴を可視化するため局別に集計したグラフを見ていきたい。

[88] 平均値と中央値を出したのは、各局が連日オリンピック関連番組を放送していたわけではないこと示すためである。例えば、NHK はオリンピック開催以降ほぼ毎日 60%を超える時間帯をオリンピックに割いていたが、最終日にはその数値が 20%台まで下がっている。これを「外れ値」とみて、よりオリンピック期間中の報道率を明確に示すために中央値を計算した。一方で、日テレやテレ東はオリンピック放送が連日行われたわけでなく、突出している日と放送のない日の差が歴然としている。

図 2－7　NHK の 18 日間の番組編成

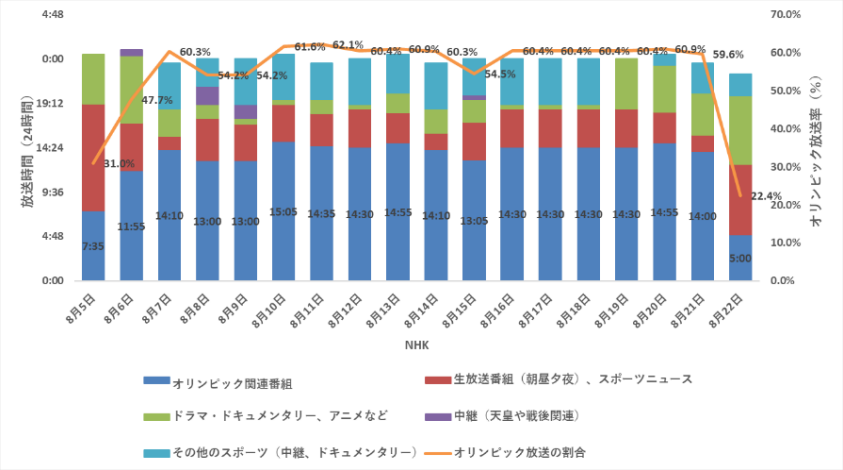


図 2－8　日本テレビの 18 日間の番組編成

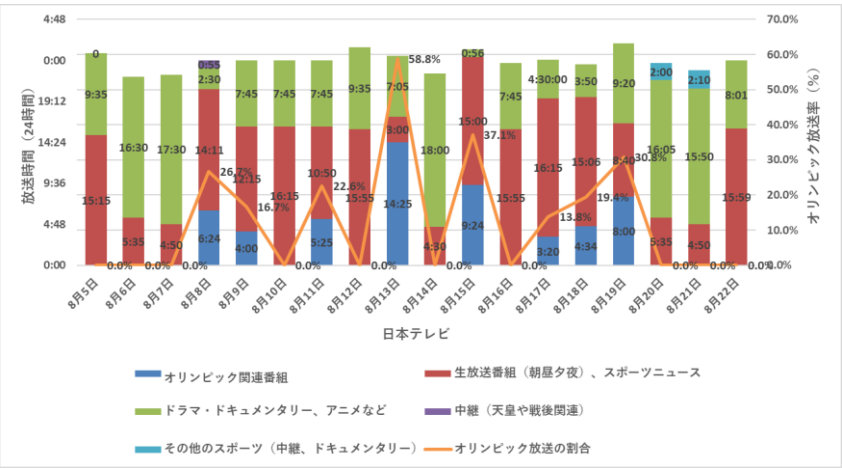


図 2－9　テレビ朝日の 18 日間の番組編成

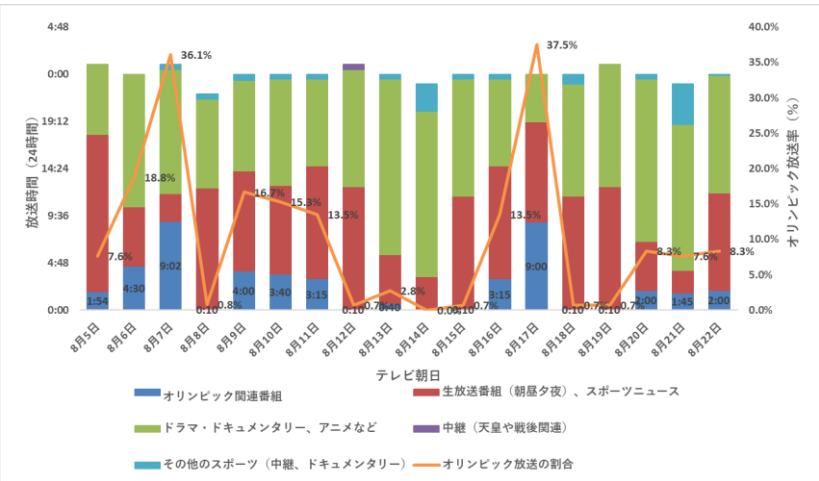


図 2－10　TBS テレビの 18 日間の番組編成

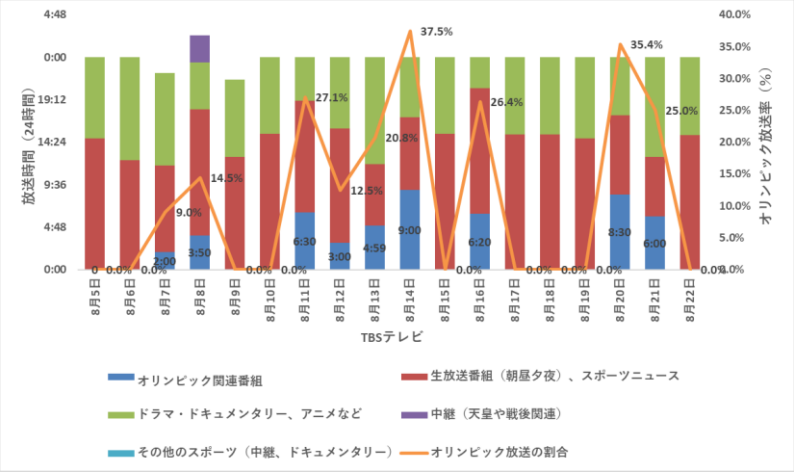


図 2－11　テレビ東京の 18 日間の番組編成

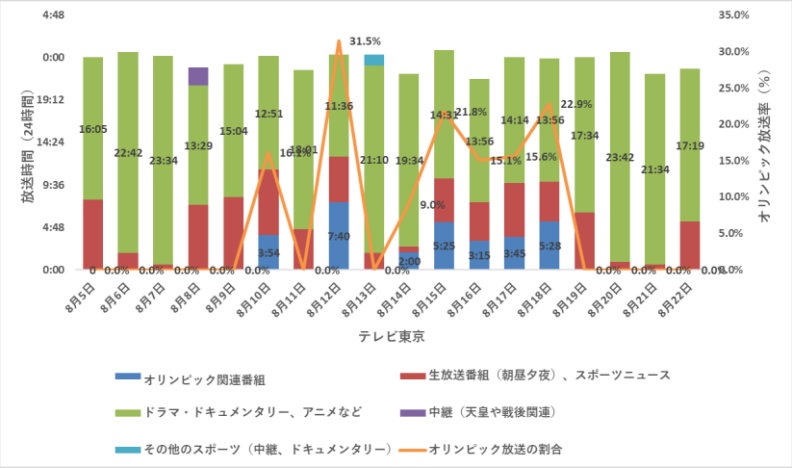
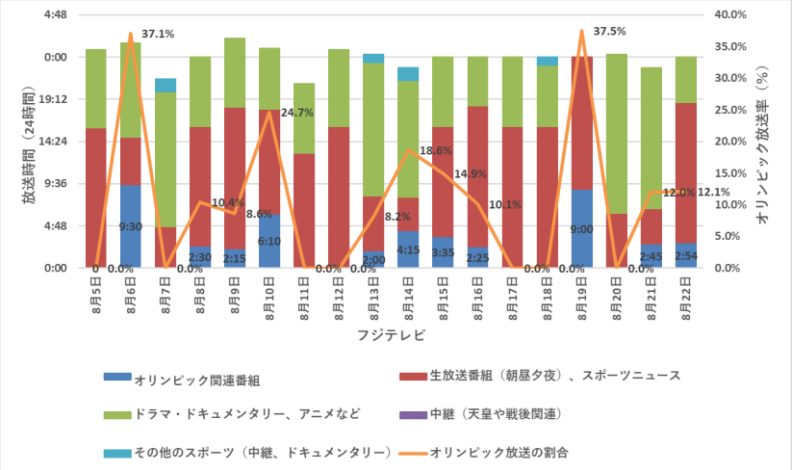


図 2－12　フジテレビの 18 日間の番組編成



このように局別にみてみると、いくつかの特徴が浮かび上がる。まずは、NHK のオリンピック関連番組の圧倒的な比重である。それに対して民放各局では、テレ東以外の局では生放送番組の報道量が多く、パッケージ型の番組（ドラマ、ドキュメンタリー、バラエティ、アニメなど）も同様に多い。これは、早朝 4 時台からニュース、情報番組を生放送し、朝、昼、夕方、夜にもニュース、情報番組を報道し、19 時からはバラエティやドラマの時間、深夜にドキュメンタリーなどを放送するという定番の番組編成がリオ大会期間中も基本的に維持されていたことを示している。つまり従来の番組編成を大きく壊さない形で、長時間のオリンピック中継が組まれているのが民放の特徴である。

また、どの局も、オリンピック中継が延長してもよいように、生放送番組などをクッションとしていることも特徴といえよう。その象徴的な例は、8 月 19 日のフジテレビであり、15 時間生放送番組があり、それ以外の 9 時間をオリンピック中継に当てている。生放送番組（ニュース）のなかでオリンピックが扱われているならば、ほぼ 1 日中オリンピックを報じていたともいえる。

テレ東は、極端に生放送番組の時間が少なく、またその内容も生活情報番組で、オリンピックを大きく扱っていたわけではない。テレ東では「WBS」という夜の報道番組の次に「スポーツ W」というスポーツニュースを放送しており、ニュースがオリンピック中心となる事態を免れている[89]。なおテレ東は 8 月 14 日の日曜日にオリンピックのハイライト放送を 2 時間行うなどしているが、他局よりはるかに放送量が少ない。

6 チャンネルによる放送全体の 37%を占めているニュース・情報番組でも、ほとんどの局がオリンピック中継に加えてニュース・情報番組の中でかなりの比重を置いてオリンピックを放送し、その多くがリオ大会を朝から夜まで繰り返し報じていると先に指摘したが、特に NHK、日テレ、テレ朝、TBS、フジの 5 局でそれが顕著である。また、自局でのオリンピック中継がない場合も、ニュース・情報番組の中でオリンピックを伝え続けていたといえる。なお、その他のスポーツ中継番組も 3%あり、日本の人々はこうしたスポーツだらけの特殊な番組編成と内容の下で 18 日間を過ごしたことになる。

本章のまとめ

日本のテレビが放送したのは、リオ大会で実施された全 39 競技中 26 競技（66.7%）であり、かなり幅広い競技が中継されたといえる。日本選手が出場していたのは 39 競技中 36 競技（92.3%）であったが、自転車、近代五種、ボート、セーリングなどは地上波で中継されず、また、日本人が出場しなかったハンドボールやビーチバレーについても中継がなかった。一方で、メダル獲得に至らずともゴルフやサッカー、マラソンのように日常的に日本人視聴者の関心が高いスポーツやマイナーとされる射撃や水球なども中継された。

地上波で中継された 26 競技を日本選手のメダルの獲得状況（39 競技中 11 競技、28.2%）と照らし合わせてみると、カヌー以外のすべてでメダル獲得の瞬間が生中継されたことがわかる（41 メダル中 40 メダル、97.6%）。中継の対象に選ばれた競技が、日本選手のメダ

[89] なお「WBS」のリオ大会期間における報道量のパーセンテージは 10%（上杉・東山 2022:16）だったことからもオリンピックを扱う比重は他局と比べ圧倒的に低いといえる。

ル獲得に照準を定めたものであることは明らかであり、テレビ局側が事前に立てたメダル獲得の予測がほとんど的中している。こうした放送のあり方は、日本のメディア側の予測力だけではなく、オリンピックの放送権を全テレビ局が得ている JC 方式という特殊な体制が生み出したものといえるだろう。

NHK は、放送計画の時点から、リオ大会期間中（18 日間）の 432 時間のうち、267 時間 5 分、実に 61.8%をリオ大会中継および関連番組にあてることを決定しており、そこには 1 日の最大放送時間が 15 時間、62%を超える日も設定されていた。実際には、これに高校野球の中継も加わり、NHK はリオ大会期間中にスポーツチャンネル化する。他方、民放もすでに 2015 年 12 月時点で、日本人メダリスト誕生の可能性がある競技中継を行うべく放送計画を立て、実際にどの局もメダル獲得にまつわるシーンを 1 つは中継した。また、どの局も、リオ大会中継の延長に備えて、生放送番組などをクッションとしておくという対応をとっているのも特徴的である。

リオ大会の視聴率は、12 時間という時差の影響が非常に大きく、過去 2 大会と比べると振るわなかった。NHK、民放ともにオリンピック中継に大きな時間を割いたものの、時差があることで、自国のプライムタイム（午後 7 時から 11 時）放送を維持しながら、深夜帯から早朝にかけてリオ大会を中継した。これもリオ大会の特徴といえよう。なお、2016 年 8 月 20 日放送の NHK「ニュース 7」が高い視聴率を獲得しているが、これは 12 時間という時差がある中で、ニュース番組が、競技結果や競技の模様をいち早く知りたいという視聴者や勤務時間等によって競技中継を視聴できない視聴者にとって重要な存在となっていたことを示していると考えられる。

6 チャンネルによる放送全体の 37%を占めているニュース・情報番組でも、かなりの比重を置いてリオ大会が報道され、これによってリオ大会を朝から夜まで繰り返し報じるという事態が生まれた。特に NHK、日テレ、テレ朝、TBS、フジの 5 局でそれが顕著である。これらの地上波 6 チャンネルが、8 月 5～22 日までの 18 日間に放送したリオ大会関連番組の放送時間を独自に集計したところ、トータルで 468 時間 13 分（全体の 18%）と全体の 2 割弱を占めていたことが判明した。さらに上杉・杉山が計測した 8 つのニュース番組におけるリオ大会報道の比重の平均値 46%をニュース・情報番組に占めるリオ大会報道の比重であると仮定し、全放送時間に占める比重を算出すると 17%となる。リオ大会関連番組の 18%に匹敵する比重であり、これを加算すると、リオ大会開催期間中の 6 チャンネル分の放送全体の実に 35%がオリンピック放送だったことになる。三分の一強という比重は、日本のテレビ放送がいかにオリンピックに偏重しているのかを鮮明に示すものである。またそれは、世界的に異例な JC 方式による日本のテレビ放送の特異性を示すものに他ならない。

第３章　ニュース番組によるリオ大会報道（１）：番組構成、選手／競技の報道に関する量的内容分析

本章の課題

本章と次章では、リオ大会期間中の夜のニュース番組を対象にして、リオ大会のテレビ放送についてのメッセージ分析を行なう。まず本章では、リオ大会の報道実態を量的内容分析によって検討する。

なぜ、夜のニュース番組におけるリオ大会報道を分析対象としたのか。その理由をまず説明しておきたい。

リオ大会の競技中継は、12 時間の時差のため、予選開始が日本時間の夜 10 時過ぎから、決勝は早朝から午前中にかけて放送された。それが競技中継の視聴率を引き下げる要因となったとみられることは、前章でみたとおりである。重要なことは、こうした状況が夜のニュース番組に対して特別な意義を付与したと考えられることである。そこにおけるリオ大会の報道が、中継を見ることができなかった人々にとって、直近の競技結果や競技の模様を濃縮し、いち早くコンパクトに提供するものとなったからである。前章でも指摘したが、8 月 20 日放送の「NHK ニュース 7」（NHK 総合）が 22.6%の高視聴率を記録し、2016 年の年間高世帯視聴率番組（関東地区）の 21 位にランクインしたことはそれを象徴していると考えられる。ニュース番組はオリンピック関連番組ではないが、そのリオ大会報道の総放送時間が、オリンピック関連番組と肩を並べるものであったことも前章で指摘した。こうした量的な面での重要性とともに、夜のニュース番組が視聴者にとってオリンピック関連番組と同等かあるいはそれ以上に重要な位置を占めるものとなったこと、これが本論文が夜のニュース番組を分析対象とした第 1 の理由である。

第 2 の理由は、夜のニュース番組によるリオ大会の報道内容が、直近の実施競技や大会に関する膨大な情報および事前取材の映像などから各局が厳選し、濃縮してコンパクトに編集したものであることから、そこに JC 体制下におけるリオ大会放送の全貌とその特徴が集約的に映し出されていると考えられることである[90]。リオ大会放送の全貌をとらえる格好の素材であるといえよう。また、各局別の分析も加えることで、JC 体制下におけるリオ大会放送の多様性、各局の特徴についても明らかにすることができよう。

本章の具体的な課題は、次の 2 点である。

第 1 に、リオ大会の報道が各局のニュース番組の構成の中にどのように組み込まれ、どれほどの比重をもって報道されたのかを明らかにすることである。ニュースの順番や伝えられる内容は制作者が意図をもって選択し、ラインナップによって番組のメッセージを決めているとされている[91]。この点をふまえてリオ大会の報道の順番および比重を検討する。それらのうち、リオ大会報道の比重の分析は、テレビ放送全体の 17%にあたると推定され

---

[90] 石川好は、テレビではスポーツから演芸、ドラマとなんでも揃っているが、テレビそのものだと言えるのはニュース番組をおいて他にないとし、その理由として、テレビ・ニュースの作り方そのものにテレビというメディアのあらゆる可能性が動員されているからだと主張している（石川 1995：1-3)。）

[91] 2022 年 6 月 23 日放送の子ども向け番組、NHK E テレ「アッ！とメディア」の放送より。

るニュース・情報番組におけるリオ大会報道の実態を解明する作業でもあり、テレビによるリオ大会放送の全貌に迫るうえで不可欠なものである。

第 2 に、ニュース番組で報じられたリオ大会の内容を情報露出量に着目して検討することである。報じられた競技、選手の報道量を計測し、その偏りを明らかにする。さらにそうした報道量の偏りが何によってもたらされているのかを、競技、メダルの獲得の有無、ジェンダーバイアス、外国人選手という視点から検討する。さらには、選手報道に付与された「人間ドラマ」をはじめとする情報の量的内容分析をも試みる。

序章でも述べたように、先行研究において、主にキー局地上波の夜のニュース報道番組を対象とした量的内容分析がなされており、競技の報道量の格差、ジェンダーによる差異、外国人選手の表象、そしてメダリスト偏向報道といった問題についての検討が重ねられてきている（飯田 2003、上瀬 2007，飯田 2009，小玉ほか 2012、中ほか 2015、中ほか 2020、小林 2017、2019、2020）。また、日本のテレビ放送については萩原滋が、アメリカについてはリー・トンプソンらが、オリンピック開催期間中に自国の応援放送と化しているという問題を指摘している（萩原 2007、Billings et al. 2012、Lowry 2016、トンプソン 2017）。

これらのうち、小林直美の量的内容分析は、リオ大会期間を含む 25 日間（開催 4 日前の 8 月 1 日から終了 4 日後の 25 日まで）の夜のニュース 2 番組（NHK「ニュースウオッチ 9」と日本テレビ「NEWS ZERO」）を対象とし、主にジェンダーバイアスの視点から検証を行っている。その結果、ニュース全体の約 9 割（89.6%）が日本選手の報道で占められ、そのうち日本の男性選手が 196 回（49.0%）、次いで日本の女性選手が 161 回（40.3%）であったこと、日本以外の選手は合計で 42 回（10.5%（女性選手 22 回（5.5%）、男性選手 18 回（4.5%）、混合 2 回（0.5%））、セクシュアル・マイノリティの選手の報道は国籍を問わず 0 回であったと報告している（小林 2020:8）。また、報道の多い競技については日本選手のメダル獲得競技が報道件数上位を占めていると明らかにした（小林 2020: 9）。だが、この研究のなかでカウントされた選手（報道件数として計測）は、1 本のニュースの中で主だった選手であること、1 本のニュースで複数のオリンピック競技結果が取り上げられた場合は、それぞれの競技結果で最も注目された選手をコーディングしたことなどから、ニュースの画面すべてに表れた選手を計測しているわけではない。

他方、トンプソンは、アメリカ NBC によるリオ大会の放送が、事前に準備した各選手の取材映像や「人情話」などの「競技以外の側面」を多く報道していることをスポーツ報道の問題点として指摘している（トンプソン 2017: 28-31）。こうした批判はこれまでにも多くなされてきたが、「競技以外の側面」がどれほどの比重を占めているのかを量的に測定した研究は皆無である。

本章の量的内容分析では、上記のような先行研究の問題点や昨今のテレビ研究の動向[92]もふまえながら、ニュース画面に登場するすべての競技、人物、国に関する情報を、ナレーシ

[92] テレビ研究では、昨今ジェンダーやダイバーシティの視点による検討がなされるようになっている。青木紀美子ほかは、テレビの画面の中に登場する人々の多様性を検証することについて、①公共性が強いメディアとしての放送の責任、②コンテンツの質、③信頼と生き残りを掛けるという、3 つの点から重要であるとしている。公共の電波を使う放送として、社会的影響力が大きいテレビはできるだけ多様な観点を伝える役割を担っており、それは情報が氾濫するネット時代にあっても、多様な人々が自分にとって意味があると感じられる発信が必要だという考えに基づいての主張だ（青木ほか 2022:30-3）

ョンや画面に表示されるテロップなどから拾い集め、そのデータをもとに検証を行っていくこととする。

なお、NHK 放送文化研究所がメタデータを用いた研究「コロナ禍の五輪　ニュースがどう伝えたか」の中で、本論文が対象とした番組のうち 5 番組を含むテレビニュース 8 番組のリオ大会報道について、ニュース報道における順位、報道量、報道内容（選手・競技、選手生出演、海外選手、開会式、政治・社会、その他）について集計しており、そのデータが東京 2020 大会との比較のために掲載されている（上杉・東山 2022)。本論文では、独自の計測を行うとともに、これらのデータを適宜参照することにする。

本章の構成は以下のとおりである。第 1 節では、分析対象とした 5 つのニュース番組のデータと各番組のリオ大会に関する報道体制について確認したうえで、番組全体の内容構成、番組におけるリオ大会の報道の位置とその比重を明らかにする。第 2 節では、ニュース番組が報じた競技の内実を把握したうえで、報道量の偏りについて検討する。

第 3 節以下では、選手報道に検討対象を絞り込み、その実態を追究していく。第 3 節では、ニュース番組に登場した競技関係者の全貌を把握したうえで、報道件数が多い選手に着目し、競技、メダル獲得、ジェンダー、外国人選手という視点から検討する。第 4 節では報道量のグラデーションに着目して選手報道を「競技結果のみの報道」「競技結果＋α の報道」「詳細な報道」の 3 つに分類し、それぞれの報道の内実を検討する。その際、「詳細な報道」に分類した選手に関しては、報道内容を構成する要素を 21 項目に区分し、それを 5 つにグルーピングすることによって、その内実により接近する。このような独自の分析手法を用いることによって、「競技以外の側面」がどれほどの比重を占めているのかについても量的に測定する。

第１節 リオ大会報道の位置と比重

１．５つのニュース番組のデータ

分析対象とした夜のニュース番組は、日本の地上波キー局のもので、NHK の「ニュースウオッチ 9」（以下、「NW9」と略す）と日本テレビ放送網（以下、日テレ）「NEWS ZERO」（以下、「ZERO」と略す)、テレビ朝日（以下、「テレ朝」)「報道ステーション」（以下、「報ステ」と略す)、TBS テレビ（以下、TBS)「NEWS23」（以下、「N23」と略す)、フジテレビ（以下、フジ）の「ユアタイム」（以下、「ユア」と略す）の 5 つである。JC 体制の一員であるテレビ東京は、ニュース番組「WBS」の後に「スポーツ W」というスポーツのみを伝える番組を放送しており、ニュースとスポーツの報道がすみ分けされていることから分析対象から除外した。

5 つのニュース番組のうち、NHK「NW9」、日テレ「ZERO」、テレ朝「報ステ」の 3 つは、2000 年代中ごろに誕生した報道番組で、キャスターや番組名が変わるなどの変化もあるが現在まで放送が継続している。TBS「N23」は、1989 年から JNN 系列で生放送している平日最終版の報道番組で現在も放送継続中である。唯一、フジ「ユア」は、2016 年に放

送開始した新しい報道番組だったが、2017 年に放送が終了している[93]。リオ大会期間中の各番組の放送時間は、NHK では変更は見られなかったが、民放キー局は、リオ大会の競技中継との関係により時間帯が変更されたり、休止となることもあった[94]。

対象とした期間は 2016 年 8 月 8 日～8 月 19 日までであり、ニュース番組の放送は平日の計 10 日間である[95]。それをまとめたのが表 3－1 だが、それがリオ大会の実施競技をどの程度カバーするものであるかを表 3－2 によって確認しておきたい。

表 3－1　各局番組に関する基本情報と対象とした放送日[96]

放送局名 （略称）	番組名（略称） 番組放送開始年	MC（当時）	放送時間	放送日
日本放送協会 （NHK）	「ニュースウオッチ９」 （「NW9」） 2006 年～	河野憲治 鈴木菜穂子	21：00～21：59 （中継の影響はほぼ受けない）	8 月 8、9、10、11、12、15、16、17、18、19 **10 日間**
日本テレビ （日テレ）	「NEWS ZERO」 （「ZERO」） 2006 年～	村尾信尚 小正裕佳子	23：00～	8 月 9、10、11、12、16，17、19 **7 日間**
テレビ朝日 （テレ朝）	「報道ステーション」 （「報ステ」） 2004 年～	富永悠太 小川彩佳	21：54～	8 月 8、10、11、12、15、16、18、19 **8 日間**
TBS テレビ （TBS）	「NEWS23」 （「N23」） 1989 年～	星浩 雨宮塔子	23：00～	8 月 8、9、10、12、15、17、18、19 **8 日間**
フジテレビ （フジ）	「ユアタイム」 （「ユア」） 2016 年～	市川紗椰 野島卓	23：30～	8 月 8、9、10、11、12、15、16、17、18 **9 日間**

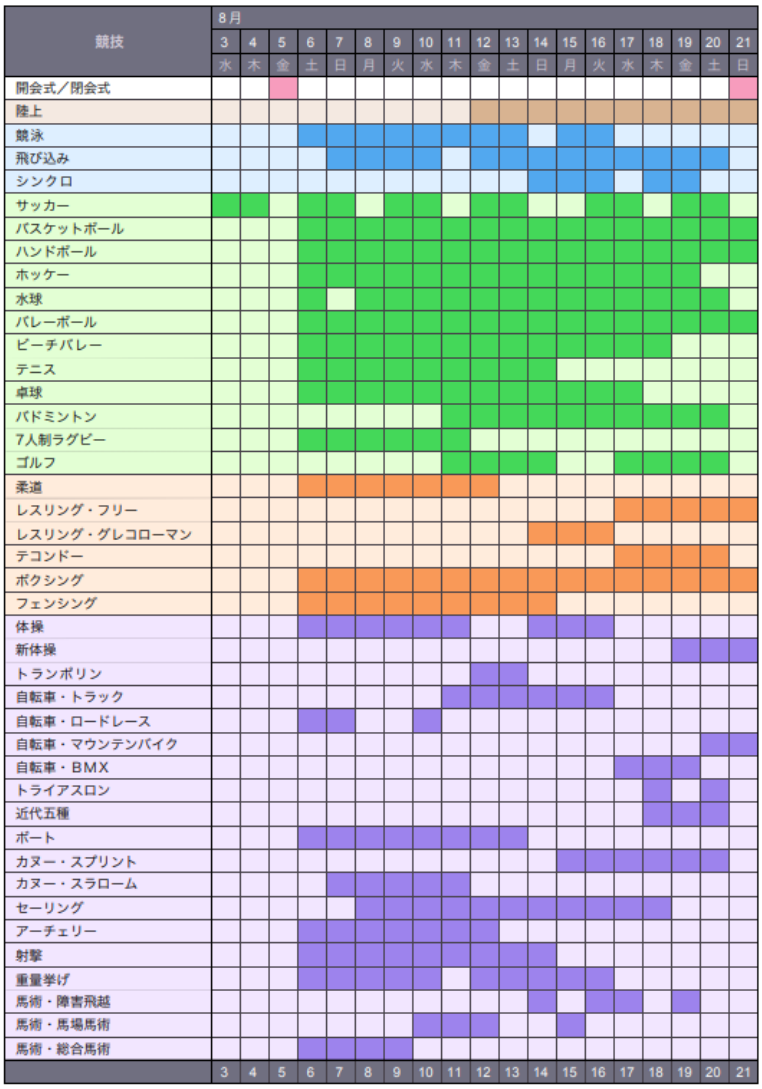
[93] 他の番組が局のアナウンサー、キャスターらが MC を務めているのに対して、元ファッションモデルの市川紗椰がメインの司会を務めていた。

[94] 放送休止となったのは日テレ「ZERO」が最多で 8、15，18 日の三日間。テレ朝「報ステ」は 9、17 日の二日間、TBS「N23」は 11、16 日の二日間、フジ「ユア」は 19 日のみであった。すべてオリンピック中継の影響を受けての休止である。

[95] オリンピック開会式が 6 日の土曜日の日本時間の夜、閉会式が 22 日の日曜日の日本時間午前中だったため、計 10 日間となった。これらの夜のニュース番組では、開始時間が比較的早い競技・種目、たとえば軽量級の選手たち（柔道の 48 キロ級近藤亜美選手や 60 キロ級高藤直寿選手、ウェイトリフティングの三宅宏実選手など）をフォローしていない可能性がある。

[96] 放送日の欄で下線を引いた 4 日は、録画データがないもの。

表３－２　競技日程（読売新聞オンラインより引用、表２－１の再掲）



８月３日からサッカー予選リーグが行われたが、多くの競技は５日の開会式以降、６日から本格的に行われたので、本論文の分析対象を放送初日の８月８日（月）からとしたことに問題はないだろう。しかし、番組分析対象を 19 日までとしたことで、20～21 日に行われた競技について報道した 22 日（月）分の放送が欠落している[97]。考察の際にはこの点を考慮する必要がある[98]。

なお、表３－１に記したように、放送時間変更や機器の容量の問題などによって録画でき

---

[97] 読売新聞縮刷版のテレビ欄では、オリンピック期間中の８月８日から 19 日までの平日の該当番組で、ほとんどの場合、項目の１番目にオリンピックの話題が記載されていたが、22 日に関しては、みな一様に台風９号が関東・東海接近、もしくは厳重警戒を伝えるものを記載していた。オリンピックについては総集編や、キャスターが見たメダルの瞬間など、オリンピックを振り返るものとしての位置づけであった。

[98] テレ朝の「報ステ」は、日曜日に「報ステ SUNDAY」の放送があったが、夕方 16 時半からと放送時間が全く異なるため、他局と同様に平日のみを対象とした。

なかった番組が 19 日の TBS「N23」、10、11、12 日のフジ「ユア」、計 4 番組あるが、同日における重複がないため、全体的な傾向を分析するうえで大きな影響はないと判断した[99]。

2．リオ大会の報道のための特別体制

大会期間中、5 つのニュース番組のどれもが、日本のスタジオとリオの特設スタジオとを行き来する形でリオ大会のニュースを伝えた。日本のスタジオでは、基本的にオリンピック以外の日常のニュースを伝えることに徹し、リオ大会のニュースを伝える場は必ずリオの特設スタジオで、生中継で繋いだ。ただし、大会の速報は、日本のスタジオから伝えることもあり、選手たちが生出演する際には、リオ特設スタジオと日本のスタジオにいるメインキャスターらとの対話が行われた。

このように 5 局すべてが現地に報道スタッフを派遣し、現地スタジオを設営して報道ができる体制は、JC として放送権を獲得している、世界的に異例な日本ならではの特徴である。以下、チャンネル順に各番組の実際の体制などをみておこう。

NHK「NW9」では、現地特設スタジオに佐々木彩キャスターがおり、「ボアノイチー（こんばんは）」と中継で登場する形でオリンピックニュースが伝えられた。トップニュースでオリンピックを伝えたのち、ニュース中盤で同日のオリンピックの結果を伝えたり、現地スタジオから生中継で現地取材の様子やメダリストを生出演させたり、次の日の見どころなどを伝えたりしていた。冒頭から長時間オリンピックニュースを伝えることもあれば、中断した後オリンピックニュースに戻る日も多くあった。

日テレ「ZERO」もオリンピックニュースは主に現地特設スタジオから報道していた。当時「ZERO」スポーツキャスターだったラルフ鈴木アナウンサーがメインで、徳島えりかアナウンサーも配置してリオ大会のニュースを伝え、アスリートキャスターとして元体操日本代表の田中理恵が大会期間中すべてに登場した。ラルフキャスターがオリンピックニュースを牽引し、日本のスタジオのメインキャスターである村尾信尚らと生中継で繋ぎ選手インタビューを行った。

テレ朝「報ステ」は、リオ大会に関するテレ朝全体のメインキャスターである松岡修造と元競泳選手でフィールドリポーターの寺川綾という元アスリート同士の二人をメインに据えて現地特設スタジオから伝えた。オリンピックニュースを松岡が主導し、選手が生出演する際には、日本にいるメインキャスターの富川悠太アナウンサー、小川彩佳アナウンサーらがコメントや質問を投げかけた。なお、松岡、寺川は同番組のスポーツキャスターでもある。

TBS「N23」は、現地特設スタジオからは、古谷有美アナウンサーとスペシャルキャスター高橋尚子の 2 人がメインで伝える形で、生出演したメダリストたちへのインタビューも、日本のスタジオと現地とをつなぐのも主にこの二人だった。日本のスタジオでは、メインキャスターの星浩と雨宮塔子がいるが、雨宮が「続いてはオリンピック」などと声を掛けたり、宇内梨沙アナウンサーが現地からの情報を継ぐ形でメダル獲得数を伝えるなどした。

---

[99] 上記の表では下線で録画できなかった日を示している。各局を比較する場合にはこの点を考慮し、基本的にパーセンテージを用いることとする。

フジ「ユア」は、田中大樹アナウンサーを中心に宮澤智アナウンサーなども登場してリオの現地特設スタジオから伝え、中継にはオリンピアンキャスターの野村忠宏（柔道）や小谷実可子（シンクロ）らも登場し、独自の視点から選手取材の様子などを語った。メダリストが生出演する際には、現地と日本のスタジオをつなぎ、MC の市川紗椰らが質問するという他局と同様のスタイルをとった。

このように各局とも、現地に特設スタジオを設置してスタッフやアナウンサー、オリンピアンキャスターらを配置するという、日常のニュース報道と全く異なる特別体制の下でリオ大会を報道したのである。

3．番組の中でのリオ大会報道の位置

リオ大会の報道が、ニュース番組の中でどのような位置を占めているのかをみてみよう。

通常のニュース番組の構成は、次のようなものである。NHK「NW9」を例にみてみよう。①トップニュース（自然災害や気象情報、殺人事件、政治、スポーツなど比較的突発的で重大な出来事）、②各地域のニュース、③独自の調査報道（戦争、時事的な歴史問題、過去を振り返った周年報道など）、④スポーツ（多くは野球がトップで、その後相撲、サッカー、メジャーリーグ情報など、各競技の世界大会や日本選手権がある場合はその情報など）、⑤気象情報、為替情報、速報。なお、民放キー局の番組でも、番組終盤にスポーツニュースが放送されており、多くの場合スポーツがトップニュースとなることはない。

しかし、リオ大会期間中はニュースの順序が大きく変更され、特にリオ大会のトップニュース扱いが増加し、幾度もオリンピックが登場する。おおよそのパターンを示すと、①オリンピック（メダル獲得状況、当日の大会結果）、②各地域のニュース、独自の調査報道（各局により様々だが、生中継までのつなぎ扱いに）、③そのほかのスポーツ、気象情報、④オリンピック（現地スタジオから生中継で、選手と東京キャスターとの会話が行われたりする）、⑤気象情報、為替情報、⑥オリンピック（速報）となる。オリンピックニュースが何度か挿入されるのは、冒頭に試合結果を伝えたのち、メダリストらが生出演したり、試合結果の速報が入ったり、次に行われる注目試合・選手を伝えるからである。

8 月 15 日の各局のニュース内容をニュースの見出しを例に具体的に見てみよう。

表 3－3　8 月 15 日の各局ニュースの内容（見出し）

局「番組」	番組内容と順序
NHK「NW9」	（スポーツ・オリンピック）、東京メトロ銀座線盲導犬つれた男性はねられ重傷、終戦の日・天皇陛下と戦争・昭和研究の第一人者に話、台風 7 号関東東北激しい雨も、SMAP 解散閣僚発言相次ぐ、相模原障害者殺傷事件再逮捕、4 月～6 月 GDP ほぼ横ばい、（スポーツ「柔道の父」五輪に込めた平和の願い）、気象情報、（スポーツ・オリンピック）、（スポーツ・高校野球）、静岡で猛烈な雨、為替情報
日テレ「ZERO」	オリンピック中継により放送なし
テレ朝「報ステ」	終戦の日：全国戦没者追悼式で天皇陛下「深い反省」表明、（スポーツ・オリンピ

	ック)、台風 7 号あす関東直撃の恐れも、気象情報、ボコ・ハラム拉致から 2 年･･･映像に乳児抱いた少女も、東京メトロ・地下鉄ホームから転落盲導犬つれた男性重体、シールズきょう解散「十分だったとは思っていない」、Ｒ２－Ｄ２の俳優ケニー・ベイカー死去、内閣府発表実質ＧＤＰ成長率 4 月～6 月ほぼ横ばい、鳥貴族消毒用アルコールで酎ハイ用と間違い、(スポーツ・高校野球)、(スポーツ・オリンピック速報福島千里 200m 予選敗退)
TBS「N23」	(スポーツ・オリンピック)、各地で花火や成人式･･･台風が直撃のおそれ、終戦 71 年「終戦の日」天皇陛下去年に続き「深い反省」、綾瀬はるか「戦争を聞く」～ヒロシマ孤児たちの戦後～、考えるキッカケ平和守ってきたもの、チューハイにアルコール製剤鳥貴族、愛媛・松山刑務所受刑者が一時行方不明に、東京・港区盲導犬連れ男性電車ホーム転落死亡、内閣府発表ＧＤＰ速報値 2 期連続プラス成長、リオ金メダリスト銃つきつけ強盗被害に、(スポーツ・オリンピック)、(スポーツ・高校野球)、尖閣沖侵入の中国船最新映像を公開、公明・山口代表が改めて 9 条改正に慎重な姿勢、気象情報、(スポーツ・オリンピック速報乾三井ペア)
フジ「ユア」	(スポーツ・オリンピック)、終戦 71 年陛下の思いは／一方竹島、もう戻らないあの日、SMAP ショック今日も、ゴーストバスターズ最初で最後のライブ、大黒摩季復活！6 年ぶりライブ、豊田泰光さん死去西鉄黄金時代を築く、(スポーツ・高校野球、サッカー、競輪、お台場夢大陸に巨人軍)、愛媛松山刑務所受刑者行方不明に、アメリカ・ルイジアナ州で洪水被害、東京・青山一丁目で盲導犬の男性ホーム転落し死亡、列島各地でゲリラ豪雨、鳥貴族アルコール製剤でチューハイ、茨城県久慈浜おぼれた男児助けに男性重体、気象情報、野良ネコ対策でモーリーが思ったこと

表 3－3 にまとめたように、NHK「NW9」は 13 本のニュースの中で、スポーツに関するニュースが 4 本あり、そのうちの 3 つがリオ大会関連である。テレ朝「報ステ」は冒頭に終戦の日を伝え、スポーツは 3 本でそのうち 2 本がリオ大会関連だった。フジは、リオ大会を冒頭で伝え、番組中盤には多様なスポーツを伝えた。このように 8 月 15 日を例に挙げると、NHK、TBS、フジの 3 局のニュース番組がリオ大会をトップニュースで扱い、NHK と TBS は各種ニュースを伝えたのちまたリオ大会を伝えている。リオ大会関連のニュースがひとつの番組のなかで複数回伝えられているのである。

8 月 15 日は日本にとって歴史的に重要な終戦の日であり、例年の報道ニュースはこの日にちなんで戦争をトップニュースで伝え、さらに調査報道による戦争報道を行う傾向が強い。しかしながら、リオ大会期間中には従来のニュースの報道順序が大きく変更され、テレ朝「報ステ」以外はリオ大会をトップニュースに据えたのである。

では、どれほどの割合でリオ大会をニュースのトップ項目に据えたのか。オリンピックがトップで扱われた件数とその割合を示したのが表 3－4 である。同表は、データが欠落していた TBS「N23」の 1 回、フジ「ユア」の 3 回分について、上杉・東山（2022:7）によって補足した。

表 3－4　オリンピックがトップニュースとなった件数

局「番組名」	放送日数	トップニュースの回数	トップニュースの割合
NHK「NW9」	10 日	8 回	80%
日テレ「ZERO」	7 日	7 回	100%
テレ朝「報ステ」	8 日	5 回	62.5%
TBS「N23」	8 日	7 回	87.5%
フジ「ユア」	9 日	7 回	77.8%

NHK「NW9」は、10 日間のうちオリンピックをトップニュースとして扱ったのは 8 回に及ぶ。NHK と同様にオリンピックをトップニュースで扱った割合が 80%を超えたのが TBS「N23」であった。さらに日テレ「ZERO」にいたってはトップニュースがオリンピックである放送日数が 100%という結果となった。一方で、オリンピックをトップで扱った割合が最も少なかったのはテレ朝「報ステ」で、62.5%、フジ「ユア」も 77.8%と、トップニュースの割合はテレ朝「報ステ」についで低かった。

次に、トップニュースがオリンピックでない時、それに代わって報道されたのは何かを確認するため、各局の一覧をまとめたのが表 3－5 である。

表 3－5　各局のトップニュース一覧

	NHK「NW9」	日テレ「ZERO」	テレ朝「報ステ」	TBS「N23」	フジ「ユア」
8 日	天皇陛下	―	天皇陛下	天皇陛下	天皇陛下
9 日	猛暑	オリンピック	―	オリンピック	オリンピック
10 日	オリンピック	オリンピック	オリンピック	オリンピック	―
11 日	オリンピック	オリンピック	オリンピック	―	―
12 日	オリンピック	オリンピック	オリンピック	オリンピック	―
15 日	オリンピック	―	終戦の日	オリンピック	オリンピック
16 日	台風 7 号	オリンピック	台風 7 号	―	台風 7 号
17 日	オリンピック	オリンピック	―	オリンピック	オリンピック
18 日	オリンピック	―	オリンピック	オリンピック	オリンピック
19 日	オリンピック	オリンピック	オリンピック	―	―

8 月 8 日の 15 時に「象徴としてのお務めについての天皇陛下のおことば」が発表された

ため、この日は各局とも天皇（当時、今の上皇）の生前退位の話題をトップニュースに据えた。それ以降は、15 日のテレ朝「報ステ」が「終戦の日」、16 日に 3 局が「猛暑、台風 7 号」をトップに据えただけである。この 10 日間には、8 月 9 日の長崎原爆の日と、8 月 15 日の終戦の日という重要な記念日を含んでいるのだが、それがトップニュースに据えられたのはたった 1 局だけであった。

ニュースの報道順序の変化と、注目度の高さ（トップニュースの割合）から、リオ大会期間中はオリンピックを中心に据えたニュース構成となっていたことは明らかであろう。NHK と民放 4 局のなかでオリンピックを扱う上での多少のばらつきはあるが、各局揃ってオリンピックに最大限の比重を置いた報道を行なっていたといえる。

４．番組の内容構成とリオ大会報道の比重

ニュース番組に占めるリオ大会報道の比重を明らかにするための前提作業として、まずニュース番組自体の内容構成を把握することにしたい。そのために設定したのが表 3－6 の分類である。これは、小林らによるニュースの分類コード（小林 2019:10）を参照したものだが、リオ大会期間中に芸能人の結婚、SMAP の解散などの報道が加わったことから、小林らの分類コードにはなかった「芸能」という項目を新たに追加するなどしてある。

表 3－6　ニュースの分類と関係分野

分類コード	関係分野
政治	政策、選挙、外交、議会、国際機関、その他政治
経済	景気・失業、金融市場、貿易、消費、流通、労働、税金、その他経済
社会	犯罪、事件・事故、イベント（人為的）、災害、社会現象、裁判、教育、デモ、その他社会
軍事	紛争・戦争（テロリズム含む）、兵器、軍事基地、自衛隊、安全保障
環境	環境汚染・破壊、環境保護、環境運動、その他環境
運輸／通信	航空、船舶、自転車、鉄道、その他運輸、通信技術、通信サービス、放送サービス、その他運輸・通信（放送含む）
科学／技術／文化／芸術	新技術、宇宙、医療、発見・発明、その他科学・技術、音楽、映画、演劇、その他文化・芸術
歳時／気候	暦、祭・年中行事、気候（季節）、天気予報、その他歳事・天気
スポーツ	リオオリンピック競技、その他スポーツ
オープニング等	オープニング、クロージング等
芸能	グループの解散、芸能人の結婚等
その他	天皇関連等

上記のような分類コードに基づいて、リオ大会期間中の各局のニュース番組の報道内容の計測を行った。ニュースの本数の数え方は、従来の先行研究と同様、テロップや映像の転換を境とした。例えば NHK「NW9」の 8 月 8 日のニュースを参考に計測の方法を下記に示す。

表 3－7　NHK「NW9」の 8 月 8 日のニュース

局「番組」	番組内容	分類

NHK「NW9」	天皇陛下生前退位、北朝鮮自衛隊に破壊措置命令発令、スポーツ・オリンピック、NHK 世論調査「安倍内閣を支持するか」、各地の猛暑日、水難事故・銚子、気象情報、為替情報	その他、軍事（北朝鮮）、スポーツ、政治、歳事・気候、社会、歳事・気候、経済

この場合、ニュースの本数は 8 本で、ニュースの分類は上記の通りである。なお、リオ大会の後半になってくると、大会関連のニュースが複数回にわたり挿入されるようになる。テレ朝「報ステ」の 8 月 11 日のニュースを参考に計測の方法を示しておこう。

表 3－8　テレ朝「報ステ」8 月 11 日のニュース

局「番組」	番組内容	分類
テレ朝「報ステ」	スポーツ・オリンピック、尖閣沖で中国漁船沈没海保 6 人救助映像公開、3.11 から伝えたい花火が照らす思い出福島、熊本地震不明大学生か、山の日愛子さま地方で初の公式行事、NY 五番街が騒然壁を登る男、気象情報、スポーツ・オリンピック、スポーツ・高校野球、スポーツ・プロ野球	スポーツ、軍事（中国尖閣）、社会（3.11）、社会、歳事・気候、社会（アメリカ）、歳事・気候、スポーツ、スポーツ、スポーツ

この場合、ニュースの本数は 10 本で、分類は上記のとおりである。番組最後に放送されたスポーツのカウントについての基準は以下のとおりである。まず冒頭のオリンピックニュースを 1 つとカウントする。番組後半に、オリンピック、高校野球、プロ野球が続けて放送されている。これについて、オリンピックのニュースは一塊で 1 つ、高校野球、プロ野球については 1 ずつとカウントし、この日の分類「スポーツ」は計 4 本と集計した[100]。このように集計した結果が表 3－9 である。

表 3－9　各局ニュース番組の報道内容（ニュースの分野）

	政治	経済	社会	軍事	環境	運輸／通信	科学／技術／文化／芸術	歳事／気候	スポーツ	オープニング等	芸能	その他（象徴天皇ほか）	総計
NHK「NW9」	8	13	30	4	0	0	2	23	37	0	0	11	128
	6.3%	10.2%	23.4%	3.1%	0.0%	0.0%	1.6%	18.0%	28.9%	0.0%	0.0%	8.6%	100.0%
日テレ「ZERO」	3	1	37	5	0	0	4	11	31	0	4	4	100
	3.0%	1.0%	37.0%	5.0%	0.0%	0.0%	4.0%	11.0%	31.0%	0.0%	4.0%	4.0%	100.0%
テレ朝「報ステ」	10	3	29	8	0	0	2	16	29	0	0	2	99
	10.1%	3.0%	29.3%	8.1%	0.0%	0.0%	2.0%	16.2%	29.3%	0.0%	0.0%	2.0%	100.0%
TBS「N23」	9	4	42	9	0	0	0	14	32	0	0	3	113
	8.0%	3.5%	37.2%	8.0%	0.0%	0.0%	0.0%	12.4%	28.3%	0.0%	0.0%	2.7%	100.0%
フジ「ユア」	4	2	27	4	1	0	7	12	19	0	13	3	92
	4.3%	2.2%	29.3%	4.3%	1.1%	0.0%	7.6%	13.0%	20.7%	0.0%	14.1%	3.3%	100.0%
平均値	6.3%	4.0%	31.2%	5.7%	0.2%	0.0%	3.0%	14.1%	27.6%	0.0%	3.6%	4.1%	100.0%

[100] なお、中ら（2020）の分類コード「スポーツ」のなかで、競技ごとに細かにニュースの本数が数えられているかどうかは定かではない。本章ではニュース全体のバランスと、スポーツ報道の中でもオリンピックかそうでない競技かが重要であると考え、このような集計方法を採った。

総本数はNHKの128本が最も多く、次いでTBSの113本、日テレの100本、テレ朝の99本、そしてフジの92本と続く。ニュース番組は、その日に起きた各地域・国の事件や事故を多く報じることから、扱われる事件・事故が多くなるほど「社会」に分類されるニュースが増える。「社会」の総本数は計 165 本で、平均値が 31.2%と最も多かった。日テレやTBSは「社会」が37%を超え、テレ朝、フジも全ニュースの中で最も多いのは「社会」だった。「スポーツ」は計 148 本、平均値 27.6%と、「社会」の次に報道量が多い。NHKは「スポーツ」が28.9%とすべての項目の中で最も高く、テレ朝も「社会」と「スポーツ」が同率で1位である。一方でフジは「スポーツ」が 20.7%と他局に比べて低い数値を示している。

なお、台風シーズンであることから「歳事／気候」に関するニュースも76本と多く、平均値で14.1%と他の分野に比べて多く報じられていた。

では、「スポーツ」に占めるオリンピックの比重はどの程度だったのか。表3－5で示したトップニュースとの関連も合わせてみてみたい。表3－10がそれをまとめたものである。

表3－10　分類コード「スポーツ」の本数、オリンピックの本数、トップニュース割合の関係性

	分析日数（放送日数）	ニュース総本数	スポーツの本数	スポーツの割合	オリンピックの本数	オリンピックの割合	トップニュースの回数	トップニュースの割合
NHK「NW9」	10日	124	37	29.8%	22	59.5%	8回	80%
日テレ「ZERO」	7日	100	31	31%	19	61.3%	7回	100%
テレ朝「報ステ」	8日	99	29	29.3%	14	48.3%	5回	62.5%
TBS「N23」	7日（8日）	113	32	28.3%	18	56.3%	6回（7回）	85.7%（87.5%）
フジ「ユア」	6日（9日）	92	19	20.7%	6	31.6%	4回（7回）	66.6%（77.8%）

ニュース総本数に占める分類コード「スポーツ」の割合が最も高いのが日テレで 31%であり、それに占めるオリンピックの割合も61.3%と最高値である。「スポーツ」に占めるオリンピックの割合は、NHK「NW9」やTBS「N23」も 50%を超えており、最も低いフジ「ユア」でも 31.6%と 3 割を超えている。また、こうした各局のニュースにおけるスポーツの割合とトップニュースでオリンピックを扱うこととには相関がみられる。オリンピック開催期間中の「スポーツ」の注目度は、どの番組でもオリンピック競技が最も高く、連日オリンピックの話題が重視されていたことが明確にわかる。

では、スポーツニュースでは他にどんな競技が扱われていたのか。

図 3－1　各局の分類コード「スポーツ」の内訳（本数）

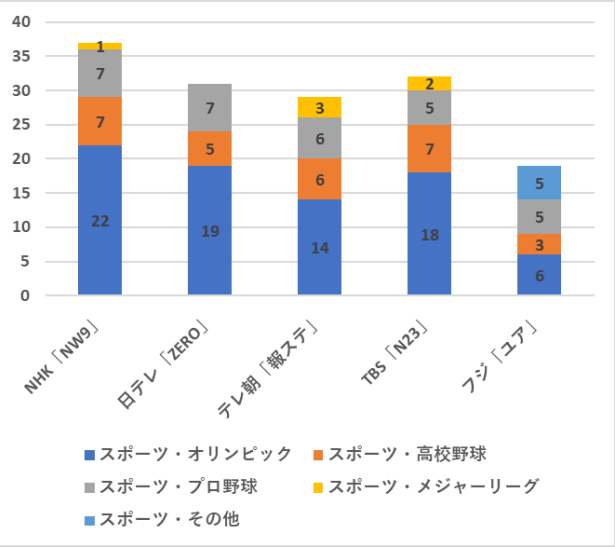


図 3－1 はスポーツニュース 148 本の各局の内訳である。5 局すべてでオリンピックが第 1 位の報道本数となっており、それ以外のスポーツのほとんどが野球（高校野球、プロ野球、メジャーリーグ）だった。フジ「ユア」は、オリンピック不参加の男子バスケットボールの様子やサッカープレミアリーグを報道するなどと、他局に比べ多様なスポーツを報じていた。

ニュース番組におけるリオ大会の報道の比重を実際の報道時間の計測によって明らかにしたのが上杉・東山（2022）である。これは NHK 放送文化研究所によるメタデータを用いた研究であり、ここでは本論文が対象としている 5 つの番組の総報道時間に占めるリオ大会の報道時間の比重を次のように計測している。NHK「NW9」48%、日テレ「ZERO」70%、テレ朝「報ステ」44%、TBS「N23」43%、フジ「ユア」54%[101]（上杉・東山 2022: 14-6）。これら 5 番組の平均は 51.8%であり、実にニュース報道の半分をリオ大会報道が占めているのである。

ではその実態とはどのようなものなのか。番組毎にリオ大会の報道時間を計測したものが表 3－11 である。

[101] なお上杉・東山はフジの番組を 2012 年、2016 年、2021 年で比較したグラフを掲載する際「Live News α」というタイトルでまとめているが、冒頭に 2016 年のフジの対象番組は「ユアタイム」であることが記載されている。また、2016 年当時まだ「Live News α」という番組は放送していないため、グラフタイトルの誤植であると思われる。

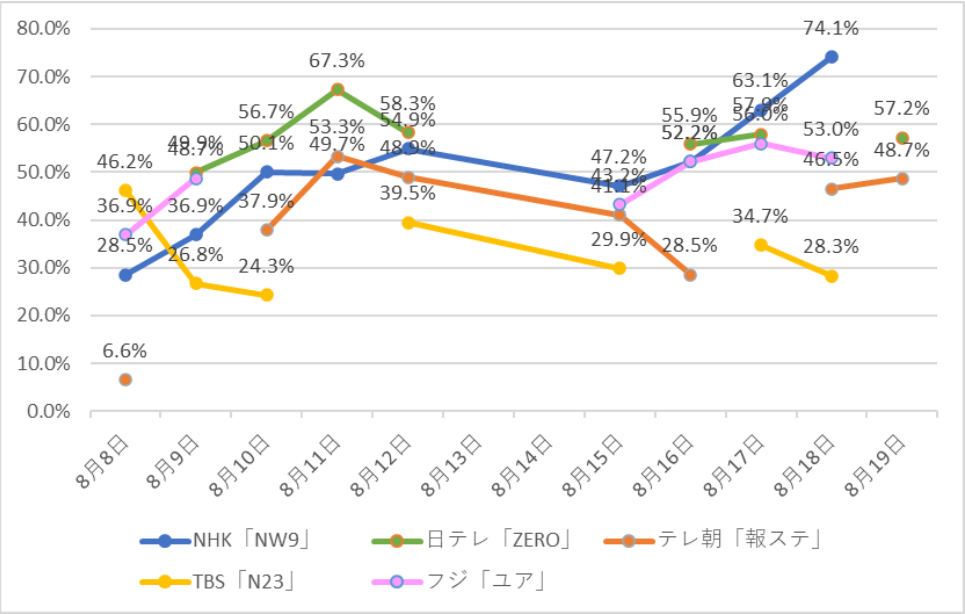
表 3－11　各ニュース番組に占めるリオ大会報道の比重

日付	局「番組」	番組の放送時間	オリンピックニュースの合計	オリンピックニュースが占める割合
8月8日	NHK「NW９」	1:00:03	0:17:08	28.5%
8月8日	日テレ「ZERO」	放送なし		
8月8日	テレ朝「報ステ」	1:16:03	0:05:01	6.6%
8月8日	TBS「N23」	1:20:03	0:36:57	46.2%
8月8日	フジ「ユア」	1:05:03	0:24:00	36.9%
8月9日	NHK「NW９」	1:00:03	0:22:10	36.9%
8月9日	日テレ「ZERO」	1:09:04	0:34:28	49.9%
8月9日	テレ朝「報ステ」	放送なし		
8月9日	TBS「N23」	1:20:03	0:21:25	26.8%
8月9日	フジ「ユア」	1:05:04	0:31:42	48.7%
8月10日	NHK「NW９」	1:00:03	0:30:04	50.1%
8月10日	日テレ「ZERO」	1:09:04	0:39:08	56.7%
8月10日	テレ朝「報ステ」	1:16:03	0:28:51	37.9%
8月10日	TBS「N23」	1:20:04	0:19:25	24.3%
8月10日	フジ「ユア」	録画ミス		
8月11日	NHK「NW９」	1:00:04	0:29:50	49.7%
8月11日	日テレ「ZERO」	1:09:04	0:46:28	67.3%
8月11日	テレ朝「報ステ」	1:16:03	0:40:33	53.3%
8月11日	TBS「N23」	放送なし		
8月11日	フジ「ユア」	録画ミス		
8月12日	NHK「NW９」	1:00:04	0:33:00	54.9%
8月12日	日テレ「ZERO」	1:10:03	0:40:51	58.3%
8月12日	テレ朝「報ステ」	1:16:04	0:37:14	48.9%
8月12日	TBS「N23」	0:55:05	0:21:46	39.5%
8月12日	フジ「ユア」	録画ミス		
8月15日	NHK「NW９」	1:00:03	0:28:20	47.2%
8月15日	日テレ「ZERO」	放送なし		
8月15日	テレ朝「報ステ」	1:16:02	0:31:15	41.1%
8月15日	TBS「N23」	1:20:04	0:23:55	29.9%
8月15日	フジ「ユア」	1:05:04	0:28:07	43.2%
8月16日	NHK「NW９」	1:00:03	0:31:21	52.2%
8月16日	日テレ「ZERO」	1:09:05	0:38:35	55.9%
8月16日	テレ朝「報ステ」	1:16:04	0:21:42	28.5%
8月16日	TBS「N23」	放送なし		
8月16日	フジ「ユア」	1:05:03	0:33:58	52.2%
8月17日	NHK「NW９」	1:00:04	0:37:54	63.1%
8月17日	日テレ「ZERO」	1:09:04	0:39:59	57.9%
8月17日	テレ朝「報ステ」	放送なし		
8月17日	TBS「N23」	1:20:04	0:27:48	34.7%
8月17日	フジ「ユア」	1:05:04	0:36:27	56.0%
8月18日	NHK「NW９」	1:00:04	0:44:30	74.1%
8月18日	日テレ「ZERO」	放送なし		
8月18日	テレ朝「報ステ」	1:16:04	0:35:24	46.5%
8月18日	TBS「N23」	1:20:03	0:22:39	28.3%
8月18日	フジ「ユア」	1:05:02	0:34:27	53.0%
8月19日	NHK「NW９」	再生不可	―	―
8月19日	日テレ「ZERO」	1:10:04	0:40:05	57.2%
8月19日	テレ朝「報ステ」	1:16:03	0:37:00	48.7%
8月19日	TBS「N23」	録画ミス	0:00:00	
8月19日	フジ「ユア」	放送なし	0:00:00	

オレンジ色で示したのは、ニュース番組のうち 50%以上をリオ大会報道が占めたもので

あり、計 16 番組（42%）[102]ある。続いて、各局の特徴を確認するため図 3－2 のグラフを見てみたい。

図 3－2　各局のオリンピック報道量の割合（%）



最も多くの時間をリオ大会報道に割いたのは 8 月 18 日放送の NHK「NW9」で、44 分 30 秒（74.1%）だった。トップニュースにオリンピックを据え、その後 44 分 30 秒もリオ大会を報じ続けた。NHK は日程が進むにつれて、ほぼ右肩上がりに報道量が増加していたことがわかる[103]。

日テレは、7 日間の放送日のうち初日を除いたすべてでリオ大会の報道量が 50%を超えた。8 月 11 日には NHK の 74.1%に次ぐ 67.3%（46 分 28 秒）もの時間をリオ大会報道に割いた。日テレ「ZERO」は、トップニュースでリオ大会を報じたのち番組の中盤で現地のメダリストの生中継をするなどと 1 つの番組の中で幾度もリオ大会報道の時間があり、全日程を通じてリオ大会報道を重視していたことが読み取れる。

一方で、リオ大会の報道時間が最も少なかったのが 8 月 8 日放送のテレ朝「報ステ」で 5 分 1 秒（6.6%）だった。この日のトップニュースは天皇陛下の生前退位で、これを重点的に報じたのち、「イチロー3000 本安打」を詳しく報じた。その後にリオ大会が報じられたが、大会の様子を淡々と伝えるものだった。50%を超えたのは 8 月 11 日の放送のみだった。同様に、TBS「N23」は 50%に到達する日は一度もなかった。

---

[102] 民放のニュースである日テレ「ZERO」、テレ朝「報ステ」、TBS「N23」、そしてフジ「ユア」は、CM を挟むことがある。オリンピックニュースとオリンピックニュースの間に CM がある。オリンピックニュースを一塊として捉えるために CM の放送時間を考慮せずそのまま一塊として計測した。オリンピックニュースを見たい視聴者は CM も見続ける、もしくはそのまま他のテレビ番組を見てもまたそのニュースに戻ることを想定した。

[103] 8 月 19 日放送の NHK「NW9」はディスク破損のため再生不可となってしまった。そのため、分数について再度検証することができなかった。

「スポーツ」の本数やリオ大会報道の本数が他局に比べて少なかったフジ「ユア」は、実際の報道時間を見てみると、8 月 16 日以降の報道では 50%を超えている。他局は、競技結果やメダリストの生出演、競技速報などを、他分野のニュースを挟みながら行ったが、フジ「ユア」の特徴は、リオ大会関連のニュースを一塊で一挙に見せるところだった。

以上のような多様性をもちつつも、リオ大会報道は、番組構成上の位置および報道量からみて大会期間中における各番組の最重要項目として位置づけられ、ニュース報道の中心を占めていたといえよう。

第２節　報じられた競技の実態

ニュース番組によるリオ大会報道は、一体何を伝えたのか。その報道内容とはどのようなものだったのか。

NHK 放送文化研究所によるメタデータを用いた研究では、日テレ「ZERO」、テレ朝「報ステ」、TBS「N23」という本論文が対象としている夜の 3 番組および NHK「ニュース７」、NHK「おはよう日本」の朝の 2 番組、計 5 番組、のべ 60 番組のリオ大会報道が、計 23 時間 27 分 40 秒に及んだこと、そしてその内訳が、①選手・競技 75%、②選手生出演 13%、③海外選手 4%、④開会式 1%、⑤政治・社会 1%、⑥その他 7%であったことを明らかにしている（上杉・東山 2022：12）。この 6 分類のうち、①～③は選手および競技に関する報道時間の比率であり、それが計 91%を占めているのである。

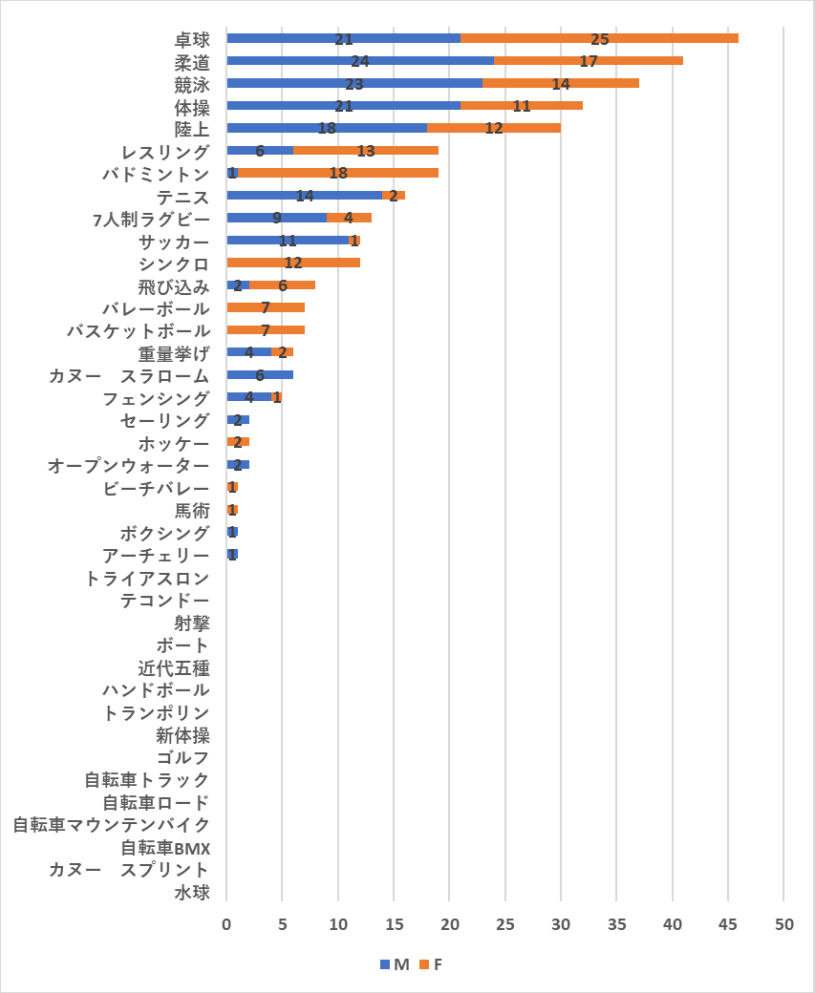
では、ニュース番組によるリオ大会の報道内容の大半を占めている選手および競技の内実とは一体どのようなものなのか。本節では、それらのうちの競技について検討を試みる。以下では、本論文が対象とする 5 つのニュース番組中の映像ないし音声で登場した競技を次のような方法によって計測し、報道量の偏りを明らかにする。ルールは以下の 3 点である。

① １つの番組でその競技が１度でも登場したら、報道件数１とカウントする
② １つの番組のなかで何度もその競技が登場しても、報道件数１とカウントする
③ ただし、男女別にその競技が登場した場合には、報道件数２とカウントする

なお、ここで対象としたのは、リオ大会関連のすべてのニュースである。つまり、競技結果以外で扱われたニュース[104]についても、その選手の出場競技が報道されていればカウントした。また、上記の計測方法によって、報道件数 1 は 1 番組で報道されたことを意味するもので、集計上の単位として番組を用いることにする。計測結果をまとめたものが図 3－3 である。

[104] 例えば、参加選手のプロポーズの話題などを指す。

図 3－3　番組内における競技の報道件数（N=326）



全 39 競技のうち、今回対象としたのべ 38 番組に登場したのは 24 競技（61.5%）である。生中継されたのが 39 競技中 26 競技（66.7%）であり、それより 2 競技少ないことになる。最も登場したのは卓球で、男子が 21 番組、女子が 25 番組だった。男子では柔道が 24 番組（63.2%）と最も多く報じられ、全体としては女子卓球の 25 番組（65.8%）が最多だった。卓球以下、柔道、競泳、体操、陸上と続く。このように競技によってニュースへの登場件数には大きな差がある。

こうした格差を生み出している要因として考えられるのは、日本選手の活躍の有無、注目度、競技日程の長短、実施種目数などであろう。たとえば最多登場の卓球は、12 日間という長い日程で行われ、シングルス男子、団体男女がメダルを獲得し決勝戦や 3 位決定戦まで日本選手の活躍が続いたことが大きいと考えられる。シングルス女子も福原愛選手が 3 位決定戦に進み、4 位という成績を収めている。また、競泳や陸上も競技日程が長く、さらに種目数が他の競技に比べて格段に多いという点も報道件数の差を生み出した要因であろう。他方、体操と柔道は、「日本のお家芸」としてメダルが期待される特別な地位にあること、また体操は団体、個人総合、種目別とあること、柔道は毎日男女 1 階級ごとに試合が行われ

たため、注目度が継続しやすかった点もあげられるだろう。レスリングについては、上位競技に比べて競技日程のスタートが遅かったにもかかわらず報道件数が多かった。これは 4 連覇がかかる選手が複数いたこと、初日の女子が 3 階級で金メダルを獲得したこと、結果として男女ともにメダリストを輩出したことで報道件数が他競技より多かったと推察される。

前章で掲載した中継競技と日本選手の参加競技との相関を示した表に上記の競技報道の実態を加えたものが下記の表である。

表 3－12　ニュースにおける競技報道の実態

競技（28）	39競技の中継放送事情	日本人の出場状況	メダル獲得状況	ニュースの報道実態（38番組）	ニュースの報道実態（日本選手の登場）
陸上競技	陸上	陸上	陸上	陸上	陸上
水泳	競泳	競泳	競泳	競泳	競泳
	飛び込み	飛び込み	飛び込み	飛び込み	飛び込み
	シンクロ	シンクロ	シンクロ	シンクロ	シンクロ
	水球	水球	水球	水球	水球
	オープンウォーター	オープンウォーター	オープンウォーター	オープンウォーター	オープンウォーター
アーチェリー	アーチェリー	アーチェリー	アーチェリー	アーチェリー	アーチェリー
バドミントン	バドミントン	バドミントン	バドミントン	バドミントン	バドミントン
バスケットボール	バスケットボール	バスケットボール	バスケットボール	バスケットボール	バスケットボール
ボクシング	ボクシング	ボクシング	ボクシング	ボクシング	ボクシング
カヌー	カヌー　スプリント	カヌー　スプリント	カヌー　スプリント	カヌー　スプリント	カヌー　スプリント
	カヌー　スラローム	カヌー　スラローム	カヌー　スラローム	カヌー　スラローム	カヌー　スラローム
自転車競技	自転車BMX	自転車BMX	自転車BMX	自転車BMX	自転車BMX
	自転車マウンテンバイク	自転車マウンテンバイク	自転車マウンテンバイク	自転車マウンテンバイク	自転車マウンテンバイク
	自転車ロード	自転車ロード	自転車ロード	自転車ロード	自転車ロード
	自転車トラック	自転車トラック	自転車トラック	自転車トラック	自転車トラック
馬術	馬術	馬術	馬術	馬術	馬術
フェンシング	フェンシング	フェンシング	フェンシング	フェンシング	フェンシング
サッカー	サッカー	サッカー	サッカー	サッカー	サッカー
ゴルフ	ゴルフ	ゴルフ	ゴルフ	ゴルフ	ゴルフ
体操	体操	体操	体操	体操	体操
	新体操	新体操	新体操	新体操	新体操
	トランポリン	トランポリン	トランポリン	トランポリン	トランポリン
ハンドボール	ハンドボール	ハンドボール	ハンドボール	ハンドボール	ハンドボール
ホッケー	ホッケー	ホッケー	ホッケー	ホッケー	ホッケー
柔道	柔道	柔道	柔道	柔道	柔道
近代五種	近代五種	近代五種	近代五種	近代五種	近代五種
ボート	ボート	ボート	ボート	ボート	ボート
ラグビーフットボール	7人制ラグビー	7人制ラグビー	7人制ラグビー	7人制ラグビー	7人制ラグビー
セーリング	セーリング	セーリング	セーリング	セーリング	セーリング
射撃	射撃	射撃	射撃	射撃	射撃
卓球	卓球	卓球	卓球	卓球	卓球
テコンドー	テコンドー	テコンドー	テコンドー	テコンドー	テコンドー
テニス	テニス	テニス	テニス	テニス	テニス
トライアスロン	トライアスロン	トライアスロン	トライアスロン	トライアスロン	トライアスロン
バレーボール	ビーチバレー	ビーチバレー	ビーチバレー	ビーチバレー	ビーチバレー
	バレーボール	バレーボール	バレーボール	バレーボール	バレーボール
ウェイトリフティング	重量挙げ	重量挙げ	重量挙げ	重量挙げ	重量挙げ
レスリング	レスリング	レスリング	レスリング	レスリング	レスリング

表 3－12 は、左から、39 競技の中継放送事情（緑で実際の放送があったことを示す）、日本人の出場状況（着色で日本選手が登場したことを示す）、メダル獲得状況（黄色で日本選手のメダル獲得を示す）、ニュースの報道実態（着色で 38 番組の中で登場したことを示す）、ニュースの報道実態（着色で日本選手が登場したことを示す）を表している。緑と黄以外の色分けの理由は、うす紫が男女とも出場、青が男性選手のみ出場、オレンジが女性選手のみ出場を示している。

生中継がなされた 26 競技のうちニュース番組に登場したものは 19 競技にとどまってい

る[105]。たとえば水球は、6 日から予選が始まり、19、20 日の決勝まで[106]の長い試合期間と日本人チームの出場があったがニュース番組での報道はなかった。

また、日本選手の参加から見ると、36 競技中、24 競技（66.7%）がニュースに登場し、実際の日本選手の出場状況とほとんど重なっていることがわかる。さらに、メダルの獲得状況とニュースの報道実態（日本選手の登場）についてみてみると、メダルを獲得した 11 競技のすべてがニュースに登場している。つまり日本選手がメダルを獲得した競技は必ず報じられているのである。

なお、日本選手が登場せずに報道された競技は、セーリング（男子）と馬術（女子）、ボクシング（男子）、ビーチバレー（女子）、サッカー（女子）だった。セーリングは外国人選手の金メダル獲得について扱い、ビーチバレーとサッカーは開催地ブラジル代表（女子）の結果を伝えるものだった。また、馬術（女子）は今大会にいくつか見られたプロポーズを報じるもので、ボクシングは、ボクシング界の英雄であるモハメド・アリと同姓同名の選手について報じたもので、競技結果に関するものではなかった。

以上のような報道実態が示しているのは、競技に関する報道を規定している最大の要因が日本人メダリストの存在の有無であるということだ。図 3－3 の上位 8 つの競技には、日本人メダリストが 1 人以上いる。また実際に報じられた 24 競技のうち 11 競技は日本人メダリストのいる競技であり、日本人がメダルを獲得した競技すべてがニュースのなかでカバーされている。前章で日本のテレビ局による中継競技の編成について検討し、その中心に据えられているのが日本選手のメダル獲得の可能性が高い卓球、競泳、柔道、体操の 4 競技であることを明らかにしたが、これがニュース番組で報道件数が多かった競技の上位と見事に一致しているのである。

第３節　報じられた選手の実態

前節で検討した競技とともに、ニュース番組によるリオ大会の報道内容の大半を占めているのが選手である。本節では、ニュース番組で報道された競技関係者すべてを取り上げるとともに選手報道の内実に迫ってみることにしたい。

１．競技関係者の全貌

ニュース番組が報道した競技関係者は、選手だけではない。監督やコーチなど選手以外の人物もいる。ここでは、これら競技関係者の全貌を把握する。カウントするのは、番組中にナレーションで読み上げられたり、テロップに掲載され、テレビ画面上で名前の確認ができたすべての人物である[107]。その際、選手個人の名前ではなく、競技名や国名だけが呼ばれた

---

105 新体操に関しては、分析対象に含まれていない 8 月 22 日の番組で登場した可能性がある。

106 決勝ならびに、8 位までの順位決定戦が行われた。

107 テレビ画面には登場していても、ニュースのなかで名前が読み上げられたりテロップで説明や名前の表示がない場合はカウントしない。例えば対戦競技であるレスリングや柔道ではその対戦相手への言及がない場合カウントができない、競泳であれば 8 コースすべてで選手が泳いでいても、言及されない、テロップで表示されない選手についてはカウントができない、となる。

り、掲載されたりしたケースについては区別して集計する。抽出および分類方法は以下のとおりである[108]。

① 番組のなかで１度でも個人名を呼ばれた人物、１度でも名前が確認できた人物をすべて抽出する[109]。
② １つの番組のなかで同じ人物が複数回個人名を呼ばれた場合は、１件とカウントする。これによってその人物がいくつの番組で報道されたかが判断できる。
③ 個人名が呼ばれた選手と監督は、それぞれを〈選手〉と〈監督・コーチ〉[110]としてカウントし集計する。
④ 個人名が呼ばれず、国籍ないし競技名のみが呼ばれた人物およびチームについては、〈国〉ないし〈競技〉としてカウントし集計する[111]。
⑤ 競技結果と関係のないニュースに〈選手〉が登場した場合[112]や〈選手〉や〈監督・コーチ〉以外の人物が登場した場合[113]は、〈その他〉としてカウントし集計する。

以上のような方法で抽出、集計した結果、総数は 1,180 件となった。それを上記の５つのカテゴリー別に集計したものが図 3－4 である。

---

[108] 今回、リオ大会を伝えるニュースの中で、治安に関するものや IOC 理事にチケットの不正転売容疑がかかったこと、リオパラリンピックのロシア全選手排除を決定など競技報道とは異なる報道がいくつか見られた。これは直接的に選手と関係する出来事ではないとみなし、データとしてカウントしなかった。また、選手の活躍について解説する元オリンピアンらが画面に登場するが、これについてもデータとしてカウントしなかった。

[109] 例えば柔道や卓球などの対戦競技では、対戦相手の名前が呼ばれたり説明があったり、テロップに出ることがある。この場合、名前が確認できる限りはすべてカウントすることとした。他に、日本選手の入賞者がいた場合、その種目のメダリストらがテロップで掲載されることがあるが、これについても名前の確認できる限りカウントすることとした。

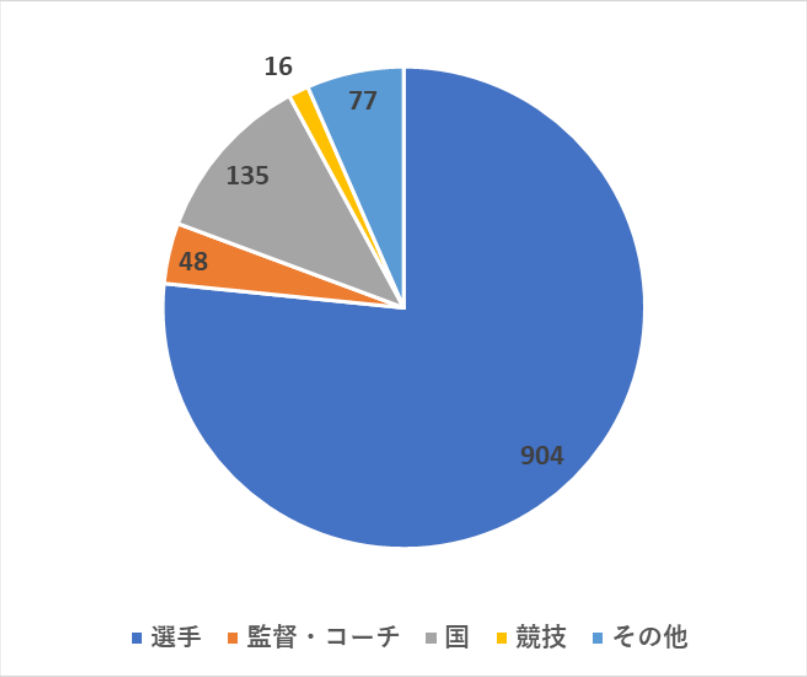
[110] ここでの〈〉は、本論文による固有の概念規定をした用語であることを示すために用いた。

[111] 例えば、開催国であるブラジルの競技結果を伝えるニュースや、日本の対戦国として扱われた場合（例えばシンクロなど点数を争う際にライバル国として国名が上がることがある）を、〈国〉としてカウントする。ホッケーや 7 人制ラグビー、バスケットボール、バレーボールといった競技は個人名が上がらず競技名のみがニュースとなることが多い。この場合〈競技〉としてカウントする。

[112] 8 月 10 日テレ朝「報ステ」は他国のハプニングとしてオランダの体操男子種目別吊り輪予選 7 位のユーリ・ファン・ヘルダー選手の帰国処分を伝えた。今大会では表彰式での「プロポーズ」が話題となった。8 月 15 日放送テレ朝「報ステ」が飛び込みの中国選手のプロポーズを、16 日放送フジ「ユア」は、7 人制女子ラグビーに出場していた LGBT のブラジル代表選手への公開プロポーズを、18 日放送テレ朝「報ステ」は、三段跳び、馬術でプロポーズがあったことを「プロポーズラッシュ」として報じた。また、「ドーピング」は 8 月 19 日放送のテレ朝「報ステ」が、ウェイトリフティング男子 69kg 級銅メダルのイザット・アルティコフ（キルギス）のドーピングを報じた。このドーピングはリオ大会初のドーピング案件であった。また、「治安」にまつわり選手が登場したのは以下のニュースである。8 月 15 日放送テレ朝「報ステ」は、アメリカの競泳・ロクテ選手が強盗に遭遇したことを報道。19 日の放送で証言が嘘だったことが判明した。NHK「NW9」も、8 月 17 日に窃盗事件の多発や流れ弾が相次ぐことに加えて柔道 73 キロ級銅メダルのベルギー選手が海岸で携帯電話を奪われ追いかけたところ殴られた事件を報じた。ここに示した通り競技結果でないものを指す。

[113] メダルを獲得した現在の日本代表に、コメントしたり解説している人物、具体的には過去のコーチや過去のメダリスト、各競技の協会関係者、帯同している医師、競技解説者など、今大会の〈選手〉や〈監督〉ではない立場の人物で競技について話すために登場した場合を〈その他〉としてカウントした。

図 3－4　報道された競技関係者の構成（N=1180）



ニュース番組によって報道された〈選手〉は、計904件で報道された全競技関係者の76.6%と圧倒的な比重を占めている。詳細については後で取り上げるが、報道内容のほとんどの部分が、選手らの競技結果を伝えるものであり、例えば「福原選手」や「内村選手」といった個人名をともなう選手たちの報道なのである。

〈監督・コーチ〉は48件（4.1%）である。画面の中に登場した監督・コーチは、選手との関係性やチーム競技の競技結果について代表してコメントする様子などが報じられた[114]。

〈競技〉は、16件（1.4%）である。具体的な競技名は、男女7人制ラグビーや女子ホッケー、女子バスケットボール、女子バレーボール、シンクロナイズドスイミングなどである。すべて団体競技であり、それゆえ個人名ではなく競技名が用いられたとみていいだろう。女子ホッケーは「さくらジャパン」、女子7人制ラグビーは「サクラセブンズ」といった愛称でも紹介された。競技結果を伝える際に選手に個別にフォーカスする必要がなかった際に競技名が中心となって報じられたとみられるが、この割合は 1.4%とごくわずかであった。

〈国〉は135件（11.4%）あった。例えば、リオ大会で初めて採用された7人制ラグビー（男子）で国として初めてとなる金メダルを獲得したフィジーや、サッカー王国と呼ばれるブラジル初の男子サッカー金メダル獲得、同じく今大会の名所ともいえるコパカバーナビ

114 その中でも登場件数が多かったのは、シンクロナイズドスイミングの井村雅代ヘッドコーチと男子柔道の井上康生監督である。その他には、男子サッカーの手倉森誠監督、女子レスリングの栄勝人強化本部長、女子バドミントンのパク・ジュボン監督らである。「選手と監督・コーチ」の人間関係を描く物語として他にも多くの「監督・コーチ」たちが登場していたが、井村、井上らに関しては、今大会のメダル獲得種目でもある「競技の発展に寄与した監督」として「監督」自体に焦点が当てられた点が特徴的であったといえる。この点については次章で検討する。

ーチで深夜に行われたブラジルとドイツとのビーチバレー（女子）の決勝戦を伝えるニュースなどである。ブラジルへの注目は、ブラジルが開催国であったことが関係していると思われる。また、サッカーや体操男子団体、シンクロナイズドスイミング、陸上や競泳におけるリレー種目のように、単位が国である種目を報じる際、ライバル国や入賞国が登場することが多かった。このほかに、日本選手・チームの対戦国として国名を紹介することが散見された。

〈その他〉の 77 件（6.5%）は、主に競技結果ではないことで選手がニュースになった例である。プロポーズラッシュとして、中国人カップルの女子板飛び込み何姿選手（銀・中国）と男子シンクロ板飛び込み秦凱選手（銅・中国）や陸上三段飛びウィル・クレイ選手（銀・アメリカ）、馬場馬術個人決勝 C・ドュジャルダン選手（イギリス）が、また、7 人制ラグビー女子イザドラ・セルーロ選手（ブラジル）は LGBT であることも同時に取り上げられた。他には、選手が巻き込まれた事件として競泳のライアン・ロクテ選手（金・アメリカ）の狂言事件やビーチで負傷した柔道・ファンティフェルト（銅・ベルギー）などが挙げられる。また、〈その他〉には競技の解説者らも含まれている。サッカーやレスリング、ラグビー、バドミントン、体操と、各局が競技の活躍に応じて解説者らを用意し、選手のどこが凄かったのか、その裏側を伝えようとしたのである。

2．報道件数が多い〈選手〉の実態

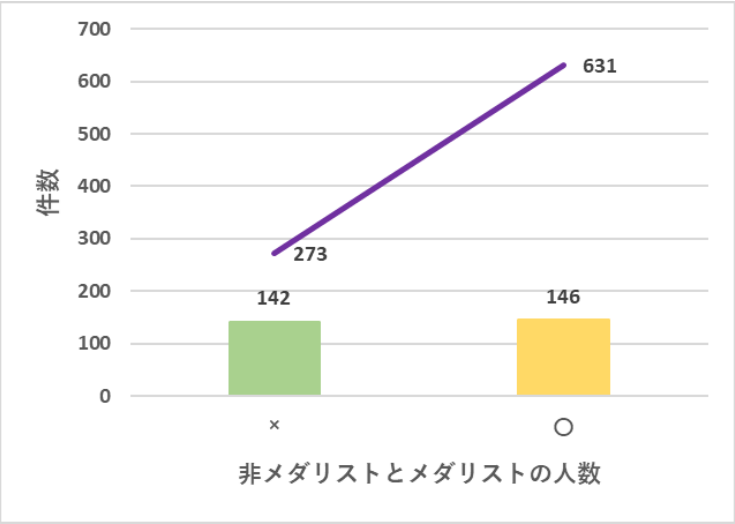
先にみたように、ニュース番組によるリオ大会報道では、選手の競技結果が圧倒的な比重を占めており、個人名が登場した〈選手〉は全体の 76.6%に及んでいる。とはいえ、〈国〉の比重も 11.4%と無視できない存在となっていることから、ここでは〈選手〉を主たる分析対象としながら、外国人選手の報道の検討の際には〈国〉にも焦点を当てて分析を行なうこととする。

リオ大会に参加した選手は 207 の国と地域から計 11,238 人である。この内、78 の国と地域の選手が計 974 個（金 307、銀 307、銅 360）のメダルを獲得した[115]。本章で分析対象としているニュース番組の中で個人名が登場した〈選手〉はこれまで述べてきたようにのべ 904 件だが、実際の人数は計 288 人で、そのうちメダリストは 146 人（50.7%）と半数以上を占めている。この数値のみを見ると、ニュース番組はメダリストも非メダリストも平等に扱っているように見える。そこで、ニュースに取り上げられた件数と、選手の登場数の相関を見てみたい。

図 3－5　選手の登場数（棒グラフ）と取り上げられた件数（左軸）の相

[115]朝日新聞デジタル「リオオリンピック国別メダルランキング」による。掲載内容は、リオデジャネイロオリンピック大会組織委員会が、ワールド・ニューズ・プレス・エージェンシー（WNPA）の規定に基づいて配信した情報を利用しているとのことで、新聞報道の表記と一部異なる場合があるとの記載がある。（2022 年 12 月 30 日取得, http://www.asahi.com/olympics/2016/results/medal/）

関図



ニュースに取り上げられた件数に着目すると、メダリストが 631 回（69.8%）に対して非メダリストは 273 回（30.2%）とその差は 2 倍以上ある。メダリストの報道が非メダリストよりも明らかに多いことがわかる。人数で見るとあまり差がないのは、日本選手と対戦しメダルを獲得できなかった外国人選手が多く報道されたことによると考えられる。

なお、第 1 節で述べたように、分析対象とした番組がリオ大会の全日程をカバーしていないため、日本人メダリストの報道が欠落している可能性がある。この点を確認しておきたい。実際の日本選手のメダリストを示したのが表 3－13 である。

表 3－13　日本選手のメダリスト（性別）

性別	メダル								計
	金・金	金・銀・銅	金・銅	銀・銅	銅・銅	金	銀	銅	
女	0	0	0	0	2	8	1	19	30
男	1	1	1	1	0	5	10	14	33
計	1	1	1	1	2	13	11	33	63

金・金は体操の内村航平選手、金・銀・銅は競泳の萩野公介選手、金・銅は体操の白井健三選手、銀・銅が水谷隼選手、銅・銅が三井梨紗子選手と乾友紀子である。つまり合計 63 名（チーム競技の人数もすべてカウントした場合）の日本人メダリストがいる。選手たちがメダルを獲得した日付と、本章が対象とした番組の放送日を照らし合わせてみると、下記のようになる。

表 3－14　リオ大会の日本選手のメダル獲得日とニュース番組放送日

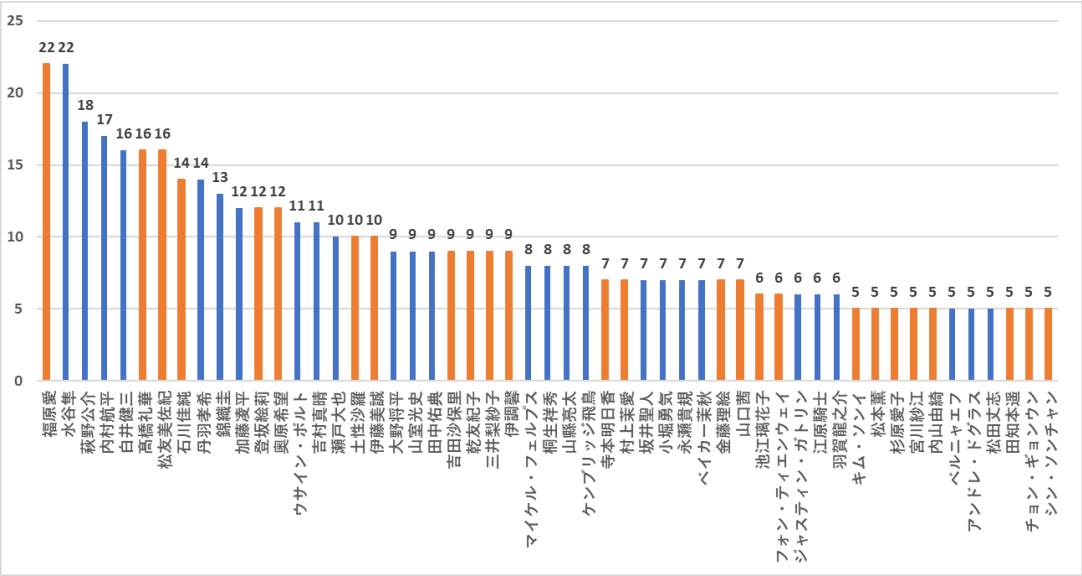
日付（現地）	日付（日本）	獲得メダル				ニュース番組放送日
		金	銀	銅	計	
8 月 6 日（土）	8 月 7 日（日）	1		4	5	
8 月 7 日（日）	8 月 8 日（月）			2	2	○
8 月 8 日（月）	8 月 9 日（火）	2		2	4	○
8 月 9 日（火）	8 月 10 日（水）		1	2	3	○
8 月 10 日（水）	8 月 11 日（木）	3		1	4	○
8 月 11 日（木）	8 月 12 日（金）	1	1	2	4	○
8 月 12 日（金）	8 月 13 日（土）		1	1	2	
8 月 13 日（土）	8 月 14 日（日）				0	
8 月 14 日（日）	8 月 15 日（月）		1	1	2	○
8 月 15 日（月）	8 月 16 日（火）			1	1	○
8 月 16 日（火）	8 月 17 日（水）			2	2	○
8 月 17 日（水）	8 月 18 日（木）	3	1		4	○
8 月 18 日（木）	8 月 19 日（金）	2	1		3	○
8 月 19 日（金）	8 月 20 日（土）		2	3	5	
8 月 20 日（土）	8 月 21 日（日）				0	
8 月 21 日（日）	8 月 22 日（月）				0	（○）

（注：8 月 21 日は、番組が放送されたが録画データがない。）

これらを照らしあわせて検証してみた結果、本章が対象とした番組で報道されていない日本人メダリストは 2 名で、柔道の銅メダリストである 48 キロ級近藤亜美選手と 78 キロ超級の山部佳苗選手であることが判明した。また、チームとして計測は行ったものの個人名が登場しなかったのがシンクロナイズドスイミング・チーム種目に出場した 7 名であることもわかった。また、それ以外のメダリストについては、全員がメダル獲得のシーンとともに報道されたわけではなく、競技の進行状況や今後の注目競技といった報道の中で登場したケースもあるものの、すべて個人名とともに報道がなされている。

では、どの選手が多く報道されたのか。これら 288 人の選手のうちニュース番組で 5 回以上報道された選手 53 人を件数が多い順にまとめたのが図 3－6 である。これによって選手報道の内実をそれぞれの競技に着目しながらより具体的に見ていきたい。

図 3－6　ニュース番組に 5 回以上登場した選手（件数）



オレンジ色が女性選手、青色が男性選手を示している。これら 53 人の選手の報道件数はのべ 492 件、全体の 54.4%を占めている。つまり計 288 人の選手のうちの 2 割弱の選手の報道件数が全体の約 5 割以上を占めているのである。報道が特定の選手に集中していること、さらに 5 局のニュース番組で取り上げた選手がかなり重複していることを意味している。この点の検討は後に行うことにして、まずは報道件数が多い選手とは誰なのか、上位 15 番目（報道件数 11 回）までを中心にして、具体的にみておこう。

最も報道件数が多かった選手は卓球の福原愛選手と水谷隼選手で 22 件である。福原選手はシングルスで 3 位決定戦まで進み 4 位入賞、水谷選手はシングルスで銅メダルを獲得している。さらに両選手は団体戦にも出場し、女子団体で銅メダル、男子団体で銀メダルを獲得した。卓球に出場した他の選手たちも石川佳純選手が 14、丹羽孝希選手 14、吉村真晴選手 11、伊藤美誠選手 10 と報道件数が多い。これらの結果、全競技の中で卓球の報道が最も多くなっているのである（前掲図 3－3）。

2 番目に報道件数が多いのが競泳の萩野公介選手で 18 である。萩野選手は、個人で金メダル、銀メダル、そして 800m自由形リレーでは 56 年ぶりとなる銅メダルを獲得し、日本選手として最多の 3 個のメダルを獲得した。競泳では萩野選手の次に個人で銅メダルを獲得した瀬戸大也選手が 10、マイケル・フェルプス選手（アメリカ）が 8、銀メダルの坂井聖人選手、女子 200m平泳ぎで金メダルを獲得した金藤理絵選手、800m自由形リレーの小堀勇気選手が 7 である。池江璃花子選手は個人成績最高 5 位ながらも 6 件であるが、これは出場種目最多かつ度々の日本記録更新が話題となったことによると考えられる。800m 自由形リレーの江原騎士選手が 6、松田丈志選手が 5 と続く。これらの結果、競泳が卓球、柔道に次ぐ報道件数となっているのである（前掲図 3－3）。

3 番目、4 番目に報道件数が多いのが内村航平選手の 17、白井健三選手の 16 である。体操男子団体金メダル、内村選手は個人総合で金メダル、白井選手は種目別ゆかで銅メダルを

獲得した。

同じく 4 番目に報道件数が多いのが女子バドミントンのダブルスで金メダルを獲得したタカマツペアの 2 人で、松友美佐紀選手、高橋礼華選手が 16 件である。女子バドミントンでは、その他にシングルスで銅メダルを獲得した奥原希望選手が 12 件、奥原選手と競った山口茜選手が 7 件である。

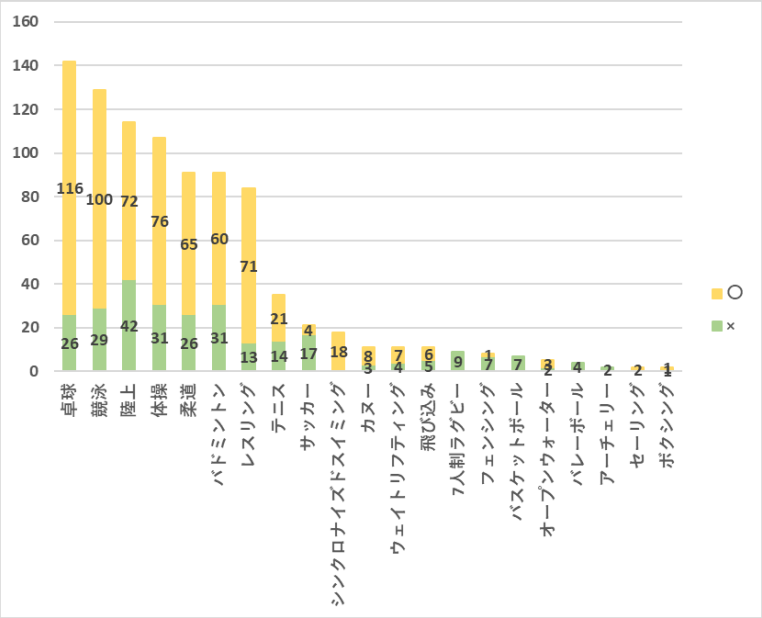
上記の卓球、競泳、体操、バドミントンの選手によって、図 3－6 の上位 7 番目までが占められている。なお、外国人選手も数名ランクインしている。金メダルを獲得したウサイン・ボルト選手（ジャマイカ）は外国人選手で最も多い 11、個人総合で銀メダル、種目別平行棒でウクライナ初の金メダルを獲得したオレグ・ベルニャエフ選手（ウクライナ）も報道件数が 5 である。

以下では、こののべ 904 件、288 人に及ぶ選手たちの報道の実態について、①競技、メダル獲得の有無、②ジェンダー、③外国人選手という観点から検討していきたい。

1）競技、メダルとの相関

先にみたように 288 人中 146 人（50.7%）がメダリストであり、非メダリストも 142 人（49.3%）いるが、報道件数についてみるとメダリストの方が 2 倍以上ある（前掲図 3－5）。報道された全選手 288 人ののべ報道件数 904 について、競技別×メダル獲得の有無に区分して示したのが図 3－7 である。

図 3－7　競技別の報道件数とメダル獲得状況の相関図（N=904）



図内の黄色（記号○）はメダリスト、緑色（記号×）は非メダリストを表している。報道数の競技別の偏差とメダル獲得との相関関係が明確に示されている。上位を占める競技の

中で、圧倒的にメダリストが多く報じられていることがわかる。

卓球は、メダルを獲得しなかった選手については計 26 回しか報道がなく、81.7%の報道がメダリスト（メダルを獲得するまでの経緯も含む）を扱ったものである。これは日本人の卓球選手が男女ともに団体戦でメダルを獲得したことやライバル国の中国やドイツといった国の選手がメダリストとなったことも関係している。シンクロナイズドスイミングは報道されたすべてがメダリストである。これはデュエットとチームともにメダルを獲得した日本選手のみが注目されたからである。レスリングが次にメダリストの割合が多く、84.5%を占めている。競泳や陸上、体操、柔道、バドミントンもメダリストの報道が 63.2～77.5%と多い。

この関係性が逆転するのがサッカーである。サッカーは非メダリストの割合が 81.0%と 8 割を超えている。日本は予選リーグを突破できず決勝トーナメントへの進出もならなかったが、まず日本におけるサッカー人気の高さから、開幕以降予選リーグ突破、さらにはメダルを期待する報道が続いたことが影響していると考えられる。また、ネイマール率いる開催国兼サッカー大国・ブラジルの金メダルが話題となったことも一因であろう。

そのほか、7 人制ラグビーやフェンシング、バスケットボール、バレーボール、アーチェリーでも、報道件数において非メダリストがメダリストを上回っている。なぜだろうか。選手の成績（メダルの有無）以外の何かの要因があったはずである。実はこれらは、フェンシングを除いてすべて日本選手が入賞を果たした競技である。つまりメダル獲得に至らなかった 4～8 位入賞者もオリンピックにおける競技結果として報じているのである。また、次大会に向けた注目選手という観点からも報道されている面もあると思われる。なおフェンシングは前回ロンドン大会でメダリストとなった太田雄輝選手の初戦敗退が話題となった。とはいえ、この 5 競技の報道件数は計 39 件、全体の 4.3%にすぎない（図 3－7）。

競技中継については、番組編成段階で特定の競技が偏重されていることを前章で明らかにしたが、それがニュース番組の報道においてより鮮明化しており、偏重傾向がさらに強化されていることが見てとれる。また、このことは各局が事前にメダル獲得の可能性が高い、つまり視聴者の関心度が高いと予測して中継のための放送枠を設けた競技・種目が、まさにそのとおりの結果であったということを意味している。

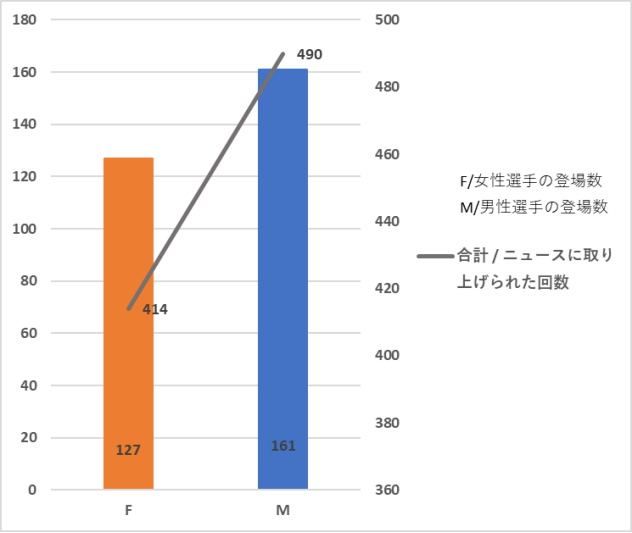
2）ジェンダーとの相関

次に、報道された選手たちをジェンダーの視点から分析する。

第 2 章でみたように、日本選手が獲得したメダルの 56.1%が男性選手によるものであるが、金メダルだけでみるとその 58.3%を女性選手が獲得している。こうした実際のジェンダー別のメダル獲得状況と上記の報道実態とのあいだにはギャップがあるのだろうか。

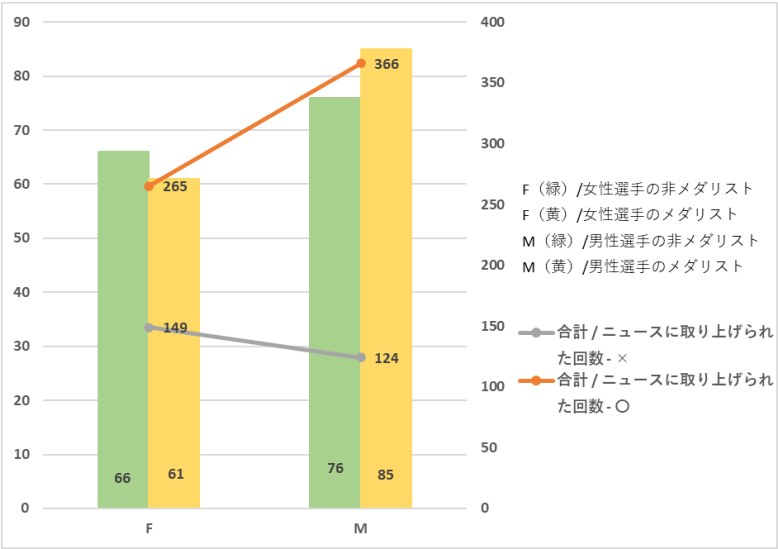
まずは、報道された選手 288 人の内訳と、報道件数の内訳について、ジェンダーの視点から見ていきたい。

図 3−8　ジェンダーごとの選手の登場数(左軸)、ニュースの件数(右軸)



報道された選手 288 人のうち男性は 161 人（55.9%）、女性は 127 人（44.1%）と男性の方が 11.8 ポイント高い。そして、報道された件数は、男性が 490 件（54.2%）、女性が 414 件（45.8%）であり、男性の方が 8.4 ポイント高い。さらにここにメダルの有無を加味してみたのが図 3−9 である。

図 3−9　ジェンダーとメダルの相関（選手数：左軸、ニュース件数：右軸）



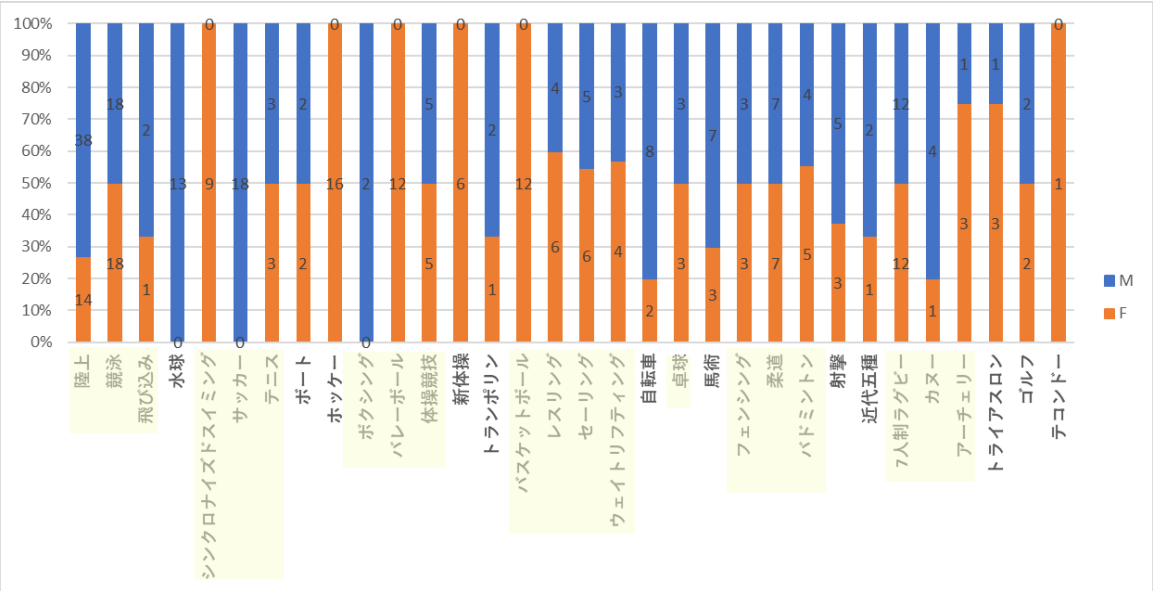
折れ線グラフが報道件数を示しており、オレンジがメダリスト、灰色が非メダリストであ

る。このグラフから、男女ともメダリストの方が非メダリストよりも報道件数が多いという結果となった。女性選手は 1.78 倍、男性選手は 2.95 倍メダリストの報道件数が多かった。

次に、黄色と緑色で示した棒グラフをみてみよう。黄色がメダリストで、緑色が非メダリストの登場人数を表す。意外にも、男性選手はメダリストの方が多いが、女性選手は非メダリストが多い。女性選手のメダリストと非メダリストの差は 5 人とわずかではあるが、ここまでメダリストの優位性が示されてきたことから、非メダリストが多いことは驚きの結果である。特に男性選手の場合は、メダリストの報道が全 490 件のうち 366 件（74.7%）と 7 割を超えている。一方、女性選手では、全 414 件のうちメダリストの報道が 265 件（64.0%）であり、男性選手よりも 10.7 ポイント低い。つまり男性選手の方が、よりメダリストに偏重した報道になっているのである。女性選手の場合は、メダル獲得という結果以外の理由で報道される可能性が示唆されている。

次に、競技にジェンダー差が存在するのかどうか、男女の比率を確認したのが図 3－10 と、図 3－11 である。図 3－10 は、実際に日本選手が出場した競技ごとの男女比を示しており[116]、図 3－11 は実際に報道された選手数とその比率を表している[117]。

図 3－10　各競技に参加した日本選手の男女比（記載の数字は人数）



（日本オリンピック委員会ホームページ「日本代表選手団」より作成[118]）

---

116 日本オリンピック委員会，2023，「日本代表選手団　編成数」（2022 年 12 月 30 日取得，https://www.joc.or.jp/sp/games/olympic/riodejaneiro/japan/）.

117 報道された選手の人数が多い競技を左から順に並べている（グラフ内の数字は選手数）。

118 競技順序は公益財団法人日本オリンピック委員会の公式 HP を参照した。そのためオープンウォーターは、図 10 では競泳に組み込まれているので若干の差異がある。

図 3－11　番組に登場した選手の男女比（記載の数字は人数）

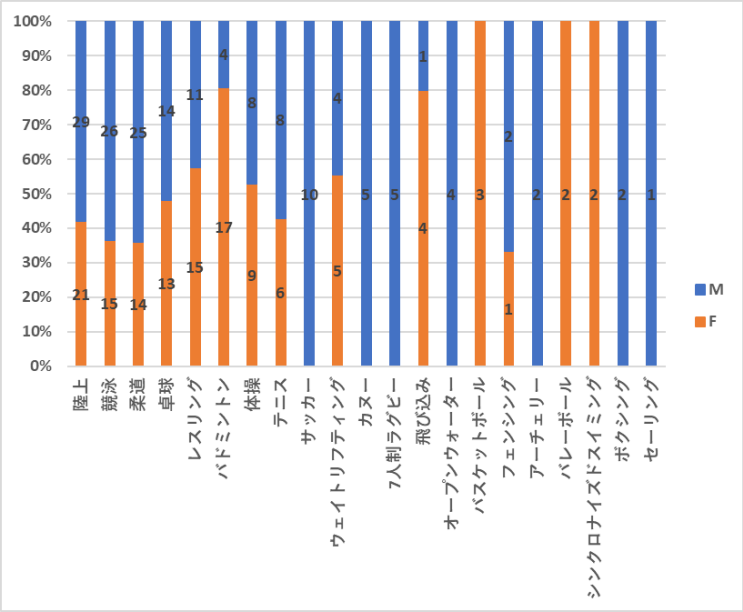


図 3－10 内の薄い黄色で印のある競技が、図 3－11 と対応している。陸上、競泳、飛び込み、カヌーは日本人男性選手が多く、サッカー、ボクシングは日本人男性選手しか出場がない。一方日本人女性選手が多いのはレスリング、セーリング、ウェイトリフティング、バドミントン、アーチェリー、日本人女性選手のみ出場しているのがシンクロナイズドスイミング、バレーボール、バスケットボールである。男女同比率なのが、テニス、体操、卓球、フェンシングである。

実際の報道に基づいた図 3－11 を見てみると、男性選手の方が多いのが陸上、競泳、柔道、卓球、テニスの 6 競技であり、サッカー、カヌー、7 人制ラグビー、オープンウォーター、アーチェリー、ボクシング、セーリングの 7 競技は男性のみが報じられている。この中で、実際に日本人女性選手の出場がなかったのはサッカーのみであるが、報道された選手の男女比は、こうした日本の参加選手の男女比を反映したものではないことが読み取れる。

これまでの検討では、報道がとくにメダリストに偏重しているという傾向が顕著にみられたが、例えば柔道、卓球、テニスは男女同じ人数が参加していたが、男性メダリスト率が 100%である柔道をはじめ、卓球もテニスも男性メダリストが誕生している。日本人と対戦した外国人選手も必然的に報道されることから、男女比に若干の差が生まれたと考えられる。

なお、男子サッカーは、決勝トーナメントに進出できなかったにもかかわらず報道された。これは前述の通り日本におけるサッカー人気の高さに加えて、前回の 2012 年ロンドン大会で男子代表チームが 4 位で惜しくもメダルを逃したことから、巻き返しの期待がかかったこと、女子サッカーが今回出場権を得られなかったことなども関係しているだろう。

一方、バドミントンや飛び込みでは、女性選手の出場実態の比率が男性より低いが、実際の報道量では女性選手が上回っている。バドミントンは、女性選手のダブルス、シングルスでのメダル獲得という活躍が報道に反映されたのだと考えられる。飛び込みは、板橋美波選

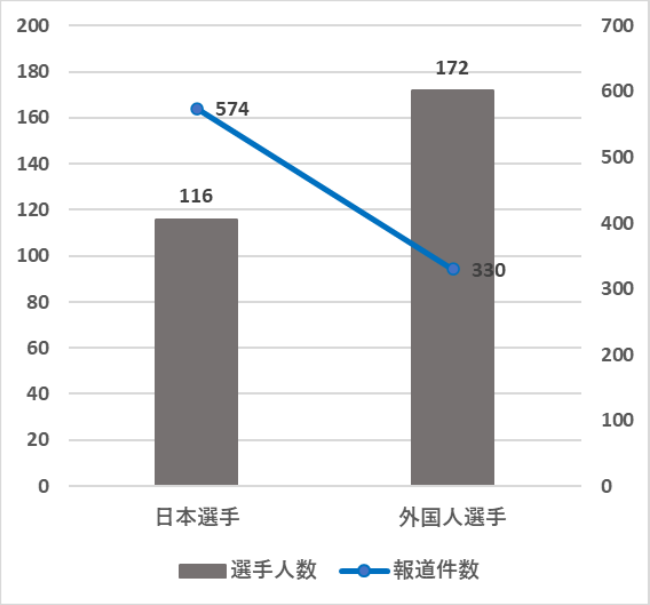
手の日本人女性選手 80 年ぶりの入賞が話題となった。その関連で上位メダリストの外国人選手が報じられたことも、参加選手と報道選手の性別の比に逆転が生じた起因であると考えられる。

分析対象としたニュース番組が競技日程のすべてをカバーしたものではないという点を若干考慮しなければならないが、報道上メダリストたちは公平に扱われており、ジェンダーバイアスは見受けられない。メダリストこそが報じられやすく、また入賞選手も結果に応じて報じられている。ただし、女性選手に関しては、メダリストに限らず報じられやすい傾向が見受けられ、この点についてはさらに考察を深める必要があるだろう。

3）外国人選手の報道実態

ニュース番組は、外国人選手をどのように報道したのか。図 3－12 は日本選手と外国人選手の報道件数と選手数について比較したグラフである。

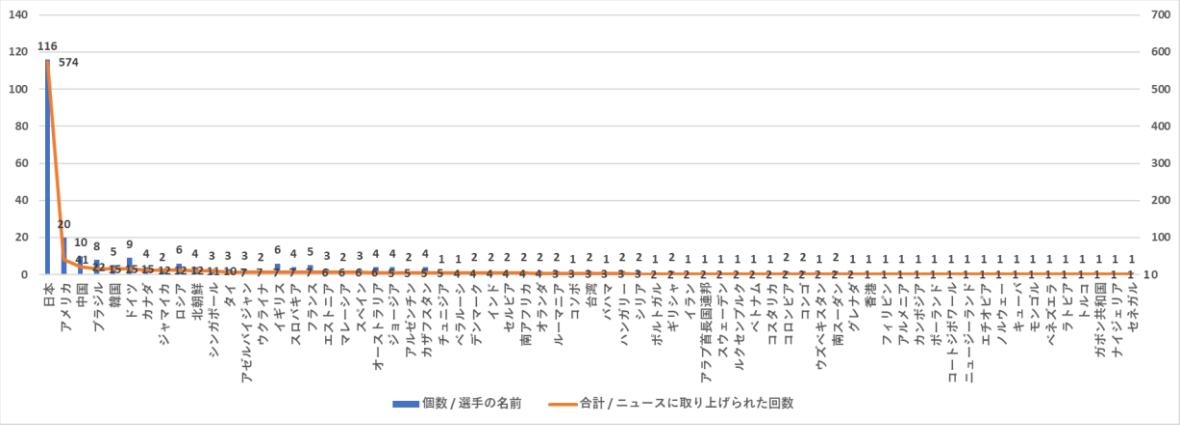
図 3－12　日本人/外国人選手の登場実態（選手数：左軸、報道件数：右軸）



日本選手は計 116 人（40.3%）、外国人選手は 172 人（59.7%）となり、意外なことにテレビ画面に登場した選手の 6 割近くが外国人選手という結果が出た。しかし報道件数は日本選手が圧倒的に多い。日本選手（116 人）に関する報道は延べ 574 件（63.5%）と 6 割以上を占め、外国人選手（172 人）は 330 回（36.5%）で、約 1.7 倍の報道量の差があった。

これらの選手の延べ報道件数を国籍・地域別に集計したのが図 3－13 である。

図 3－13　国籍・地域別の報道実態（選手数：左軸、報道件数：右軸）

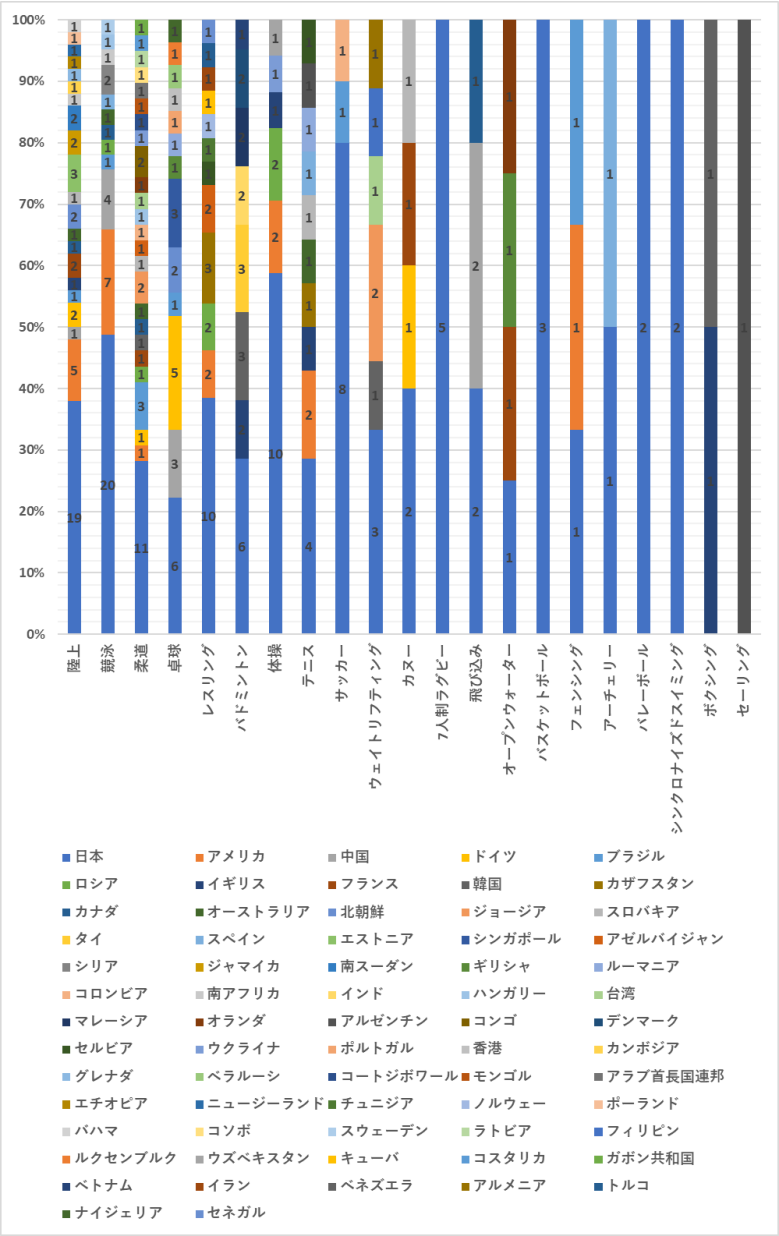


実に日本を除いた 66 か国がニュースの中に登場しているのである。この結果のみを見てみると、外国人選手の報道が少ないという先行研究の指摘がリオ大会の報道には該当しないようにみえるが、果たしてそうか。外国人選手の報道が多いと言っても、実際には番組中にその選手の名前が呼ばれただけであったり、競技結果の一覧に名前が掲載されただけかもしれない。こうした報道の内実をふまえなければ、日本選手と外国人選手の報道量の格差を評価することはできない。この件については次節にて検討することにする。

なお、日本に次いで報道件数が多かったのはアメリカ人選手で 41 件（20 人）、次が中国人選手で 22 件（10 人）、以下ドイツ 15 件（9 人）、ブラジル 15 件（8 人）、韓国 15 件（5 人）、ジャマイカ 12 件（2 人）、ロシア 12 件（6 人）、カナダ 12 件（4 人）と続くが、多くの国が 1 ケタ台の報道件数である。

さらに図 3－14 で、これを競技別に見てみよう。

図 3－14　報道された選手の競技別・国籍別グラフ（人数、%）



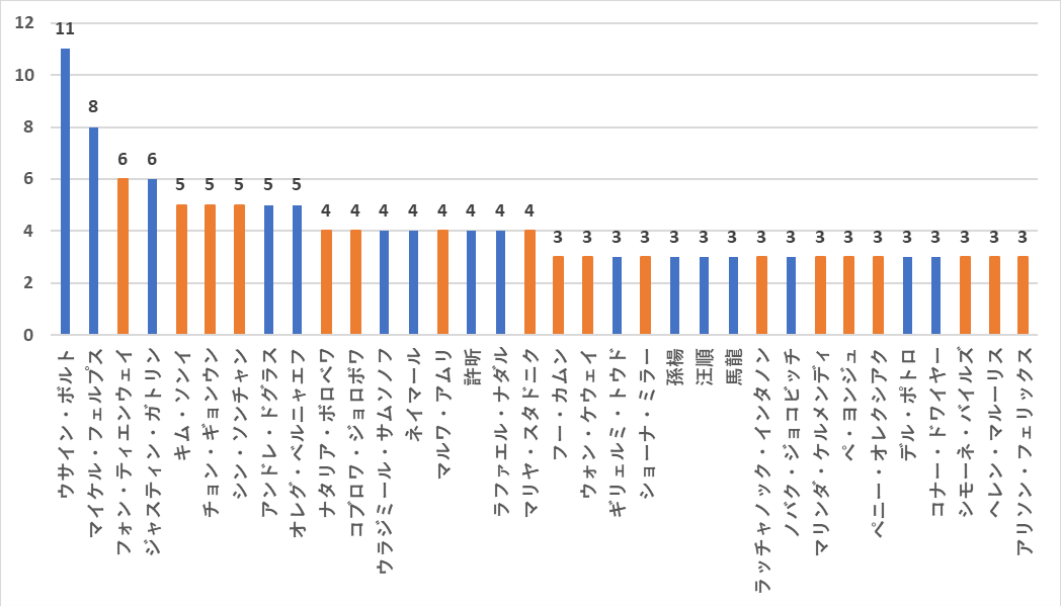
競技別に見てみると、上位の競技ほど多様な国の人々が登場していることがわかる。陸上と競泳は種目数が多いこと、柔道は対戦相手（国）が都度異なることがその理由であろう。卓球は最も外国人選手の割合が多く、日本選手 6 人に対して外国人選手が 21 人も登場している（日本選手の割合は 22.2%）。柔道やバドミントン、テニスなども日本選手の割合が 3 割を切り、外国人選手の割合が多い競技となっている。これは、いかに日本選手の対戦相手が多くニュースに取り上げられたかということを意味している。

なお、外国人選手個人への言及がなかったのが、7 人制ラグビー、バスケットボール、バレーボール、シンクロナイズドスイミングだった。これらの競技はチーム競技のため、外国

人選手個人にフォーカスした報道がなされなかったということだろう。この点については、後で〈国〉に関するデータと合わせて改めて取り上げることにしたい。

外国人選手で報道件数が多かった選手を図 3－15 によって、個別にみていこう。

図 3－15　3 件以上報道された外国人選手（青＝男性、オレンジ＝女性）



3 件以上報道された外国人選手は計 33 人いた。報道件数が最も多かったのは、リオ大会を最後に引退すると明言していた陸上のウサイン・ボルト選手で報道件数は 11 件である。つまり図 3－13 のジャマイカ人選手の 12 件のうちのほとんどがボルト選手の報道である。ボルト選手は個人 2 種目で三連覇を果たし、日本が銀メダルを獲得した陸上 100m×4 リレーでも金メダルを獲得しており、こうした卓越した競技実績が引退表明とも相まって報道件数が多かったと考えられる。

2 番目に多いのが競泳のマイケル・フェルプス選手だ。五輪史上最多メダル獲得記録を更新し、獲得メダル総数が 28 個となった「水の絶対王者」であり、またメダルを獲得した萩野選手や坂井選手らと同じ種目に出場したことから、両選手らの憧れのヒーローといった論調での報道も見られた。3 番目に多いのが卓球のフォン・ティエンウェイ選手（シンガポール）である。シングルスの福原選手と準々決勝で対戦したほか、卓球女子団体でも対戦相手だったため上位に入った。

同じく 6 件なのがジャスティン・ガトリン選手（アメリカ）で、ボルト選手のライバル選手として登場し、200m でまさかの準決勝敗退が伝えられた。敗退という点で見ると、3 件報道があったノバク・ジョコビッチ選手（セルビア）は、優勝候補にもかかわらず初戦で敗退したことが着目された。

報道件数 5 件のキム・ソンイ選手（北朝鮮）は、卓球シングルス 3 回戦で石川選手と、3 位決定戦で福原選手と対戦し勝利した選手である。チョン・ギョンウン選手とシン・ソンチャン選手はバドミントンでタカマツペアと準決勝を競った韓国のペアで、日本選手のメダ

ル確定に大きな期待がかかるシーンを伝えるために報道件数が多かった。体操のオレグ・ベルニャエフ選手の 5 件は、体操・内村航平選手と個人総合で最後まで競り合った選手という点と種目別平行棒での金メダル獲得によるものである。

以上のように、ウサイン・ボルト選手も含め、報道件数が多い選手には、日本選手とライバル関係あるいはスター、ヒーロー的選手として報道された傾向がみられる。

次に外国人選手の報道実態をメダルおよび性差に着目してみてみたい。

図 3－16　性別・メダル別の外国人選手の報道実態（N=172）

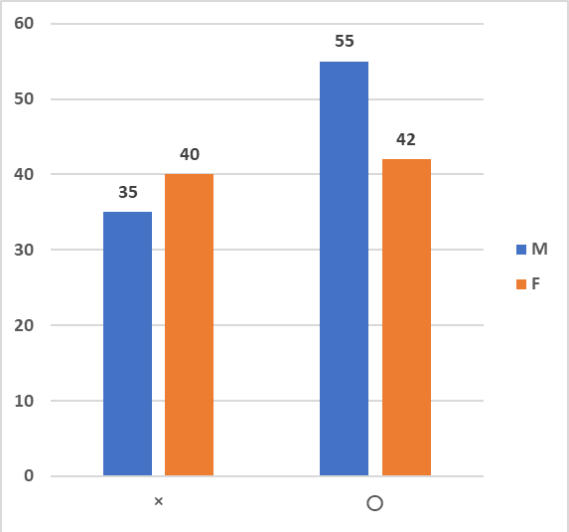
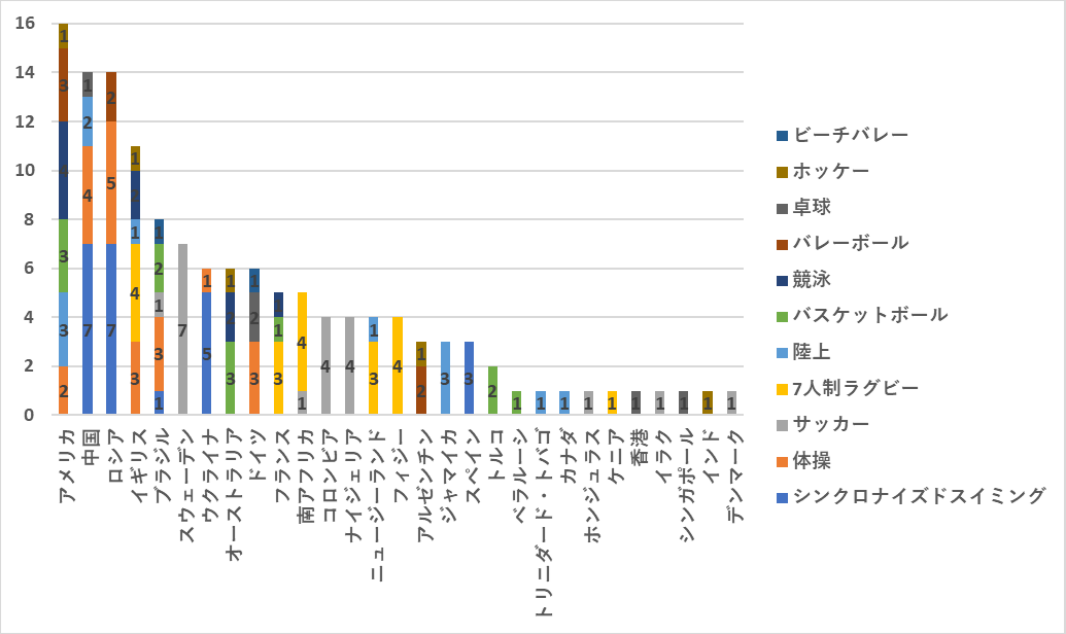


図 3－16 は報道された外国人選手 172 人の性別と、メダリスト/非メダリストの人数を集計したものである。○がメダリスト、×が非メダリストを表し、M（青）が男性選手、F（オレンジ）が女性選手を表す。そもそも男性選手が 90 人に対し、女子選手は 82 人と若干の開きがあるが、メダリストの割合が、男性選手が 61.1%であるのに対し、女子選手は 51.2%と、10 ポイント近い開きがある。男女ともメダリストのほうがより多く登場しているが、男性の方がその傾向が強いという結果である。先に全体的傾向として女性選手のほうが、非メダリストが扱われる件数が多いということを指摘したが、外国人選手についても同様の傾向が見て取れる。

最後に、第 3 節 1 で定義した〈国〉についてみてみたい。実際に〈国〉としてカウントされたのは 135 件であった。先にチーム競技の場合は、外国人選手個人にフォーカスした報道がなされないため、国籍で呼ばれたのではないかと指摘したが、実際にどのような競技が国籍で呼ばれたのかを集計したものが図 3－17 である。

図 3－17〈国〉としてニュースに登場した 135 件の実態（競技別）



国籍別にみると、アメリカが最も多く登場し、6 競技、16 件だった。その多くは、日本の対戦国としての報道である。バスケットボール（女子）やバレーボール（女子）、ホッケー（女子）などの団体競技、競泳 100m×4 リレー（男子）や体操団体男子の競技結果を伝える時など、ライバル国として登場した。それ以外には陸上の 400m×4 リレー（女子）予選でのバトンミスによるやり直しレース、女子 5000m で転倒したアメリカ人選手とニュージーランドの選手について五輪精神と伝えたものなどがカウントされた。

2 番目に多かった中国とロシアは、シンクロナイズドスイミングのライバル国として最も登場した国だった。それ以外にも、体操男子団体の競技結果を伝える際にもライバル国としてよく登場した。

競技の側面からその特徴的な〈国〉をいくつか挙げると、イギリスや、フランス、南アフリカ、ニュージーランド、フィジーは、7 人制ラグビー（男子）の日本の活躍から、対戦国としてよく登場したと言える[119]。また、スウェーデン、コロンビア、ナイジェリアはサッカー（男子）の日本が予選リーグで属していたグループにいた国である。これらの国は、日本の決勝トーナメント進出をかけた解説の中で登場した国だった。

ブラジルは 5 番目に多く、サッカー（女子）の準決勝で女子が敗退したことや、ビーチバレー（女子）の深夜の決勝の様子を伝えるなど、開催国としての報道色も強かったことがわかる。なお、サッカー（男子）が報じられる時は必ずネイマール選手に言及があったことから、〈国〉としての計測にならなかった。また、報道が多かったボルト選手の母国であるジャマイカはここでは 3 件で、陸上 100m×4 リレーで言及があったものである。団体競技のネイマール選手と個人競技のボルト選手を同等に扱うことはできないが、スター選手が登

119 なお、ケニアの 1 件の 7 人制ラグビーは女子である。

場する時には、団体競技であっても個人名がニュースに登場しやすいことが確認できよう。

以上のように、外国人選手および〈国〉についてデータを詳細に検討していくと、そのほとんどが日本選手の対戦相手、ライバル国としての報道であることが判明した。また、報道の全体的傾向であるメダリストを焦点づけて報じるという点については外国人選手にも同様であり、そこにはジェンダーバイアスがさほど見られないといえるだろう。

第４節　〈選手〉報道の内実：３分類によるグラデーションの把握

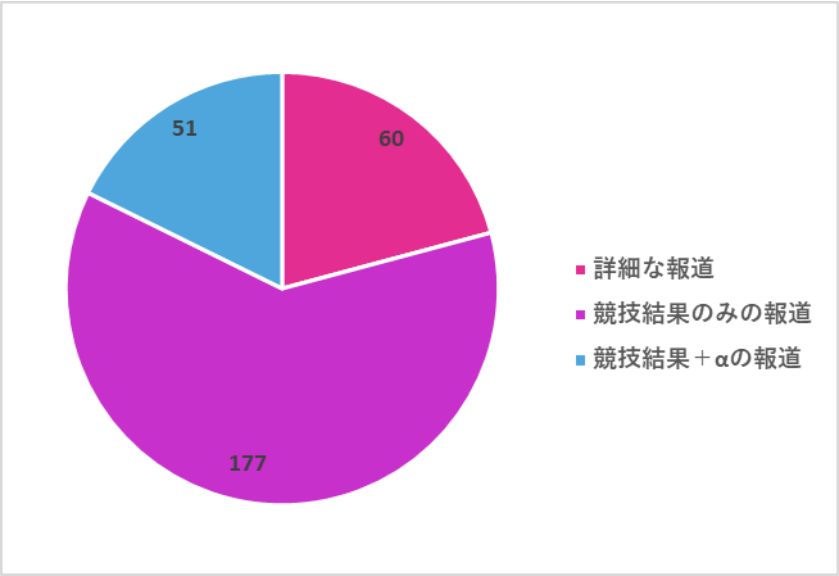
前節でみたように、ニュース番組によるリオ大会報道の中で、実際にナレーションで名前を読み上げられたり、テロップとして映し出された選手は計 288 人（報道件数 904）にのぼった。しかし、その報道内容は多様であり、生出演でインタービューを受けたり詳細な報道がなされる選手がいる一方で、競技結果のみが伝えられた選手もいる。ここではそうした報道量のグラデーションに着目し､選手の報道を以下のような 3 つに分類することにしたい。

１）詳細な報道
①選手への事前取材または追加取材が行われているもの、②選手がスタジオに生出演しているもの、③選手の地元などで親族や友人、元コーチらが取材されているもの、④選手の過去の写真・映像などが紹介されているもの、⑤選手/競技の強さ・技術の秘密について各所に取材がなされているもの[120]。
２）競技結果のみの報道
日本選手の対戦相手という理由だけで報道された場合も含む。
３）競技結果＋α の報道
競技結果に加えて何かしらの＋α 情報が、選手の言葉や番組出演者らによって伝えられているもので、その内容が「詳細な報道」の①～⑤以外のもの[121]。

その割合について示したのが以下の円グラフである。

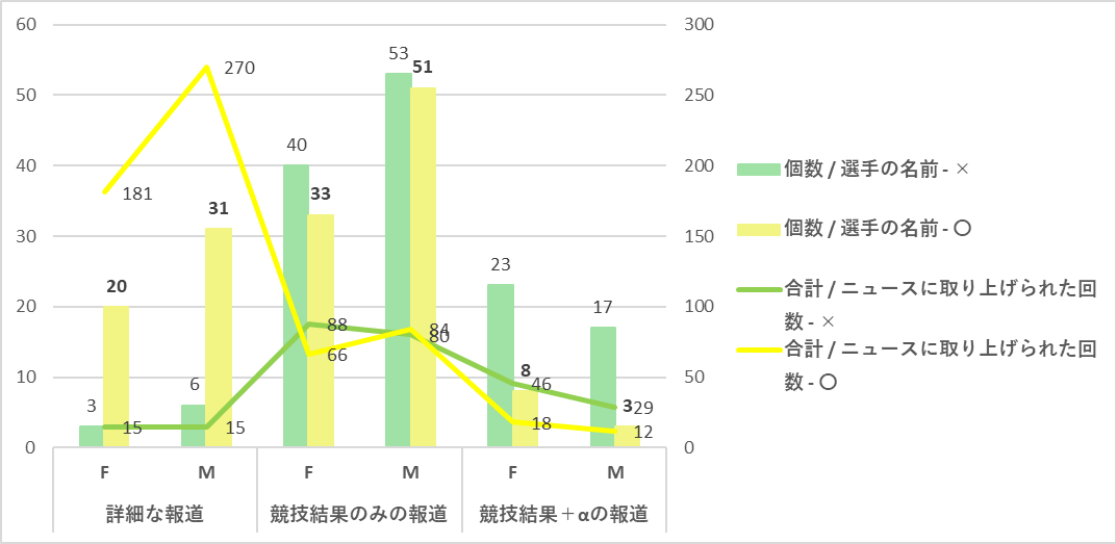
[120] 1 番組でも詳細な報道が行われていればその選手は「(要素）あり」とカウントすることとする。また、団体としての注目があった場合（体操団体、卓球団体、シンクロナイズドスイミングなど)、選手への着目度について、生出演したかどうかなども加味し、都度入念に検証を行った。
[121] その選手の競技結果を受け、選手自身が一言発言をしていたり、プライベート（人種や年齢など）情報などが付与されているケースなどが該当する。前者は、チーム競技のなかでキャプテンやエースなどが発言するケースが多く、バスケットボールの吉田選手やバレーボールの木村選手、島田選手、7 人制ラグビーの桑水流選手の報道がこれにあたる。これらの選手たちはほとんどの場合個別に掘り下げた報道がなされていない。チーム競技の報道については、第 4 章 4 節 3 項で検討する。

図 3－18　〈選手〉288 人の報道実態



「競技結果のみの報道」が 177 人（61.4%）と最も多く、「詳細な報道」に該当する選手は 60 人（20.8%）と全体の 2 割程度、「競技結果＋α の報道」は 51 人（17.7%）である。さらにこのデータについて、ジェンダーとメダル獲得の有無という視点で分析したのが下記の図 3－19 である。

図 3－19　報道実態と報道回数（ジェンダー、メダルの相関）



F が女性選手、M が男性選手を表し、黄色いグラフの○がメダリスト、緑のグラフの×が非メダリストを表している。

「詳細な報道」に該当する選手はニュースの件数も多く、逆に「競技結果のみの報道」「競技結果＋α の報道」に該当する選手はニュースの件数が少ない。とくに「競技結果のみの報道」に該当する選手は、1 人あたり 1～2 件しかニュースに取り上げられていない。

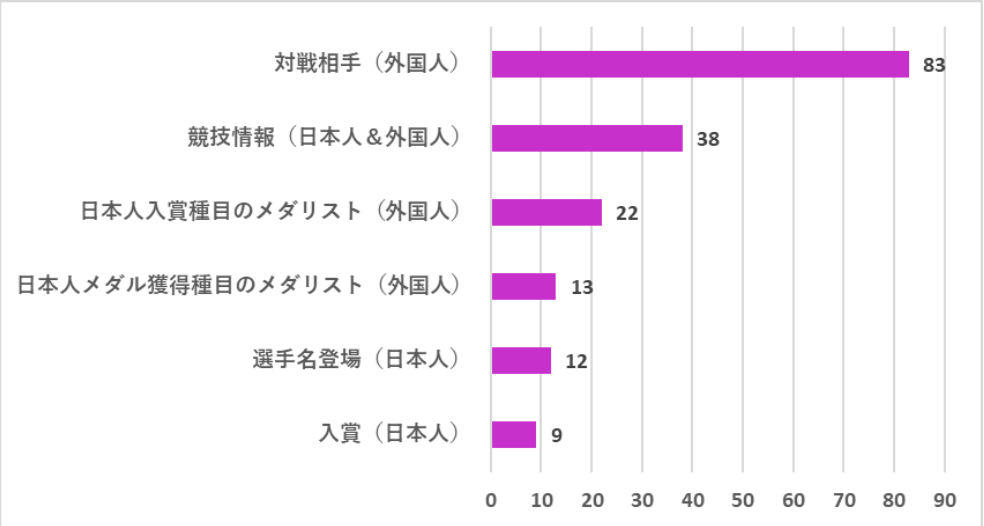
「詳細な報道」に該当する選手には、男性選手が 37 人（61.7%）と多く、そのうちの 31 人がメダリストである。ニュースの報道件数が最も多いのが、この男性メダリストである。一方、女性選手は 23 人で、メダリストは 20 人だった。図 3－6 で、ニュースで 5 回以上報道された選手をまとめたが、これら 53 人（492 件）の選手のうち実に 42 人（79.2%）が「詳細な報道」に該当する選手である。

5 回以上報道された選手の中で「競技結果のみの報道」に該当するのは体操の村上茉愛、杉原愛子、宮川紗江、内山由綺、卓球のキム・ソンイ、フォン・ティンウェイ、陸上のアンドレ・ドグラス、バドミントンのチョン・ギョンウン、シン・ソンチャン、「競技結果＋α の報道」に該当するのは、体操・寺本明日香、陸上・ジャスティン・ガトリンであった。これらの選手の多くは非メダリストである。

1．「競技結果のみの報道」の内実

まずは、「競技結果のみの報道」に該当する選手たち（177 人）が取り上げられた理由を図 3－20 によってみていきたい。

図 3－20　「競技結果のみの報道」に該当する選手たちの報道理由



最も多い理由が「対戦相手（外国人）」で、83 人（46.9%）とほぼ半分を占め、報道された全 288 人の中でも 28.8%、実に 3 割近くを占めている。その報道内容は、日本選手に関する報道の一部として登場したのみで、当該選手の競技結果に着目して取り上げられたものではなく、日本選手のライバルという文脈で「競技結果のみ」が伝えられたのである。

次いで多いのは、世界新記録や注目選手の敗退といった注目度が高い「競技情報」による

もので、計 38 人（21.5%）である。ウェイトリフティング（男子）や陸上・ハンマー投げ（女子）の世界記録、陸上・福島千里選手の予選敗退、テニスのジョコビッチ選手やウィリアムズ姉妹の初戦敗退など、日本選手・外国人選手問わずこうした「競技情報」が伝えられた。

「日本人入賞種目のメダリスト（外国人）」と「日本人メダル獲得種目のメダリスト（外国人）」は、それぞれ 22 人（12.4%）、13 人（7.3%）である。日本選手が入賞したり、メダルを獲得した競技でメダリストとなった外国人選手がテロップや口頭で伝えられたものをカウントした。

「選手名登場（日本人）」12 人（6.8%）は、サッカー（男子）や 7 人制ラグビー（男子）、バスケットボール（女子）などの団体競技の結果を伝える際に、得点を入れたり、得点に絡んだ選手、活躍した日本選手が名前を呼ばれたものである。

「入賞（日本人）」9 人（5.1%）は、体操女子団体の 4 名[122]、競泳・入江陵介選手、100m×4 自由形リレーメンバーの 3 人[123]、ウェイトリフティングの八木かなえ選手の計 9 人である。

2．「競技結果＋α の報道」の内実

次に、競技結果に加えて何かしらの情報が伝えられた「競技結果＋α の報道」に該当する 51 人の選手たちに目を向けよう。これらの選手は、「詳細な報道」と「競技結果のみの報道」の中間に位置するわけだが、競技結果以外のことを付加された理由を探っていきたい。

図 3－21　競技結果＋α の報道をされた選手の競技傾向

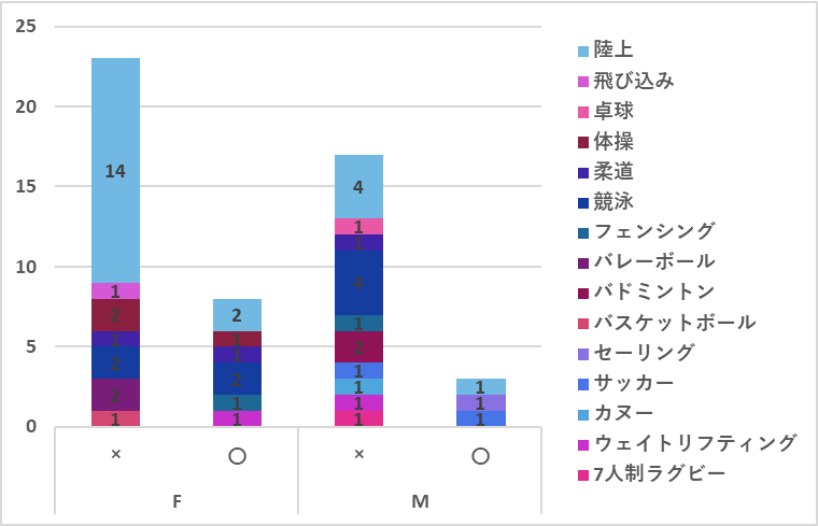


図 3－21 の○と×は、メダリストか非メダリストかを表し、F が女性選手、M が男性選

[122] 寺本明日香選手は個人総合でも入賞を果たし、短いインタビュー映像が流れたため「なし＋α」とした。
[123] このうち中村克選手は第 1 泳者で日本人初の 47 秒台という日本記録を出し短いインタビュー映像が流れたため「なし＋α」とした。

手を表している。このように整理してみると、陸上が圧倒的に多いこと、また女性選手の非メダリストが多いことがわかる。実は 14 人のうち 10 人がマラソンの選手で、日本選手は 3 人娘として報じられ、外国人選手らは双子と三つ子の選手たち(エストニアのレイラ・ルイク選手、リーナ・ルイク選手、リリー・ルイク選手、北朝鮮のキム・ヘギョン選手、キム・ヘソン選手、ドイツのアンナ・ハーナー選手、リサ・ハーナー選手)が報じられた（フジ「ユア」8 月 15 日放送、NHK「NW9」8 月 18 日放送)。陸上の女性選手のうちさらに 2 人は 400mのショーナ・ミラー選手（バハマ）とアリソン・フェリックス選手（アメリカ）で、ヘッドスライディングで優勝したミラー選手と 2 位のフェリックス選手の僅差の勝負をハプニングとして伝えたものだ（日テレ「ZERO」8 月 16 日放送)。そして陸上 5000m の N・ハンブリン選手（ニュージーランド）と A・ダゴスティーノ選手（アメリカ）は、予選で転倒後ともにゴールし特例で決勝進出を果たしたことが、五輪精神、スポーツマンシップとして伝えられた（NHK「NW9」とフジ「ユア」8 月 17 日放送)。

ほかの競技に目を向けると、卓球女性のシャーリエンニー選手(ルクセンブルク)は 53 歳、女子体操の種目別跳馬で 7 位入賞したチュソビチナ選手(ウズベキスタン)はオリンピック 7 大会連続出場の 41 歳と、年齢が注目を浴びた（NHK「NW9」8 月 18 日放送ほか)。フェンシング女子では、ムハンマド選手(アメリカ)がヒジャーブを着用して試合を行ったという、宗教的な面がクローズアップされた（NHK「NW9」8 月 18 日放送)。メダリストの中で人種に着目された選手もいる。競泳 100m 自由形で同着金メダルとなったシモーネ・マニュエル選手である。彼女は 16 歳のペニー・オレクシアク選手（カナダ）と同着で金メダルとなったことに加え、黒人女性初の競泳金メダルがクローズアップされた（テレ朝「報ステ」8 月 12 日放送)。

他方、男性選手に目を向けると、サッカーのネイマール選手は、自身の競技力の高さと自国開催という点（テレ朝「報ステ」8 月 18 日放送)、セーリングのランヘ選手（アルゼンチン）は、肺がんを克服し 6 度目の挑戦で 54 歳での金メダルを獲得したことが注目された（NHK「NW9」、フジ「ユア」8 月 18 日放送)。陸上のガトリン選手は、100m 銀メダリストでありボルト選手や日本のケンブリッジ選手のライバルとしても登場した（TBS「N23」8 月 15 日放送ほか)。

以上のように同じ「競技結果＋α の報道」に該当する選手であっても、男性選手と女性選手では「＋α」の内容に明確な違いがみられる。男性選手の報道が競技力の高さを基本としたものとなっているのに対して、女性選手の「＋α」の内容は、家族構成や年齢、宗教、人種といった事柄である。女性選手で競技力が着目されたケースといえるのは、柔道のケルメンディ選手のコソボ初の金メダル、体操のバイルズ選手の 5 冠の 2 件であるが、バイルズ選手の場合は、フジ「ユア」MC の市川が大好きな選手と明言しながらも、「生みの親がドラッグとアルコール中毒で壮絶な幼少期があって今の活躍に勇気をもらえる」と、生い立ちについても報道がなされている（フジ「ユア」8 月 15 日放送)。第 3 節で女性選手の方が男性選手よりもメダル獲得以外の点で取り上げられている可能性が示唆され（前掲図 3－9)、外国人選手にもその傾向が見られた（前掲図 3－16）ことを指摘したが、この検討によってそれが主に外国人女性選手に見られる傾向であることが判明した。

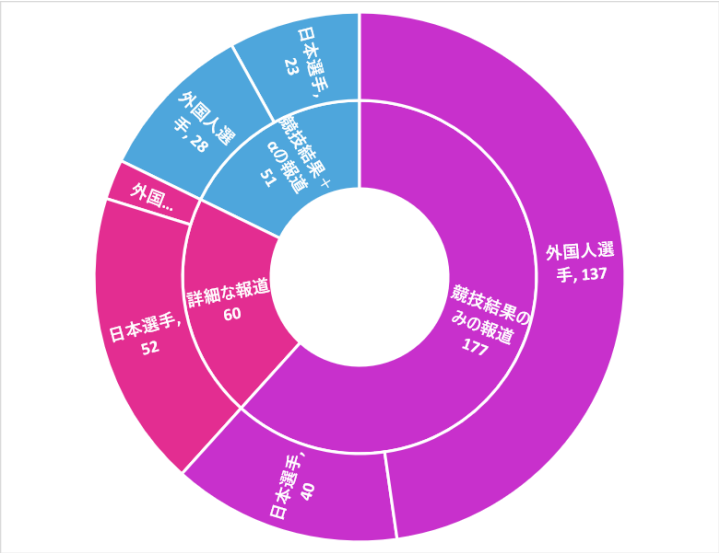
その他、難民選手団（柔道、陸上、競泳に出場する選手 7 人）の登場は、「オリンピックにはその時々の世界情勢が現れている」と河野キャスターがコメントしているようにオリ

ンピックの歴史や、難民選手団が誕生した政治的社会的な背景を理解するために取り上げられたものであり（NHK「NW9」8 月 15、16 日放送）、番組中に詳しくは言及されなかったが、世界平和の構築をめざすオリンピックの理念とも合致するものといえる。

次に日本選手をみてみよう。「競技結果＋α の報道」に該当する日本選手は、サッカーや 7 人制ラグビー、バスケットボール（女子）、バレーボール（女子）のキャプテンらであり、敗退の際の総括コメントが報じられている。これらのうちサッカー以外はすべて入賞競技である。歴史的な記録が「＋α」の内容となっているのは、飛び込みの板橋美波選手の 80 年ぶりの入賞であり、板橋選手がスーパー女子高生と紹介され（日テレ「ZERO」、テレ朝「報ステ」8 月 19 日放送）、体操の寺本明日香選手の個人総合入賞も 52 年ぶり（NHK「NW9」、日テレ「ZERO」8 月 12 日放送）、競泳・100m×4 リレーの第 1 泳者の中村克選手の日本記録更新、リレーでの 48 年ぶりの決勝進出（フジ「ユア」8 月 8 日放送）、陸上・棒高跳びの澤野大地選手の 64 年ぶりの入賞（日テレ「ZERO」8 月 16 日放送）などが選手たちの言葉とともに報道された。その他、ウェイトリフティングの糸数陽一選手の日本記録での 4 位入賞と人口 200 人の神の島・沖縄久田高島出身であること（フジ「ユア」8 月 9 日放送ほか）、競泳の渡辺一平選手のオリンピックレコードでの決勝進出（日テレ「ZERO」8 月 10 日放送）などがある。一方で、わずかだが敗者もいる。初戦で敗退したフェンシングの太田雄貴選手は引退を示唆するコメントが各局で報じられ（NHK「NW9」、テレ朝「報ステ」、フジ「ユア」8 月 8 日放送）、男子バドミントンダブルスの遠藤早川ペアは、早川選手のぎっくり腰発症もあり敗退、その申し訳なさを口にし（ユア「フジ」8 月 15 日）、競泳・今井月選手は、準決勝で敗退し「こんな情けない結果で終わって悔しい」と話す様子が報じられた（フジ「ユア」8 月 9 日放送）。

このように報道内容にはジェンダー差もあるが、それ以上に日本選手か外国人選手かが大きな要因として作用していることが伺える。そこで本節の 3 つの区分と日本選手か外国人選手かという点をクロス集計してみた。図 3－22 がそれである。

図 3－22　日本選手と外国人選手の登場人数と要素の関係性



日本選手と外国人選手の差が圧倒的に大きいのは、「詳細な報道」と「競技結果のみの報道」である。外国人選手で「詳細な報道」に該当する選手はわずかに 7 人（外国人選手のうち 4.1%、報道のあった選手全体のうち 2.4%）であり、「競技結果のみの報道」に該当する選手たちは、先に述べたように日本選手の対戦相手だからと報じられたウェイトが大きい。

これは、ニュース報道のなかで選手の物語が伝えられるのは多くの場合日本選手であり、日本のオリンピック報道の主役は紛れもなく日本選手、そしてメダリストであるということを示している。

３．詳細に報じられた選手 60 人：その報道内容を構成する要素

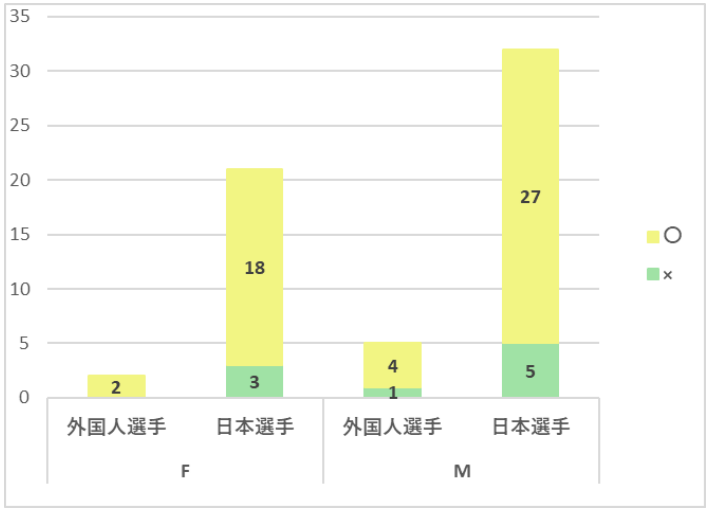
まず「詳細な報道」に分類した選手 60 人が誰であるのかを表 3－15 で確認しておきたい。

表 3－15「詳細な報道」に該当する 60 人の選手

選手の名前	報道件数	競技	メダルの有無	日本選手か外国人選手	ジェンダー
福原愛	22	卓球	○	日本選手	F
水谷隼	22	卓球	○	日本選手	M
萩野公介	18	競泳	○	日本選手	M
内村航平	17	体操	○	日本選手	M
白井健三	16	体操	○	日本選手	M
髙橋礼華	16	バドミントン	○	日本選手	F
松友美佐紀	16	バドミントン	○	日本選手	F
石川佳純	14	卓球	○	日本選手	F
丹羽孝希	14	卓球	○	日本選手	M
錦織圭	13	テニス	○	日本選手	M
登坂絵莉	12	レスリング	○	日本選手	F
加藤凌平	12	体操	○	日本選手	M
奥原希望	12	バドミントン	○	日本選手	F
ウサイン・ボルト	11	陸上	○	外国人選手	M
吉村真晴	11	卓球	○	日本選手	M
土性沙羅	10	レスリング	○	日本選手	F
瀬戸大也	10	競泳	○	日本選手	M
伊藤美誠	10	卓球	○	日本選手	F
吉田沙保里	9	レスリング	○	日本選手	F
伊調馨	9	レスリング	○	日本選手	F
大野将平	9	柔道	○	日本選手	M
山室光史	9	体操	○	日本選手	M
田中佑典	9	体操	○	日本選手	M
乾友紀子	9	シンクロナイズドスイミング	○	日本選手	F
三井梨紗子	9	シンクロナイズドスイミング	○	日本選手	F
マイケル・フェルプス	8	競泳	○	外国人選手	M
桐生祥秀	8	陸上	○	日本選手	M
山縣亮太	8	陸上	○	日本選手	M
ケンブリッジ飛鳥	8	陸上	○	日本選手	M
坂井聖人	7	競泳	○	日本選手	M
小堀勇気	7	競泳	○	日本選手	M
永瀬貴規	7	柔道	○	日本選手	M
ベイカー茉秋	7	柔道	○	日本選手	M
金藤理絵	7	競泳	○	日本選手	F
山口茜	7	バドミントン	×	日本選手	F
池江璃花子	6	競泳	×	日本選手	F
江原騎士	6	競泳	○	日本選手	M
羽賀龍之介	6	柔道	○	日本選手	M
松本薫	5	柔道	○	日本選手	F
オレグ・ベルニャエフ	5	体操	○	外国人選手	M
松田丈志	5	競泳	○	日本選手	M
田知本遥	5	柔道	○	日本選手	F
浅野拓磨	4	サッカー	×	日本選手	M
海老沼匡	4	柔道	○	日本選手	M
太田忍	4	レスリング	○	日本選手	M
川井梨紗子	4	レスリング	○	日本選手	F
星奈津美	4	競泳	○	日本選手	F
羽根田卓也	4	カヌー	○	日本選手	M
小関也朱篤	3	競泳	×	日本選手	M
中村美里	3	柔道	○	日本選手	F
ヘレン・マルーリス	3	レスリング	○	外国人選手	F
新井涼平	3	陸上、やり投げ	×	日本選手	M
ラファエラ・シルバ	2	柔道	○	外国人選手	F
渡嘉敷来夢	2	バスケットボール	×	日本選手	F
原沢久喜	2	柔道	○	日本選手	M
ウェイド・バンニーキルク	2	陸上	○	外国人選手	M
平井康翔	2	オープンウォーター	×	日本選手	M
右代啓祐	2	陸上、十種競技	×	日本選手	M
猫ひろし	1	陸上、マラソン	×	外国人選手	M
髙藤直寿	1	柔道	○	日本選手	M

選手たちの性別は、女性が 23 人、男性が 37 人である。では、メダルと国籍に注目するとその構成がどうなるか。図 3－23 の○と×はメダルの有無を表し、F と M は女性選手か男性選手かを表している。

図 3－23　「詳細な報道」に該当する選手の国籍とメダル獲得の有無



まず、国籍を問わずメダリストが圧倒的に多いことがわかる。非メダリストであった日本選手の報道では、陸上・やり投げで決勝進出を一投目で決めた新井涼平選手や、北島康介の次エースとして注目された競泳・小関也朱篤選手、同じく競泳の池江選手、バドミントンシングルスの山口茜選手、バスケットボール女子のエース渡嘉敷来夢選手などで、今大会での活躍を期待した事前取材や東京五輪を見据えた事後取材による映像が付加されている。

一方、外国人選手の非メダリストは、マラソンの猫ひろし選手（カンボジア）である。日本から国籍をカンボジアに移しカンボジア代表として出走する猫選手が、売名行為だとバッシングを受けながらもカンボジアの陸上競技発展に力を注ぎレースに備える様子を追う事前映像が流された（NHK「NW9」8 月 17 日放送）。

ニュース番組における選手報道には、様々なバリエーションがある。周囲の人間との関係だけでなく、技術的側面や競技にまつわるものなど多様なものが含まれている。家族が報道される場合であっても、選手の親が指導者であるケースなどもあり、他者との人間関係をプライベートと一括してしまうと一面的な評価を生み出しかねない。こうした先行研究の問題点を克服し、60 人の選手の報道内容の内実に迫るために、ここでは報道内容を構成する要素を以下のように 21 項目に区分して把握したうえで、それを「その他」を含む A～E 群の計 5 つにグルーピングすることにしたい。

表 3－24　選手の報道内容を構成する要素とグルーピング

A 群＜選手自身の感情や意思＞
A-1　気持ち
A-2　東京オリンピック
A-3　自分の役割
A-4　声援

B 群＜選手に関連して登場する他者と自身の物語＞
B-1　家族
B-2　監督・コーチ
B-3　ライバル
B-4　友情・チーム
B-5　地元
B-6　ケガ・病気
B-7　食事
C 群＜選手の強さや勝因、チームの勝機＞
C-1　技術
C-2　過去
C-3　戦略
C-4　身体的特徴・身体能力
D 群＜競技（種目）にまつわる説明＞
D-1　競技の歴史
D-2　先人の活躍
D-3　競技の特徴
E 群＜その他＞
E-1　私生活（ファッションやネイル、年齢などのプライベートなもの）
E-2　波乱（期待された選手の敗退を指すとき）
E-3　裏話（選手個人の裏話的なもの：あだ名やメダル獲得時のエピソードなど）

各群の項目とそれぞれの要素のうち説明が必要と思われるものについて、補足をしておきたい。

A 群＜選手自身の感情や意思＞は、インタビュアーやキャスターに促されたものも含めて、選手の発言に依拠したものである。例えば「気持ち（A-1）」は、選手自らの成績に関する率直な気持ち（嬉しい、悔しいなど）が報じられたものをカウントした。「東京（A-2）」は、4 年後のオリンピックが 2020 年に東京（母国）で開催されることを踏まえて、キャスターやインタビュアーからは「ずばり 2020 年はどうですか？」といった質問、若手や現役続行を明言する選手からの自発的な「東京ではもっといい色のメダル」「東京ではメダルをとりたい」といった言葉が確認されたためリオ大会の特殊事項としてカウントした。「自分の役割（A-3）」は、自身の競技へのコミットメントの仕方を選手たちがどう捉えているかについて語ったものであり、この中には団体競技やチーム競技でのメダル獲得や入賞した競技（種目）の選手の発言が多い。

B 群＜選手に関連して登場する他者と自身の物語＞は、「人間ドラマ」とされる「家族（B-1）」～「友情・チーム（B-4）」のほか、選手自身の「ケガ・病気（B-6）」の克服や「食事（B-

7)」面での選手を支えたものなど、選手に関連してメディア側が主に付与したものである。なお「家族（B-1)」には、メダルを獲得した選手の報道で流された家族（父、母、兄弟、姉妹など）のインタビューも含まれる。

C 群＜選手の強さや勝因、チームの勝機＞は、選手やチームが培ってきた技術や戦術、身体的特徴・身体能力といった内容のもので、主に「勝利の秘訣」に迫る内容のものである。

D 群＜競技（種目）にまつわる説明＞は、選手ではなく競技に着目した報道であり、「競技の歴史（D-1)」は、「競技初の金メダルのバドミントン」、「56 年ぶりのメダルの競泳 200m×4 フリーリレー」、「テニスの 96 年ぶりの銅メダル獲得」など、「先人の活躍（D-2)」は、競技の強さの秘訣を先人の活躍と結び付けた報道であり、レスリングの女子 4 階級金メダルに寄与した吉田・伊調や柔道男子、競泳の活躍を伝える際の北島康介（過去 2 大会連続 2 種目金メダル）への言及、競泳 200m バタフライでの日本選手の連続メダル獲得（2004 年アテネ大会以降 4 大会連続）の際に流された説明報道が該当する。

E 群＜その他＞は、ファッションやネイル、好きなアイドルといった「私生活（E-1)」、番狂わせなどを指す「波乱（E-2)」、そしてメダル獲得時のエピソードや選手のあだ名などを報じた「裏話（E-3)」の報道である。

A 群と B 群は、先行研究で問題視されてきた「人間ドラマ」「ヒューマンストーリー」「人情話」などの物語性に直結する要素を含む。A 群は選手の発言が対象となるため、キャスターらの質問などテレビ側からの誘導が反映されることがあるが、B 群はテレビの入念な取材によるものが多く、A 群よりも「人間ドラマ」的な傾向を生み出す可能性が高いといえる。それに対し、C 群と D 群は、実況が伝えるスポーツの迫力や競技そのもの魅力を中心にした報道、競技の調査報道であるといえる。また E 群はどちらの可能性も含むものであり、ジェンダー差の問題も該当しやすい項目だ。

表 3－24 にあげた 21 の要素は、実際の報道の中でどのように登場しているのか。その集計方法の説明も兼ねていくつかの事例をあげておこう。

最も要素が多かったのはバドミントンのタカマツペアで、8 月 19 日の日テレ「ZERO」の報道で、12 の要素（A-1,2,4、B-1,2,3、C-3、D-1,2、E-1,3）が認められる。両者同じなので高橋選手のほうを例に書き出したデータを以下に見てみたい。

気持ち（昨日の伊調の逆転を見ていて自分たちも巻き返して勝ってやると／強気／10 年頂点を目指してきて最後に勝てて良かった／二人でやってきてよかった)、**私生活**（験担ぎのネイル／ピアス)、**家族**（妹インタビュー／高橋両親)、**裏話**（勝利の瞬間：信じられなくてあたふたしてこけて倒れた／起死回生の 4 連続ポイントで王手／まるまる性格が反対／互いにないものを持っていてダブルスによい／表彰式では対照的な競技面と異なり同じ動作をする二人)、**東京**（2 人で狙う)、**競技の歴史**（日本バドミントン史上初の金)、**ライバル**（デンマークペアは世界ランキング 6 位)、**過去**（高校で田所光男総監督の指示でペアを組む)、**先人**（ロンドン大会・フジカキペアが銀メダルを獲得：今年 5 月のインタビューで当時の悔しさ「次は自分たちが」)、**声援**（所属・ユニシス)、**戦略**（陣内貴美子が勝利の決め手を解説)、**監督コーチ**（パク監督：技術もだけど気持ち面、世界で勝てると信じてくれていた）

また、男性選手で要素が最も多かった卓球の水谷選手の場合、8 月 18 日の TBS「N23」の報道で、10 の要素（A-1,2,3,4、B-1,3,4,5、D-1、E-3）が認められる。書き出したデータを以下にあげておきたい。

自分の役割（エース）、**ライバル**（ランク 3 位・許昕：12 試合勝ちなし相手と互角に戦い勝利）、**声援**（地元／母校）、**過去**（5 歳・映像／15 歳・写真最年少日本代表／3 度目のオリンピック）、**競技の歴史**（シングルス史上初のメダル獲得／歴史を塗り替える）、**家族**（両親が現地で見守る／兄からメッセージ／奥さん／娘／子煩悩／祖父祖母）、**気持ち**（卓球界皆の夢叶えられた／オリンピックでやるしかない）、**チーム**（団体はみんなの汗と涙混じる思い）、**裏話**（試合でパンツをはかない：青森山田の先輩の伝統）、**東京**（優勝したい）

なお、次に多かったのは 9 の要素で、競泳の 2 選手である。競泳の 1 人目は 8 月 10 日放送の日テレ「ZERO」で取り上げられた坂井聖人選手（A-1,2,4、B-1,3,5、C-2,4、E-1）、二人目が 8 月 12 日の日テレ「ZERO」で取り上げられた萩野公介選手（A-1,2,4、B-2,3,4、C-1,2、D-1）だった。両者とも出場したすべての種目が終わった時に報じられたものである。なお、8 の要素が認められたのは、レスリングの吉田沙保里選手、卓球の福原愛選手、体操の白井健三選手らであった。

選手 60 人の要素の合計は 706、のべ選手報道件数は 213 なので、選手報道件数 1 件あたりの要素の平均値は 3.3 個ということになる。上記の高橋、松友、水谷、坂井、荻野の 5 選手の報道の場合は、その約 3～4 倍にあたる 9～12 の要素によって報道が構成されているのである。

また、最も多くの番組で「詳細な報道」がなされたのは、卓球の水谷選手で 11 番組であった。第 2 位が体操・白井選手で 9 番組、第 3 位が内村選手で 8 番組である。一方、1 番組でしか詳細に報道されなかった選手が 11 人いる。柔道のシウバ選手、原沢選手、高藤選手、競泳の小関選手、平井選手、フェルプス選手、陸上の桐生選手、右代選手、バンニーキルク選手、猫選手、レスリングのマルーリス選手で、外国人選手が多い。表に整理してその実態を見てみよう。

表３－25　「詳細な報道」に該当する選手の登場番組数

選手名	競技	競技結果	詳細な報道をした番組
水谷隼	卓球	シングルス銅／団体銀	11
白井健三	体操	種目別跳馬銅／団体金	9
内村航平	体操	個人総合金／団体金	8
ウサイン・ボルト	陸上	100m金／200m金／400リレー金	6
丹羽孝希	卓球	団体銀	6
吉村真晴	卓球	団体銀	6
ベイカー茉秋	柔道	90キロ級金	6
萩野公介	競泳	400m個人メドレー金／200m個人メドレー銀／800mフリーリレー銅	6
登坂絵莉	レスリング	48キロ級金	5
奥原希望	バドミントン	シングルス銅	5
髙橋麗華	バドミントン	ダブルス金	5
松友美佐紀	バドミントン	ダブルス金	5
福原愛	卓球	団体銅	5
伊藤美誠	卓球	団体銅	5
乾友紀子	シンクロナイズドスイミング	デュエット銅／チーム銅	5
田知本遥	柔道	70キロ級金	5
太田忍	レスリング	59キロ級銀	4
伊調馨	レスリング	58キロ級金	4
土性沙羅	レスリング	69キロ級金	4
吉田沙保里	レスリング	53キロ級銀	4
山口茜	バドミントン	ベスト8	4
錦織圭	テニス	シングルス銅	4
石川佳純	卓球	団体銅	4
三井梨紗子	シンクロナイズドスイミング	デュエット銅／チーム銅	4
大野将平	柔道	73キロ級金	4
松本薫	柔道	57キロ級銅	4
永瀬貴規	柔道	81キロ級銅	4
瀬戸大也	競泳	400m個人メドレー銅	4
坂井聖人	競泳	200mバタフライ銀	4
金藤理絵	競泳	200m平泳ぎ金	4
羽根田卓也	カヌー	スラローム銅	4
川井梨紗子	レスリング	63キロ級金	3
山縣亮太	陸上	400mリレー銀	3
ケンブリッジ飛鳥	陸上	400mリレー銀	3
羽賀龍之介	柔道	100キロ級銅	3
池江璃花子	競泳	100mバタフライ5位／800mフリーリレー8位	3
小堀勇気	競泳	800mフリーリレー銅	3
松田丈志	競泳	800mフリーリレー銅	3
星奈津美	競泳	200mバタフライ銅	3
新井涼平	陸上	11位	2
渡嘉敷来夢	バスケットボール	ベスト8	2
山室光史	体操	団体金	2
加藤凌平	体操	団体金	2
田中佑典	体操	団体金	2
オレグ・ベルニャエフ	体操	個人総合銀／種目別平行棒金	2
海老沼匡	柔道	66キロ級銅	2
中村美里	柔道	52キロ級銅	2
浅野拓磨	サッカー	予選リーグ敗退	2
江原騎士	競泳	800mフリーリレー銅	2
ヘレン・マルーリス	レスリング	53キロ級金	1
桐生祥秀	陸上	400mリレー銀	1
ウェイド・バンニーキルク	陸上	400m金	1
猫ひろし	陸上	マラソン出場	1
右代啓祐	陸上	10種競技出場	1
ラファエラ・シルバ	柔道	57キロ級金	1
原沢久喜	柔道	100キロ超級銀	1
高藤直寿	柔道	60キロ級銅	1
小関也朱篤	競泳	100m平泳ぎ6位／200m平泳ぎ5位 400mメドレーリレー5位	1
マイケル・フェルプス	競泳	100mバタフライ銀／200mバタフライ金／200m個人メドレー金／400mフリーリレー金／800mフリーリレー金／400メドレーリレー金	1
平井康翔	競泳	オープンウォーター8位	1

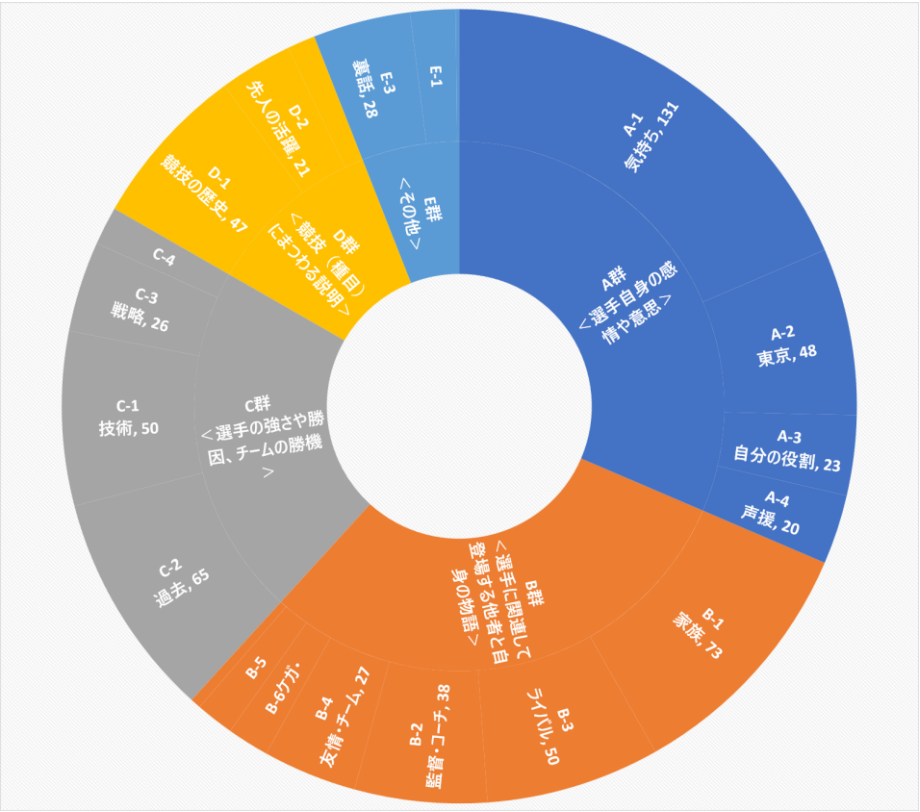
黄色い色で示されている選手たちはメダリストである。登場番組数からはメダル獲得選

手および人気選手偏重報道が端的に示されているといえるが、特に上位の水谷選手、白井選手、内村選手らが出場した卓球や体操は、シングルスや個人総合から、団体、そして体操は種目別など日程が長きにわたっており、複数の番組がこれらの選手たちに着目した理由にもなっていると考えられる。

表 3－26　選手の報道内容を構成する要素とグルーピング (1) (N=706)

A群 ＜選手自身の感情や意思＞				B群 ＜選手に関連して登場する他者と自身の物語＞						
A-1 気持ち	A-2 東京	A-3 自分の役割	A-4 声援	B-1 家族	B-2 監督・コーチ	B-3 ライバル	B-4 友情・チーム	B-5 地元	B-6 ケガ・病気	B-7 食事
131	48	23	20	73	38	50	27	11	12	3
C群 ＜選手の強さや勝因、チームの勝機＞				D群 ＜競技（種目）にまつわる説明＞			E群 ＜その他＞			全要素の合計
C-1 技術	C-2 過去	C-3 戦略	C-4 身体的特徴・身体能力	D-1 競技の歴史	D-2 先人の活躍	D-3 競技の特徴	E-1 私生活	E-2 波乱	E-3 裏話	
50	65	26	11	47	21	8	13	1	28	706

図 3－24　選手の報道内容を構成する要素とそのグルーピング（2）



選手の報道から、21 の要素に該当するものをカウントし、それらを A～E の 5 つにグルーピングしたものが表 3－26 であり、A 群～E 群がニュースにどのように配分されていたのかを最もわかりやすいサンバーストで表したのが図 3－24 である。

選手の報道内容は、A 群に該当するものが 222 件（31.4%）、B 群が 214 (30.3%)、C 群が 152 件（21.5%）、D 群が 76 件（10.8%）、そして E 群が 42 件（5.9%）であった。ニュース番組のオリンピック報道のなかで、「人間ドラマ」を構成する要素を多く含む A 群と B 群の合計が 61.7%と多くを占めていることがわかる。

A 群は主に選手の発言・発信がメインとなっている項目であるが、そのなかで最も多いのが選手の「気持ち（A-1)」で 18.6%を占めている。これは、メダリストおよびメダルまであと一歩と期待のかかる選手が、嬉しさや悔しさ、驚異の追い上げの最中の気持ちなどをインタビューあるいは生出演で語ったものである。それ以外に次回大会が母国開催であることから東京大会を意識した発言が多く見られ、「東京（A-2)」は 6.8%、今大会では団体競技のメダリストが多く輩出されたことで、競技の中における「自分の役割（A-3)」を語る選手もおり、3.3%となった。

B～E 群は主にメディア側が付与した要素である。

B 群は、選手報道を「人間ドラマ」に仕立てるうえで重要な要素を提供していると考えられるが、「家族（B-1)」が 10.3%と最も多く、「ライバル（B-3)」7.1%「監督・コーチ（B-2)」5.4%「友情・チーム（B-4)」3.8%と続き、これらの合計が、30.3%のうち 26.6%を占めている。選手に関連して登場するものとして「人間」が欠かせないことがわかる。「人間ドラマ」に収容される「人間」が登場した合計 26.6%は、「気持ち（A-1)」の 18.6%を超えて最も大きい範囲を占めている。

C 群と D 群は、合計すると 30%を超える比率だ。これはスポーツの迫力や選手の技術、競技そのものを伝える報道がそれなりの比重を占めていることを示唆するものである。しかしながら、A 群と B 群の合計 61.7%と比べると半分以下にすぎず、「人間ドラマ」仕立ての報道の優位性が示唆されているといえよう。

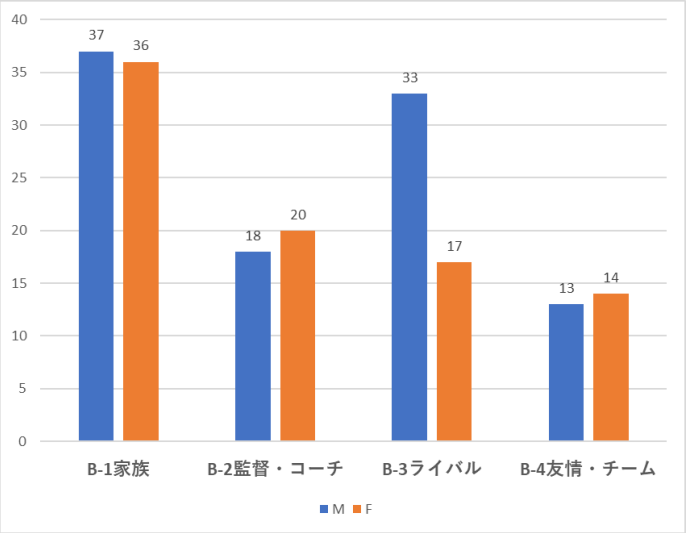
また、E 群にグルーピングされる私生活やプライベート、裏話を扱う要素は、わずか 6%と非常に少ないことがわかる。ニュースの報道において、日本選手の私生活やプライベートが取り上げられることはきわめて稀なのである。しかし稀だからこそ時に報じられると奇妙に映るのかもしれない。これについては、次章第 2 節でジェンダーバイアスとも絡めて検討することにしたい。

1）報道を構成する要素からみたジェンダー差

ところで、先にも述べたようにメディア側が付与した B 群は、選手報道を「人間ドラマ」に仕立てるうえで重要な要素を提供していると考えられるが、そこには先行研究で指摘されてきたようなジェンダー差の問題が存在するのだろうか。

B 群＜選手に関連して登場する他者と自身の物語＞のなかでも他者との関係を示す B-1 から B-4 までの要素について、男女別に再集計したのが図 3－25 である。

図 3－25　B 群の男女別集計（男性選手 N=101、女性選手 N＝87）



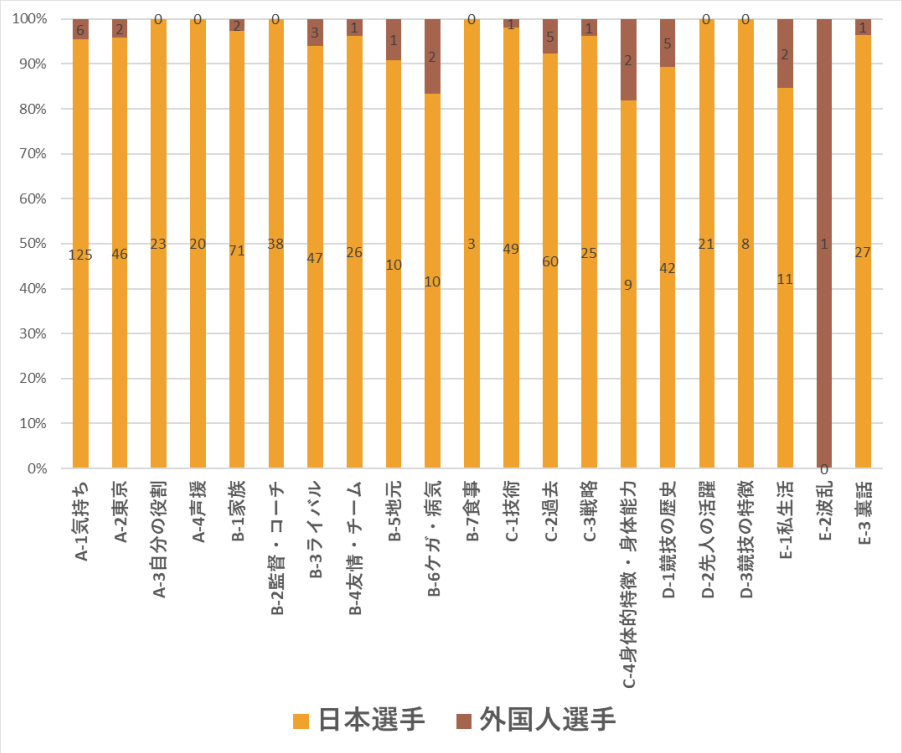
男女比で見ると、女性が 46.5%で男性が 53.5%と、人間関係を描かれたのは男性の比率のほうが高い。しかし、前掲図 3－8 でみたように男性選手の方がニュースに取り上げられた比率が高いことを考慮するならば、この結果についてもほとんど差異がないととらえるべきであろう。

男女とも第 1 位が「家族（B-1)」でほぼ同数である。また男女とも 4 位が「友情・チーム（B-4)」で、こちらもほぼ同数である。男女で逆転しているのが、第 2 位と 3 位である。男性の第 2 位が「ライバル（B-3)」で全体の 17.7%、3 位が「監督・コーチ（B-2)」で 9.0%であるのに対して、女性は 2 位が「監督・コーチ（B-2)」で 10.7%、3 位が「ライバル（B-3)」で 9.1%である。女性選手の報道では、2 位と 3 位に大きな差はないが、男性選手は「監督・コーチ（B-2)」よりも圧倒的に「ライバル（B-3)」が報じられている。ライバル関係は選手の男性性を、監督・コーチとの関係は女性性を強調するうえでそれぞれ有効な要素である（阿部 2008:78、稲葉 2001：172-8 ほか）と一般的にとらえられていることを考慮するならば、この差異は重要である。この点については、次章第 2 節で丁寧に読み解いていくことにしたい。

2）報道を構成する要素からみた国籍の差

続いて、日本選手と外国人選手の報道を構成する要素について、その差を比較してみたのが図 3－26 である。総数 706 に対して、日本選手の要素の合計は 671（95.0%）を占めるのに対して、外国人選手については 35（5.0%）であった。

図 3－26　A～E 群の報道差（日本選手 N＝671、外国人選手 N=35）



「波乱（E-1）」が異質なデータに見えるが、これは、女子レスリングのマルーリス選手（アメリカ）が 53 キロ級で吉田選手に勝利し金メダルを獲得したことを受けて各国メディアが波乱として報じたことを日本のニュースが伝えたからである（テレ朝「報ステ」8 月 19 日放送）。また、日本選手でよく報じられていた「家族（B-1）」～「友情・チーム（B-4）」の値は低く、外国人選手の報道は、「ケガ・病気（B-6）」や「身体的特徴・身体能力（C-4）」「競技の歴史（D-1）」といった「人間ドラマ」よりも、競技結果に直結するような要素によって構成されていることがわかる。これについては、さらに詳細に読み解いていく必要があるだろう。

本章のまとめ

本章では、5 つの地上波放送の夜のニュース番組を対象として、量的内容分析を試みた。その結果明らかになった点について、若干の補足も加えながらまとめておきたい。

リオ大会期間中各番組は、リオに取材陣を派遣し、現地特設スタジオからオリンピックという特別体制でリオ大会を報道するだけでなく、トップニュースや報道の順序といった番組構成そのものが通常とは異なるものとなった。本来、社会の出来事を伝える目的のニュース番組が、リオ大会期間中には「スポーツ」のニュース本数が、「社会」の次に多い 27.6%にまで増加し、その中でもオリンピックへの注目度が NHK、日テレ、テレ朝、TBS で特に高かった。また、オリンピックをトップニュースにした頻度が高い局ほどオリンピックの報

道時間が長いという傾向が見られ、特にそれが顕著なのが NHK であった。NHK のオリンピックニュースの報道量は 5 局中で突出しており、番組の 74.1%を占める日もあった。NHK のリオ大会の放送時間が全局の中で突出していることは前章でみたとおりだが、ニュース番組においても同様にオリンピック色が強烈なのである。これは公共放送としての意義に照らして再考すべき問題であろう。また、NHK にとどまらず、リオ大会報道は民放各局でも番組構成上重要な位置および比重を占めており、大会期間中における各番組の最重要項目としてニュース報道の中心を占めていたといえよう。

ニュース番組によるリオ大会報道の内容は、どのようなものだったのか。競技に着目して報道件数を分析してみた結果、ニュースで取り上げられた競技の傾向は、前章で明らかとなった注目中継競技とほぼ合致していたことが明らかになった。地上波で放送された競技の生中継は 39 競技中 26 競技（66.7%）であったが、ニュース番組では全 39 競技中 24 競技（61.5%）であった。最も多く取り上げられたのは卓球で、以下、柔道、競泳、陸上、体操と続く。競技によってニュースへの登場件数には大きな差があるが、日本のテレビ局が注目していた中継競技がニュースでも継続して注目され、日本選手がメダル獲得した 11 競技はすべてニュースで報じられていた。つまり日本選手の活躍＝メダル獲得が、リオ大会報道の主軸となっているということである。

次に報道画面に登場した競技関係者をすべてカウントしてみた結果、最多が〈選手〉であることが分かった。10 日間、38 番組の中で、288 人もの選手たちがナレーションの中やテロップという形で番組内に登場していた。そのうちメダリストは 146 人（50.7%）であり、一見非メダリストも平等に扱われているように見えるが、報道件数に着目すると、メダリストが 631 回（69.8%）と約 7 割を占めているに対して、非メダリストは 273 回（30.2%）とその差が 2 倍以上ある。そのうち最も報道件数が多かったのは、卓球の福原愛選手、水谷隼選手で、二人とも団体戦でメダルを獲得し、シングルスも福原選手は 4 位、水谷選手は銅メダルと好成績を残した。番組に登場した非メダリストの多くが、日本メダリストの対戦相手やライバルであったと考えられるが、そこには入賞を果たした日本選手も多数含まれている。これは、ニュース番組がメダリスト一辺倒ではなく、入賞者もニュース価値があるものと位置づけていることの証左であるが、そこには次の東京大会に向けた注目選手をピックアップするという意図もあったのかもしれない。

ニュース番組に登場した選手をジェンダーの観点から検討した結果、従来からの指摘のとおり、全体を通して男性選手よりも女性選手のほうが報道量が少ないという事実が確認された。報道された選手のうち男性は 161 人（55.9%）、報道された件数も男性が 490 件（54.2%）である。この事実に関しては、ジェンダーバイアスによるものというよりも、競技成績によるものとみるべきであろう。日本選手が獲得したメダルの 56.1%が男性選手によるものであるからだ。

ニュース番組に登場した選手の国籍に着目してみると、日本選手 116 人（40.3%）、外国人選手は 172 人（59.7%）で、外国人選手が多いという意外な事実が判明した。しかし、報道件数で見ると逆転し、日本選手が 574 回、外国人選手が 330 回であり、やはり日本選手の方が多い。

以上のような選手たちの報道実態をさらに「競技結果のみの報道」「競技結果＋α の報道」「詳細な報道」の 3 つに分類して、より詳細な検討を試みたところ、以下のような点が明ら

かになった。

第 1 に、日本選手と外国人選手の扱いに関する差異である。「競技結果のみの報道」が 177 人（61.4%）と最も多く、「詳細な報道」に該当する選手は 60 人（20.8%）と全体の 2 割程度、「競技結果＋α の報道」は 51 人（17.7%）であるが、日本選手と外国人選手の割合が均衡しているのは「競技結果＋α の報道」だけであり、あとの２つでは格差が明瞭である。「詳細な報道」に該当する外国人選手はわずかに 7 人（選手全体の 2.4%、外国人選手の 4.1%）で、日本選手が 53 人（選手全体の 18.4%、日本選手の 45.7%）である。逆に「競技結果のみの報道」は、外国人選手が 137 人（選手全体の 47.6%%、外国人選手の 79.7%）、日本選手が 40 人（選手全体の 13.9%、日本選手の 34.5%）であり、外国人選手のうちの 83 人（46.9%）が日本選手の「対戦相手」として登場している。ニュース番組の報道が日本選手を中心になされていることが、改めて浮き彫りになった。

第 2 に、上記の国籍による差異ほどではないが、ジェンダーによる差異も認められる。「競技結果＋α の報道」では、男性選手の「＋α」の内容が競技力の高さを基本としたものとなっているのに対して、女性選手の場合は、家族構成や年齢、宗教、人種といった事柄であり、明確な違いがみられる。女性選手のほうが競技力以外の理由でニュースに取り上げられていることを示しており、ジェンダーバイアスの存在を確認することができる。

第 3 に、特定の選手に偏重した報道の実態である。「詳細な報道」がなされた選手は 60 人（20.8%）で全体の 2 割程度であるが、報道件数は 481（53.2%）と半数以上を占めている。先にも述べたようにこのうち外国人選手はわずか 7 人に過ぎない。これは、ニュース番組が自国の少数の選手にフォーカスし、同じ選手を幾度も登場させているということを意味しており、メディアによる「人気選手」の生産プロセスを示すものであるといえよう。

「詳細な報道」には、事前取材映像や選手の生出演映像などが含まれているが、その内容はどのようなもので構成されているのか。報道内容を構成する要素を 21 項目に区分し、それを A～E 群の計 5 つにグルーピングするという手法を用いてこの点を検討した結果、以下のようなことが明らかになった。

第 1 に、「詳細な報道」がなされた選手 60 人の報道内容を構成する要素の合計は 706 個、選手報道件数 1 件あたり最大で 12、平均で 3.3 個の要素によって構成されている。

第 2 に、それらの構成要素の偏在が、「詳細な報道」の多くを「人間ドラマ」仕立てにしていることを示唆している。「人間ドラマ」を構成する要素を多く含む A 群〈選手自身の感情や意志〉が 222 個（31.4%）、B 群〈選手に関連して登場する他者と自身の物語〉が 214 個(30.3%)、合計すると 61.7%を占めており、そのなかで最多の要素が、選手の「気持ち（A-1）」で 131 個（18.6%）であり、次が「家族（B-1）」で 72 個（10.3%）である。

第 3 に、スポーツの迫力や選手の技術、競技そのものを伝える報道内容もそれなりの比重を占めていることが示唆されている。C 群〈選手の強さや勝因、チームの勝機〉が 152 件（21.5%）、D 群〈競技（種目）にまつわる説明〉が 76 件（10.8%）、合計 228 個（32.3%）である。ただし、この数値は A 群と B 群の合計 61.7%と比べると半分以下にすぎず、「人間ドラマ」仕立て報道の優位性を示唆するものとなっている。

第 4 に、外国人選手 7 人の報道については、「ケガ・病気（B-6）」や「身体的特徴・身体能力（C-4）」「競技の歴史（D-1）」といった「人間ドラマ」よりも、競技結果に直結するような要素によって構成されているという差異が認められる。

第 5 に、ジェンダーによる差異が認められるのは、男性選手の報道では「監督・コーチ（B-2 ）」（9.0%）よりも圧倒的に「ライバル（B-3)」（17.7%）の要素が多いという点であり、ライバル関係は選手の男性性を、監督・コーチとの関係は女性性を強調する有効な要素であるという先行研究の指摘を考慮するならば、この差異は重要であると考えられる。

第４章　ニュース番組によるリオ大会報道（２）：選手／競技の報道に関する質的内容分析

本章の課題

前章の量的内容分析をふまえて、本章では、ニュース番組によるリオ大会報道のナレーションやキャスターによる言葉、選手の言葉、さらにテロップや映像表現を対象として質的内容分析を行う。それによって、リオ大会報道の内実により接近したい。

人間ドラマやヒューマンストーリー、人情話など、競技以外の面をクローズアップしているスポーツ報道に対する批判は、これまでも多くなされてきている（藤原 1988、森田 2009、滝口 2008、深沢 2009、大野 1996、稲垣 2017、トンプソン 2017）。たとえばトンプソンは、アメリカ NBC の放送について、制作者らがオリンピック開催が決まった時点から数年間にわたり各選手の取材を入念に行ってきたことが、逆に選手たちの競技を生で見せるよりも、活躍した選手の過去のパッケージ報道や「人情話」が増えてしまうという矛盾や選手の試練を強調するといった「競技以外の側面」を誇張する報道を生み出していると指摘している（トンプソン 2017:28-31）。

なかでも、日本選手の描写におけるジェンダー差は顕著で、「家族」や「師弟」として描かれる関係性において、特に女性選手が「男の眼差し」に守られ、「性別役割分業」という固定概念にさらされることで、選手（女性）の業績が監督・コーチ（男性）によって矮小化される報道が後を絶たないこと、さらには、「〇〇ちゃん」や「〇〇王子」といった愛称で選手が呼ばれることも選手の業績の矮小化につながるなどと問題視されてきた（飯田 2001、稲葉 2001、森田 2009、小林 2017、2019、2020、山田 2021）。

他方、外国人選手の描写は、主にライバル扱いが多く、日本選手の価値が外国人選手らの活躍によってさらに高められていることなどが指摘されてきたが（上瀬 2007、太田 2017）、前章の分析でも、報道件数が多い外国人選手の報道にはライバル扱いが多いことが確認された（前掲図 3－20）。外国人選手が日本選手を称揚するための道具として扱われているということである。さらに日本選手の戦い方や身体の描写についてトンプソンは、日本のメディアが「日本人種」ともいうべきステレオタイプ化を行っていると指摘している（トンプソン 2008：36）。

本章の第 1 の課題は、先行研究で指摘されてきた「競技以外の側面」のクローズアップやジェンダーバイアス、外国人選手の描写、日本選手の身体や戦い方のステレオタイプ化の実態について、ニュース番組の中のリオ大会の報道映像を対象にして実証的な検討を行なうことである。ジェンダーバイアスが生む報道内容の差異については一定の研究蓄積があるが、自国の選手以外の外国人選手報道の内容を細かに検証したものはほぼ皆無である。また、先行研究で競技以外の面のクローズアップとして問題視されてきた人間ドラマ化も含めて、こうした報道内容への批判が恣意的な対象の選択によるものか否かを含めた検討が必要であろう。

第 2 の課題は、上記の第 1 の課題とも重なるが、前章の量的内容分析によって浮上した選手報道に関する論点を質的内容分析によって検討することである。前章の第 4 節で、選

手報道の内容に踏み込んだ検討を行ない、「詳細な報道」がなされた 60 人（全体の 20.8%）の選手について、その報道内容を構成する要素を数値化した結果、B 群＜選手に関連して登場する他者と自身の物語＞の中でも「家族（B-1）」～「友情・チーム（B-4）」の合計が 26.6%と報道内容の 4 分の 1 以上を占め、報道の視点が特に人間関係に偏っている可能性が示唆された[124]。また、そこにはジェンダー差が存在し、特に差が大きかったのが男性選手が「ライバル（B-3）」、女性選手が「監督・コーチ（B-2）」との関係に関する情報が付与されがちであることが数値によって示唆されている。特徴的な事例によって検討を試みたい。他方、外国人選手 7 人については、人間関係（B-1～4）に関する値は低く、それ以上に「ケガ・病気（B-6）」や「身体的特徴・身体能力（C-4）」「競技の歴史（D-1）」のような競技結果に直結する要素が高い数値を示している。実際の映像はどのようなものなのか。

他方、競技による報道量の差が大きいことも、報道件数の分析によって明らかになった。報道件数が多かった上位 5 つは、卓球、柔道、競泳、陸上、体操である。こうした格差を生み出している最大の要因は日本人メダリストの有無であると考えられるが、特に陸上を除いた 4 競技は、メダル獲得の可能性が高い競技として期待され、日本のテレビ局による中継競技・種目の編成の中心に据えられていた。したがって、各局によって事前取材による選手や競技に関する映像の準備もしっかりとなされていたはずである。これらの競技の報道内容にはどのような特徴があるのか。また、逆にそれ以外のメダル獲得の可能性が低い競技や認知度自体が低いマイナーの競技の報道内容にはどのような特徴があるのか。

以上のような論点を検討するために具体的な報道映像をピックアップし、各論点に沿った分析を行なう。

第 3 の課題は、日本選手の競技結果以外を主役にした報道の検討である。上記の第 2 の課題のうちの競技を主役にした報道もここに含まれるが、それ以外にも、選手の身体能力、「日本の戦い方」、競技力向上の理由、競技自体についての情報や練習方法、監督を主役とした報道がある。こうした報道の実態についての検討である。

第 4 の課題は、オリンピック理念との関連でニュース番組のリオ大会報道のあり方を検討することである。メダル獲得総数の報道、平和の視点からの報道、スキャンダルやドーピング問題についての報道が、それぞれどのようになされたのかを明らかにする。「特に、巨大化した五輪の問題点を批判的に伝えることは主要なテレビ・新聞が挙国一致（オールジャパン）体制でコミットした日本においては、難しい」(砂川 2016:13)との指摘がなされているが、これらの検討を通してその実態についても迫ってみたい。

本章の構成は以下の通りである。第 1 節では、選手の家族の報道に着目し、家族＝指導者であるケースとの区別をはかりながら、人間ドラマ化との批判が多い報道の内実をジェンダー差も含めて明らかにする。第 2 節ではジェンダー問題に焦点を当て、監督・コーチと選手の関係性、あだ名や愛称、プライベートの表現、性別役割分業、パワーやライバルという男性性、LGBTQ の描き方について検討を行なう。第 3 節では「詳細な報道」がなされた外国人選手を対象にし、彼らがどのような存在として描かれ、注目されたのかを検討する。第 4 節では、選手以外を主役にした報道の実態について検討を試みる。第 5 節では、オリンピ

[124] なお、まったく人間関係が報じられなかった選手は、陸上の新井、右代、猫、競泳の平井、バスケットボールの渡嘉敷、柔道のシルバのみであった。これ以外の選手は必ず人間関係に言及されていた。

ック理念との関連でニュース番組のリオ大会報道のあり方を検討する。その際対象に据えるのは、メダル獲得総数の報道、平和の視点からの報道、ドーピング問題などの報道である。

第１節　家族と人間ドラマ

メダリストの報道には、多くの場合その家族が登場する[125]。メディアによって付与された家族の報道内容とはどのようなものがあったのか。例えば家族による喜びや選手への労いの言葉は、選手の苦労をよく知り、選手がなした偉業を誰よりも喜ぶ人間の姿に他ならず、視聴者を共鳴させる効果を持つ。ここでは「人間ドラマ」を構成する要素としての家族の中でも、家族が選手を支えるもの、また、選手が感謝すべき対象として描かれている点に焦点を絞り、「支えとしての家族」というメディア側が用意した人間ドラマのフォーマットを明らかにしてみたい。

分析の対象とするのは、前章で「詳細な報道」に分類した選手の報道内容を構成する要素の「家族（B-1)」73 件（前掲表 3－26）であり、そこに登場する女性選手 17 人、男性選手 18 人、計 35 人の選手の家族である。女性選手 17 人のうち①応援する家族が登場したり家族への思いに言及するシーンのみが報道されたのが、シンクロの乾選手、三井選手、レスリングの土性選手の 3 人、②指導者である親との関係性が強調されたのは、卓球の福原選手、石川選手、伊藤選手、レスリングの川井選手、登坂選手の 5 人、そして③家族の支えを重視した描写がなされたのは、柔道の田知本選手、松本選手、中村選手、競泳の金藤選手、星選手、レスリングの伊調選手、吉田選手、バドミントンの松友選手、高橋選手の 9 人である。一方、男性選手 18 人のうち、①応援する家族が登場したり家族への思いに言及するシーンのみが報道されたのが、体操の田中選手、山室選手、競泳のフェルプス選手、坂井選手、萩野選手、小堀選手、卓球の吉村選手、丹羽選手、陸上のボルト選手の 9 人、②家族が指導者として描かれたのが、体操の白井選手、卓球の水谷選手、レスリングの太田選手の 3 人、③家族とのエピソードを少々深掘りしたのが柔道の永瀬選手、カヌーの羽根田選手、サッカーの浅野選手の 3 人、④家族の支えを強調したのが体操の内村選手や柔道の海老沼選手、ベイカー選手の 3 人の報道であった。

この人数比は、女性選手は半数以上が家族の支えを中心に据えた描き方がなされているが、男性の場合はその 3 分の 1 であるということを示している。

以上のような報道内容をふまえて、本節では、家族＝指導者であるケースとの区別をはかりながら、その内実をより詳細に明らかにする。

---

125 そのような傾向はメダリストになって以降に顕著にみられる傾向であり、それ以前の報道では家族が登場することは稀である。たとえば、リオ大会では時差が大きいことからニュース番組の中で、選手が活躍した結果を伝えるだけではなく、番組の後で中継される競技で活躍しそうな選手を取り上げるケースがあった。柔道の原沢久喜選手、レスリングの吉田沙保里選手、バドミントンの奥原希望選手、陸上男子 400mリレーの 3 人（桐生選手、ケンブリッジ選手、山縣選手)、陸上の新井涼平選手、競泳の小関也朱篤選手、バドミントンの山口茜選手の計 9 人の選手であり、うち 6 人がメダリストとなった。こうした競技開始の直前の選手報道では家族は登場せず、選手の練習姿勢や対戦相手の強さといった競技に関する内容が報道の中心を構成している。

1．選手を支え、選手が感謝すべきものとしての家族

事例①　8 月 11 日の日テレ「ZERO」には、女子柔道で唯一の金メダリストとなった田知本遥選手の姉が登場する。

ナレ：そして田知本遥 26 歳。ニッポン柔道女子リオで初の金メダル。
田知本：ずっとほしかったものが今こうして手元にあることが信じられないです。
ナレ：そして真っ先に会いに行ったのが姉の愛さんだった。金メダルが妹から姉へ。実は田知本のそばにはいつも愛さんがいた。
＞2004 年中学時代、2006 年、2011 年
ナレ：姉の愛さんとともに男子相手に稽古をしていた田知本。
田知本（当時中学 1 年生）：やっぱ喧嘩はするけどすごいと思います。
ナレ：姉妹でオリンピックへそれが夢だった。ところが今回田知本がリオ行きを決めた一方、姉の愛さんが膝を痛め敗退。夢は叶わなかった。落ち込む田知本。励ましたのはより悔しいはずの愛さんだった。
＞映像：2016 年 6 月
田知本：本当にショックだったんですけど、姉がそんなの関係なくサポートしてくれているので。本当に自分頑張らなきゃなという思いです。
＞映像：決勝
ナレ：そして迎えた決勝の舞台。姉の愛さんもスタンドから見守る。開始から 2 分技ありを奪いそこから押さえ込みへ。いつも一緒に戦ってくれた姉愛さん。
姉・愛：言葉にならないくらい感動しました。金メダルもかけてもらえて、本当にこれ以上ないなと。
ナレ：姉妹で手にした金メダル。
田知本：お互いに常にそばにいて感じるものもあったし、まさかそんな泣いて喜んでくれると思わなくてこっちも泣いちゃいました。

番組写真 4－1 日テレ「ZERO」（8 月 11 日放送）

「姉妹で手にした金メダル」という言葉に象徴されているように、ナレーションで幾度も連呼される「姉」という言葉が、田知本が姉の支えなしでは金メダルを獲得できなかったか

のような印象を与え、また、支え合いや感謝という「人間ドラマ」が構築されていることがわかる。

事例②　同日の同番組では、競泳の星奈津美選手についても報道したが、最初のナレーションは「母に守られた星が銅メダルを獲得しました」だった。

星母：たぶん面と向かってはそんなに言えないと思うんですけど、本当に今までありがとうということを伝えたいです。私自身は娘を支えていたという感覚よりかはどちらかというと、私が娘に支えられていたような感じがあるので、とにかく今すごく娘に感謝しています。 星：いやあもう。本当にそうですね。あの、いろんなことたぶん本当に一番近くで戦ってくれたと思うので、私も本当に同じ気持ちです。 ラルフ：手術もなさってかなり苦しい時期も。 ＞映像：手術後、練習 2014 年 11 月 星：その当時も、24 歳の私と本当に毎日病院に通ってくれて、常に安心感を与えてくれて、一番近くで支えてもらいました。 村尾：最後の追い上げがすごかった。お母さんの思いがゴールに向けて押していたような、最後の 50 どんな思いで？ 星：最後の 50m は今でも鮮明に覚えているんですけど、LINE のやりとりでも言ったように、絶対あきらめないという気持ちで。ま、それは母のためにもそうですし、応援してくれているみなさんのためにも絶対あきらめないで最後まで泳ぎ切ろうという気持ちでした。

星選手は前年の世界選手権でこの種目の金メダリストであり、ロンドン大会でも銅メダルを獲得し 2 大会連続メダルが期待された選手であった。番組内では、彼女の競技レベルの高さは紹介されているものの、母の支えというエピソードがメインを占め、さらに最後の追い上げについて「お母さんの思いがゴールに向けて押していたような」と形容されている。

事例③　12 日には金メダルを獲得した競泳の金藤理絵選手が伝えらえた。彼女には「監督・コーチ」のエピソードが多く付与されたが[126]、それ以外にも家族、姉の支えとして 2013 年の姉の結婚式でのサプライズ映像を公開し、金藤選手を応援する母の新聞切り抜きや同級生、加藤コーチからのメッセージが姉の結婚式で読み上げられたことを伝えた。これを受け金藤選手が「もういいかなっていう気持ちはすごく大きかったんですが、加藤コーチにずっと引きとめられ、やりたくなくてもやるんだ、頑張らざるを得ないじゃんみたいな」と過去の発言がクローズアップされた（日テレ「ZERO」8 月 12 日）。

田知本選手と金藤選手はどちらも今大会の前半の日程で誕生した女子個人種目の金メダリストである。田知本選手の結果を伝えた 8 月 11 日のニュースはこのほかに NHK「NW9」とテレ朝「報ステ」があり、どちらも姉との絆がメインに描かれていた。金藤選手の結果を伝えた 8 月 12 日のニュースでは、これ以外に NHK「NW9」と TBS「N23」が姉とのエピ

126 「監督・コーチ」の描き方については第 2 節でより詳しく論じることとする。

ソードを報じた[127]。

事例④　日テレ「ZERO」はバドミントンダブルスについて、ナレーションが「歓喜の瞬間は家族も見守っていた」と伝え、家族のインタビューを流した。

松友母：私にしたら夢のような。誰の子だろうって感じなんですけど。 高橋母：最後まであきらめず 2 人で頑張って獲った金だと思います。 松友父：親孝行もんやね。 高橋父（奈良から）：嫌がられるのはわかっているので抱きしめるのはやめておきます。 松友祖父・祖母（徳島から）：だてに 10 年はしてないわあ。帰ってきたらなシジミの味噌汁が好きなんよ、一番先にあげるわ。

このように、「見守っていた」家族からの言葉を立て続けに流し、金メダル獲得が「見守られた」末の親（祖父母）孝行物語として描かれている。

事例⑤　銅メダルを獲得した柔道の中村美里選手は、8 月 8 日の NHK「NW9」生出演中にキャスターから「ロンドン大会の後には膝の手術もありまして苦しい時期もあったと思います。ご両親の支えをどのように感じていましたか」と質問される。両親の映像が背景に流れるなか、以下のようなやり取りがされる。

中村：やっぱりいつも身近で支えてくれた大切な存在だったので、今回も応援にきてくれて力になりました。 佐々木：3 回もオリンピックにつれてきてくれてありがとうと（ご両親が※筆者注）お話しされていましたけどどんな風に感じましたか。 中村：本当はやっぱり金メダルをかけてあげたかったんですけど、そうやっていろいろ応援に来てもらって、両親も喜んでくれたのでよかったなと思います。

事例⑥　柔道の松本薫選手は、2 連覇がかかるなかで銅メダルを獲得した。松本選手はケガや二連覇の重圧、あだ名である「野獣」などが挙げられながらも、父の支えによる銅メダル獲得の面がクローズアップされる。例えば日テレは、現地リポーターのラルフキャスターが日本のスタジオの桐谷美玲に「日本中が歓喜しました。桐谷さん、興奮しましたか？」と呼びかけ、生インタビューが始まる。

桐谷：本当に興奮しました、お疲れ様でした。松本選手、一番の支えは？ 松本：両親ですね、ロンドンのときは母と約束したんですけど、リオのときは父と約束したオリンピックなので父への思いがすごかったです。 桐谷：どういった具体的なサポートが？ 松本：ロンドン終えてから柔道を続けるかやめるか、悩んでいるときがあってそのときに父が「お父さんをリオにつれてってくれ」って。その一言だけで「わかった薫がつれてくね」

[127] なおテレ朝「報ステ」は、「監督・コーチ」の関係性にクローズアップして報じていた。

って。

同日の TBS「N23」も 3 位決定戦の映像に「父・賢二さんが見守る中 2 大会連続のメダルなるか」とナレーションが読んでいる。

松本 : 金と同じって書いてあるからいいかなって。悔しいですね金メダルを目指して金メダルを獲りたくてやってきたので。
松本父 : 今、薫の顔を見てケガをしていなくてほっとしました。ほっとしたけど悔しいですね。
古谷 : あまずっぱい、酸っぱい思いが。でもお父さんの支えがあったんですね。
高橋尚子 : 松本選手にとってお父さんはヒーローなんですよね。いつも見守ってくれて支えてくれて、本当に松本家で戦ったリオだなと思いました。また終わった後に「Q ちゃんやっちまった～」と駆け寄ってくれたんですね。どんなに苦しくてもいつでも明るく振る舞うその姿は本当に強い選手なんだなと思います。

こうした「支え」の描写は他の報道でも多く見られる。
事例⑦　8 月 18 日の TBS「N23」では、柔道の伊調馨選手が亡くなった母に語った言葉が VTR とともに流れた。

＞映像 : レスリング女子 58 キロ級決勝、国旗と伊調、メダルと伊調）
ナレ : 残り 5 秒。大逆転で女子史上初の 4 連覇を果たした伊調馨。
＞インタビュー
伊調 : やっぱり最後はお母さんが助けてくれました。
＞幼少期の写真、2004 アテネ、2008 北京、2012 ロンドンイチョウ、会場母、部屋の遺影
ナレ : レスリングを始めた頃からずっと支えてくれた母トシさん。スタンドにはいつもお母さんの姿がありました。ところが 2 年前。
＞2014 年 11 月 28 日
ナレ : 別れは突然でした。
伊調 : 母はいつも明るくて優しくてとても強い人でした。いつも母を思い出しながら頑張っていきたいと思います。
＞写真 : 1 月 29 日ヤリギン国際 13 年ぶりの敗戦＊不戦敗を除く、決勝前、会場の父姉、試合終了、遺影を持つ伊調
ナレ : さらに追い打ちをかけるように今年の 1 月 13 年ぶりの敗北、このとき痛めた首は未だに完治していません。痛み止めをうって迎えた今日の決勝。彼女はマットにあがるまえ天を見上げました。
伊調 : 天井を見上げてお母さんのことを思いながらマットに上がった。
ナレ : 決勝の相手は吉田沙保里にも勝ったことのあるロシアのコブロワジョロボワ。1 点のリードを許し試合を折り返します、第 2 ピリオドに入ってもなかなか相手を崩すことが

できず残りあと 10 秒、4 連覇を達成した伊調は家族のもとへ。
＞インタビュー、表彰台
伊調：最後はお母さんが助けてくれました。お母さんにありがとうって言いたいです。よくやったって褒めてくれると思います。
ナレ：表彰台の真ん中に立った伊調は今度は笑顔を浮かべながら天を見上げました。

「やっぱり最後はお母さんが助けてくれた」という伊調選手の言葉から始まった VTR には、実際の伊調選手の行動である「天を見上げる」シーンを映し出し、ナレーションでも補足がある。勝利の後家族に駆け寄るシーンも映し出され、亡き母に捧げる金メダル・4 連覇であることが前面に押し出される。同日のフジ「ユア」も同様だった。北京大会の後に現役に復帰したのは母の言葉だったとして、現地で応援する父と姉のコメントも紹介している。さらに試合後の伊調選手の様子を「母の遺影を愛おしそうに抱えた」とコメントし、インタビュアーの「これまでの金メダルと比べて？」の問いかけに伊調選手は、「母がくれたメダルだと思う。これまで自分がこれたのは家族のおかげ。応援、支えてくれた方がいてここまでこれた。その一人として母の存在が大きかった。こんなにも天井を見上げたオリンピックはない。お母さんありがとう。感謝しかない。ずっといてくれたと思います」と答えている。このように、伊調の声と映像も挿入され、「亡くなった母に捧げる勝利」がよりクローズアップされる。

なお、放送のない日テレ「ZERO」以外の 4 番組すべてが伊調選手と母のエピソードをメインで伝えており、4 連覇という偉大な功績を残した伊調選手を語るエピソードが、軒並み「亡くなった母に捧げる勝利」の物語として描かれているのである。その一方で、伊調選手のアスリートとしての強さの秘訣や戦略などを丁寧に追った報道はほとんどなく、あえてあげるならば、決勝の相手を「吉田沙保里に勝ったこともあるコブロワジョロボワ」と紹介したことや（TBS「N23」、フジ「ユア」）、NHK「NW9」が冒頭から 2004 年のヒット曲『瞳をとじて』（平井堅）を流し 12 年という年月の長さ・凄さを演出し、伊調選手の 4 連覇までの道のりの長さを示してはいる。

事例⑧　次の日、8 月 19 日には吉田沙保里選手が敗北した。吉田は指導者でもある父を亡くしている。日テレ「ZERO」は、冒頭から下記のようなナレーションを読んだ。

ナレ：オリンピック 4 連覇に王手をかけた吉田沙保里、父の栄勝さんが亡くなって迎えた初めてのオリンピック、スタンドからは母幸代さんが見守る。得意のタックルを仕掛けるも攻めきることができない、すると、リードを許す苦しい展開となった。
母・幸代：沙保里大丈夫大丈夫。
ナレ：しかしポイントを奪えない。ショックを隠しきれないチームメートたち（登坂、伊調）
ナレ：泣き崩れる吉田。オリンピック 4 連覇はならなかった。試合後、真っ先に向かったのは家族の元だった。
＞試合終了後 3 人抱き合うシーン
吉田：ごめんなさい。

兄：いいのいいのよくやったよおまえ。
吉田：お父さんに怒られる。
母：ありがとうよく頑張った。
吉田：ごめんなさい。
ナレ：銀メダルでごめんなさい、そう謝り続けた。

伊調選手とともに 4 連覇を目指した吉田選手も、家族の「支え」は欠かせず、さらには「亡くなった父」のために戦ったが敗北し、「お父さんに怒られる」と泣きじゃくる吉田選手を家族が励ましている様子を多くのテレビカメラがとらえ報じた。こちらの報道も家族が軸となっていたことは紛れもない。しかしながら吉田選手については、敗北の理由を元レスリング日本代表の山本美憂が解説したり、テレ朝「報ステ」が勝者となったマルーリス選手を報じることで吉田選手の凄さを掘り下げるなど、日本女子レスリングが強くなった理由を吉田選手に帰すことで吉田選手の強さを印象付ける報道が見られた。

ここまで女性選手について家族を「支え」とするパターンを見てきた。多くの金メダリスト女性選手に、「家族の支え」のエピソードが観察された。では、男性選手はどうだったのか。

事例⑨　体操男子団体の 5 人の選手は、団体金メダルの報道のなかでほとんどの選手の家族がテレビ局のインタビューに答え、選手たちもインタビュアーの問いかけに家族への感謝の気持ちを述べることが多くあった。なかでも、内村選手は団体、個人での金メダル獲得者でもあり注目を集めていた。団体での金メダル獲得時は現地で応援する両親らがクローズアップされていたが、個人での金メダル獲得の際は内村の妻・娘に着目する報道があった。

ナレ：そしてもう一人内村を支えた女性がいる。ニッポンで見守り続けた千穂さん。夫の演技が全て終わると安堵した表情で娘を抱きしめた。
妻：本当に最後の鉄棒はすごく感動して、もうそれと同時にすごくほっとして今はうれしいです。金メダルおめでとうお疲れ様と声をかけてあげたいです。
ナレ：二人が結婚したのは 2012 年実は千穂さん大学時代の先輩後輩で元体操選手、大学日本一に輝いたこともある。
〔…中略…〕
内村：家族の支えがあるからこそより強くなっている自分がいると思うので、そこがだいぶん強みです。
ナレ：夫となり父となって初めて臨んだオリンピック。奇跡の逆転金メダルを獲得し内村が口にしたのは妻への感謝の思いだ。

内村選手は、妻の支えに感謝し、より強くなった結果、夫・父として、奇跡の逆転による金メダルという最高の結果を生み出した選手として描かれる。また、柔道・海老沼選手も妻の支え、妻と二人三脚のメダルという描き方がなされる（NHK「NW9」、TBS「N23」、フジ「ユア」8 月 8 日放送）。なお性別役割分業については次節 4 項で検討したい。

事例⑩　唯一非メダリストで家族が登場したのが、サッカー男子が予選リーグ突破をかけたコロンビア戦の結果を伝えた TBS「N23」の、浅野選手の父である（8 月 8 日放送）。

父・智之：得点を 1 点でもようけ入れてもらってね。本当に勝利してほしいです。
ナレ：家族を大切にすることで知られています。試合前にはこんな LINE も。
＞映像：家族との LINE のやり取り、試合シーン
ナレ：家族のためにもなんとか勝利を掴みたい浅野。チャンスはいきなりやってきた前半 11 分、矢島のシュートのこぼれ球に反応しますがオフサイド判定、前半は有利に試合を進めていた日本ですが、コロンビアに先制点、さらにオウンゴール。この男がやってくれました。細かいパスワークから浅野が豪快にたたき込み 1 点を返します。

今大会でサッカー代表のキーマンの一人だった浅野選手の父親が登場する。その後のナレーションが「家族を大切にすることで知られる」「家族のためにもなんとか勝利を掴みたい浅野」と、家族のための 1 勝を強調する。

事例⑪　カヌーの羽根田卓也選手の家族に注目したのは、日テレ「ZERO」だった。特設スタジオに生出演した柔道の永瀬選手が母について「小さいときから道場から出稽古へ毎日のように送り迎えしてもらって片道 1 時間弱かかるところでも嫌な顔せず送ってくれたので、苦労をかけたのでなんとかよかったです」と話したのち、羽根田選手の父親の家族エピソードが流れる。

＞映像：柔道
ナレ：母が見守るなか。
＞映像：カヌー
ナレ：そして羽根田は父が見守る前で。
田中：10 年前ヨーロッパに単身で飛び立つ決意は？
羽根田：やはりこのカヌースラロームでは日本にはなかなか世界のトップを目指すことは難しい現状なので、ちょうどヨーロッパの遠征先から父親に手紙を書いて自分の気持ちを伝えて「その首にメダルをかけるから」と頭を下げて、だから行かせてくれと。お願いしたところじゃあいってこいと気持ちよく送り出してもらいました。
徳島：もう（メダルは※筆者注）かけた？

羽根田は、武者修行を決めた 10 年前は日本のカヌーは世界のトップを目指すことが難しかったこと、これを家族に頭を下げてお願いすることで支えてもらっている。こうした関係性の中でメダルを獲得することが競技者としての責任や義務であることが発言から読み取れ、さらにこの後「東京では金メダルを」と発言している。

事例⑫　8 月 11 日放送の柔道は先に述べた田知本選手とベイカー茉秋選手のダブル金メダルの日であった。テレ朝「報ステ」は、番組冒頭から二人の金メダルを「家族と共に 2 つの金メダル」と伝える。田知本選手については先にみたとおりであるが、果たしてベイカー選手はどうか。現地で応援する母が、柔道を始めたきっかけを「ピアノの先生から勧められ

て」と語るシーンが挿入され、高校時代に 30 キロ体重を増やしたことなど日本人男子で初の 90 キロ級金メダルという結果を裏付ける体づくりの話がメインとなり、最後に家族が登場する。

番組写真 4−2 テレ朝「報ステ」(8 月 11 日放送)

＞映像：リオ会場には母、千代田区には祖母
ナレ：会場では母ゆかさん。ニッポンでは祖母リナさんが声援を送ります。
＞映像：決勝
ナレ：そして決勝。
祖母：抱きついて喜びたいです。抱きしめたい。
母：家族みんなでサンバ踊りたいくらいの。
ナレ：金メダルを決めた後スタンドを指さした茉秋選手。その先には。
＞映像：インタビュー
ベイカー：家族がたくさん見に来てくれていたので応援もすごく聞こえていたのでそれにいい結果で恩返しできたというか、応えられたので指をさしました。
＞映像：母と記念撮影

母や祖母が数回登場し、家族に応援される選手という構図は見られるが、家族の支えの下でというストーリーよりも、選手自身の強さの秘訣に重点が置かれている。

このほかにも、8 月 10 日の日テレ「ZERO」やテレ朝「報ステ」は、200m バタフライで銀メダルを獲得した競泳の坂井聖人選手について、地元から見守る母のインタビューを紹介したが、その後坂井選手の身体的特徴を紹介するなど家族の支えがメインではない（8 月 8 日 NHK「NW9」ほか)。男女とも、選手自身が「家族や応援してくれた方たちにありがとうと伝えたい」という発言をすることは多くあったが、女性選手の報道に多くみられた「支え」を幾度も繰り返し、過度にキャスターのコメントやナレーションで補う、語らせるといったことは、男性選手の場合にはほとんど見られなかった。このように、選手の家族の報道には、ジェンダー差が明瞭に現れている。

２．家族が指導者の場合

家族の中には、選手の指導者である場合もある。卓球やレスリング、体操がそうである。このケースを取り上げてみたい。

事例①　8 月 12 日の日テレ「ZERO」は、卓球・水谷隼選手について次のように伝えた。

＞映像：試合
ナレ：卓球シングル水谷（27）左手にラケット持つ訳は？左手にラケットをもつサウスポー世界トップクラス、よく見ていると右手で水を飲む、ふだんの生活は右利き。
＞3 歳の写真
ナレ：左手でラケットを持つ。ルーツは父信雄さんが幼い頃から左手で練習をさせていた。
＞過去映像
近藤欽司・元女子日本代表監督：上半身左利き下半身右利きが多彩なショットを生む。
ナレ：14 歳でドイツプロリーグ挑戦、単身武者修行で磨きをかけた粘り強いラリー。
＞昔のインタビュー
水谷：ボールを 1 球でも多く返球するのが得意だったので自らそういう部分を強くしていこうという意識のなかで練習していたのでより一層ほかの選手よりラリーが強いと思う。
＞映像：試合銅メダルかけた
ナレ：父母がみまもるなか水谷が壮絶なラリー戦を見せた。48 回のラリー。日本卓球シングルス史上初の銅メダル。幼い頃から指導しその瞬間を見た信雄さん。
父：小さい頃からの目標が積み重なって一番ほしいメダルがとれたので銅でもすごいうれしい。

父が指導者として卓球を教えていたエピソードが紹介され、さらに強さの秘訣であるサウスポーに着目し、これが父譲りの「技術力」であるとされているのである。

事例②　卓球団体女子の選手たちは、全員の母親が指導者である。しかし、男性選手とは若干描き方が異なる。8 月 17 日の日テレ「ZERO」は、3 人の母へのインタビューを紹介する。

ナレ：3 人の母がそれぞれの思いを胸にスタンドで見守る
福原母：シングルスでまけたときはどうしようとダブルスみんなに支えられてメダルは何色でもいいんです、いただけてよかった。
石川母父：今回は気迫がすごく伝わってきてすごいと思った、よくやったね頑張ったねおめでとう。
伊藤母：銅メダルを取る気持ちだけ、集中していた。ほめてあげたい。
＞表彰台の映像（両親の元に駆け寄る石川記念撮影伊藤も母の首に銅メダルを、福原も母に触らせる）

福原母：25 周年おめでとうございます
ナレ：母にプレゼント。写真に収めた。リオではかなわなかった金メダル。その思いは東京へと続く。

TBS「N23」も母からのメッセージを収録し生出演している選手たちに見せている。

雨宮：試合中は前髪をとめている。母親目線で見てます。母とは？
石川：親もよかったといってくれた。
福原：母にメダルをかけにいった。
伊藤：おめでとうっていって銅メダルをかけてあげた。最近は卓球よりも私生活のほうにアドバイスを。
＞映像：お母さんからのメッセージ
ナレ：伊藤 2 歳で卓球を始める。
伊藤母：素晴らしい試合で感動しましたし。本当に素晴らしいの一言。
ナレ：石川 6 歳で卓球をはじめる。
石川母：卓球のことを考えて、生活中心でメダルを持って帰れてよかったね。
ナレ：福原泣き虫愛ちゃん。
福原母：にこにこになりますね、それがいいこと、四半世紀ですからよく続けて頑張ったねと言いたいですね。
石川：おにぎりに I love you とかいてあって。うれしかった。
伊藤：東京ではこのメダル以上の色をしっかりとりたい。
福原：最高なチームワークとメンバーに囲まれて幸せでした。

「母親目線で見てます」というキャスター雨宮塔子のコメントも加わって、卓球の女性選手たちが「国民の娘」として注目を浴びてきた事実を強調するものとなっている。伊藤は 2 歳、石川は 6 歳、そして福原については「泣き虫愛ちゃん」と呼ばれた頃から紹介しており、卓球の女性選手たちがいかに幼い頃から注目を浴びてテレビに登場してきたかということがよくわかる。しかし、同じ卓球で家族が指導者であった水谷選手と比べてみると、選手の強さにつながるようなコメントはなく、指導者ではなくもっぱら母として描いているという違いがみられる。なお愛称については第 2 節でもまた詳しく見ていきたい。

事例③　女子レスリングの川井梨紗子選手は、母が指導者である。8 月 19 日の NHK「NW9」は、川井選手のメダルを「母に捧げる金」とコメントするとともに、川井選手の母のプロフィールについて、かつて全日本選手権を連覇達成したが当時はオリンピックがなく、コーチとして娘を指導してきたと紹介した。また、川井選手が高校生の時に書いた手紙に「ママが現役の時にとれなかった世界一をとりに行く」と書かれていたというエピソードも紹介された。同日の日テレ「ZERO」も母の指導に着目したが、ニュースの着地点が異なる。

＞映像：女子 63 キロ級決勝

ナレ：吉田の涙からおよそ1時間後。重い雰囲気をいっぺんさせたのが初出場21歳の川井梨紗子だ。
＞映像：2009年、当時中学3年生
ナレ：小学 2 年でレスリングをはじめ、世界選手権に出場経験がある母の指導を受けてきた川井。その後進んだ道は、かつて吉田も汗を流した愛知県の大学だった。
＞映像：決勝開始約30秒、勝った瞬間、栄監督を投げる、家族のもとへ
ナレ：吉田の敗戦後迎えた決勝の舞台。
川井母：あせらないあせらない。
ナレ：相手に1ポイントも与えず攻め続け、レスリング女子4つめの栄冠。そして家族のもとへ。
＞映像：インタビュー
川井：沙保里さんが負けちゃって、何があるかわからないというのが直前にわかりましたし、決勝では絶対攻めて勝って終わろうって。
＞映像：表彰台
ナレ：6階級のうち5階級でメダルを獲得したレスリング女子。栄強化本部長は吉田の存在の大きさを語った。
栄：後輩が頑張ってくれましたよね。吉田はそれが一番気にしてましたから。みんなでみんなでって言ってましたから。
＞映像：表彰台、メダル
ナレ：悔しさそして喜びの涙にぬれたリオ。吉田沙保里と彼女に憧れてきた選手達のオリンピックが幕を閉じた。

川井選手の報道では、「母に捧げる金」「母とつかんだ世界一」とコメントされてはいるが、子どもを支える母というよりも、選手と指導者という関係性が強く出ている。しかしながら日テレはさらにそこに栄監督の言葉を乗せ、直前に吉田選手が敗北したことも踏まえ、レスリング女子の金 4 銀 1 という一人ひとりの選手の結果を「吉田の功績」に繋げてしまう。ほかに、初日に金メダルを獲得した 48 キロ級の登坂選手も父が指導者であったが（NHK「NW9」8 月 18 日放送)、そのエピソードは短く吉田選手との関係性が強く描かれ「吉田の功績」へとつながっていく。

なお、吉田選手自身も父親が指導者であり、そのエピソードが深められてもよかったはずであるが、今大会の報道はそうではなかった。その報道内容は、多くの選手に研究しつくされてきたことや、父が亡くなって初めて迎えるオリンピック、吉田選手に勝利したマルーリス選手が注目されたほか、女子レスリングが吉田選手によって引っ張ってこられたというストーリーであった（NHK「NW9」、日テレ「ZERO」、テレ朝「報ステ」8 月 19 日放送)。

事例④　8 月 15 日のテレ朝「報ステ」は、銀メダル獲得のレスリングの太田忍選手について、「練習量とスタミナに絶対の自信を持つ太田」と紹介するとともに、地元で応援する父と現地で応援する姉の前で銀メダルを獲得した太田選手をクローズアップした。そして太田選手の「小学生のときは家に帰りたくなかった」という言葉や「一言で言うと地獄の毎日。同じことを何度も毎日やる。日付、学校の行事、お盆正月関係なくできるまで終わらない」という父との苛酷な練習の日々を姉の言葉と共に紹介する。このケースも、子どもを支

える父というよりも、選手と指導者という親子関係が押し出され、強さの秘訣につながっている。

事例⑤　体操の白井健三選手は、団体で金メダルを獲得、その後種目別跳馬でもメダルを獲得した。団体戦後は、両親も指導者のため、幼少期の練習風景の映像が NHK、日テレ、TBS で流された。また、各局ともガッツポーズをとる両親の様子やコメントが紹介され、兄弟で競い合う幼少期の映像に「負けず嫌い」というコメントが付与されたりもした。

このように家族が指導者である場合には、通常の家族の描かれ方とは異なり、選手と指導者という関係性やそこにみられる強さの秘訣に重点が置かれていることがわかる。しかし、そこにもジェンダー差がみられる。特に幼少期から注目度の高い女子卓球選手の場合は、指導者ではなくもっぱら「見守る」母として描かれていたのである。

第２節　ジェンダー問題

従来の研究では、報道量のジェンダー差に加えて、選手と監督の関係、特に女性選手と男性コーチ・監督との関係に焦点が当てられ、その問題点として女性選手自身の業績が矮小化されていることが指摘されてきた。また、男性選手よりも女性選手があだ名や愛称で呼ばれがちであることや性別役割分業的な報じ方も女性選手に顕著だとされてきた。

ここまでの検討でも、家族関係を伝える際にジェンダーバイアスがかかっていたことが確認されている。ここでは改めて従来の問題点について、報道内容から検討を試みる。

１．選手と監督・コーチの関係の報じ方

前章において、監督・コーチは、ニュース番組のオリンピック報道の中に登場した人物計 1,177 人のうちの延べ 45 人に過ぎないが（前掲図 3－4)、実際の報道では「監督・コーチ（B-2)」が 38 件で、「詳細な報道」がなされた選手の 7.1%を占め（女性選手は 9 人、20 件、男性選手は 9 人、18 件)、ジェンダーを問わず報道内容を構成する重要な要素となっていること、また、監督・コーチとの関係は、先行研究において女性性を強調するうえで有効な要素であるとされていることなどを指摘した（前掲図 3－25)。

ニュース番組に登場した主な監督・コーチと選手の関係性を整理すると次のようになる。

監督・コーチ→選手（ジェンダー）	実際の報道内容
男→女	加藤コーチ×金藤 朴監督×高橋、松友(バドミントン) 南條監督×田知本(柔道) 栄×吉田、土性、川井ほか(レスリング)
男→男	井上監督×高藤、大野、ベイカー、羽賀ほか、鈴木コーチ→羽賀(柔道) 平井コーチ×萩野、徳丸コーチ×坂井(競泳)

女→男	久世コーチ→松田、小堀、江原（競泳男子 800 リレー）
女→女	井村→乾、三井ほか(シンクロナイズドスイミング)

なお、これらのうち監督を主人公にした詳しい報道が展開されたシンクロと柔道については、これは第 4 節で取り上げることとし、この 2 ケースを除いた選手と監督・コーチとの関係性について検討していく。

8 月 12 日には、競泳の金藤理絵選手と萩野公介選手の金メダリスト 2 人と柔道の羽賀龍之介選手が NHK「NW9」に登場した。特に金藤選手に関する報道では家族である姉の登場に加えて、コーチとの二人三脚という点が大きくクローズアップされた。

番組写真 4－3NHK「NW9」（8 月 12 日放送）

金藤：コーチを信じてよかった。
ナレ：ロンドン代表落ちで引退を頭によぎった。
＞映像：コーチとのエピソード
ナレ：世界一になれると二人で臨んだ決勝のレース。コーチを信じ前半から飛ばします。
加藤コーチ：腰抜けた、感無量。
金藤：加藤コーチの家族にも感謝。
ナレ：大学時代から二人で歩んだ 10 年ついにつかんだ金メダル。
〔…中略…〕
＞映像：東京スタジオ
河野：金藤さんのメダルは自身の努力はもちろんだけど周りの支えが導いた。

「コーチを信じてよかった」「加藤コーチの家族にも感謝」という金藤選手自身の発言と「二人で臨んだ、歩んだ」「コーチを信じ」「周りの支えが導いた」というナレーションによって構成されたこの語りでは、コーチの存在感が際立っている。

その後、同番組で選手たちが生出演するシーンでは、金藤選手、萩野選手に加えて柔道の羽賀選手が登場した（次ページ掲載番組写真、左）。

番組写真 4－4 NHK「NW9」（8 月 12 日放送）

その中で金藤選手は「コーチのことを信じてよかった」と繰り返し発言し、萩野選手も「辞めたい気持ちもあったけどサポートと、信じてくれたコーチがいたから」と発言し、平井コーチとのトレーニングの映像が流され「金を支えた名コーチ」のテロップが入る（上記番組写真、中央）。それに続いて羽賀選手も井上監督と鈴木桂治コーチの 2 名の名前を挙げた（上記番組写真、右）。このように、従来の研究では「名将あってのメダル」というイメージが「男性コーチ・監督→女性選手」という関係を報じる中で生産・強化されているという指摘がなされてきたが、3 選手が同時に生出演したことによって、「男性監督・コーチ→男性選手」という関係も同様に扱われたことがわかる。なお、金藤選手についてはメダル獲得を報じた他局（8 月 12 日放送日テレ「ZERO」、テレ朝「報ステ」、TBS「N23」）すべてがコーチとの二人三脚を伝え、テレ朝「報ステ」ではキャスターを務める寺川が「熟年夫婦。どう見ても選手とコーチっぽくないんです」と言及する。

8 月 10 日の各番組のオリンピック報道は、競泳男子 800m自由形リレーで男子が 52 年ぶりに銅メダルを獲得したことでもちきりだった。自由形のリレーでのメダルは、体格的に劣るとされていた日本にとって歴史的な快挙であった。テレ朝「報ステ」は、選手とコーチとの関係についてこう質問を投げかけている。

＞映像：レース後

松岡：これはレース後ですね。久世さんにどんな思いでした？

松田：今回は僕だけじゃなくて騎士（江原選手※筆者注）と小堀も一緒に約 4 カ月くらい一緒に練習して、それも久世コーチに見てもらってたので、それも大変だったと思いますし、プレッシャーもコーチもあったと思いますし。それから解放されて喜びの瞬間ですね。

松岡：久世コーチの存在？

松田：やはり僕らの力を一番信じてくれている人だったのでそれに応えたいと思っていました。

〔…中略…〕

松岡：じゃあ最高の形でいつものパターンで。ずっと競泳応援させてもらって本当にうれしかった。自由形のリレーは夢でした、とんと届かなかった。松田さん、一人で獲ったメダルじゃないみんなで獲ったメダル、何の力がありました？

松田：えー。まあこれまで僕自身だけでも 800mリレーは何回かはじき返されている種目。そういう意味では日本の自由形を引っ張ってきた先輩方がいて、強くしたいと思っていた人たちの思いが詰まっている種目だと思いますね。

松田丈志選手は、リオ大会を含む 3 大会連続のメダリストで、従来から久世コーチとの二人三脚のエピソードにスポットライトが当てられてきた。しかし彼らの師弟関係に切り込んだ先行研究はこれまでに見当たらない。「女性コーチ→男性選手」という関係性は松田選手の活躍をさかのぼれば 2008 年北京大会から見られていたはずである。

番組写真 4－5 テレ朝「報ステ」（8 月 10 日放送）

さらにリオ大会では、小堀選手、江原選手も久世コーチの指導を受けていたことが明かされている。このケースの新規性は、久世コーチが女性であるということであり、「女性コーチ→男性選手」という関係性が報じられていることである。そしていかに自由形リレーでのメダルが難しいものだったかが松岡と松田の言葉で語られている。

同日の TBS「N23」では次のようなやり取りがなされている。

星浩：みなさんおめでとうございます、松田さんあの泳ぎを見ていると東京でもまだ？
松田：ふふ、後輩に託したいと思います。
雨宮：松田さんといえばお母さんのような久世コーチと二人三脚でやってきましたよね。試合後のお話は？
＞映像：宮崎延岡市プール
松田：えー、今回はちょっと騎士と小堀も一緒に練習して 3 人分指導してもらって本当大変だったと思うので、コーチありがとうございましたと伝えました。

二人の関係を「二人三脚」、久世コーチを「お母さんのような」と形容している。

同じく同日の日テレ「ZERO」では松田選手の過去の練習環境がビニールハウスに囲まれたプール（宮崎県延岡市）だったことを紹介し、北京大会で銅メダルを獲得してもスポンサーが見つからず、久世コーチと企業巡りをした過去の映像が紹介されている。こうした過去のエピソードも踏まえて、「お母さんのような」という表現がなされているが、これが単なる年齢差をさしているのか、両者の関係性をさしているのかは不明だが、男性選手を指導する女性コーチを「名将」に類する言葉で表現していない点には注意が必要だろう。実に 52 年ぶりの自由形種目のリレーのメダル獲得という競技結果へ導いた女性コーチの業績を矮

小化する表現であるとの指摘も可能であるからだ。

その他、レスリングでは、女性選手の活躍を語る栄監督（フジ「ユア」8 月 17 日放送、日テレ「ZERO」8 月 19 日放送ほか)、バドミントンでもダブルスの金メダル秘話について朴監督が「日本選手にはちょっと目標がなかったんですね。日本のナショナルチームのシステムをチェンジして、遠征も小さいトーナメントではなくて大きい強い国際大会に参加して。どんどんどんどん選手の成績がでてきた」と語る（日テレ「ZERO」、テレ朝「報ステ」8 月 19 日放送）など、「男性監督→女性選手」の関係性が観察された。

また、シンクロナイズドスイミングでは女性選手たちと井村監督という「女性監督→女性選手」の関係が幾度も言及される（TBS「N23」8 月 15 日放送ほか)。柔道に関しては、男子全階級メダル獲得の立役者は井上康生監督であるという論調が強く、「男性監督→男性選手」の関係が報じられた。前述の通り、柔道とシンクロに関していえば、全体的に監督ありきの結果であるという報道の傾向が強く、その結果選手の業績が矮小化されてしまっているという問題を指摘することができる。

このように、番組でクローズアップされた監督・コーチと選手との関係性には、「男→女」「男→男」「女→男」「女→女」というすべてのパターンが見られ、従来のようなジェンダーバイアスによる女性選手の業績の矮小化といった視点だけではとらえきれない現象である。問題点として、男女を問わず監督・コーチの存在感を肥大化させ、選手の業績の矮小化を生み出すこと、また、スポーツ界の上下関係を肯定し再生産することをあげることができる。これらは従来の研究でも指摘されてきたことだが、男性選手を指導する女性コーチという本章の分析で明らかになった新たな関係性の場合においても、コーチが女性であることで業績が矮小化されてしまうというジェンダーに潜む問題を指摘できる。

２．選手のあだ名や愛称

前章で「詳細な報道」に分類した選手の報道内容を構成する E 群＜その他＞の「裏話（E-3)」（前掲表 3－26 には、選手の愛称やあだ名を計測したものが含まれている。その中でそれが最も露骨に登場した競技は、卓球だった。前章でみたように卓球は、福原選手、水谷選手を筆頭に、選手の報道件数が最も多い競技である。男女とも団体でのメダル獲得を果たし、女性が「三人娘」「天才少女」、男性が「三銃士」や「天才の融合」と呼ばれていた。この愛称自体すでにジェンダー的な差異が明確である。

例えば 8 月 17 日放送の TBS「N23」は、現地キャスターの古谷が「姉妹のようなチームワークの良さ、ご覧ください」とナレーションし、女性選手たちの間で対策ノートが共有されていたことを紹介した。対戦相手に対する戦術や戦略に関するエピソードを、「姉妹のようなチームワークのよさ」という関係性に落とし込んでしまっている。これもアスリートとしての選手の能力や業績を描くことを放棄し、矮小化したものといえるのではないか。

同日のフジ「ユア」にも天才少女と姉妹言説がみられる。

Q 天才少女、一番母親が卓球に厳しいのは？

福原：それぞれのお母さんの厳しさがわからないです。指導してもらったことがないので。逆に優しいなと、応援してくださって。3 人とも自分の母親が一番厳しいと思っている

と思う。温かい応援をコートにしてくださって感謝の気持ち。
〔…中略…〕
ナレ：実は卓球4姉妹だったんですね。もう一人平野美宇選手です。リザーブメンバーとしてサポート。
＞映像：平野美宇選手
ナレ：その後仲良くお菓子を食べました。
福原：毎日最高の状態でプレーできるよう、支えてくれた。美宇のおかげでメダルを獲ることができた。
伊藤：美宇ちゃんの分まで頑張ろうと思って。よかったです。

「ズバリ答えます！スマッシュトーク！」というコーナーの中で、天才少女と母親という関係性をクローズアップ。その後、リザーブという卓球の団体競技ならではの制度に着目した点は従来の報道ではなかなかみられない画期的なものだったが、その平野選手を加えて「4姉妹」と、国民の娘たちのような愛称を冠したことが問題として指摘できる。

なお、天才少女として幼少期より愛称で呼ばれてきた福原選手などの卓球の人気女性選手は、メディアの扱いに関する男性選手との差異を際立たせる存在であり、メディアによる人気選手の創出を象徴するものである。以下の水谷選手の発言は、そのような問題を男性選手の側から指摘したものと受け止めることができる。8月12日のテレ朝「報ステ」が「卓球シングルス水谷隼悔しさをバネに掴んだ銅」として伝えたニュースの一部である。

＞映像：団体決勝
ナレ：初めてのメダルをもたらした。
＞写真：幼い頃、過去のインタビュー
ナレ：5歳で卓球を始め天才卓球少年と呼ばれていました。
水谷：目標？オリンピックにでること。
ナレ：14歳でドイツに卓球留学プロリーグに参戦。
＞映像：2011年5月インタビュー
水谷：取材とかを愛ちゃんとか石川さんがされて、自分もついでとかに取材されてもやっぱりテレビに映ることはないから。
松岡：自分が出るってことは勝つことが重要？
水谷：そうですね。まず勝たないと。
ナレ：男子が注目されるには勝ち続けるしかない
＞映像：2012ロンドン
ナレ：しかしロンドンでは1勝しかできず、かたや女子は団体で銀メダル、妻子と離れ欧州No.1クラブに在籍。
＞映像：シングルス3位決定戦
ナレ：相手は元世界ランキング1位のサムソノフ選手40歳。
水谷：今までずっと卓球男子は本当に悔しいことばかりでオリンピックでメダルをとれさえすればもっと注目浴びると思うし、もっともっと卓球全体が盛り上がってほしいし。

ナレ：エッジボールでのポイント。
水谷：本当にあればっかりは運に味方をしていただいたというか。今までの苦労が実った1本だなと思います。

水谷選手も幼少期より卓球の「天才少年」と呼ばれ続けてきたが、メディアの注目度は女性選手と比較すると雲泥の差であったのだ。また 8 月 16 日放送の日テレ「ZERO」では、水谷選手の「北京から 8 年暗い中にいたので今日、日に当たれてよかった」というコメントを、8 月 18 日の NHK「NW9」は、水谷選手がツイッターで呟いた「卓球という素晴らしいスポーツを日本中に伝えることができた」というコメントを紹介している。こうした水谷選手の発言には、卓球女子と比べてメディアの扱いに雲泥の差があった卓球男子が、メダル獲得によってようやく注目を浴びることができたという喜びが示されている。この事例は、同じ競技の中でも、人気選手というものがメディアによって、競技力以外の話題性によっても作られてきたことを示唆しているといえよう。

ほかに、レスリングの太田忍選手の「忍者レスラー」（NHK「NW9」8 月 15 日放送）、柔道の松本薫選手の「野獣」（日テレ「ZERO」8 月 9 日放送）、体操の白井健三選手の「ひねり王子」（TBS「N23」8 月 9 日放送、日テレ「ZERO」8 月 11 日放送ほか）、陸上の新井涼平選手の「やり投げ仙人」（テレ朝「報ステ」8 月 18 日放送）、外国人選手では競泳のフェルプス選手が「水の怪物」（テレ朝「報ステ」、TBS「N23」8 月 10 日放送、日テレ「ZERO」8 月 12 日放送）と呼ばれたが、これらはプレースタイルや業績をもとにつけられたあだ名であると判断できよう。ほかに、競泳の小堀選手が「こぼちゃん」と呼ばれている（TBS「N23」8 月 10 日放送）ことが紹介されたが、全番組を通じて露骨な愛称による報道は、卓球以外の選手にはみられなかった。選手に「ちゃん」付けがなされたのは、福原選手ら幼少期からメディアで注目され、そう呼ばれてきた選手に限定されており、彼女らは国民に見守られた「姉妹」として描写される傾向にあった。

3．選手のプライベート

番組の中で選手のプライベートが着目されたケースは、男性選手 6 人、女性選手 4 人と男性選手が多かったが、男性選手の場合は日本選手が「普段はひょうきん」「ムードメーカー」「おちゃめ」といった簡単な情報の付与にとどまった一方で、女性選手はネイルや料理、といったプライベートな内容に踏み込まれることがあった[128]。また競泳の萩野選手、星選手は好きなアイドルについても言及していた。

例えば、8 月 17 日放送のフジ「ユア」では、女子レスリング史上初の 4 連覇がかかる吉田沙保里選手の後継者として期待が高まっていた登坂絵莉選手に着目し、同選手のプライベートにも切り込んでいる。

[128] 私生活（プライベート）に踏み込まれた選手の中には、競泳・フェルプス選手のアルコール依存症問題や、陸上・猫ひろし選手が芸人時代にオリンピックを目指したことによる誹謗中傷なども観察されたが、これについては第 3 節にて詳しく触れたい。

＞映像：2012 ロンドン吉田
ナレ：霊長類最強女子。そんな吉田が後継者に指名する登坂。
吉田：自分に似ているな、絵莉はまねしてるんでしょうけど。
ナレ：小 3 からレスリングをはじめる。2008 年全中優勝、2011 年全日本山本美憂を撃破、至学館大学入部、登坂の素顔はどこにでもいそうな明るくかわいい女の子。
＞映像：友達とショッピング中
登坂：めっちゃ優柔不断です。
ナレ：マットの上では別人。積極的なレスリングスタイル。
栄：バランスがいい組み手練習。
吉田：努力している。すごい。

前半では登坂選手の競技成績が紹介されるが、そこに突然「登坂の素顔はどこにでもいそうな明るくかわいい女の子」というナレーションが入り、ショッピング中の映像が流れる。18 日のテレ朝「報ステ」にはメダリストの共通点である至学館大学の寮生活の様子が映し出され、皿洗いをする登坂が「絵莉の女子なところも撮っておいて」と口にするシーンが流れる。ここまで露骨にプライベートを映したものは、他の選手、番組では見られなかった。8 月 16 日、19 日の日テレ「ZERO」では、バドミントンの高橋麗華選手の「ゲン担ぎネイル」に注目した報道があった。

ナレ：正反対の 2 人はプライベートも。日本を発つ前に高橋が見せてくれたのはゲン担ぎのネイル。ピアスもリオのためにつくってもらったという。一方の松友。
松友：（ネイルは※筆者注）2 回くらいやって満足したんでやめました。

メダリストとはならなかったものの複数回ニュースに取り上げられた選手が女子競泳の池江璃花子選手である。池江選手はメダルこそ獲得しなかったが、競泳選手の最多種目出場かつ 3 レース連続日本記録更新、5 位入賞という結果を残した。池江選手については 8 月 8 日に NHK「NW9」、テレ朝「報ステ」、TBS「N23」の 3 番組が「日本記録連発」をニュースとして報じ、なかでも NHK「NW9」は、外国メディアに逆取材し、外国人記者らのコメントを報じている。

佐々木：勢いに乗る池江璃花子選手。海外メディアはどう見ているんでしょうか。
ブラジルの新聞記者：とてもかわいいね。彼女には勝ってほしいよ。
フランスのネットメディア記者：オリンピックでは若い選手でも金メダルを取ったことがあるので、彼女も取れないことはないと思うよ。

海外メディアからみた日本選手の評価を伝えたシーンは、全番組を通じて数えるほどし

かない[129]。また、その内容は、「とてもかわいい」「若い選手」という容姿や年齢に関するものである。全番組を通じて、容姿への直接的な言及はほとんど見られなかったことから、この点も特異である。なお、男性選手では、ベイカー選手について「父がアメリカ人、母が日本人のハーフ選手。イケメン選手として雑誌で特集された」ことが紹介され、これも容姿への言及であると読み取れる（日テレ「ZERO」8 月 11 日放送）。このほか、坂井聖人選手はおちゃめな表情を見せるムードメーカーとして渡辺一平選手の Twitter に掲載された動画が紹介されたりした（日テレ「ZERO」8 月 10 日放送）。

8 月 18 日の TBS「N23」では、「誰に真っ先にメダルの報告をしたか」という質問に対して、団体銀メダルの水谷、丹羽、吉村の 3 選手が答えた。

吉村：彼女が一番最初です。あとは親とかです。
古谷：彼女にはなんて？
吉村：メダルとれたよと。すごく喜んでくれました。
古谷：ああ、泣いてたんじゃないですか。
吉村：泣いてはなかったです。
丹羽：僕は明治のチームメイトだったり、実際にテレビの前で応援してくれているので、報告しました。
水谷：僕は奥さんに一番最初に報告しました。
高橋：奥様に聞いたんですけど、娘さんが生まれたときくらいうれしかったと。
水谷：もっと喜んでほしかったですね。
＞水谷娘・表彰台のパパを発見
古谷：丹羽選手、吉村選手からみて子煩悩だなというところはありますか？
吉村：そうですね、大変だとは思うんですけどそれでもしっかりとやっているのですごいなと思います。
古谷：丹羽選手からみてもメロメロだなというところはあります？
丹羽：はい、本当に水谷さんに似ていてかわいくてよく写真とかとらせてもらってます。

吉村選手の彼女発言や、水谷の子煩悩な父親というエピソードが繰り広げられる。団体戦でともに戦いメダリストとなった 2 人の選手の発言が、水谷選手に「子煩悩」という父親像を付与する裏付けとなっている。また、8 月 18 日のフジ「ユア」も「水谷の宝物である 2 歳になる愛娘の写真」を紹介し、丹羽と吉村に「パパになって変わったか」という質問を投げかけ、丹羽からは「いつもより優しくなった」、吉村からは「寛大的になった」というコメントを引き出している。

このほかに、8 月 12 日放送の TBS「N23」では、萩野選手を小 3 から高 3 まで指導した前田覚コーチが登場し、「スイッチのオンとオフの切り替えがすごく上手な子で、練習は妥協しないで一生懸命やる、終わったら自分の好きなことを一生懸命やる。どうしても休ませ

[129] 他にはテレビ朝日が吉田選手が敗退したことをブラジルメディアがどう報じたかという記事の引用を行っている。また、NHK が男子 7 人制ラグビーの日本のジャイアントキリングについて観客などへの取材を行っている。

てくれと言うんですよ、どうしてかといったらAKBのコンサートにどうしても行きたいと［以下略］」というコメントが紹介され、萩野は「事実ですね。前田コーチはテレビに映りたくて嬉しくてでしょうね。なんでもしゃべっちゃいますね」と話し、高橋尚子が「推しメンは？」と問いかけると「大島優子さん好きでした」と答えている。一方星選手は、ラルフキャスターに「日本に帰ってやりたいことは？」と聞かれ、「3 カ月くらい日本に帰らずにリオに来たので、久しぶりにゆっくり家族と過ごしたいなと思います」と答えると、「その喜びをお母さんとわかちあって。なんでも嵐のファンだと」と、日テレのメインキャスターが嵐・櫻井翔であることもさることながら、唐突に嵐の話題が挟まれた。星選手はそれに「いっぱい今回も曲を聴いたりDVDを見たりしてパワーをもらいました」と答えている（8月11日放送日テレ「ZERO」）。

以上のように選手のプライベートを報じる傾向は、ニュース番組の中でも決してなくなったとはいえない。以前に比べるとその報道量や頻度は減少したといえるかもしれないが、競技に全く関係のないプライベート報道が行われたという事実は重要であろう。

４．性別役割分業

性別役割分業意識を示す報道は 2 件あった。柔道の海老沼選手、体操の内村選手ら男性メダリスト２名に関する報道の中では、いずれも夫および父親としての側面がクローズアップされ、彼らの子どもや妻もニュースに登場している。その中で、性別役割分業意識がみられたのは内村選手のケースである。

8月11日には、NHK「NW9」と日テレ「ZERO」が、体操の内村選手の活躍を支えた人物として「妻」に着目した。

＞映像：鉄棒内村

ナレ：個人総合連覇を果たした内村航平。大逆転での金メダル、最後まで追い詰められた闘いだった。

＞映像：インタビュー

内村：最後の鉄棒で自分の演技ができなければ、絶対に負けると思っていて。

＞映像：試合開始2時間前、内村・加藤

ナレ：試合開始2時間前会場に入る内村。そこへ握手を求める選手が、ウクライナのベルニャエフ。彼こそが内村の前に立ちはだかる。

＞映像：決勝入場、観客席、KONAMI応援妻千穂・長女・次女

ナレ：闘いの舞台。2日前に共に歓喜を味わった団体メンバーが声援を送る。6種目の合計点で競う個人総合（ゆか・あん馬・つり輪）最初の種目は得意のゆか。さらに2種目目のあん馬も安定して美しい演技、しかし3種目の苦手のつり輪で順位が入れ替わる。

＞映像：つり輪ベルニャエフ

ナレ：内村は 3 位に順位を落とす。心配そうにみつめる妻千穂さん。実は内村には不安が。それは蓄積した疲労だ。

ライバルのベルニャエフ選手の情報とともに、内村選手を応援する妻や子どもの映像とナレーションを織り交ぜている。この映像の後、内村選手を支えた存在としてトレーナーの今井聖晃を紹介したのち、もう一人の存在として再度妻にスポットライトを当てている。第1節でも一部を掲載したが再度確認してみたい。

ナレ：そしてもう一人内村を支えた女性がいる。ニッポンで見守り続けた千穂さん。夫の演技が全て終わると安堵した表情で娘を抱きしめた。
妻：本当に最後の鉄棒はすごく感動して、もうそれと同時にすごくほっとして今はうれしいです。金メダルおめでとうお疲れ様と声をかけてあげたいです。
ナレ：二人が結婚したのは2012年実は千穂さん大学時代の先輩後輩で元体操選手、大学日本一に輝いたこともある。
＞2016年5月
内村：同じ競技をしていたからこそ、どういう部分が大変でっていうのがすごくわかっているので、すごくありがたいというか。
妻：体調がちょっと悪いっていってても休まないので、少し休んでもいいのになとか思うんですけど。
ナレ：さらに夫の体への負担を配慮し子どものだっこも長時間はさせないよう気を配っているという。
内村：家族の支えがあるからこそより強くなっている自分がいると思うので、そこがだいぶん強みです。
ナレ：夫となり父となって初めて臨んだオリンピック奇跡の逆転金メダルを獲得し内村が口にしたのは妻への感謝の思いだ。
＞インタビュー
内村：試合に行く前とかもあまり僕にそういうプレッシャーとか与えないようにいつも通り試合のことなども話題に出さずに送り出してくれた。この何ヶ月間かは本当に気を遣わせてばかりだったので、帰ったら存分にこき使っていいよと言いたいと思います。

8月8日のTBS「N23」は柔道・海老沼選手の妻・香菜さんのエピソードを紹介した。

ナレ：客席から声援を送る妻、香菜さんの手には1通の手紙が。元柔道選手の香菜さんは夫を献身的にサポート。
＞写真：2014年結婚
妻・香菜：今までの思いを全て最高の舞台で出してくれれば私はそれだけで満足だなと。
＞映像：7月31日
ナレ：自宅に戻ると一通の手紙が置いてありました。「いつも、ありがとう。必ず金メダルをとります。最高の柔道を香菜の目に焼き付けてください」
＞映像：3位決定戦
ナレ：そして3位決定戦。夫からの手紙を握りしめ必死に声援を送ります、すると。
＞映像：応援する妻の涙

海老沼：金メダルとって一緒に喜びたかったんですけど、僕の力不足です、すみません。
ナレ：金メダルの夢は叶いませんでしたが、最後まで戦う男の姿を目に焼き付けた。
妻：金メダル以上に素晴らしい銅メダルだと思います。

同日放送の NHK「NW9」でも、海老沼選手が現地特設スタジオに生出演した際、妻の応援が届いたかどうか、そして妻への感謝の想いを聞きだし、さらには妻と実業団時代の先輩後輩関係だった中村美里選手（海老沼選手と同日に銅メダルを獲得）に、二人の普段の様子を尋ねた。一方、内村選手の妻は元体操選手であり、内村選手の体調管理などへの配慮も、その専門性にもとづくものであることが示唆されており、海老沼選手についても、元柔道選手の妻が献身的にサポートしていることが前面に出ている。同じ競技を行っていた妻だからこその支え方を紹介しながらも、全体として「男は仕事、女は家事・育児」という性別役割分業規範と一致しており、そこから逸脱する語りは皆無である。なお、今大会でメダリストとなった女性選手の中に既婚者はいないため比較ができない。男性選手の報道において「性別役割分業」という規範の存在が確認されたという指摘にとどめたい。

5．パワーやライバルという男性性の象徴

スポーツにおける男性性を象徴するものとしてパワーやライバルがあげられる。前章でみたように、「詳細な報道」に分類した選手 60 人の報道を構成する要素のうち、「ライバル」のみ件数が男性 33、女性 17 と倍近い差が生じていた。これを実際の選手数でみると、男性選手が 16 人、女性選手が 12 人でそれほど大きな差はない。しかし、実際の報道内容を確認してみると、男性選手の場合は、特にテニスの錦織選手や柔道の原沢選手、競泳の萩野選手、坂井選手は、対戦相手であるナダル選手やリネール選手、フェルプス選手といった絶対的な王者に立ち向かう形で描かれているのに対し、女性選手の方は、レスリング女子などが決勝の対戦相手などを単にライバルと呼んでいるものが大半である。女性選手で、ライバルがメインのストーリーを構成する者として唯一描かれたのが日本選手対決となったシングルスバドミントン女子の奥原選手と山口選手だった。ライバルの描写は、これまで男性性を象徴するものとの指摘がなされてきたが、上記の事実もそれを示している。ところが、男性性を象徴するものとされてきたライバルとパワーの描写に関して、リオ大会では特異な例が柔道とバドミントンで見受けられた。それらをピックアップしてみたい。

柔道の報道における「パワー」の扱い方に従来の報道にはない新規性がみられた。8 月 10 日の TBS「N23」では、男子柔道 81 キロ級で銅メダリストとなった永瀬貴規選手について次のように報じた。

ナレ：日本が 16 年間メダルから遠ざかっていた鬼門の階級で永瀬貴規選手が見事銅メダル獲得。怪力の選手が集う柔道 81 キロ級の闘い、永瀬選手の武器はパワーではなくその技です。
＞写真：山口末男永瀬選手の恩師
ナレ：柔道を始めたのは 6 歳、恩師に話を聞きました。

山口：人の試合をじっと見ていました。
Q それは人の技を盗んでいる？
山口：そうですね。それでやっぱり聞き上手ですよね。教わり上手。
ナレ：高い技術にはもう一つ理由が。
＞映像：長崎明誠高校取材
ナレ：実は進学した中学には柔道部がありませんでした。そこで高校の柔道部で女子部員を相手に練習。力勝負で勝っても練習にはならない、そこで力に頼らず技に集中したといいます。
＞映像：小森講平柔道部顧問
小森：身につけたい技をとにかく何回も何回も繰り返して練習して完成度を高めることを一番の目的にしてきていたのかなという感じはします。力を加えられたらまともに力を受けてしまうのが普通なんですけど、それをうまく自分が投げる力に変えられるのは才能だと思います。

その一方で、8 月 11 日のテレ朝「報ステ」は、女子柔道 72 キロ級で金メダルとなった田知本遥選手の強さの秘訣について、次のように報じた。

＞映像：女子 70 キロ級表彰式
ナレ：女子柔道、金メダル女子 1 号に輝いた田知本遥選手。誰よりも喜んでいたのが姉の愛さんでした。
田知本姉：妹が優勝してくれて自分のことのようにうれしいです。
＞写真：中学時代
ナレ：中学時代は女子柔道部がなく二人は男子柔道部に入ったそうです。
映像：朽木淳司姉妹の中学時代の恩師
朽木：遥は投げ返すことはできないですが、投げられても投げられても立ち向かっていく。そんな練習をよく見かけたので、そういうところでお互い強くなっていって絆も深まっていったのではないかなと。

永瀬選手も田知本選手も中学時代にそれぞれ異性の柔道部員を相手に、永瀬選手はパワーではなく技を磨き、田知本選手はパワーで上回る相手に投げられても立ち向かっていく練習を繰り返したことが、両選手の強さの理由としてクローズアップされている。この２つの報道は、スポーツにおけるパワーの意味を、男性性の象徴から解き放つ新規性をもっているといえるのではないだろうか。

女性選手自体にライバル関係を描くことが少ないと阿部（2008）は指摘しているが、そのことは前章でも確認することができた（前掲図 3－25）。ただし、リオ大会では例外も存在するので以下に紹介しておきたい。日本女性選手同士の対戦がライバルとし描かれたバドミントンの事例である。8 月 16 日放送のフジ「ユア」では二人を天才少女と紹介しながら下記のように報道した。

＞映像：準々決勝に進出することが決まりインタビュー
山口：最後まで自分らしいプレーで勝敗はどちらに転ぶかわからないんですけど、悔いの残らない試合をしたいと思います。
奥原：お互いベストパフォーマンスで、悔いのない試合ができたらと思います。
ナレ：なぜこのような試合が。2012 年ロンドン五輪、意図的ミスによる無気力試合が行われた。再発防止のため「決勝トーナメント」の組み合わせが抽選となった。異例の日本人対決だ。
＞映像：2011 年全日本総合選手権／奥原
ナレ：拾って拾いまくるプレーで史上最年少優勝を果たし日本のトップへと成長。今年 3 月全英オープン制覇。金メダル候補として注目されるようになりました。
＞映像：2013 年ジャパンオープン／山口
ナレ：もう一人の天才少女。2013 年ジャパンオープン。男子顔負けの力強いプレーで、16 歳 3 か月優勝は世界最年少記録。ジュニア国際大会でも記録を残し
＞写真：世界ジュニア選手権 2 連覇、南京ユースオリンピック銀メダル
ナレ：リオオリンピック出場権。
＞映像：2012 年世界ジュニア選手権
ナレ：世界一を争う二人。奥原が先輩の貫禄で勝利。日本人初のジュニア世界一に輝きました。日本代表合宿ではパートナーを組んで練習しています。選手村では同部屋で寝泊まりする関係。そんな二人に 5 カ月前こんな質問をしていました。
＞映像：3 月取材
山口：盛り上がるとは思います。二人出て。一人よりは。
奥原：そうですね。自分たちは若い世代とか言われますし、東京に向けてもステップアップできる大きな大会だと思うので、2 人でバドミントン界を盛り上げていきたい気持ちは前もこれからも変わらないです。
ナレ：そんな仲良しの二人。過去の対戦成績は奥原が 6 戦 6 勝。先輩が意地を見せてきました。明日の準々決勝、男女を通じてシングルス初のベスト 4 入りは果たしてどちらの手に。

彼女たち二人は、数々の国際大会を制しながら、バドミントン界を背負う天才少女から初のシングルスメダリストの期待を背負う、ライバル同士として描かれている。そして、奥原選手のプレーは「拾って拾いまくる」という日本代表女子バレーボールのプレーにも使用される女性のプレーを表する言葉で形容されるのに対し、山口選手は「男子顔負けの力強いプレー」と形容され、二人のプレーがジェンダー差であるかのように対照的に描写している。

6．プロポーズと LGBTQ の扱われ方

前章において、ニュース番組によって報道された全競技関係者の中で、主に競技結果ではないことで選手がニュースになった例が 77 件あったことを示したが（図 3－4 の〈その他〉）、その中にジェンダー問題として見逃せないシーンがあった。選手のプロポーズが報道され

た際の、ニュースを発信するキャスター側の反応である。

プロポーズを報じたのは、テレ朝「報ステ」とフジ「ユア」であるが、プロポーズを先んじて報じたのはテレ朝「報ステ」だった。8 月 15 日の放送の最後に、まず男子シンクロ板飛び込み秦凱選手（銅・中国）による女子板飛び込み何姿選手（銀・中国）へのプロポーズ、次にロクテ選手の強盗遭遇、柔道日本の凱旋帰国の順に報道がなされた。また、テレ朝「報ステ」は、8 月 18 日の報道の最後に、IOC 理事のチケット不正転売容疑の逮捕とロクテ選手の狂言事件の後に、プロポーズラッシュとして、陸上三段飛びウィル・クレイ選手（銀・アメリカ）と馬場馬術個人決勝 C・ドュジャルダン選手（イギリス）のプロポーズを伝えた。オリンピック期間中に 2 日間、ニュースのなかでプロポーズを伝えたのである。

問題なのは、テレ朝「報ステ」の 15 日のリオ大会を伝えるニュースの最後に、富川アナ（男性）が「小川さんが注目したのはやっぱりプロポーズ？」と問いかけ、「そうですね止まっちゃいました。うっとりしました」と小川アナ（女性）が答えるシーンである。なぜ女性アナ（当時未婚）にリオ大会のニュース終了後に「やっぱりプロポーズ？」という問いかけをしたのか。このやり取りによって、「女性＝結婚したい」があるべき姿であり、その視聴者への押し付けがなされたといえよう。

一方、8 月 16 日にフジ「ユア」は、7 人制ラグビー女子イザドラ・セルーロ選手（ブラジル）によるマルジョリエ・エンヤさんへのプロポーズを伝え、セルーロ選手が LGBT であることも同時に報じた。市川メインキャスターが、「今回リオオリンピックで私びっくりしたのが LGBT をカミングアウトしたのが過去最高で選手に 45 人いて、コーチにも 3 人いたりとか。パラリンピックの選手もいて、リオオリンピックの公式グッズにもそういう LGBT を応援するものが出ていたり」とコメントした。続けて「ソチを覚えていますか？」と問いかけ、ソチ大会の開会式の映像が流れる中、コメンテーターのモーリー・ロバートソンが「2014 年のソチが大変だったんですよ。オリンピックの冬季だったじゃないですか、その前の年に、ロシアではプーチン大統領のほぼ独裁なんですけど、同性愛を規制する法律が成立してしまったわけですね。それに抗議して欧米の政府高官は開会式のボイコットもしたりしたわけです。それくらい物議を醸した。世界ではほら、やっぱり LGBT の認知、権利拡大が一様にと思いきや場所によっては抑圧になったり」と畳みかけた。これを受け市川が「LGBT の権利を、と誓約する。今までで一番寛容」とコメントすると、モーリーが「ソチの反省が踏まえられている。東京も偏見のない大会にする大いなる教訓に」と主張した。

両番組が発したメッセージは対称的である。「女性＝結婚したい」という既存の固定概念を押し付けたテレ朝「報ステ」に対し、フジ「ユア」は、昨今問題化している LGBT の在り方に選手のプロポーズというニュースから切り込み、さらにソチ大会でのロシアの実情についても解説し、東京大会への期待にも触れているのである。古い価値観と同時にそれを乗り越える新しい価値観も発せられているのである。

性別役割分業規範をはじめジェンダー問題に関しては、テレビから発信される選手報道自体に無意識的に溶け込んでいるバイアスが多いと考えられるが、それをさらに強化するものとしてスタジオのキャスターらの（負の）役割というものが指摘できるのではないだろうか。

第３節　外国人選手の表象

次に、外国人選手の報道を検討したい。従来の研究では、外国人選手の報道量が日本選手よりはるかに少ないこと、外国人選手表象がライバル関係に偏重し、日本選手の応援放送化を増長している点などが問題点とされてきた。

前章における報道量の分析の結果は、登場選手数では 288 人中 172 人と外国人選手が 59.7%を占めているものの、報道件数は日本選手より少なく、また報道内容を検証した結果、詳細な報道が行われている外国人選手はわずか 7 人（全体の 2.4%)にすぎないことが判明した。陸上のボルト選手、バンニーキルク選手、猫ひろし選手、競泳のフェルプス選手、体操のベルニャエフ選手、レスリングのマルーリス選手、柔道のシルバ選手である。彼らについては計 35 の要素（全体の 5%）が確認され、日本選手でよく報じられていた「家族（B-1)」～「友情・チーム（B-4)」の値は低く、外国人選手は「ケガ・病気（B-6)」や「身体的特徴・身体能力（C-4)」「競技の歴史（D-1)」といった、「人間ドラマ」でなく、競技結果に直結するような要素を報じられやすい可能性が示された。また、報道量や外国人女性選手の報道傾向から、男性選手よりも女性選手の方が競技力以外の理由で報じられたという結果も出ている（第 3 章 4 節 1、2 項)。

このような全体的な特徴をふまえた上で、以下では外国人選手が詳細に報じられた理由に着目しながら、具体的な報道内容についてみていきたい。

１．ヒーロー・ヒロインという描き方

はじめに、ヒーロー、ヒロインとして詳細に描かれた外国人選手の報道をピックアップしてみたい。まずは、報道件数の最も多かったボルト選手である。同選手については、TBS「N23」が厚い取材をしており、8 月 9 日、レースが始まる前の時点で、記者会見と単独インタビューの様子を報道した。

ナレ：カメラ 80 台、記者 500 人が会見に殺到
ボルト：これが最後のオリンピックです。やるべきことはすべてやりました。リオ五輪も楽しみです。
＞映像：単独インタビュー
Q 五輪で印象に残っているのは？
ボルト：北京です。200mで世界記録を更新できるとは思わなかった。ただ勝ちたいと思い人生のなかで一番一生懸命 200mを走りきりました。フィニッシュで身を乗り出したのはあのときだけです。リオでのゴールと私の夢は同じです。金メダル 3 つと 200m世界新記録です。
＞映像：桐生リオ入り
ナレ：ボルトと 3 年前に初対面。
＞映像：インタビュー
ボルト：速く走ろうなんて考えるな。自分の走りをすることだけを考えるんだ。
ナレ：そして今回熱いエールを。

ボルト：頑張れ、リオで全てを出せても俺には勝てないけどね。
＞映像：スタジオ
キャス：さすがボルト選手ですよね、でもやはり日本勢に期待したいですよね。

世界のメディアの注目度の高さを物語る記者会見の様子に、ボルト選手の「金メダル 3 つと 200m世界新記録」という突出した目標設定発言が続くが、桐生選手のリオ入りの映像が挿入されると、インタビューの後半は日本選手に向けたコメントとなる。スタジオのキャスターの「でもやはり日本勢に期待」という言葉が挿入されることで、ボルトというスター選手から、日本選手への話題転換が見られる。

8 月 15 日の終戦記念日、各局はボルトの 100m 金メダルを報じた。なかでもトップニュースで 8 分以上（ボルトの後、日本選手の話題で 10 分超）の時間をかけて報じたのが NHK「NW9」だった。「ボルトの背中→1984 ロサンゼルス大会 100m カール・ルイス→2000 シドニー大会 100m モーリス・グリーン→インタビュー→スローモーションで走るボルト→2008 北京大会 100m ボルト、2012 ロンドン大会ボルト→日本の子どもたちとボルト→リオレースとインタビュー→リオ 100m 決勝レース」の順で、ボルト選手の 100m3 連覇への軌跡を伝えた。日本のスタジオからニュースはスタートしたが、すぐに現地特設スタジオに画面が移り変わる。佐々木キャスターの「はいこんばんは、ボアノイチー。ということで今晩はやっぱりこの話題からですよね。ウサイン・ボルト選手がまた新たな歴史を打ち立てました。ボルト選手、現場で取材してきました。レースの舞台裏には厳しい闘いがあったんです」の言葉とともに、現地から改めてボルト選手のレースを振り返りはじめる。

＞映像：リオレース前
ナレ：日本時間の午前 10 時。大観衆がその登場を待ちます。
佐々木：さあいよいよ男子 100m決勝。ボルト選手が入場してきました。もう場内の興奮は最高潮。大歓声で自分の声も聞こえないくらいです。
ナレ：前人未到の 3 連覇へのスタートラインに立ったボルト。
＞映像：8 日記者会見サンバを踊る女性たちの中に踊るボルト
ナレ：1 週間前に行われた会見ではいつもどおり陽気な姿。
＞写真：地元紙
ナレ：しかし今回のオリンピック、ボルトは大きな不安を抱えていました。先月左太ももに軽い肉離れを起こしジャマイカ選手権を欠場していたのです。
＞映像：ＮＨＫのインタビュー先月
ナレ：直後に行われたＮＨＫのインタビュー、その胸の内を語っていました。
ボルト：数年前から誰かに追いかけられる夢を見るんだ。どんなに早く走っても逃げられない。つかまりはしないけど逃げ切ることもできない。
＞映像：2 日前の練習 11 日リオデジャネイロ
ナレ：予選二日前の練習でも。
ボルト：追いかけてくる足音が聞こえて焦ったよ。
ナレ：北京ロンドンと圧倒的な成績を残してきたボルトも今年で 30 歳。専門家のなかに

は肉体の衰えを指摘する声もありました。
＞映像：朝原宣治、北京五輪陸上銅メダル
朝原：ものすごい大きなエネルギーがないとこんな大きな体を動かせないので、それが満ち溢れていたんですけど徐々に減ってきているという印象がありますね。
＞映像：ボルトの両親記者会見
ナレ：そばで見守ってきた両親は。直前のボルトについて。
ジェニファー・ボルト：昨日の夜選手村で話したんですが、「ママ、準備はできているよ」と言ってました。
ウェズリー・ボルト：すばらしい結果を待ちましょう。
＞映像：ボルト会見
ナレ：これが最後のオリンピックと公言してきたボルトは、レースにかける思いを
ボルト：ナンバーワンになるために生きている。
＞映像：レース
ナレ：そして世界中が注目するスタートの瞬間。スタートはすこし出遅れたボルト。中盤でぐんぐん加速しライバルガトリンを抜き去ります。最後は余裕のフィニッシュ。両親に駆け寄るボルト。この種目で史上初となる3大会連続の金メダルを勝ち取りました。
＞映像：レース後インタビュー
ボルト：言葉にならない。最高の気分だ。完璧ではなかったが勝つしかなかった。

ケガや、30歳という年齢からくる体力の衰えを指摘する地元紙や日本の解説者・朝原宣治（北京大会陸上100m×4リレーメダリスト）のコメントを挿入し、さらにボルトの両親（記者会見）のインタビューも交えながら「種目史上初の3大会連続金メダル」という圧倒的な競技成績を伝えた。取材映像を受けて河野キャスターは、「あのボルト選手にしても焦りがあったり悩みを抱えていたりって話だったんですけど。それを乗り越える力があるからこそ、世界の王者」と、苦境を乗り越えたアスリートという点を強調した。一方佐々木キャスターは、「会場にボルトのレースを見に来たお客さんたちもですね、憧れと同時に必ず尊敬の気持ちを口にするんですね。やはりそれだけの気持ちを集める選手なんだなと改めて感じました。ボルト選手、気になるのは本当にこのオリンピックで最後の出場になるのか、オリンピックに最後の挑戦になるのかなんですが、試合後のインタビューでこう話していました〔原文書き起こしママ—筆者注〕」と、ボルト選手が人々に憧れられ、尊敬されるヒーローであることを強調する。

そしてこのニュースの直後に、「日本から最強との呼び声高い短距離陣3人が挑みました」とコメントし、まず日本選手（山縣、ケンブリッジ）らの準決勝レースを伝えた。自己ベストを更新した山縣選手の「自己ベストを出したという点に関しては素直にうれしいと思いますし、決勝進出が目の前まで来ていたと思うとやっぱり悔しいですね」というインタビューを流し、桐生選手については映像と共に、ナレーションで「この準決勝を桐生は観客席から見守りました。3年前、高校3年のときに日本歴代2位の10.01をマーク。9秒台の期待を背負い続け臨んだオリンピックでした。しかし日本選手3人のうちただ一人準決勝に進むことができませんでした」と紹介。予選後のインタビューで「僕はもう速い選手じゃないっていうか。次は追う側というか。この悔しさをリレーで晴らしたいと思います」と話す映

像を出し、ナレーションで「3 人は 2 大会ぶりのメダル獲得を狙って 3 日後 400m リレーに出場です」と説明する。TBS と同様にボルト選手から「日本選手への期待」でニュースが終わる。

シンデレラヒロイン[130]として描写されたのが、レスリングのマルーリス選手（アメリカ）で、吉田沙保里選手の功績とともに伝えられた。8 月 19 日のテレ朝「報ステ」は、「涙の『銀』絶対王者の功績」と吉田選手をたたえ、マルーリス選手の人となりも重点的に伝えた。

＞映像：試合終了間際

ナレ：試合終了をつげるブザー。その瞬間マットに崩れ落ちる吉田、そして挑戦者もまたマットにひざまづきました。

実況：うーん決勝で吉田が勝ち名乗りをあげないのは初めてになります。

＞映像：表彰式

ナレ：吉田をくだし頂点に立ったのはアメリカのマルーリスでした。

＞映像：インタビュー

マルーリス：言葉にならない。信じられない。長い間沙保里と戦うことを夢見てきました。彼女は私のヒーローですから。最も多いタイトルをとった彼女と対戦できたことを本当に誇らしく思います。

＞映像：試合、海外メディアのＨＰ＜英 BBC、米 CBS

ナレ：今回マルーリスは吉田に自分のレスリングをまったくさせませんでした。吉田より低く構え、ひたすらカウンターを狙います。そして吉田の得意なタックルをことごとく封じました。今回のマルーリスの勝利に海外メディアは最大の番狂わせ、リオでの最大のショックなどと報じました。

＞映像：2012 レスリング世界選手権 55kg 級決勝

ナレ：マルーリスと吉田は過去に 2 度戦ったことがありますが、吉田が圧勝しています。

＞映像：記者会見

ナレ：マルーリスはこの 2 年間吉田に勝つために練習のほとんどをその対策に費やしました。吉田の研究は徹底していて、ときにそれはインタビュー記事や CM の翻訳にまでおよんだそうです。

マルーリス：コーチや両親など支えてくれた皆さんに感謝したいです。吉田選手はオリンピックを 3 連覇し世界タイトルを何度も獲っています。厳しい闘いになるので全力を尽くそうと考えていました。

＞映像：Instagram、レスリングを始めた頃のマルーリス、2004、アテネ五輪吉田

ナレ：マルーリスが吉田にこだわるのにはわけがあります。7 歳でレスリングを始めたマルーリス、転機が訪れたのは 2004 年マルーリスが 12 歳の時でした。レスリング女子がオリンピック正式種目となり吉田が初出場で初優勝しました。このときからマルーリスにとって吉田は憧れでありいつか倒すべき対象だったのです。

＞映像：インタビュー

マルーリス：対戦に向けた研究をしてきましたが、知れば知るほど彼女の人間性の素晴ら

[130] 童話シンデレラになぞらえて、無名だったにもかかわらず突然有名になった女性を指す和製英語。

しさに気づきました。あれほど勝ち続けるには強靭な精神力が必要です。彼女は非の打ち所がない人です。

吉田：本当に強くなっていたなという風に思います。本当に私の研究をして私を倒したいという思いがこの決勝戦で伝わってきました。

＞映像：勝利後米国旗を持つマルーリス

ナレ：吉田がいなかったら、今日のマルーリスはなかったかもしれません。

＞映像：9 日愛知大府市

ナレ：吉田は自らの金メダルだけでなく他の選手のメダル獲得に大きく影響を及ぼしています。メダリストとはどういうものなのかを自ら率先して見せてきたからです。48 キロ級の登坂、子どもの頃から吉田に憧れその背中をずっと追いかけ金メダルを手にしました。土性もずっと吉田の間近でレスリングに対する姿勢を学び練習量を増やして金メダルを勝ち取っています。

〔…中略…〕

富川：松岡さん。

＞映像：現地スタジオ

松岡：ぼくは沙保里さんに対して、ありがとうっていうその言葉しかないんです。沙保里さんはイメージは前向きでどんなプレッシャーもはねのけて勝つ。ずっと金メダルとってました実際。ただ、大会前の話をきいたとき、私はいつも負けるのが恐い。プレッシャーに押しつぶされそうだ。自分の心を出してくれました。その中で負け、涙をみたときに、ぼくがみていた以上に想像以上のもので、相手に研究され本当に強かった。彼女の涙は悔し涙というより責任感、申し訳ないというのを感じた。そのなかですべてを出したぼくは沙保里さんに対してありがとうという思いでいます。

富川：背中をみてそだってくる日本選手、外国選手も同じことが言える。マルーリス選手も尊敬し続けたからこそあんなに強くなった。

松岡：富川さんまさにそのとおりですよ。ぼくあのちょうどお母さんと話して、今の思いを伝えたんです。

＞映像：吉田母・幸代

松岡：アメリカの選手は、沙保里さんはレスリングの強さだけじゃない、人間的にとにかく素晴らしい人だって。お母さん、そういう人に負けたんだったら何よりですって。お父さんのことも含めいろいろ思っちゃったので、感極まる瞬間でした。

吉田選手の敗北シーンから、マルーリス選手の境遇・競技歴・強さの秘訣が紹介され、最後は日本の女子レスリングに話題が転換し、「日本選手への期待」というパターンがここにもみられる。吉田選手を負かしたマルーリス選手をシンデレラヒロインとして扱い、吉田選手の人となりをマルーリスの目線から紹介し、最後にはナレーションが「吉田は自らの金メダルだけでなく他の選手のメダル獲得に大きく影響を及ぼしています。メダリストとはどういうものなのかを自ら率先して見せてきたからです」と、吉田選手自身の功績、さらには日本の女子レスリング界、今後の「日本選手活躍への期待」へと転換していく流れが見られる。

ボルト選手、マルーリス選手の描写は、「ヒーロー、ヒロイン」的外国人選手の報道から

日本選手への期待すなわち「応援」へと移り行くパターンが実に巧妙で、違和感のない自然な報道が形づくられていた。

外国人選手報道のすべてがそのようなパターンだったわけではない。ボルト選手の活躍から日本選手への期待へと話題を転換せず、同じ外国人選手の話題に終始したのがテレ朝「報ステ」とフジ「ユア」だった。どちらの番組も、ボルト選手の次に報じたのは、陸上男子 400m で世界記録を更新したバンニーキルク選手（南アフリカ）だった。テレ朝は、ボルト選手のレースとインタビューの「誰も止められない、いや不滅と誰かが俺を呼んでいた。だから残り 2 レースで俺は不滅になる」という言葉を紹介したのちに、バンニーキルク選手を語るボルト選手の言葉も伝えている。

＞映像：レース後駆け寄った南アフリカ選手
ナレ：陸上男子 400m 決勝。キラニ・ジェームズ、ラショーン・メリット、8 レーンの選手バンニーキルク。南アフリカ、0.45 自己ベストを縮めて世界記録に。
＞映像：1999 年世界陸上セビリア大会・マイケル・ジョンソン
ナレ：100 年はやぶられないと言われた伝説の記録。
＞映像：BBC）
マイケル・ジョンソン：OMG、第 8 レーンからの世界新記録だ。あまりにも早く達成したこんなレースは見たことがない。バンニーキルクは他の選手を完全に置き去って打ち負かした。
ナレ：200m の選手から 5 年前にリハビリとしてはじめ、毎年自己記録を更新。ボルトと一緒に練習する仲。
＞映像：記者会見
ボルト：バンニーキルクが世界記録を出したとき本当にすごいと思った。とうとうやったと。僕以外で世界記録をとれるとしたら彼しかいないとコーチとも話していたんだ。
バンニーキルク：ロンドン五輪は家で見ていたんだ。それが今日は選手の一員になっている。レースに勝った。限界はない。

元世界記録保持者で、BBC で解説を務めていたマイケル・ジョンソンの映像も用いて外国人選手らの活躍を伝えた。このように「日本選手への期待」へと話題を転換せず、外国人選手間での互いの期待や評価を中心にしたものは陸上のボルト選手とバンニーキルク選手の報道のみで、日本選手中心の報道のあり方から逸脱する事例として注目される。

2．ライバルという描き方

では、日本選手の直接的な「ライバル」として登場した外国人選手の報道とは、どのようなものだったのか。

競泳の萩野選手の場合、各国を代表するライバル選手のなかでメインの扱いがなされたのがマイケル・フェルプス選手である。「水の怪物」と呼ばれヒーロー的側面が強いフェルプス選手であるが、今大会では同レース（200m 個人メドレーと 200m バタフライ）に出場

した萩野選手、坂井選手がメダルを獲得しており、彼らのライバルとしても描かれる側面が強くあった。8 月 12 日のテレ朝「報ステ」では、萩野選手のリオ大会での活躍を振り返りながら、この日のレースを世界のトップ選手が多く出場した「世界最高峰のレース」として報じた。2012 年ロンドン大会では 400m 個人メドレーが Billings らによって分析されているが、その時の登場人物と同じ 4 選手が登場する。

＞ナレ：競泳役者はそろった。
萩野：喜びをかみしめて泳ごうと思いました。
ナレ：怪物に挑む各国のメダル候補、人生をかけた 2 分でした。
＞映像：インタビュー
萩野：これでもちろん終わりじゃないですし、これからもっともっと強くなるための銀メダルだと思います。
ナレ：2 分に満たないレース。それは世界最高の 2 分でした。
＞映像：レース
ナレ：史上初の 4 連覇に挑戦、フェルプス、世界記録保持者ロクテ、地元ブラジルの雄ペレイラ、日本のエース萩野。まさに世界最高峰のレース。バタフライ、わずかに抜け出したペレイラ（写真：北京 4 位、ロンドン 4 位）、母国にメダルをもたらそうと気迫の泳ぎ、萩野が得意の背泳ぎ、しかしアメリカ勢の壁（2011 世界水泳）ロクテ、オリンピックではこの種目で金メダルを手にしていません、怪物の存在があったからです。

アメリカのロクテ選手、フェルプス選手という 2 名の過去のオリンピック金メダリスト、ブラジルのペレイラ選手といった名だたる選手たちに挑む萩野選手のライバル物語のなかで、焦点が当てられたのはフェルプス選手である。

＞映像：3 日の記者会見
フェルプス：今回は過去のどの大会よりも感動的なものになるだろう。レースも最も僅差のものになるだろう。
＞映像：2004 アテネ
ナレ：金 6 個。怪物の名をほしいままに金メダルを取り続けてきた。
＞映像：2008 北京
ナレ：8 種目全てで金メダル。
＞映像：2012 ロンドン
ナレ：最も得意の 200 バタフライで金を逃した。原因は本人曰く努力不足。「自分は金メダルにふさわしくなかった」。その後、私生活は荒れアルコールにおぼれる日々、2 年前には飲酒運転で逮捕、リハビリをうけた。
＞映像：2014 年 12 月
フェルプス：今回のことは大きな教訓になりました。これからの 2 年は私にとって試練の 2 年になるでしょう。
＞映像：表彰式後

ナレ：家族の支え。3 カ月前には息子も生まれました。
＞映像：3 日の記者会見
フェルプス：この 2 年は私にとって最高の時間でした。いろいろなことがあったからです。私の最後のレースを子どもに見せられることを楽しみにしています。
ナレ：引退を宣言。最後は息子家族のため最高の泳ぎを誓いました。
＞映像：レース平泳ぎから
〔…中略…〕
ナレ：並み居る強敵のなか異次元の泳ぎをみせ 4 連覇達成。22 個目の金メダルを獲得した彼を家族が見守ります。銀メダルを獲得した萩野選手。
＞映像：ミックスゾーン
松岡：いやあ公介さん、もうスーパースターが集まったなかで出し切りました獲りました。
萩野：そうですねまあタイムはまだまだですけど自分のやれる限りのことはやったつもりです。
松岡：最後フェルプスに自分から握手。
萩野：フェルプス選手は自分よりも年齢がもっと上ですしそのなかでね、決勝の種目では必ずいいタイムを出して、そして勝負を勝っていくってことがすごくて、またフェルプス選手のことを好きになったし、目標がまた明確になったなという風に思います。

競泳界で 4 連覇、22 個目の金メダルと偉大な成績を残してきたフェルプス選手の報道でクローズアップされたのは、一度自暴自棄になった彼が家族の支えによって復活し、この大会を最後に引退するというドラマチックな側面である。それがまたも最後に、日本人の荻野選手の「目標」という形で結びつけられている。

同様の展開は、男子体操競技でもみられる。8 月 17 日のフジ「ユア」は、体操個人総合で内村選手と最後まで競ったベルニャエフ選手について紹介したのち、内村のコメントとナレーションで以下のように締めくくる。

内村：個人総合では 4 年後はかなわない。種目を絞って狙うしかないのかなと思う。
ナレ：白井、加藤らが体操王国ニッポンを守り切るのか？4 年後の新たな物語が始まっています。

先にみたマルーリス選手と吉田選手、萩野選手とフェルプス選手、山縣選手・桐生選手・ケンブリッジ選手とボルト選手の関係のように、外国人選手の活躍から日本選手への期待へと切り替えられていく。ここに、外国人選手の報道量が増加しても、その内容が日本の応援となるパターンが象徴されている。

3．国を背負う外国人選手

国を背負うアスリートという側面がクローズアップされていたのが、体操のベルニャエ

フ選手の報道である。8 月 17 日放送のフジ「ユア」は、体操個人総合について「歴史に残る名勝負」とナレーションしたうえで、個人総合後の会見で、ベルニャエフ選手が内村選手に対する、記者からの審判のスコアへの疑問を門前払いした点を強調し、こうしたフェアプレイ精神は祖国への愛情から生まれたと説明する。2014 年のクリミア自治共和国へのロシア侵攻を受けて、オリンピックセンターが劣悪な環境となり、器具を新調する費用がないことや、当時の給与が月 100 ドルだったことを 2015 年の取材映像を用いて紹介する。こうした状況下で、ベルニャエフ選手のかつての練習仲間のニコライ・ククセンコフ選手は、2013 年にロシア国籍を取得した。ベルニャエフ選手のもとにも好条件のオファーがいくつも届いたが、ベルニャエフ選手は、母国や家族・友人のため孤独な練習を経て、リオ大会では個人総合で銀メダル、種目別平行棒で金メダルを獲得したと伝えた。

そして国旗掲揚のシーンとともに、「種目別平行棒では雪辱の金メダル。ロシアの国旗を従えて祖国ウクライナの国旗を高々と頂点に掲げました」とナレーションが読まれ、スタジオに映像が戻ると、MC の市川が「環境を乗り越えての金メダル」と口にする。これを受け、当時のコメンテーター風間晋が「政治とスポーツは別だって言いますけど、オリンピックは国旗を背負って出場している以上は切り離せない。ベルニャエフのように相手に対する敵意ではなく自分を育んでくれる国との一体感というもので政治を表現されているならそれはいいのではないかと。そうであってほしい」と語る。

もう一つの事例は、リオ大会期間中、母国開催で初の金メダルを獲得したブラジル・リオデジャネイロ市のファベーラ出身[131]の柔道ハファエラ・シルバ選手の報道である（NHK「NW9」8 月 9 日放送）。

番組写真 4－6NHK「NW9」（8 月 9 日放送）

2013 年の世界選手権で優勝しているシルバ選手は、金メダルをかけて世界ランキング 1 位のスミヤ・ドルジスレン選手（モンゴル）と対戦し優勝する。シルバ選手は、地元の貧しい子どもに希望を与えた選手として描かれ、「シルバみたいになりたい」という子どもの声

131 ファベーラとは、ブラジルにおいてスラムや貧民街を指す言葉のことで、リオデジャネイロ市のファベーラは今大会でも貧困の象徴として注目が集まった。渡会環は、特に開会式では多様性と寛容がテーマとなったが、そこにはファベーラ発の音楽が披露されるなど、貧困層や犯罪というイメージのみでなくファベーラの二面性を描くことにしたのだろうと分析している（渡会 2017:9-10）。

とともに、ファベーラの希望の星と報じられる。開催地であるブラジル・ファベーラ出身選手を、現地取材によって深掘りした報道である。

なお、第 3 章 4 節 3 項で述べたとおり、猫ひろし選手は、日本からカンボジアに国籍を変え、ロンドン大会ではかなわなかったカンボジア代表としてのオリンピック出場がかなったことが報道された。猫選手の練習風景やジムの様子、カンボジアでの陸上界への貢献がニュースとして報じられ（NHK「NW9」8 月 17 日放送)、元日本人かつ芸人が国籍を変えてオリンピックに出場するという特異な例を通してカンボジア陸上界の練習環境に触れた報道だった。

上記の 3 名の選手の報道は、外国人選手を主役に据えることで、各国と競技が置かれた環境をうかがい知ることができるという、国際理解へとつながる特徴的な報道であったといえる。

第 4 節　日本選手の競技結果以外を主役にした報道

これまでの検討で明らかなように、ニュース番組のリオ大会報道の主軸は、日本選手の活躍（メダル獲得や入賞）であり、その比重は圧倒的である。しかし、その一方で、選手以外を主役にした調査報道も存在する。このうち、競技を主役にした報道は、主に前章で「詳細な報道」がなされた 60 人の選手の報道内容を構成する D 群＜競技（種目）にまつわる説明＞に該当し、76 件（10.8%）ある。日本の「お家芸」として描かれた柔道などの競技がそれである。また、競技結果ではなく、選手の身体能力、「日本の戦い方」、競技力向上の理由、競技自体についての情報や練習方法、監督を主役とした報道もある。本節では、こうした報道の実態について、事例をピックアップしながら検討を試みたい。

1．身体能力に着目した報道

非メダリストだが、日本記録を連発した競泳・池江選手の身体能力に着目して報じたのが TBS「N23」である。8 月 8 日の放送では、幼少期の身体能力について写真や映像、母親の証言を用いながら以下のように伝える。

＞写真：生後 6 カ月、映像
ナレ：母の親指を雲梯代わりに。自宅にも雲梯。
母・美由紀：経験として、握ることから運動能力は育っていくと感じたので、毎日毎日やってました。
ナレ：身体能力は抜群、1 歳半で逆上がりをマスター。3 歳の頃に始めた水泳、5 歳で全ての泳ぎをマスター。最大の武器は長い腕。身長よりも 16 センチも長いのです（身長 170 センチ、リーチ 186 センチ）
池江：小さい頃ずっと毎日のようにやってきたので、それが少しは関係しているんじゃないかなと思います。
ナレ：積み重ねが 16 歳初出場につながったのです。
＞映像：出身高校でのパブリックビューイング

クラスメイト：テレビの話とか普通の話。ふだんはいたずら好きなところもあったりかわいい。（練習でも※筆者注）メインになると顔つきが変わる。すごいかっこいい。
インタビュアー：池江選手の武器は？
クラスメイト：誰にも負けないストロークの良さ、手の長さ。

池江選手のリーチの長さといった身体的特徴が日本記録連続更新の快挙につながったことを、母への取材やクラスメイトへの取材から明らかにしていく。

NHK「NW9」は全出場種目終了後の 16 日に追加インタビューを行い、その様子をニュースにした。7 種目 12 レースを泳いだこと、日本記録を更新し続けた 100m バタフライについては、今大会の目標が決勝進出だったことを受け、予選 8 位、準決勝 3 位で進出した結果だったことを改めて伝えた。その中で、オレクシアク選手（カナダ）が同世代（16 歳）で銀メダルを獲得したことから、「東京で同世代に置いて行かれないように」という東京大会に向けての言葉を引き出している。また、8 月 18 日のフジ「ユア」は、池江選手がリオから帰国後インターハイに出場し優勝したことをニュースで伝え、非メダリストの中でも多様な視点による報道がなされている。

競泳 200m バタフライで銀メダリストとなった坂井聖人選手は、「今日、競泳日本に新たなヒーローが誕生した」（日テレ「ZERO」8 月 10 日放送の冒頭ナレーション）、「坂井さんなんですが、はっきりいって日本のみなさんほとんど知らなかったと思いますよ」（テレ朝「報ステ」8 月 10 日放送の松岡の発言）と評されるいわばダークホース的存在だった。各番組が両親やかつてのコーチの言葉、同レースに出場していたフェルプス選手や瀬戸選手とのライバル関係、過去の成績（高 1 でインターハイ優勝、高 3 で世界ジュニア選手権準優勝）などを説明する中で、日テレ「ZERO」は、その身体的特徴、身体能力にも着目した。

ナレ：進学したのは多くの代表選手を輩出した名門早稲田大学。そこで背中を追い続けたのが瀬戸大也だった。
＞映像：去年 5 月の練習風景／世界選手権直前合宿米・アリゾナ州
ナレ：水の中ではライバルだがプライベートでは一緒に行動するほど仲がいい。
＞映像：去年インタビュー
坂井：大也くんは、あ、大也さんは水泳の面はもちろん素晴らしいですし、人としても素晴らしい。ついて行きたくなる先輩ではあります。
ナレ：過酷な練習のなかでも笑顔を絶やすことのない坂井。日本代表メンバーの Twitter にはこんな動画も。
＞映像：渡辺一平選手の Twitter
ナレ：おちゃめな表情を見せるムードメーカー。
＞映像：日本選手権 2 位
ナレ：そんな持ち前の明るさと努力を重ね、瀬戸とともに掴んだオリンピックへの切符。その夢の舞台で世界王者を脅かす泳ぎを見せた強さの秘訣とは。
＞映像：流水プールトレーニング
ナレ：5 月に行っていたトレーニング。勢いよく流れる水流に逆らって泳ぐことでスピー

ドとパワーを強化していた。そしてもう一つの武器が並外れた肩の柔軟性。肩の関節を外すようなこの動きでおよそ 10 センチ伸びるという。こうすることでより遠くからたくさんの水を捉えられ推進力を生み出していた。このダイナミックな泳ぎでつかみ取った銀メダル。ラスト 50mでは坂井が憧れるフェルプスよりも速い記録をたたき出した＜テロップ：坂井 29.67、フェルプス 30.68、瀬戸 5 着 31.24＞

坂井：フェルプス選手と一緒の表彰台に立てたということにすごく嬉しいし。

ナレ：憧れのフェルプス選手と肩を並べた坂井選手。その目はすでに次のステージへと向かっている。これは試合後の映像、坂井の手にはスマホが。

＞映像：試合後の坂井

坂井：やっぱりちょっと遅れてますね。

ナレ：今日の自分の泳ぎをチェックしていた。

坂井：4 年後もあるので。4 年後の東京では確実に金をとっていいところを見せられたらなって思います。

瀬戸選手やフェルプス選手という周囲のライバル関係だけでなく、「肩の柔軟性」という身体的特徴に着目し、池江選手と同じように腕の長さの部分を強調する報道となっている。池江選手と同様、坂井選手自身も「東京では確実に金を」という東京大会に向けた発言もある。さらには、二人ともプライベート（池江選手は容姿、坂井選手は性格が取り上げられた）も描かれている。

このように非メダリストや想定外の人物がメダリストとなった場合も、丁寧な取材にもとづく報道がなされているケースが存在する。そこには、東京大会を見据えた次世代ヒーロー、ヒロインの発掘というメディア側の狙いもみえるが、速さの秘訣を身体的特徴などから解き明かそうとした報道内容には、外国人に劣る日本人の身体といったナショナリズムに彩られたステレオタイプは見当たらない。

2．「日本の戦い方」がクローズアップされた事例

選手ではなく、競技自体が注目された例がごくわずかだがある。サッカー（男子）、シンクロナイズドスイミングやバスケットボール（女子）、競泳男子 800m リレーである。これらの競技の報道では、日本選手の対戦相手である外国人選手との体格の違いが注目され、「日本の戦い方」というテーマがクローズアップされた。

例えば、浅野選手が注目されたサッカーの予選リーグ突破をかけた最終戦のスウェーデン戦での期待を解説者が語るシーンである（TBS「N23」8 月 8 日放送）。

福田正博：（2 戦終わって※筆者注）5 失点（ナイジェリア戦※筆者注）、2 失点（コロンビア戦※筆者注）してますから。これはあくまでもミスです。自分たちの。判断のミスです。クリアするならクリアする、シュートする、パスする、シンプルにサッカーをしていく。それをもっと徹底していく。はっきりとしたプレーをしていく。キーマンは浅野。50m5.9 秒ですから。彼のスピードを最大限活かしてもらいたい。スウェーデンは大きい選手なのでス

ピードに対してはなかなか対応しづらい。そういう意味では浅野みたいな俊敏に速い選手というのはスウェーデンに対応しづらいので、少ないチャンス、相手のちょっとした隙をどれだけしっかりとゴールに結びつけることができるか、その辺が勝敗の鍵。それができたらスウェーデン戦は勝てると思いますよ。そしたらメダルも全然可能だと思います。

浅野選手の、50m5.9 秒という俊足に着目しながら、スウェーデンのような大きい選手はスピードに対応しづらいため、対抗策としてスピードで勝負し、隙を突くという「日本の戦い方」が必要と力説する。勝利をあげられていないチームに「メダルも全然可能」という言葉で期待を煽る形である。

このような体格差報道はバスケットボール女子でも同様だ。8 月 9 日放送のフジ「ユア」は、「女子バスケ快進撃スピードで体格差をカバー」として、女子バスケの快進撃を以下のように伝える。

ナレ：（平均身長が※筆者注）176 センチと今大会最小。
＞映像：主将インタビュー、練習風景
ナレ：世界とのハンデをどのようにカバーしているのか。
主将・吉田亜沙美：高さでは絶対に勝てないので小さいからこそ足を使って走ったりディフェンスでプレッシャーをかけて攻めたり。
ナレ：彼女たちは世界に近づくためスピードだけでなく当たり負けない身体を作りました。
＞映像：試合
ナレ：そのスタイルが、格上のベラルーシ（※10 位タイ）戦で威力を発揮します。鍛え抜いた身体で臆せず当たるディフェンス。格上を自由にさせず得意のスピードでカウンター攻撃で初戦をものにすると、さらに格上のブラジル（※7 位）に対してもそのスタイルを貫きます。豊富な運動量でしつこく追い回し相手の攻撃をシャットアウト。日本ならではのスピードとパスワークで翻弄します。素早いディフェンスからの速攻というスタイルが機能し、体格のハンデをカバーした日本は 2 連勝。現在グループ 2 位につけ、明日世界ランク 10 位のトルコに勝てば決勝 T も射程圏内。そんな彼女たちのモチベーションは協会からのご褒美。
＞写真：お寿司を食べる選手たち
ナレ：リオ出場の際には寿司が振る舞われました。メダルを獲得すればなんと全員で海外旅行だそうです。（日本は世界ランク 16 位※番組テロップ）

番組写真 4−7 フジ「ユア」(8 月 9 日放送)

バスケ女子の戦い方も、スピード勝負、そして豊富な運動量とあたり負けしない身体作りが強調される。実際にベスト 8 まで進むも、6 連覇を目指すアメリカに「地力の差を後半で見せつけられ」敗北する(日テレ「ZERO」8 月 17 日放送)。高さに圧倒されながらも 2 点差に迫る日本の活躍に、「小さくても世界とこれだけ戦える」(NHK「NW9」8 月 19 日)というコメントも流された。17 日にはバレー女子もアメリカに敗北しており、「高さとパワーに 2 大会連続でメダルならず」と報じられている(日テレ「ZERO」8 月 17 日放送)。バスケットボールやバレーボールなど、身長差が勝利のカギとなる競技において、体格差と「日本の戦い方」への着目が欠かせないことがわかる。なお、ニュースの最後に、協会からのご褒美として寿司を食べている選手たちの写真が映されるが、こうしたプライベート場面は女性選手の報道に付与されがちであることが読み取れる。

7 人制ラグビー男子は、ジャイアントキリングを繰り返し 4 位という結果を収めた。ニュージーランド戦で「日本が勝つことはあり得ない」とされながらも勝利した戦い方について「グラウンドを広く使い細かくパスをつなぎ敵陣に」食い込む様子を伝えた。ニュージーランドの「体格を生かした強引な突破」に残り 4 分で逆転を許すも再逆転で勝利する(NHK「NW9」8 月 10 日放送)。同日のテレ朝「報ステ」は、「圧倒的なパワーを見せつけられリードを許し」た日本が勝利した凄さについて、「南アフリカに W 杯で勝利してスポーツ史上最高の番狂わせと言われたあの衝撃と並ぶくらいのすごさです」と大畑大介が解説している。

上記のチーム競技からは、体格差を乗り越えるために、スピードやパスワークといった機動力を向上すること、当たり負けしない身体の強さを身に着けることが「日本の戦い方」であることが前面に押し出されている。

こうした体格差を乗り越えての勝利として報道されたのが、競泳 800m 自由形リレーだった。8 月 10 日放送の日テレ「ZERO」は身長差を各国と比較している。

久保:こんなデータがあります。平均身長<アメリカ 193.5 センチ、イギリス 188.3 センチ、日本 179.0 センチ。アメリカとの差 14.5 センチ)。

松田:これは騎士(江原選手※筆者注)がさげてる。

田中:体格の差っていうのは影響しますか?

江原：影響しないっていうことを証明したいですね。でも海外の選手に招集所にいるときに下から上まで見られて「あいつなんだよって」絶対隣の選手に言われてると思うので＜172 センチ 59 キロ※筆者注＞

松田：おまえ何歳だ？とか聞かれるもんね。

江原：はい。僕、知らない人にいきなり「How old are you」と言われて「23」と答えるとお～って。

小政：松田選手、体格差もあるなかということなんですけど、このチームの強みとは？

松田：僕ら 3 人はずっと 4 月から練習してきましたし、苦しい練習も乗り越えてきたのでチームワークっていうのがすごくあって、萩野選手はまた日本のエースで当然信頼できる選手でありますので、お互いを信じられるっていうのは最後メダルにつながったんじゃないかと思います。

平均身長が圧倒的に高いアメリカ、2 位のイギリスに次いで 3 位になった日本チームの平均身長は 170 センチ台である。「江原選手が下げている」とされているが萩野選手が 177 センチ、松田選手が 184 センチ、小堀選手が 184 センチと、イギリスの平均と比べても日本選手が大きいとは言い難い。江原選手は日本の男性の平均身長とほぼ変わらない体格でありながら、大きな選手が有利とされる競泳でメダリストとなった。

競泳 800m 自由形リレーにおける体格差を乗り越えての勝利は、しかし、「日本の戦い方」についての新しい説明を付与するものにはならなかった。池江選手や坂井選手の報道のように身体能力に関する深掘りもありえたと思われるが、そのような方向ではなく、むしろ北島康介なきあとの競泳日本代表という視点からの報道が多く見られた（フジ「ユア」8 月 8 日放送、日テレ「ZERO」、TBS「N23」8 月 10 日放送、NHK「NW9」8 月 11 日放送、TBS「N23」8 月 12 日放送）。

柔道や体操、競泳といった従来から注目度の高い競技（生中継でもニュースでも注目度の高かった 3 競技）については、「継承されてきた歴史」（21 項目の要素の中では「競技の歴史（D-1）」や「先人の活躍（D-2）」）という視点から報道される傾向が強い。一方、チーム競技であるバスケットボールやサッカー、ラグビーでは、日本がいまだに体格で負けている部分を体力とパスワークで補うことが重視された「日本の戦い方」が強調されている。前者に関しては、「日本の戦い方」のように自国らしさが強調されているが、それをより鮮明に示すものが「お家芸」という表現である。これについては後で取り上げる。

３．競技力向上の理由に着目した報道

史上初の快挙として報じられたのが、バドミントン女子のダブルス金、シングルス銅、卓球男子シングルスの銅、団体の銀、4 連覇に挑む競泳・フェルプス、レスリング・伊調、3 連覇に挑む陸上・ボルトである。「カヌー界競技日本人初」と報じられた羽根田選手もこれに当たるだろう。柔道男子の全階級メダルも史上初の快挙であった。また、体操個人総合 2 連覇は 44 年、テニスは 96 年ぶりのメダル獲得と、歴史的なシーンも多くあった。これらの報道の中で、競技力向上の理由に着目した報道をピックアップし、検討してみたい。

リオ大会で初めてのダブルス金メダル、シングルスでは銅メダルを獲得したバドミント

ンをまず取り上げよう。

前回のロンドン大会ではフジカキペア（銀メダル）、2008 年北京大会の際にはオグシオペア（ベスト 8）が注目されたが、8 月 19 日の NHK「NW9」は、タカマツペアが誕生した高校時代を伝えたのち、ペアという種目の特徴に着目し、彼女らを「対照的な二人」として描いた。

ナレ：高橋は明るくてワイワイ、松友はおとなしくて周りを見ていて自分の世界。お互いにないものを持っている。信頼している。正確なスマッシュが持ち味の高橋。ネット際で相手を揺さぶる松友。信頼関係がコンビ磨いた。土壇場で発揮された。日本バドミントンに新たな歴史。

また、同日の日テレ「ZERO」も、高校時代の監督のコメントを紹介しながら、両者の正反対な性格や技術を紹介している。

＞映像：過去

ナレ：バドミントンの強豪宮城県の高校に 1 学年違いで入学した二人、2007 年監督の指示でタカマツペアが始まった。

＞映像：インタビュー田所光男総監督・聖ウルスラ学院英智バドミントン部

田所：いろんな意味でまるまる性格が反対ですね。ダブルスはいいんですよね。お互いにないものを持ってるから。

〔…中略…〕

＞ナレ：バドミントンでは強気な高橋と冷静な松友。正反対の二人は世界最高の舞台を目標に走り始めた。

〔…中略…〕

ナレ：ニッポンバドミントン界の歴史を変えたタカマツペア。元日本代表の陣内貴美子さんは勝利の決め手について。

陣内：松友が後ろから自分の右側にクロスのスマッシュをうったんですけど。

＞映像：試合

ナレ：ファイナルゲーム 17-19 の大事な局面できめた松友のクロスのスマッシュ。

陣内：2 人のだいたい真ん中にスマッシュを集めていたんです。相手は予測がつかなかったからびっくりした。

ナレ：実際に試合を見ると。

＞映像：第 1 ゲーム、ファイナルゲーム

ナレ：真ん中に打ち込むシーンが目立つ。相手は右利きと左利きのペア。真ん中の場合ラケットがぶつかる可能性がありどちらが打つか、瞬時の判断が難しいという。結成から 10 年目で勝ち取った金メダル。

他方、同日のテレ朝「報ステ」は、ペアの特徴を「後衛の高橋が相手の体制を崩し前衛の松友が決める。10 年たって二人が磨き上げた必勝パターンです。高橋が崩して松友が決め

る。高橋の緩急を使ったゆさぶり、チャンスを確実に決める松友、この必勝パターンでオリンピックの金メダルをつかみ取ったのです」とナレーションで解説し、さらにシングルスで奥原選手の銅メダルが確定したことを受け、日本のバドミントンが強くなった秘訣に迫るため、日本バドミントン協会への取材映像を放映している。

ナレ：なぜ日本バドミントンはここまで強くなったのでしょうか。
＞映像：インタビュー日本バドミントン協会今井茂満理事
レポーター：バドミントン界が低迷している時代もあった。今回金メダル躍進の秘訣？
今井：うーんまあ全体的にはジュニアを強化している。手とラケットの感覚、そういうのが速いほうがそれが結果的には功を奏している。今現時点ではそれが実を結んだ結果だと思う。
＞写真：小学生時代のバドミントンを持つ二人
ナレ：奇しくも協会のこの方針がペア結成以前のタカマツを引き合わせることになります。
＞写真：小学生 ABC バドミントン大会▼2000 年日本バドミントン協会が創設
ナレ：小学生のレベル向上のために協会が 2000 年新たに創設、その第一回大会で奈良出身の高橋と徳島出身の松友が初めて出会ったのです。
＞映像：2001 年初対戦、写真：2002 年 U13 代表を創設
ナレ：初めて戦ったときの映像、このときはネットをはさみ互いに争うライバル関係でした。その後二人は若手強化のために新設された代表チームに選ばれ小学生のころから海外遠征を経験していったのです。
＞映像：1992 バルセロナ五輪男子ダブルス金パク・ジュボン、今年 1 月沖縄・糸満市
ナレ：さらに日本バドミントン界を大きく躍進させたのが、ダブルスの神様と呼ばれた韓国のパク・ジュボン。オリンピック金メダリストを指導者として招聘したのです。パク監督は砂浜での厳しい練習を提案するなど技術とメンタルを鍛え上げ海外遠征の数も 2 倍に増やしました。
＞映像：リオインタビュー・パク監督
パク：日本選手にはちょっと目標がなかったんですね。日本のナショナルチームのシステムをチェンジして、遠征も小さいトーナメントではなくて大きい強い国際大会に参加してどんどんどんどん選手の成績がでてきた。
＞映像：2007 女子ダブルスオグシオ
ナレ：徐々に力を付けていくなか日本バドミントン界にさらなる追い風が増えます。
今井：子ども達がバドミントンを始める要素として、オグシオって本当になくてはならない現象というか役割を果たしてくれたと思うんですよ。（北京五輪時※筆者注）12 万人だった登録人口がいま 27 万なんですよ。それだけあの登録人口があるということは、登録料もらってますので、その分倍お金が入ってくると言うことですから、強化費そのものは不可欠ですからね。
＞映像：表彰式メダル、マッチポイントで勝利の映像
ナレ：そしてリオでようやく金メダルをとれるまで実力をつけたのです。

ジュニアの強化や韓国のパク監督の招聘による練習方法の変化、海外遠征の増加と選手の意識改革、さらに人気選手（オグシオ）の登場によるバトミントン人口の増加、強化費の増大など、日本バドミントン協会による強化策を詳細に報じたこの報道は、競技の競技力向上の歴史的経緯に着目した調査報道としても抜きんでている。実はバドミントンが金メダルを獲得する前に、テニス・錦織選手が銅メダルを獲得している。その際にキャスターの松岡修造は、「テニス界の強化費が増える、子どもたちの心のモチベーション」という発言を残している（テレ朝「報ステ」8 月 15 日放送）。

＞映像：ミックスゾーンインタビュー

松岡：96 年ぶりのメダル、ありがとうしかない。

錦織：オリンピックなのでこれにかける思いもありましたし、大舞台って言うのも自分のなかであったのでちょっと堅くなった部分もありましたけど、最後は振り絞って。気力を振り絞って頑張りました。

松岡：（2 セット目追いつかれて※筆者注）あそこからは挽回できないかと思った。

錦織：流れ的には本当に最悪としか言えなかったけれど 3 セット目本当に気持ちを切り替えてなるべく忘れて。もちろんイライラもありましたけど押さえてプレーしました。本当に出しきって自分らしいプレーを心掛けて。今日はテニスがすごく本当に振り切れてプレーできたのでよかった。

松岡：自分自身になんて言ってあげたい？

錦織：本当に我ながらがんばりましたね。

＞映像：表彰式

ナレ：金メダルはイギリスのマレー。オリンピック二連覇を達成しました。オリンピック 3 度目の挑戦で初めてメダルを手にした錦織、その思いを語ってくれました。

松岡：改めてこのメダル獲ってどうですか？

錦織：うれしいですね。あの、やっぱり重みがあるというか、ああいう表彰台っていうのも初めての経験だったのですごく感極まるものがありました。

松岡：今回内村さんとか萩野さんとか金メダル見て、なんか普通の自分のペースだけじゃなくてね、エネルギーもらったんじゃないかなって。

錦織：本当にそうですね。他のアスリートの方達から得られるエネルギーだったり元気をすごく今回感じたので、今回の試合にも気持ちがすごく入ってみんなの頑張りが力になったので本当に今週すごく楽しい充実した 1 週間でした。

＞映像：東京スタジオと現地中継

富川：大逆転のときナダルに（負けるかもしれない※筆者注）って？

松岡：僕もお客さんも世界中が思った。圭だけが思ってなかった。キーはトイレ休憩。自分に負けていいのかと問いかけた。オリンピックは普通の大会と違う。準決勝で終われば 4 位。でもオリンピックは戦える。マレーに対して心が折れた。ナダルにもその可能性があった。絶対に自分に勝つというオリンピックという国の思い、いろんな感情があった。

富川：日本テニス界は？

松岡：強化費が増える。子どもたちの心、モチベーションにつながる。グランドスラムだけじゃない、オリンピックという国を背負って戦いたいと。だからこそこのセンターコート

で思いをぶつけさせてください。圭、ありがとう、そして、おめでとう。

対戦成績1勝9敗中のラファエル・ナダル選手（スペイン）との闘いで、メダル獲得のターニングポイントをトイレ休憩（もしくはトイレットブレイク）であるとする話をメインで伝えるニュースが多い中（NHK「NW9」、日テレ「ZERO」8月15日放送）、テレ朝「報ステ」は松岡と錦織選手の会話から、テニスという競技にとってのオリンピックの立ち位置、選手が少なからず抱く国への思い、活躍による強化費の増加と多岐にわたる視点を提供している。

松岡は、女子レスリングが初日に3階級で金メダルを獲得した際には、「崖っぷち金。崖っぷち筋。トレーニングを見ていた。追い込んで追い込んで追い込む。絶対無理を跳ね返せる力を育んだ。レスリング協会が取り組んできた取り組みが実を結んだ金だと思います」と、協会視点に立ったコメントを残している（テレ朝「報ステ」8月18日放送）。競技団体が長い時間をかけてきた競技界全体の強化方法を解き明かす視点や、競技におけるオリンピックの意味を視聴者に垣間見せる会話などは、元アスリートかつ多様なスポーツの現場を取材してきた人物を起用する強みでもあるだろう。

４．競技情報や独特な練習方法が報じられた事例

リオ大会でマイナー競技が初のメダルを獲得した例としてカヌーがあげられる。地上波中継では、唯一リアルタイムでメダル獲得の瞬間を逃した競技である。メダルを獲得したカヌーの羽根田選手について、8月10日のテレ朝「報ステ」が以下のように伝えている。

ナレ：全長242mの急流、設置されたゲートを通過しながらより速いタイムでゴールを目指します。ゲートに触れたり通過できなかった場合はペナルティポイントがつきます。羽根田はスピードに乗りミスなく次々とゲートを通過。最後までミスをすることなくフィニッシュ。競技は進み1人残し3位。最後は準決勝トップ、ロンドン銀のタジアディス。その序盤のゲートでわずかに触れて痛恨のペナルティ。銅メダルが確定すると同時にライバルたちに祝福される羽根田。高校卒業後カヌーの強豪スロバキアで一人武者修行に励み 3 度目のオリンピック挑戦で見事カヌー競技日本人初のメダルを獲得しました。

羽根田：18歳でスロバキアに渡った時からこの日を夢見てずっとトレーニングしてきたので、うんやっととれたなという気持ちでいっぱいです。

TBS「N23」での報道は下記のとおりである。

ナレ：カヌー競技で 3 大会連続出場の羽根田卓也がやってくれた。カヌーのスラロームは激流に設置されたゲートを通過しタイムを競う。羽根田は華麗なパドルさばきで勢いに乗るとカヌー競技日本人初のメダル獲得です。

カヌーは日本ではマイナーな競技である。だからこそカヌーがどのような競技であるの

かをナレーションが冒頭から非常に丁寧に伝えている。他の競技結果の報道では実況映像をそのまま流し、結果が決定する瞬間をメインに映すことが多いが、カヌーの場合はそこに丁寧なナレーションが付け加えられているのである。なお羽根田選手がメダルを獲得できた理由には、どの番組も華麗なパドルさばき（技術）などとともに、18 歳でスロバキアに武者修行したことを取り上げていた。

もう一つマイナー競技で取り上げられたのが、オープンウォーターだ。トップと 5 秒差で平井康翔選手が日本人初の8位入賞を果たしたこの競技について、8月17日のTBS「N23」は映像とともに「給水はまるで海釣り」と紹介。8 月 19 日放送の NHK「NW9」では、「自由形〔個人種目－筆者注〕で入賞したのは僕と萩野君だけ」という平井選手の言葉を放送し、競技についても「2 時間弱のレースは栄養補給なしには泳ぎ切れない」と、TBS と同様、給水中の試合風景を流した。競泳種目の中でも、世界大会で自由形で入賞することは珍しいが、リオ大会では、男子 800m フリーリレーで銅メダル、男子 400m フリーリレー8 位入賞、女子 400m フリーリレー8 位入賞、女子 800m フリーリレー8 位入賞、個人種目でも萩野選手が 200m 自由形で 5 位入賞している。自由形種目でも日本人が戦えることが示された大会でもあった。

陸上・十種競技は日本選手がメダル獲得や入賞がなかなかできない競技である。しかし今大会で旗手を務めた右代啓祐選手については日本旗手の誇りを胸にと報道（フジ「ユア」8 月 18 日放送）があったほか、総合得点で前回大会よりも 100 点アップしたことが伝えられた。加えて、立川の布団屋さんに取材し、二人三脚で練習してきたというエピソードも紹介された（8 月 19 日 NHK「NW9」）。

陸上・やり投げも日本選手の活躍が難しいとされてきた競技である。これについては新井涼平選手が予選の 1 投目で 84m16cm と、予選通過ライン（83m）を一投でクリアしたことが話題となった（テレ朝「報ステ」、TBS「N23」、フジ「ユア」8 月 18 日放送）。テレ朝「報ステ」は、自宅近くの川で大きな石を投げ込み続けた練習方法を紹介し、新井が「野生児です。やり投げ仙人と都会の子たちから呼ばれていました」と語る様子を伝え、TBS「N23」は「決勝もしっかり 1 投目から狙っていって、メダルを狙えるように全力で合わせていきたいと思います」という新井選手のインタビューを放送しており、期待が見える報道になっていた。

カヌーやオープンウォーターの報道から、マイナー競技で日本選手がメダル獲得や入賞の活躍を見せた際の報道の傾向として、競技自体の情報が詳しく報じられていることが指摘できるだろう。また、陸上・十種競技では布団屋さん、やり投げは河原での石投げなど、意外性あふれる練習方法が紹介された。マイナー競技が視聴者の興味をいかに引くかという点の腐心がみられる。

5．「お家芸」として描かれた競技

「お家芸」という言葉が使用された競技は、柔道、シンクロナイズドスイミング、陸上

100m×4 リレーのバトンパスで、特に柔道とシンクロで多用された[132]。また、体操も同様の扱いがなされていた。

なかでも柔道において、「お家芸」というクローズアップが顕著だった。リオ大会での柔道は、大野将平選手の金メダル獲得をきっかけに「お家芸復活」報道の方向性が決定的となった。大野選手が、前回の「ロンドン大会で初めて金メダル 0 に終わった男子柔道」という屈辱的な歴史を塗り替え、その後永瀬選手が 81 キロ級で銅メダル獲得（16 年ぶりのメダル）、ベイカー選手が 90 キロ級で日本人初の金メダルを獲得、さらに羽賀選手が 100 キロ級で銅メダル獲得（16 年ぶりのメダル）、100 キロ超級では原沢選手が銀メダルを獲得した。前日までにも軽量級の 60 キロ、66 キロの 2 階級で銅メダルを獲得していることから男子柔道は全階級メダル獲得を果たしたのである。

実際の報道をみてみよう。8 月 11 日のテレ朝「報ステ」で、金メダルを獲得したベイカー選手が登場したシーンである。

寺川：4 年前のロンドンで（自分が水泳で獲得したのが※筆者注）銅メダルだったんですけど、銅メダルですごくうれしくて喜んでいたんです。でも柔道のみなさんって金のプレッシャーがすごい。とって当たり前の雰囲気があるなかの金。緊張感プレッシャー重圧ってどんなもの？

ベイカー：そうですね。あの、やっぱり僕も銅メダル銀メダルでも素晴らしいと思っているんですけど、柔道は金じゃなきゃダメって言うイメージが強くて。でもオリンピック出るからには金メダル目指してやっているわけなので、それでもいいかなと思っています。

松岡：金とったあと監督からささやかれていて？

田知本：金獲った後がどういう風に生きるかっていうのを価値が見いだされるぞと。

寺川：直後にですか？

松岡：金メダルおめでとうじゃなかったんですか。

田知本：ああ、あったかなあ。それが印象強くて。

松岡：これが柔道なんですね、金とってからが重要なんだぞと。どう捉えた？

田知本：本当にそうだと思います。柔道もそうですし私生活も問われると思うので、今まで以上に振るまいとかちゃんとしなきゃいけないな。

金メダルを獲得して当たり前で、さらに「金とってからが重要」という柔道特有の雰囲気や規範意識の存在が示唆されている。

また、日本柔道がいかに「一本」での勝利を当たり前ととらえているかも報道で注目されている。8 月 8 日の NHK「NW9」では海老沼選手に佐々木キャスターが「海老沼選手は得意の背負い投げを決めて 3 位ということでした。今回のオリンピックで勝った試合すべて一本勝ちでしたけど、ご自身の柔道を見せられたという実感はありますか？」と、一本で勝

[132] 陸上男子 400 リレーについては、結果以前の報道までを対象としたため、そのバトンパス技術を深めた報道が見つけられず、決勝進出した日本のバトンパスについて、日テレ「ZERO」ではナレーションが「ニッポンのお家芸バトンパスに人類最速の男ボルトも注目」と話し、ボルトが「日本はてとてもいいチームだ。バトンパスがうまい。日本が決勝に進んだことに驚きはない」と話す様子を伝えたのみだった。

つという日本の柔道らしさが強調されている。

8 月 9 日のフジ「ユア」では、井上監督の「一本を取りに行く柔道。これは私自身は変えるつもりはありません」という言葉を紹介。ナレーションが、「一本での勝利こそニッポンの柔道」「しかし（2012 ロンドン大会映像）お家芸と呼ばれたニッポン柔道、男子は屈辱の金メダル 0。柔道王国の威信を失うきっかけとなった」と続ける。金メダルを獲得した大野選手やベイカー選手、さらに 3 位決定戦に回った羽賀選手らが一本で勝利したことを伝えるなど、ニュース番組が、一本での勝利という日本柔道へ理解を示している。

さらに「美学」という言葉もキーワードだ。8 月 9 日の日テレ「ZERO」では大野選手の金メダル決定の瞬間に、「勝負には勝っても感情は表に出さない。相手に礼を尽くす日本柔道の美学だ。畳を降りると、〔金丸コーチに「よくやった」と声をかけられて—筆者注〕笑顔があふれた」と、柔道という国技を様々な言葉で脚色し伝える。

快進撃を続けた柔道の凱旋帰国を伝えた 8 月 15 日のテレ朝「報ステ」は、大野選手と井上監督の言葉を紹介する。

大野：井上監督には柔道家としてだけでなく人間として男として成長させていただいて感謝の気持ちでいっぱいです。

井上：畳以外のところでも選手達の成長をひじょうに感じ取れるオリンピックでありました。ウォーミングアップ会場を自然と選手達が掃除している姿だとか、負けた者もつらい立場にあったにもかかわらず次の選手の応援に自然とまわっている。ああいう姿を見たときには我々が究極の目標にしている最強かつ最高の選手に一歩一歩近づいている。

番組写真 4−8 フジ「ユア」（8 月 9 日放送）

柔道は、オリンピック競技に選ばれた唯一の日本の国技でもある。番組写真 4−8 のように、報道内容だけでなく日本の国旗と文字での演出映像とも相まって、日本柔道の「お家芸」イメージが報道をとおしてさらに強化されている。

このような、「お家芸」復活という論調は、柔道だけでなくシンクロナイズドスイミングにも見られた。銅メダルを獲得した際、複数の番組が「お家芸復活」とタイトルを出し（TBS「N23」、フジ「ユア」8 月 17 日放送）、井村雅代監督の「メダルを奪還しメダル常勝国に返り咲くオリンピック」という言葉を紹介しながら、事実上の休みは正月のみという過酷な

練習風景を放送した。なお、柔道、シンクロナイズドスイミングについては競技結果から監督への注目度が最も高い競技となった。この点については次の 6 項で詳細に検討したい。

8 月 19 日の日テレ「ZERO」では、ボルトの 200m3 連覇を伝えたのち、日本の 400m リレーが予選でアジア新記録をマークしたことを伝えた。この際バトンパスに「お家芸」という言葉が使われている。

＞映像：男子 400 リレー
ナレ：第 1 走者はスタートが得意な山縣、さらにアジア新記録をマーク、優勝候補ジャマイカを押さえアメリカに次ぐ 2 位で決勝進出。
＞映像：インタビュー
桐生：決勝でワンランク。もう一回タイムをあげられたらメダルもいけると思うのでしっかりタイムあげていきたいです。
ケンブリッジ：今でも余裕があったんですけど、タイムを更新してメダルをとれるように頑張りたいです。
ナレ：日本のお家芸バトンパスに、人類最速の男ボルトも注目。
ボルト：日本はてとてもいいチームだ。バトンパスがうまい。日本が決勝に進んだことに驚きはない。

日本チームのアジア新記録更新、そしてそのバトンパスの技術にボルト選手からのお墨付きのコメントもある。陸上男子 400m リレーは 8 月 20 日に銀メダルを獲得し、さらにアジア新記録を更新した。「お家芸」のバトンパス分析の報道が週をまたいで閉幕後にも行われ、22 日の番組でも報道された可能性があるが、録画データがないので検討はここで切り上げざるをえない。

12 年ぶりに団体金メダルを獲得した体操に対しても「復活」という言葉が使用された[133]。「体操日本復活」の理由を、キャスターの追加取材で伝えたり、競技力を向上させてきた理由や日本選手の体操についての考え方などを追究していることが特徴的である。例えば、8 月 9 日の日テレ「ZERO」では、体操男子団体の活躍について、記者会見の質問を受けて日本の練習場を取材し伝えている。

ナレ：歴史的快挙、試合後の記者会見ではこんな質問もとんだ。
＞映像：試合後の記者会見
外国人記者：どんな練習をしたらすべての種目で優秀な成績が出せるのですか？
内村：う～ん。ムダな練習をしないということだけですかね。あとは教えたくありません。
ナレ：金メダル獲得の裏に隠された練習とは。桐谷キャスターは練習場へ。
＞映像とナレの内容抜粋：体操競技専用体育館の説明／跳馬の着地床がせり上がる床、タ

[133] 体操も、団体総合では 1956 年メルボルン大会以降表彰台の常連国であり、オリンピックの金銀銅の合計ではリオ大会までで最多となる 98 個もメダルを獲得している、日本のお家芸競技の一つであるが、今大会の報道の中には「お家芸」と表現したものが見当たらなかった。その代わりに、5 局すべてで「体操日本」と連呼されていた。

ブレットで演技を録画し動きをチェックすぐに修正が可能に／食堂カロリー計算体調管理
　青山政高[134]：航平さんはいろんな野菜系ほとんどダメだったんですけど、食べられるようになって。
　内村：次のオリンピックは 2020 年に東京で開催されるので、必ず日本がまた団体の金メダルをとれると信じています。
　ナレ：日本体操の新たな歴史が始まる。

　このシーンでは、専用の体育館や機材、器具、食事による体調管理といった点から「金メダル獲得の裏に隠された練習」に迫っている。また、8 月 11 日の同番組に生出演した選手たちに対する村尾キャスターの質問に、白井選手は以下のように返答している。

　村尾：白井選手、会社や組織には全てに秀でるオールラウンダーと特定分野に抜群のスペシャリストがいる。後者のタイプ？　ただその存在が団体金に貢献したと思う。自分のスタイルは？
　白井：日本の体操選手は 6 種目できて体操選手と、小さい頃からそういう教育を経て代表に入っていくので、今でも僕も 6 種目やれて体操選手だと思ってますし、昨日の航平さんの素晴らしい演技を見てやっぱり 6 種目やって本当の体操選手だなって思えたんですけど。与えられた役割がその 2 つ（床と跳馬※筆者注）な以上は、団体決勝でそれをばっちりやるだけ、それが仕事。こなせる自信があった。今回はスペシャリストとして自分の力を発揮するだけだと思いました。
　村尾：今度はオールラウンダーに？
　白井：そうですね。

　村尾キャスターが会社組織における仕事に例えたオールラウンダーとスペシャリストという区分に対して、白井選手は「6 種目出来て体操選手」というのが日本選手の体操についての考え方であることを示している。「お家芸」を支えてきた体操観が選手の言葉で明確に示されている。また体操では技についても念入りにそのすごさを伝えている。8 月 9 日放送の TBS「N23」では、駒澤大学総合教育研究部竹田幸夫教授から白井選手の技の凄さや、幼少期に空中感覚を養うことの重要性などが解説された。

　ナレ：金メダルのポイントは白井選手の跳馬にあるといいます。
　竹田：ここですね。最後。
　ナレ：白井選手の演技シライキムヒフンをスロー映像で分析してもらいました。
　竹田：ここからの頭の動きを見ておいてください。はいここで着地する場所をよんでいます。体はまだ残っていますね、ただ頭はちゃんと着地する方向へひねられています。これがあるから自分で着地するところを体全体でおさめればいいというのを読んでいる。
　ナレ：このとき注目するのは頭の位置が変わらないという点です。別の映像でも頭が動か

[134] コナミスポーツクラブのコーチ

ず足だけが降りてきているのが見えます。
竹田：止まってますでしょう。
キャスター：頭の高さがほとんどかわらないですね。
竹田：はい。
ナレ：そして余裕をもって見事に着地を併せていたのです。
竹田：この跳馬で日本の流れを掴んだといってもいい。
＞映像：過去の白井の映像など
ナレ：同様にゆかでも頭は動かず。最高の H 難度の技もあみだし、ひねり王子ともよばれる白井選手。たぐいまれな空中感覚は幼少のころからトランポリンで培われました。
竹田：白井選手も内村選手も練習しながら幼少の頃練習ノートをつけていたと、そのなかに絵をかくんですね。例えば逆さになったときに自分の身体がどこにあり、足がどこにあり頭がどこにあり手はどこにあるか、それが彼らなりの空中感覚を養う礎、前提になっていったんじゃないかと思います。

これ以外にも、団体金のキーポイントとして最終種目のゆかの順序に着目した田中理恵の解説があげられる。「ゆかの演技力だと白井選手が本来なら 3 番手を務めると高得点が期待できます。内村選手より高得点がでるので。いろんな工夫があるのですが、内村選手を休ませるために 3 番手に持ってくると。そういった工夫で金メダルを勝ち取った日本でもあったと思います」（8 月 9 日放送日テレ「ZERO」）。このほかアテネ金メダリスト米田功をスタジオに呼ぶなど（同日フジ「ユア」）、過去のメダリストが多いからこそ、メダルの裏側の解説がふんだんに行われていた。

個人総合でも金メダルを獲得した内村選手は、最終種目の鉄棒で 0.901 点差のあったベルニャエフ選手に 0.099 の差をつけ逆転勝利し、個人総合 2 連覇を果たし 44 年ぶり 4 人目の快挙を成し遂げた。審判のスコアに一部海外メディアが反発した会見が話題となったが、これについて詳しく解説したのが 8 月 11 日放送のテレ朝「報ステ」である。体操の得点とはそもそも「技の難度を示す D スコアと完成度を示す E スコアの合計点を競」っていること、「D スコアは難しい技を組み合わせるほど高い点数となり鉄棒が得意な内村選手は D スコアがもともと 0.6 高く、E スコアは減点方式でミスをするほど減点されるため、内村選手が完璧な演技をこなしたことで高い得点が得られた」のだと、遠藤幸一・日本体操協会常務理事の解説を取り入れた。

「お家芸」と呼ばれるこれらの競技は、これまでに幾人もの日本選手が活躍しメダリストとなっている。こうした競技では、各番組が競技力や戦略などの側面も含めた多岐にわたる情報を事前に準備し、報道したとみられる。体操はそうした報道がメインであったが、柔道やシンクロナイズドスイミングは、競技の哲学や日本の戦い方というナショナルな文脈、さらに選手よりも指導者に注目した報道となっていった。これらについては次に取り上げることにしたい。

6．監督を主役にした報道

今大会で「お家芸」復活を果たした柔道男子とシンクロナイズドスイミングは、その競技

結果から監督・コーチが注目された。男性選手と男性監督、女性選手と女性コーチの関係性も含めてどう描かれたのかをみてみたい。

1）柔道の井上康生監督

男子柔道復活の立役者として一躍注目を集めたのが井上康生監督である。井上監督の報道が増え始めたのは、8月9日に男子73キロ級で大野将平選手が金メダルを獲得して以降である。男子柔道は、前回のロンドン大会で金メダル0に終わった。こうした「お家芸」の「復活」を受け各局が大野選手の金メダルとともに井上監督についても報じ始めた。

8月9日の日テレ「ZERO」は、大野選手のメダル獲得を伝えるニュースの最後に、井上監督の「これぞ柔道というものを彼自身〔大野－筆者注〕はこの舞台で体現してくれたんじゃないかなというふうに思います。本当にまた偉大な柔道家がまた一人現れたと私自身思います」というコメントをインタビュー映像とともに流した。TBS「N23」は、大野選手のニュースの導入部分で「大野に関しては 7 人のなかで一番金メダルに近い男ではないかなというふうに思っています」という井上監督の過去のコメントを使用した。フジ「ユア」は、大野、松本薫両選手の生出演の後、大会前の記者会見映像や過去の大会、練習風景などの映像を用いながら次のように伝えた。

＞映像：記者会見・井上康生
井上：一本を取りに行く柔道。これは私自身は変えるつもりはありません
＞映像：2000 シドニー：野村忠宏の 3 連覇
ナレ：そう、一本での勝利こそニッポンの柔道。しかし
＞映像：2012 ロンドン大会・上川選手、篠原監督、穴井選手、井上
ナレ：お家芸と呼ばれたニッポン柔道、男子は屈辱の金メダル０。柔道王国の威信を失うきっかけとなった。
＞映像：練習風景
ナレ：台頭する海外勢に対応するためブラジリアン柔術など他の格闘技から学び大改革に着手した井上監督。ニッポンの柔道家たるもの最強かつ最高であれそれがかつて日本中を席巻した指揮官のプライド。そして。
＞映像：記者会見
井上：大野に関しましては 7 人のなかで一番金メダルに近い男ではないかと思っています。
＞映像：リオ大会
ナレ：73 キロ級代表、エースとして期待を寄せられた。柔道に対して真面目。その重圧を感じさせない柔道で並み居る外国勢を投げ飛ばした。そして今大会日本人初となる決勝の畳へ。上体を巻き込み小内刈り。相手の重心をずらすテクニックは大野の真骨頂だった。
大野：柔道という競技の素晴らしさ・強さ・美しさを見ている皆様に伝えられたんじゃないかなと思います。
ナレ：美しく勝つ。大野将平がニッポン柔道に取り戻した金メダルはリオの畳にあがる日

本選手にとって大きな勇気となるだろう。

番組写真 4−9 フジ「ユア」(8 月 9 日放送)

日本のお家芸である柔道の特徴を「一本での勝利」であるとし、2012 年のロンドン大会で金メダル 0 に終わった日本の柔道を強くするために海外の格闘技などから積極的に学んでいった井上監督の姿勢を評価している。そしてそれを体現した大野選手の金メダルが「日本選手にとって大きな勇気」をもたらしたとする。男子柔道はすべての階級でメダル獲得という結果を残した。

彼らが凱旋帰国した 8 月 15 日には、放送のなかった日テレ以外の NHK「NW9」、テレ朝「報ステ」、TBS「N23」、フジ「ユア」がそれぞれの切り口で井上監督を主役にした報道を行なった。これらの番組では、メダリストよりも井上監督が主役として扱われた。

テレ朝「報ステ」は、凱旋帰国時に成田空港に約 300 人のファンが出迎えた様子、空港でのインタビューで「メダルを獲ったときは自分だけじゃなくみんなも嬉しいと思う」と語る子どもの姿に続けて、ナレーションが「選手たちからは井上監督に感謝の気持ちが」と読み上げ会見の映像を流した。

＞映像：メダリスト記者会見

大野：井上監督には柔道家としてだけでなく人間として男として成長させていただいて感謝の気持ちでいっぱいです。

井上：畳以外のところでも選手達の成長をひじょうに感じ取れるオリンピックでありました。ウォーミングアップ会場を自然と選手達が掃除している姿だとか、負けた者もつらい立場にあったにもかかわらず次の選手の応援に自然とまわっている。ああいう姿を見たときには我々が究極の目標にしている最強かつ最高の選手に一歩一歩近づいている。

質問：今大会選手に一本とられたなというエピソードは？

井上：何もとられてないですね。

＞映像：日本のスタジオ

キャスター：最強かつ最高のチームに。男子は、とにかく自分たちがやるんだという自立心が芽生えたことがよかったと井上監督が言っていた。

「選手から井上への感謝の気持ち」に注目し、井上監督が「人間として」の選手の成長を促し、「最強かつ最高の選手」に近づけ、さらにメダリストのその先へと導いていることを強調するものとなっている。単なる競技力の引き上げではなく、日本文化としての武道の目的とされている人間形成という面でも、成功しているというのである。女子柔道で金メダリストとなった田知本遥選手が、南條監督から「金メダルをとったあとの人生が大事なんだ」と言われたことを先にみたが、こうしたメダル獲得後の人間形成面への着目は、フジ「ユア」の 8 月 18 日の放送で小谷実可子が卓球男子団体に向けて、「スターですよ？メダリストとなると人生が変わりますよ？」と呼びかけた程度で、柔道の報道以外ではみられない。

TBS「N23」は、「史上最多メダル 12 個」と、7 階級すべてでメダルを獲得した男子だけでなく、女子が田知本選手の金メダルをはじめとする 5 個のメダルを獲得したことと併せて報じた。会見では番組内でスポーツを担当する宇内アナが「リオでの闘いを振り返ってお話を聞かせてください」と質問し、選手や監督の声をピックアップして紹介した。

＞映像：メダリスト記者会見
宇内：リオでの闘いを振り返ってお話を聞かせてください。
ベイカー：小さい頃からの夢が実現できて本当によかったと思ってます。
大野：目標にしてきた圧倒的な差をつけることが、しっかり畳の上で体現できたと思う。
井上：我々日本柔道界というものはこれで改めてスタートにたったんではないかというふうに思う。ビッグイベントが待っている東京オリンピックにむけてまた一丸となって頑張っていきたいというふうに思います。

TBS「N23」が切り取った井上監督の言葉は、井上監督がすでに 2020 年東京大会を見据えており、リオ大会での成績は日本柔道界の新たなスタートであると捉えているとの印象を与えるものである。

8 月 9 日にも井上監督を報じたフジ「ユア」は、柔道日本代表の凱旋帰国をトップニュースに据え「井上康生監督の 4 年間」として伝えた。約 400 人が成田空港で出迎えたとし、「選手達には、本当にご苦労さんという言葉しかありませんでした。私からはその言葉以外は見つからないというのが正直でありました」という井上監督の会見での言葉を報じた後、映像は、2012 年ロンドン大会→2016 年リオ大会→ミックスゾーンの井上インタビュー→2012 年 11 月 5 日の柔道男子日本代表新監督就任会見→2014 年高藤規律違反事件→2015 年世界選手権→2000 年シドニー大会→井上×野村忠宏の対談→2016 年リオ大会へと移り、空港での記者会見に戻る。フジ「ユア」の報道は、リオ大会の代表選手の映像だけでなく、井上監督自身が金メダリストとなった 2000 年シドニー大会や監督就任会見の映像など、井上監督自身のキャリアにも重きを置いたものとなっている。そこで強調されているのは、日本男子柔道復活のきっかけと井上監督が目指した監督像である。

＞映像：2012 年 11 月 5 日柔道男子日本代表新監督就任会見（当時 34 歳）
井上：一本を取りに行く柔道。これは私自身変えるつもりはありません。これまでやってきた練習内容というのは大幅に変わってくると僕自身は感じています。やはり 4 年に一度

のオリンピックでいかに勝てるかというプランを立てながらしっかり強化を図っていきたいと思います。

ナレ：積極的にコミュニケーションをはかり従来の選手と監督のような関係性ではなく家族のような関係を築くことでした。それをもっとも象徴するエピソードが 2014 年愛弟子高藤直寿が規律違反をし、強化指定選手から格下げされたとき。井上自ら丸坊主にし、けじめをつけた。

高藤：本当は僕が反省しなければならないところでありますし、井上監督に申し訳ないというのはずっと思っていて、もっと頑張らなくてはいけないなと思ってました。

ナレ：そしてもう一つの改革は様々な格闘技を体験、対処法のヒントを掴ませること。

＞映像：2015 年世界選手権

ナレ：3 つの金メダル含む 6 階級でメダル獲得の躍進。

大野：例えば自分が 10 あるうちの力の 1 しか出せなくて、相手が 10 の力を出してきても勝てる。最低金メダル。相手に大野には勝てないという風に感じさせたい。

高藤：柔道 60kg 級といえば野村忠宏じゃないと言われるくらい強い自分を見せて金メダルを獲りたい。

井上：自分自身を信じてもらいたい。本当に信じた上で畳に挙がってもらいたい。

番組写真 4－10 フジ「ユア」（8 月 15 日放送）

新監督就任会見当時、井上監督は、ロンドン大会での金メダル 0 という結果を踏まえオリンピックで勝つための強化プランを実施すると公言したが、ナレーションでは井上監督の「積極的にコミュニケーションをはかり従来の選手と監督のような関係性ではなく家族のような関係を築く」という改革を強調し、それを象徴するエピソードとして規律違反をした高藤選手（60 キロ級銅メダル）の反省を受けとめて監督自らも丸坊主にしたことを挙げている。また、もう一つの改革として、諸外国の様々な格闘技を体験させ、対処法のヒントを掴ませたことをあげている(フジ「ユア」はこれより先、8 月 9 日にもブラジリアン柔術の体験について報じている)。こうした改革の成果がリオ大会前年の世界選手権ですでに現れ、日本の男子柔道は 6 階級でメダルを獲得していたことを指摘し、リオ大会に向けての大野選手と高藤選手のコメント、井上監督が掲げた「選手が自分自身を信じるように」という目標が、リオ大会で達成されたことが示唆されている。フジ「ユア」の報道の中では、井上監督が 2000 年のシドニー大会で金メダルを獲得した後、2004 年のアテネ大会で連覇で

きなかったことについて、「魔物はいると思うか」とフジのオリンピックキャスター野村忠宏に尋ねられて、「日本代表合宿の前に選手達に目的を書いてもらって最終的に書いたのは、オリンピックに魔物はいないと書いた。やるべきことをやればおまえらは勝つよと」と答える場面もある。さらに、井上監督のニュースの最後には、全階級の選手からの言葉も流した。

＞映像：メダリスト記者会見
ナレ：監督への感謝の気持ちがあふれていました。
ベイカー：最高かつ最強の選手をという指導をされて自分自身成長できたと思っているので 4 年間ありがとうございましたという感謝の気持ちでいっぱいです。
海老沼：井上監督の下で柔道ができたことが本当にうれしくて、幸運に思っています。
原沢：(100kg 超級の※筆者注)再建を託されてその役が担えたかどうかわからないですけども、本当に自分を信じてもらえて感謝の気持ちでいっぱいです。
高藤：本当に自分自身頑張れたのは監督がいたから、監督のためにという思いがすごく強かったのでとても感謝してますし、金メダルには届かなかったですけど、本当の恩返しは金メダルとってからなので、また 4 年間頑張りたいと思います。
羽賀：自分は今回途中で負けて 3 位決定戦回ったんですけど、井上監督の言葉がなかったら気持ちを切り替えることができなかったので今度はもっと大きな夢を達成して井上監督に恩返しをしたいと思いました。
永瀬：最後は金メダル取れなかったんですけど、この悔しさをバネに次に活かして監督について行きたいと思います。
大野：監督がよく言われる最強かつ最高の選手に近づけたんじゃないかなと思います。感謝の気持ちでいっぱいです。
井上：まあ終わった後の涙に関しては、そうですねやはりこの最高のメンバーとやれたことの幸せという涙だったんではないかなと。本当に柔道は 2012 年ロンドン金 0 からスタートして、そのなかでいろいろなこともおき、変わらず心から応援してくれた人たちへの感謝の涙でもある。4 年後のビッグイベント東京オリンピックに向けてまた一丸となって頑張っていきたい。
ナレ：誇りを胸に 4 年後の東京へ。

このシーンでは、4 年後の東京大会を見据えた選手の発言とともに、登場したすべての選手が井上監督への「感謝の気持ち」を述べている点が特徴的である。そして、井上監督も、自身の涙について「最高のメンバーとやれたことの幸せという涙」「心から応援してくれた人たちへの感謝の涙でもある」と語り、ナレーションが結びに「誇りを胸に 4 年後の東京へ」と視聴者の意識を東京大会に向ける。

柔道は、先にも述べたように、そもそも競技の歴史的特徴として日本の「お家芸」として注目されてきた。それに男子柔道の全階級メダル獲得という、ロンドン大会での不振を克服し「お家芸」復活というストーリーをまさに証明する競技結果が加わり、立役者として井上監督が選手以上に注目されることになったといえるだろう。その指導方法が海外に学び、家族のような関係性を築いたという点も、伝統重視、上下関係、家父長制と指摘されてきた従

来の「監督・コーチ」のパターンからの逸脱であるといえる。

2）シンクロナイズドスイミングの井村雅代コーチ

シンクロナイズドスイミングは正式種目として採用された 1984 年のロサンゼルス大会から 6 大会連続でメダルを獲得し、日本の「お家芸」として注目されてきた。そのヘッドコーチ（名称はコーチだがその地位は代表チームの監督）を務め、「シンクロの母」と呼ばれてきたのが井村雅代コーチである。同じく日本の「お家芸」である柔道の男子代表監督の井上監督が、コミュニケーションを大事にしながら改革を推進した新しいタイプの監督として描かれたのとは対照的に、井村コーチは従来型のスパルタ監督として報じられた。

シンクロナイズドスイミングは、ロンドン大会で初めてメダルなしに終わったが、そのひとつの理由としてあげられたのが、北京大会に向けて井村コーチが中国代表の監督を引き受け、日本に不在だったことである。ロンドン大会の 2 年後、2014 年に井村コーチは日本代表コーチに復帰し、リオ大会で銅メダルを獲得した。

シンクロナイズドスイミングが柔道とともに日本の「お家芸」として復活を遂げる。こうして各局の報道では、選手による競技や本番でのパフォーマンス以上に、井村コーチが主役としてクローズアップされ、その存在や指導力が強調された。

日テレ「ZERO」は、8 月 16 日、17 日と連日井村コーチについて詳しく報じ、日テレ「ZERO」は、8 月 16 日に「井村コーチのこだわりの水着」というショート特集を組み、シンクロナイズドスイミングの肝として、「こだわりのきれいな水着」という観点から切り込んだ。この水着特集は、水着制作に携わったデサントの担当者が「音楽と演技と水着は一体だと。演技の進化に合わせて曲、水着を調整した。試着サンプルは 50 着」などと語り、太陽の下でも視認できる発色、手捺染と呼ばれる伝統手法で職人が一色ずつ、透けにくく軽い、勝つためにこだわった水着でメダル奪還を誓ったことを報じた。この中で水着の最後の仕上げに「選手の親御さんがクリスタルを縫い付ける、思い入れを背負って選手が戦う」と井村コーチが語るシーンがある。これを受けてメインキャスターの村尾が「シンクロの勝負は演技だけでない、総合的な戦略が着用する水着にも用いられている」と言及する。シンクロナイズドスイミングという競技の特徴に最大限にこだわる井村の姿勢とともに、選手の家族の思いをクローズアップしているのである。

デュエットでメダルを獲得した 8 月 17 日以降の各番組は、一斉に「厳しい指導」「地獄」「限界まで追い込む」「鬼コーチ」といった井村コーチのスパルタ指導ぶりを、明確に打ち出していく。

8 月 17 日の NHK「NW9」が掲げたタイトルは、「猛練習乗り越えてメダル奪還」。競技を行う最後の最後まで井村コーチが指導し、その末に決勝では予選を上回る高得点をたたき出したという描き方である。1 日 12 時間に及ぶ練習を乗り越えて逆転でつかんだメダル、それは当日が誕生日だった井村コーチへの最高の誕生日プレゼントになったと結び、乾選手が「先生を信じてきてよかった」、三井選手が「毎日地獄のよう。先生についていけて幸せ」と語った。

番組写真 4－11NHK「NW9」（8 月 17 日放送）

同日の日テレ「ZERO」は、「厳しい指導、シンクロの母へ銅メダルのプレゼント」というタイトルで報じた。試合後のインタビューからは、NHK「NW9」と同じ、乾選手の「先生を信じて」、三井選手の「毎日が地獄。先生についていくことができて幸せ」という言葉が伝えられた。ロンドン大会で初めてメダルなしとなった歴史を伝え、それを乗り越えることができた要因として、選手を限界まで追い込む練習（1 日 12 時間）とともに選手に檄を飛ばす井村コーチの姿が映された。

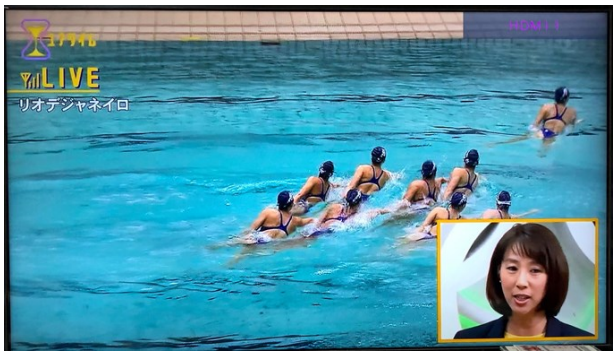
井村コーチの誕生日に迎えたデュエット決勝の結果の伝え方も NHK と同様で、ナレーションが最後に「鬼コーチが優しい笑顔を見せた」と結ぶ。その後、スタジオにいる女優でキャスターの板谷由夏が「コーチと選手、チームの心のぶつけ合いの結果がメダル、それに憧れるし心動かされる」、村尾キャスターは「よく頑張った。別々のものを同時にあわせる、試合であわせる、井村の厳しさにあわせる。心と体もあわせる、いくつものシンクロナイズである」とコメントし、スパルタ的指導を賛美する。

TBS「N23」もまた、「お家芸復活の銅メダル」とし、冒頭にこの日が井村コーチの誕生日であったことを伝えた。さらに、0.0144 の差の 3 位ウクライナの情報を伝え、乾選手の地元の応援の様子、演技をはさんで、乾選手の母、三井選手の母を映し、ウクライナの点数を受けメダル獲得が決定すると抱き合う井村コーチと乾・三井両選手を映した。三井選手が「井村先生お誕生日おめでとうございます」と涙ながらに口にした後、インタビューで三井選手が「毎日が地獄のようで大丈夫かなと思った。幸せ者です」、乾選手が「ずっとこのメダルのためにやってきた。先生を信じてやってきて良かった」と語り、それを受け井村コーチが「本当に重たいおめでとう」と笑顔で話す様子を流した。そしてその 30 分後には、チームでのメダル獲得に向けて猛練習する様子が伝えられた。ライバル国や選手の地元、母親が登場した点が、他の番組と若干異なるが、井村コーチを軸に、彼女の誕生日が笑顔で終わるという描き方は同じである。

フジ「ユア」も最初に伝えたのは、当日が井村コーチ 66 回目の誕生日であることで、それに続けてナレーションが「復活への道は険しかった」と読み、これまで日本の「お家芸」として井村コーチが牽引しメダルを獲得してきた軌跡を紹介、ロンドン大会でメダルが途絶えたことも伝えた。また、井村コーチが大会前に「メダルを奪還しメダル常勝国に返り咲くオリンピックに」と抱負を語ると、勝ちパターンは独創性であるとして、リフトから飛ぶ

選手に対してトランポリンを使った練習を取り入れたり、選手全員にハイポトレーニングを課した練習風景も紹介した。乾選手が「当日はメダルをかけられるようにしたい。やりきったという気持ちも 4 年前と違います」と試合に向けた抱負を語る部分も挿入され、他番組とは異なる構成と情報が提供される。

番組写真 4－12 フジ「ユア」(8 月 17 日放送)



最後に井村コーチが「本当によく泳いだと思います」と選手たちの頑張りを認める発言があり、フジのオリンピックキャスターでシンクロナイズドスイミング OG でもある小谷実可子の「厳しい練習の先に確信と安心がある」というコメントで締めくくられている。

柔道はロンドン大会で初めての金メダルなしに終わり、シンクロナイズドスイミングは、ロンドン大会で初めてのメダルなしに終わった。しかしリオ大会でメダルを獲得し、柔道とともに日本の「お家芸」として復活を遂げる。その立役者としてクローズアップされたのがコーチという構図も柔道と同じと言っていいだろう。そして井村コーチの指導力が注目されるのであるが、そこで登場したのは、選手に檄を飛ばし、一日 12 時間に及ぶ練習やハイポトレーニングなど選手が「地獄」と呼ぶ過酷で厳しい練習であり、選手らがコーチを信じてそれを乗り越え、幸せなメダルを獲得したというストーリーが展開される。井村コーチがいなければ今回のメダル獲得はなかった、というメッセージが視聴者に伝えられるとともに、近年批判されてきたスパルタ的指導が肯定的に報じられ、それに憧れ、心動かされたキャスターのコメントが加えられることによって、スパルタ的指導を賛美するものとなっているのである。「お家芸」という競技の共通点はあるが、立役者の二人と選手たちはジェンダーも異なり、描かれ方もまったく正反対であった。

第５節　オリンピック理念とニュース報道

本節では、オリンピック理念との関連でニュース番組のリオ大会報道のあり方を検討する。具体的には、メダル獲得総数の報道、平和の視点からの報道、ドーピング問題についての報道が、それぞれどのようになされたのかを明らかにする。

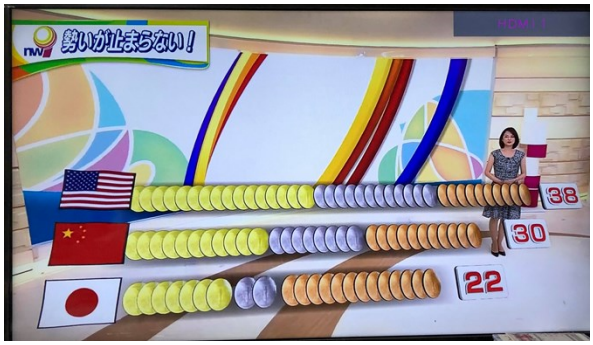
１．日本選手のメダル獲得状況の伝え方

オリンピック憲章の規則６は、「オリンピック競技大会は、個人種目または団体種目での選手間の競争であり、国家間の競争ではない」と明言し、規則 57 では、「IOC〔国際オリンピック委員会〕 と OCOG〔大会組織委員会〕は国ごとの世界ランキングを作成してはならない」としていた[135]。こうした規定は、「オリンピズムの目的は、 人間の尊厳の保持に重きを置く平和な社会の推進を目指すために、人類の調和のとれた発展にスポーツを役立てることである」というオリンピック憲章の冒頭に掲げられているオリンピズムの根本原則 2 にもとづくものである。つまりオリンピックは、単なる国際競技大会ではなく平和運動なのであり、こうした目的を遂行していくために、国家間の競争としてオリンピックが扱われることを断固として否定しているのである。

では、日本のニュース番組の報道は、「国家間の競争ではない」というオリンピックの理念にふさわしいものになっているのだろうか。テレビ放送局は、オリンピック憲章規則 57 でいう「世界ランキング」の作成禁止の対象ではないが、それを無視することは、オリンピック自体についての無理解や商業主義的な利用などを示す指標となるだろう。ここでは、各番組の日本の総メダルの獲得状況についての報道を対象にこの点を検討してみたい。

以下の映像は、NHK「NW9」、日テレ「ZERO」、テレ朝「報ステ」、TBS「N23」の 4 番組が日本選手のメダルの獲得状況を伝えている場面である。なお、フジ「ユア」にはこのようなメダルの伝え方をする場面が見当たらなかった[136]。

番組写真 4－13NHK「NW9」の国別メダル数報道（8 月 12 日放送）



[135] このうち規則 57 は、2021 年 8 月の改正によって消滅し、「競技成績の表示は、情報提供の目的で IOC が行うことができるほか、IOC の承認のもとに OCOG が行うことができる」となった（黒須 2022：118）。

[136] 前章でも言及したように、フジ「ユア」は 3 番組の録画に失敗してしまった。もしかしたら、見逃してしまった部分があるかもしれないことをここに断る。

番組写真 4－14 日テレ「ZERO」のメダル数報道（8 月 9 日放送）

番組写真 4－15 テレ朝「報ステ」のメダル数報道（8 月 18 日放送）

番組写真 4 －16TBS「N23」のメダル数報道（8 月 18 日放送）

各局とも、日本のスタジオにいるキャスターらが日本のメダル獲得状況を伝えている。

特徴的なのは、NHK「NW9」であり、国別のメダル数とその中での日本の順位をわかりやすく表示した。同番組で、初めてメダル数が国単位で集計され順位づけがなされたのは、大会 6 日目の結果を伝える 8 月 11 日の放送であった。この日は、体操・個人総合の内村選手、柔道・男女金メダル、競泳・200mバタフライ銅とメダルラッシュだったことから、他のオリンピック関係のニュースを伝えたのち、日本のメダル獲得数について「体操、柔道、競泳で〔メダルを—引用者注〕加え 18 個に。アメリカは 32 個、中国は 23 個〔内訳も画面に表示—引用者注〕日本は金総数 3 番目」と報じている。翌 12 日には日本の獲得メダル数のなかでも金メダルがすでに前回大会を上回ると報じ、合計 22 個で国別の順位で 3 番目で

あることを伝えた。17 日には、大会 12 日目を終えて日本は金 7 銀 4 銅 18 合わせて 29 個になったことを報じている。日本のメダル獲得数を報じるだけでなく、国別の比較をグラフィックで見せたのは NHK「NW9」の特徴だ。オリンピック憲章規則 57 を完全に無視した報道である。

日テレ、テレ朝、TBS は、メダル数については上記の画面写真のように日本のメダル獲得数をメインに伝えていたが、TBS も 8 月 12 日の放送で、「金 7 銀 2 銅 13」と金メダル数が前回ロンドンに並んだことを伝えた際、「合計は世界第 3 位なんですね」とコメントしている。

TBS「N23」についてみてみよう。TBS「N23」は、メダルを獲得した選手の顔をわかりやすく表示しながら、日本のメダル獲得数を毎日伝えた。大会 4 日目の 8 月 8 日の放送時点ですでにメダル獲得数を報じていた。オリンピックニュースをすべて伝えたのちに、日本のスタジオから日本の総メダル獲得数が「金 1 銅 6」となったことを伝え、「どこまでメダルが増えていくか楽しみですね」とスポーツ担当の宇内アナがコメントし、メダルへの期待を披露していた。翌 8 月 9 日には、男子体操団体や柔道の男女でのメダル獲得を受け、スタジオでメダル数を「金 3 銅 7、好調続く日本勢」、10 日には、歴史的なメダルばかりとして競泳・男子 800m リレー、男子 200m バタフライ、カヌースラローム・男子カナディアンシングル、柔道・男子 81 キロ級の競技結果を報じ、「金 3 銀 1 銅 10」を伝えた。11 日の放送休みを挟み、12 日には上述の通り前回ロンドン大会に並ぶ金の数に触れ、「金 7 銀 2 銅 13」を伝えている。土日の放送の休みを挟み、8 月 15 日には日本のスタジオで「リオ五輪メダル獲得選手」の一覧を表示するとともに、キャスターが「現在、金 7 銀 4 銅 15 の計 26 個でロンドンの合計 38 を超えるかもしれません」と日本のメダル最多の可能性を伝えた。16 日の放送休みを挟んで、8 月 17 日には「金 7 銀 4 銅 18」、18 日にも「金 10 銀 5 銅 18」と、必ず日本選手のメダル総数を伝えていた。

日テレ「ZERO」も、日本のメダル獲得数を毎日伝えた。8 月 9 日に総数が 10、内訳が金 3、銅 7 であることを報じている。10 日のニュースでも日本のメダル獲得数を「金 3 銀 1 銅 10」と伝えた。この日は、競泳やカヌー、柔道でメダルを獲得し、また番組に生出演する選手も多かったが、リオにある特設スタジオで、カヌーの羽根田選手、柔道の永瀬選手が生出演する直前に、メダル数が伝えられた。翌 11 日のニュースでも「金 6 銀 1 銅 11」、12 日にも「金 7 銀 2 銅 13」と伝えた。8 月 16 日には、番組放映がなかった土日（13 日・14 日）と 15 日の競技結果を加算し、日本のメダル獲得数が 27（金 7、銀 4、銅 16）と「着実に増えている」と伝え、翌 17 日には「金 7 銀 4 銅 18」、18 日には「金 10 銀 5 銅 18」と連日日本のメダル獲得総数とその内訳を繰り返し伝えた。

同番組は、8 月 19 日には速報として 50km 競歩の結果を報じ、荒井選手が他の選手を追い抜かすシーンとゴールシーンを流し、キャスターが「男子 50ｋｍ競歩の速報です。3 位争いのオリンピック初出場の荒井が残り 1 キロで驚異的な追い上げです。荒井は日本競歩界初の銅メダル獲得、これでメダルは 38 個とロンドンオリンピックに並びました」と伝え、「金 12 銀 6 銅 20。メダルの数は 38 個となっています」と説明した。さらにこの日は、ニュースの終盤に、2 階級が行われていた男子レスリングのうち 1 階級でメダル獲得が確定した。ラルフキャスターは、「高谷選手惜しかったのですが、57 キロ級樋口選手が銀メダル以上を確定しました。ということでメダル史上最多を更新しました」と、日本のメダル獲得数

がオリンピックを通じて最多となったことを強調した。以上のように同番組は、メダルの総数と内訳を連日伝えるとともに、日本のメダル獲得数が史上最多を更新した瞬間を逃さず、速報として伝え、他局に抜きんでてリアルタイムでメダル数の変動を伝えた。

一方、メダル獲得数をあまり報じなかったのがテレ朝「報ステ」とフジ「ユア」である。

テレ朝「報ステ」は、ニュースのなかで日本のメダル獲得数に触れることはほとんどなく、8 月 18 日のニュースで一度だけ「金 10 銀 5 銅 18」と伝えるにとどまった。

番組写真 4－17 テレ朝「報ステ」独自企画「日めくりオ」

テレ朝「報ステ」は、「日めくりオ」という企画で、8 月 11 日には体操男子の活躍を受けて「伝わった金」、柔道の男女 2 階級金メダル(ベイカー選手と田知本選手)を受けて「はじめまして金」と紹介し、19 日にはバドミントンダブルスの金メダルを受け「一番の日」などとキャスターの松岡修造自身がテーマを定めてメダリストに話を聞いていくスタイルがとられていた。メダル獲得数ではなく、当日にメダリストとなった選手や競技にちなんで、メダルが持つ意味を独自の言葉で視聴者に伝えることを重視していた。

フジ「ユア」では、メダル獲得数に関する言及や映像表現は見られなかった。録画の失敗により検証できる番組数が他局より少ないが、確認できた 6 番組の中で日本のメダル獲得数を伝えるシーンはなかった。他の番組と比べてフジ「ユア」のリオ大会の報道量は極端に少ないわけではない（前掲図 3－2 参照）。8 月 9 日のオープニングトークで、日本のスタジオにいる市川やその他コメンテーターらが「私たちはスポーツ音痴」と公言したこともフジ「ユア」の独自色を示すものだが、メダル獲得総数の報道をしないというのも同様であろう。

以上のようにメダル獲得総数の報道については、各番組でかなりの差異が認められる。日本のメダル獲得総数を報じるだけでなく、国別のランキングというオリンピック憲章規則 57 を完全に無視した報道を行なったのは NHK「NW9」だけである[137]。日テレ「ZERO」と TBS「N23」は、日本のメダル獲得数を毎回伝えた。それに対して、テレ朝「報ステ」は日本のメダル獲得数に触れたのは一度だけであり、フジ「ユア」は皆無である。この点で、テレ朝「報ステ」とフジ「ユア」におけるメダル獲得総数の扱いは、オリンピック理念を遵守したものであったと評価することができるだろう。ちなみに両番組は、前章でみたようにリオ大会をトップニュースに据えた割合も低い。

---

[137] ただし、TBS「N23」でも「合計は世界第 3 位なんですね」とコメントしたシーンが一度あった（8 月 12 日放送）。

２．平和と難民選手団の扱われ方

先にみたようにオリンピックは「人間の尊厳の保持に重きを置く平和な社会の推進を目指す」国際的な平和運動である。しかし、こうした視点による報道はきわめて少ない。本論文が対象としたニュース番組の中で、平和という視点からニュースを報道したのは、8 月 15 日と 16 日の NHK「NW9」のみであった。

8 月 15 日のこの番組では、「お家芸復活！帰国する選手たち」として柔道の選手団を紹介したのち、選手たちが直前に訪れた千葉県内嘉納治五郎のお墓のシーンを報道した後、嘉納をクローズアップする。嘉納が創設した講道館の映像や、柔道を通して深いつながりのあった魯迅を紹介し、さらに「自他共栄」の信念が五輪への執念になったことと、IOC 委員として 1940 年の東京五輪の招致や準備に奔走し、1938 年 IOC 総会に出席後、77 歳で帰国の船中で病死したこと、そのわずか 2 ヶ月後に政府が東京五輪を中止したことを紹介し、「平和のためのオリンピックができることはありがたい」という 1940 年東京五輪の幻の日本代表選手の発言を流した。それを受けて河野キャスターは、「今回は難民選手団も出場、世界情勢がその時々で出ている」とコメントした。

翌 16 日には、難民選手団を選手の試合映像と共に紹介し、選手たちを応援する難民キャンプの子どもたちの映像も用いて、「難民の人の希望につながるオリンピック」とリオ大会を評価するとともに、「東京五輪では戦争も難民もなくなり自分の国に戻り代表になれたらいい」というシリア難民のラミ・アニス選手のコメントを伝えた。38 番組のうち難民選手団を伝えたのは NHK「NW9」のみであった。

平和運動というオリンピック・ムーブメントの意義をふまえたニュース報道は、このように NHK「NW9」のみの 2 件にすぎず、15 日の報道に関しては、終戦記念日および嘉納治五郎という日本についての記憶、日本人や日本文化の賞賛とも一体となった企画である点にも留意が必要だろう。これまでみてきたような報道内容の大半が日本選手の活躍で占められ、外国人選手の多くが日本選手のライバルとして描かれているという実態自体が、平和運動というオリンピック・ムーブメントの報道として問題であるが、上記の事例は、オリンピック・ムーブメントという視座をニュース番組がそもそも持っておらず、オリンピックを単なる国際的な競技大会と扱っているということを示しているといえよう。

３．リオ大会のネガティブな事件や問題の扱われ方

最後に、選手のスキャンダルやドーピング問題というリオ大会のネガティブなニュースをどう報道したのかを見ておきたい[138]。

アメリカ NBC の報道過熱現象の一例として、Coche and Tuggle はロクテ選手の狂言事件をめぐる報道を挙げているが（Coche and Tuggle 2017: 199-217）、日本ではこの事件に

---

[138] これらの報道は、第 3 章の図 3－4「報道された競技関係者の構成」の〈その他〉に分類したものである。なお本論文では、選手を中心にした追究を試みたため、8 月 18 日テレ朝「報ステ」が報じた IOC 理事のパトリック氏がチケット不正転売容疑で逮捕された事件や、各局が伝えたリオ会場での投石や銃声など治安に絡んだ事件の報道については検討の対象外とした。今後の課題としたい。

ついて計 4 件しか報道実態がない。テレ朝「報ステ」は、8 月 15 日に、ロクテ選手らがタクシーで強盗被害にあったことをカメラ映像などを用いて報じたのち、18 日には「証言が狂言であった」として選手 4 人中 2 人が出国拒否となっていること、19 日にはロクテ選手の証言が嘘だったことを伝えた。一方、NHK「NW9」は、17 日にアメリカの 800mリレーメンバーがタクシー強盗の被害にあったと伝えただけである。リオ大会で、ロクテ選手は個人種目でメダルはなかったものの競泳の 800m リレーで金メダルを獲得しており、フェルプス選手と並ぶアメリカの競泳界のヒーローでもあるため、アメリカでは大きなスキャンダルとなったが、日本のニュース番組にとってニュースの価値は低かったことがわかる[139]。

リオ大会期間中に起きたドーピングに関するニュースも、日本のニュース番組での報道はわずか 2 件しか確認できなかった。1 つは、8 月 8 日のテレ朝「報ステ」のみが報じた、ロシア選手のリオパラリンピックから排除決定である。当時は、ロシアによる国家ぐるみのドーピング問題が浮上し、ロシア選手の 100 人以上が IOC によって出場禁止処分を受けていた[140]。そのような中でのパラリンピックからのロシア選手の排除決定というニュースは、オリンピックにとって重大ニュースであるにもかかわらず、その報道はわずか 1 件であった。もう 1 つも、テレ朝「報ステ」で、8 月 19 日の放送で、ウェイトリフティング男子 69ｋｇ級銅メダルのイザット・アルティコフ選手（キルギス）のドーピングが発覚し、メダル剥奪となったというニュースである。こちらも、日本ではほとんど話題に上がらなかった。ドーピング問題も、ニュース番組にとってニュースの価値が低かったことがわかる。

リオ大会で発生したスター選手のスキャンダルやドーピング問題を報じたのは、NHK「NW9」とテレ朝「報ステ」だけであり、その件数も計 6 件にとどまった。しかし、オリンピックの根本理念をふまえるならば、これらはきわめて深刻な問題であり、ニュース番組が報道すべき高い価値を本来もっていたと考えられる。これらの問題は、オリンピック憲章に定められている「オリンピズムは肉体と意志と精神のすべての資質を高め、バランスよく結合させる生き方の哲学である。オリンピズムはスポーツを文化、教育と融合させ、生き方の創造を探求するものである。その生き方は努力する喜び、良い模範であることの教育的価値、社会的な責任、さらに普遍的で根本的な倫理規範の尊重を基盤とする」というオリンピズムの根本原則 1 に明らかに反する行為であり、オリンピックの理念と実態との乖離を象徴するものであるからだ。こうした事件の意味や背景を追究するどころか、2 局のみが事実を報道するにとどまったのは、各番組の報道がリオ大会の競技結果に偏重しているというだけでなく、「特に、巨大化した五輪の問題点を批判的に伝えることは主要なテレビ・新聞が挙国一致（オールジャパン）体制でコミットした日本においては、難しい」(砂川 2016:13) という、ジャーナリズムとしての機能の弱体化を示すものと考えられるだろう。

本章のまとめ

本章では、前章における 5 つのニュース番組の量的内容分析をふまえて、質的内容分析を

---

139 ライアン・ロクテ選手は、2004 年アテネ大会からオリンピックに 4 大会連続で出場、個人とリレー種目を合わせて金メダル 6、銀メダル 3、銅メダル 3 の成績を残している。

140 なお陸上チームは出場禁止が決定しており、唯一出場できたのは走り幅跳びのダリア・クリシナ選手のみであった。

試みた。検討課題として設定したのは、第 1 に、先行研究で指摘されてきた「競技以外の側面」のクローズアップやジェンダーバイアス、外国人選手の描写、日本選手の身体や戦い方のステレオタイプ化、第 2 に、前章までの検討で浮上したニュース番組がリオ大会報道を「人間ドラマ」仕立てにしている可能性、ライバルや監督・コーチとの関係に関する報道のジェンダーによる差異、外国人選手の報道内容の日本選手との差異、第 3 に、日本選手の競技結果以外を主役にした報道の特徴、第 4 に、オリンピック理念との関連での検討である。その結果明らかになったのは、以下のような点である。

「競技以外の側面」をクローズアップした報道の典型といえる「人間ドラマ」仕立ての問題について「家族」を通して迫ろうとした。詳細な報道のあった 60 人のうち家族が要素として付与されたのは計 35 人（女性選手 17 人、男性選手 18 人）と、選手の半数以上を占める。「家族」が、選手報道にとって重要な要素であることは明らかといえる。一方で、登場する男女比に差はなかったが、「支え」という視点で見ていくと、とくに女性選手の場合に家族による「支え」が過度に演出されており、それは 4 連覇を達成したレスリングの伊調選手をはじめ競泳金メダリストの金藤選手、柔道の田知本選手など、多くの女性選手の業績を矮小化するものであったといえる。一方で、家族が指導者である卓球、レスリング、体操などの選手の事例では、上記のような家族関係の描かれ方とは異なり、家族による指導ゆえの強さの秘訣といった競技力の解説に重点が置かれていた。しかし、そこにもジェンダー差がみられ、特に幼少期から注目度の高い女子卓球選手の場合は、指導者ではなくもっぱら「見守る」母等として描かれていた。これらのことから、ニュースに登場する「家族」の描写にはジェンダーバイアスが確実に存在しているといえる。

家族の「支え」の演出にも関連するが、体操の内村選手、柔道の海老沼選手の報道では、「外で働く男、家を守り支える女」という性別役割分業が強調されていた。また、「監督・コーチ」のエピソードは、女性選手だけでなく男性選手の報道にも付与されていたが、これはジェンダーフリーと称賛できるような内容ではなく、「競技の結果を選手が出すためには、家族、監督・コーチの存在が必須である」というメッセージを内包するものであり、スポーツにおける上下関係の再生産につながっていく懸念を拭えない。また、体格差を乗り越え自由形 800m フリーリレーでのメダル獲得に貢献した女性コーチが「母親のような存在」と描写されていた。つまり女性選手や女性コーチの業績の矮小化がなされている。

選手の愛称やプライベート報道についても、女性選手に情報が付与される傾向があり、ここにもジェンダーバイアスが存在するといえる。なお、天才少女として幼少期より愛称で呼ばれてきた卓球の人気女性選手は、メディアの扱いに関する男性選手との差異を際立たせる存在であり、メディアによる人気選手の創出を象徴するものであることが男性選手自身の発言から明らかになった。

以上のようなジェンダーバイアスについては、前章で明らかになった量的な差異が質的な差異にもつながっていることを示すものであり、選手報道を構成する要素を、テレビの側が選択する段階で、すでにジェンダーバイアスが作用していることを示唆するものとして重要であろう。

男性性の象徴とされてきたパワーやライバルに関しては、特異な事例が 2 つの競技で見受けられた。ひとつはバドミントンシングルスで、奥原選手と山口選手という日本女性選手同士の対決が実現し、女性選手間のライバル関係が描かれたことである。もうひとつは柔道

の永瀬選手と田知本選手の事例であり、両選手とも異性の柔道部員を相手に練習を行なっていた経験をもち、男性選手の方がパワーではなく技を磨き、女性選手の方がパワー重視の練習をしていたというもので、男性性の象徴という従来の描写からの逸脱といえよう。

「詳細な報道」に該当する外国人選手はわずかに 7 人であったが、その報道は、彼/彼女らのヒーロー性/ヒロイン性をクローズアップするだけでなく、日本選手が自然に挿入され、「ライバル」や「日本選手活躍への期待」というパターンに落とし込まれている。例えば、リオ大会で新たに注目されたレスリングのマルーリス選手や体操のベルニャエフ選手の報道は、日本選手（レスリングの吉田選手、体操の内村選手）があってこそ台頭してきた選手であるという、自国の選手を賛美する形で構成されている。自然かつ巧みに転換される〈外国人選手→日本選手〉という報道の流れは、先行研究が指摘するオリンピック報道の「自国の応援放送化」とも重なる問題である。唯一の例外的報道は、テレ朝とフジの２番組が、陸上のボルト選手からバンニーキルク選手という〈外国人選手→外国人選手〉のパターンで報じたものであり、これは外国人選手による世界記録の更新について詳細に報じた唯一の例でもあるが、この場合は同競技種目でメダルを期待できる日本選手が不在であるという事情も関係しているように思われる。

日本選手の競技結果以外を主役にした報道に関しては、ジャーナリズム性が多数見いだせた点がひとつの特徴である。たとえば、史上初のメダル獲得となったバドミントンやカヌーなどの競技では、競技の歴史を紐解き、協会による競技全体の底上げの取り組みに着目した調査報道もなされた。また、競泳における速さの秘訣を身体的特徴などから説明しようとした報道には、日本人の身体についてのナショナリズムに彩られたステレオタイプは見当たらない。

一方、サッカー、バスケットボール、バレーボールというチームスポーツでは、「日本の戦い方」がクローズアップされ、体格で劣る日本が勝つためには俊敏さ、機動力、パスワークといった「日本」の特徴を生かした戦い方を強調する報道が顕著だった。これらの競技の報道では、対戦相手国との戦力比較などの中でナショナリズム的な文脈が登場し、「日本の戦い方」が強調されるという構造がみられる。

「日本」らしさをより鮮明に示しているのが「お家芸」という表現であり、柔道、シンクロナイズドスイミング、陸上 100m×4 リレーのバトンパスでみられ、体操も同様の扱いがなされている。これらの競技では、各番組が事前に歴史や競技力や戦略などの側面も含めた多岐にわたる情報を準備しており、体操ではそうしたジャーナリズム性を持った報道がメインであったが、柔道やシンクロナイズドスイミングは、競技の哲学や日本の戦い方というナショナルな文脈が強調された。そのような傾向は特に柔道において顕著であり、「一本で勝つ」ことが日本の柔道の美学であるという理解を前面に押し出した報道がなされた。

監督を主役にした報道が、「お家芸」とされる柔道とシンクロナイズドスイミングだったことも、日本のテレビ報道の特徴だったといえるだろう。ロンドン大会での不振を克服し「お家芸」を復活させた立役者としてクローズアップされた井上監督の描写は、戦術を海外に学び、選手たちと家族のような関係性を築いたとするものであり、伝統重視、上下関係、家父長制と指摘されてきた従来の「監督・コーチ」のパターンからの逸脱であるといえる。一方、シンクロナイズドスイミングの井村コーチも、ロンドン大会での不振から「お家芸」を復活させた立役者としてクローズアップされたが、その報道は近年批判されてきたスパ

ルタ的指導を賛美するものとなっており、井上監督と対照的な描かれ方となっている。

最後にオリンピック理念との関連で検討したが、その結果は以下のようなものである。第1に、メダル獲得総数の報道については、各番組でかなりの差異があり、オリンピック憲章規則57を完全に無視した報道を行なったのはNHKだけで、テレ朝は一度だけ、日テレとTBSは毎回日本のメダル獲得数を伝え、フジは皆無であった。フジとテレ朝の報道は、オリンピック理念を遵守したものであったと評価することができ、また、両番組はリオ大会をトップニュースに据えた割合も低く、ここには相関関係が見いだせる。第2に、平和運動というオリンピック・ムーブメントの意義をふまえたニュース報道は、NHKのわずか2件であった。このことは、そもそも平和運動という視座をニュース番組が持っておらず、オリンピックを単なる国際的な競技大会と扱っているということを示していると考えられる。第3に、リオ大会で発生したスター選手のスキャンダルやドーピングという、オリンピックの理念と実態との乖離を象徴する問題を報じたのは、NHKとテレ朝だけであり、その件数も計6件にとどまった。このことは、各番組の報道がリオ大会の競技結果に偏重しているというだけでなく、ジャーナリズムとしての機能の弱体化を示すものと考えられる。

終章　総括と今後の課題

第１節　総括

これまでの日本におけるテレビのオリンピック放送に関する研究は、第 1 に、送り手については研究そのものが不十分であり、第 2 に、メッセージ分析研究については一定の蓄積があり、量的内容分析あるいは質的内容分析のどちらか一方の手法による検討が重ねられているが、事例の解明に両手法を採用することでより詳細に実態を検討する余地が残されている。こうした研究状況を乗り越えるために、本論文では、日本における 2016 年リオ大会のテレビ放送を対象とし、送り手研究としてリオ大会に関する放送体制および番組編成、メッセージ分析研究としてはニュース番組によるリオ大会報道の内容に照準を定めて検討を行なった。それらの検討結果の詳細は、各章で示したとおりであるが、ここではそのポイントをもう一度確認したうえで、上記の 2 つの課題に即して総括を試みたい。

第 1 章では、放送権の獲得を前提に確立されている日本におけるオリンピックの放送体制をその歴史的な経緯および欧米との比較も交えながら検討した。

日本では、1979 年 10 月に NHK と民放が共同で放送権契約を行うことを機関決定して以降、JC 方式というオリンピック放送のための臨時の放送機関を立ち上げて、「1 国 1 放送機関」と定められていた放送権の制限をクリアしてきた。このような独自の体制によって、2014 年ソチ大会と 2016 年リオ大会とを合わせて 360 億円という放送権料を支払い、オリンピック映像を NHK と民放各局で使用できる許可を得てきたのであり、これがオリンピック期間中に地上波すべての局のチャンネルで、自国選手が出場しているか否かにかかわらずオリンピック放送が見られるという日本特有の現象を生み出した。

第 2 章では、世界的にも例外的な放送体制の下でのリオ大会のテレビ放送の実態を番組編成の決定過程も含めて検討した。

日本のテレビが生中継したのは、リオ大会で実施された全 39 競技中 26 競技で、かなり幅広い競技がカバーされているといえる。中継した 26 競技は、日本選手が獲得した 41 のメダル中 40、カヌー以外のすべてのメダル獲得の瞬間をカバーしており、中継の対象に選ばれた競技が、日本選手のメダル獲得に照準を定めたものであることは明らかであり、テレビ局側が事前に立てたメダル獲得の予測がほとんど的中していた。

NHK は、放送計画の時点から、リオ大会期間中全放送時間の 61.8%をリオ大会中継および関連番組にあてることを決定しており、実際にはこれに高校野球の中継も加わり、NHK はリオ大会期間中にスポーツチャンネル化する。他方、民放も日本人メダリスト誕生の可能性がある競技中継を行うべく放送計画を立て、実際にどの局もメダル獲得にまつわるシーンを 1 つは中継した。

これらの地上波 6 チャンネルが、8 月 5～22 日までの 18 日間に放送したリオ大会関連番組の放送時間は、計 468 時間 13 分、全放送時間の 18%を占めた。また、全放送時間のうち 37%を占めているのがニュース・情報番組であるが、上杉・杉山が計測したニュース番組におけるリオ大会報道の比重の平均値 46%を用いてそこに占める比重を算出すると 17%となる。これはリオ大会関連番組に匹敵する比重であり、これを加算すると、リオ大会開催期間中 6 チャンネル分の放送全体の実に 35%がオリンピック放送だったことになる。これ

は、日本のテレビ放送がいかにオリンピックに偏重しているのかを鮮明に示すものであり、世界的に異例なJC方式による日本のテレビ放送の特異性を示すものに他ならない。

第1～2章で明らかになった最も重要な事実は、日本においては、高額な放送権料をNHKと民放が共同で支払い、世界でも異例な挙国一致的な放送体制を構築して、オリンピック期間中に地上波すべての局のチャンネルでオリンピックを放送するという世界でも稀な状況が生み出され、さらにオリンピック放送に偏重した番組編成が組まれて、日本選手のメダル獲得の可能性が高い競技種目を中心とした膨大な量のリオ大会関係の情報が発信されたことである。

通常の番組を中断して独占的に生中継が行われるのは「放送と私たちの生活がもつ通常の流れに対する介入」であり、「社会にとっての何らかの中心的価値や、集団的記憶の一面にスポットライトをあてる祝日」であり、オリンピックはまさにその代表格であるとダヤーンとカッツは指摘しているが（ダヤーン＆カッツ 1996：18,10）、日本においてはそれが世界でも例をみない極限的な形でなされたのである。

オリンピックをめぐるこのような日本のメディアの特異性とその機能について、私たちはこれまであまりにも無自覚だったのではないだろうか。

第3章では、リオ大会期間中の夜のニュース番組を対象にして、リオ大会の報道を量的内容分析によって検討した。

リオ大会期間中各ニュース番組は、リオに取材陣を派遣して現地特設スタジオから報道するという特別体制を組むとともに、リオ大会に関するニュースを各番組の最重要項目に位置づけた。報道の順序を変えてリオ大会をトップニュースに置くことが6割を超え、オリンピックを中心とした「スポーツ」のニュース本数が、「社会」の次に多い27.6%にまで増加した。オリンピックをトップニュースにした頻度が高い局ほどオリンピックの報道時間が長く、なかでもNHKのオリンピックニュースの報道量は5局中で突出している。

ニュース番組で取り上げられた競技は、全39競技中24競技であり、ニュースへの登場件数には競技間で大きな差があるが、日本選手がメダルを獲得した11競技はすべてカバーしている。メダリストとなった日本選手がリオ大会報道の主軸となっているのであり、報道画面に登場した競技関係者のうち最多が選手であり、288人もの選手たちがナレーションの中やテロップという形で番組内に登場した。そのうちメダリストは146人（50.7%）と半数であるが、報道件数はメダリストが631回（69.8%）と約7割を占め、メダリストへの偏重が顕著である。男性選手よりも女性選手のほうが報道量が少ないが、これは男性選手によるメダル獲得の比率の高さと比例関係にあると考えられ、ジェンダーバイアスによるものとは言い難い。選手の国籍では、日本選手116人（40.3%）よりも外国人選手の方が172人（59.7%）と多いが、報道件数で見ると日本選手が外国人選手の1.7倍であり、報道の実態は明らかに日本選手に偏重したものである。

選手たちの報道は、「競技結果のみの報道」が61.4%と最も多く、「詳細な報道」が20.8%、「競技結果＋αの報道」は17.7%である。このうち「詳細な報道」がなされた選手は60人で全体の2割程度であるが、報道件数の半数以上を占めており、また、外国人選手はわずか7人に過ぎない。自国の少数の選手にフォーカスし、同じ選手を幾度も登場させ「人気選手」を生産しているのである。外国人選手のほとんどが「競技結果のみの報道」であり、137人中83人が日本選手の「対戦相手」として扱われている。また、「競技結果＋αの報道」では、

男性選手の「＋α」の内容が競技力の高さを基本としたものとなっているのに対して、女性選手の場合は、家族構成や年齢、宗教、人種といった事柄であり、ジェンダーバイアスの存在が確認できる。

選手 60 人の「詳細な報道」の内容を構成する要素を 21 項目に区分し、5 つにグルーピングしてみた結果、「人間ドラマ」を構成する選手の「気持ち」や「家族」などを多く含むグループの合計が 61.7%となった。これは、リオ大会の報道内容が「人間ドラマ」仕立てとなっていることを示している。他方で、スポーツの迫力や選手の技術、競技そのものを伝える報道内容もそれなりの比重を占めているが、比率としては 32.3%であり、「人間ドラマ」仕立て報道の優位性が示された。ただし、外国人選手の報道の場合は、競技結果に直結するような要素によって構成されており、また、男性選手の報道では「監督・コーチ」よりも圧倒的に「ライバル」の要素が多い。

第 4 章では、ニュース番組によるリオ大会報道の質的内容分析を行った。

「詳細な報道」がなされた選手 60 人のうち「家族」の情報が付与されたのは、半数以上の 35 人である。とくに女性選手の場合は、家族による「支え」が過度に演出されており、多くの女性選手の業績を矮小化するものであった。一方で、家族が指導者である選手の事例はそれとは異なり、競技力の解説に重点が置かれていたが、そこにもジェンダー差がみられ、特に幼少期から注目度の高い女子卓球選手の場合は、指導者ではなくもっぱら「見守る」母等として描かれていた。

「監督・コーチ」のエピソードは、女性選手だけでなく男性選手の報道にも付与されており、それらは選手にとって家族や監督・コーチの存在が必須であるというメッセージを内包し、スポーツにおける上下関係の再生産につながるものである。その際にも、女性選手、コーチには業績の矮小化がみられ、また、女性選手には愛称やプライベートな情報が付与される傾向がみられる。他方、男性性の象徴とされてきたパワーやライバルに関しては、それから逸脱する特異な事例もみられた。

外国人選手の実際の報道には、日本選手が自然に挿入され、日本選手を賛美する形で構成されていくというパターンが顕著である。自然かつ巧みに転換される〈外国人選手→日本選手〉という報道の流れは、先行研究が指摘するオリンピック報道の「自国の応援放送化」とも重なる。

以上のように報道の大半を占める選手の報道は、明らかに日本選手の活躍に偏重した「人間ドラマ」仕立てのものが主流であるが、日本選手の競技結果以外を主役にした報道に関しては、ジャーナリズム性が見いだせる。たとえば、バドミントンやカヌーなどの競技では、競技の歴史を紐解き、協会による競技全体の底上げの取り組みに着目した調査報道もなされた。また、競泳における速さの秘訣を身体的特徴などから説明しようとした報道には、日本人の身体についてのナショナリズムに彩られたステレオタイプは見当たらなかった。ただし、チームスポーツでは、「日本の戦い方」がクローズアップされ、体格で劣る日本が勝つためには俊敏さ、機動力、パスワークといった「日本」の特徴を生かした戦い方を強調する報道が顕著で、対戦相手国との戦力比較などの中でナショナリズム的な文脈が登場し、「日本の戦い方」が強調されるという構造がみられた。

競技の「日本」らしさをより鮮明に示しているのが「お家芸」という表現であり、柔道、シンクロナイズドスイミング、陸上 100×4 リレーのバトンパス、体操の報道にそれがみら

れた。そのうちの体操では、歴史や競技力や戦略などのジャーナリズム性を持った報道がメインであったが、柔道やシンクロナイズドスイミングは、競技の哲学や日本の戦い方というナショナルな文脈が強調された。監督・コーチを主役にした報道では、男性の監督の報道が、伝統重視、上下関係、家父長制と指摘されてきた従来の「監督・コーチ」のパターンから逸脱するものであったのに対して、女性コーチの報道は、近年批判されてきたスパルタ的指導を賛美するという対称的なものとなっていた。

平和運動としてオリンピックという視座からリオ大会を報じた事例は 2 件のみであり、オリンピックの理念と実態との乖離を象徴するドーピング問題などの報道も計 6 件にとどまり、NHK はオリンピック憲章を無視してメダル獲得総数の世界ランキングを報じている。このことは、各番組の報道がリオ大会の競技結果に偏重しているというだけでなく、オリンピックの理念への無理解とジャーナリズムとしての機能の弱体化を示すものと考えられる。

3〜4 章で明らかになったのは、第 1 に、ニュース番組においてもリオ大会報道が最重要項目に位置づけられ、日本のメダリストにスポットライトを当てた「人間ドラマ」仕立ての報道がなされ、そこには随所でジェンダーバイアスが作用しており、ナショナリズムの文脈の付与等もなされていることである。ニュース番組の報道内容については、すでに一定の研究の蓄積があり、上記の結論もそれらを追認するものであるが、量的および質的内容分析を併用することによって得られた本論文の結論は、報道内容の全貌とその内実をより深く掘り下げたうえでのものであり、より説得的なものとなっているはずである。

第 2 に、報道内容の全貌の解明がもたらしたもうひとつの成果として強調しておきたいのは、スポーツの技術や競技自体を伝える入念に準備された調査報道、差別的な規範やナショナリズムなどの価値観から抜け出した報道といった、従来の研究においては焦点の外に置かれていた事実にも光を当てたことである。それらの事実は積極的に評価すべきものであるが、問題なのはそれらが傍流的な位置しか占めていないことであり、これこそが日本のオリンピック報道の根本的な問題であると私は考える。それが日本のオリンピック報道がオリンピックの理念から乖離していることを象徴しているからである。平和運動という明確な理念をもった地球的規模のメガイベントであるオリンピックの中継や報道は、ほかの中継やニュースよりも多様な価値観や世界観を発信できる可能性をもっているはずである。このギャップの克服こそが求められている。

第 2 節　今後の課題

最後に本論文の今後の課題をあげておきたい。

第 1 に、放送体制、番組編成、放送内容の相互関連を実証的に究明することである。高額な放送権料を JC 方式で得て世界でも異例な放送体制を構築していること、オリンピック放送に偏重したテレビの番組編成、自国のメダリストに偏重した「人間ドラマ」仕立てといった報道内容、これら 3 つは深く結びついているように思われるが、本論文ではこれらを一直線的に結び付けなかった。三者とくに放送内容についての自律性を重視したためである。今後は、制作者へのインタビューなどによって、その相互関係を慎重に解明していく必要があると考えている。こうした検討によって、放送内容がそれほど「市場の論理に従う商業生産物」（ブルデュー 2000：141）となっているのか、制作者が「組み込まれている客観的な

関係のネットワークによって課される拘束の圧力」（ブルデュー2000：144）がどのようなものであるのかといった問題についても、さらに一歩接近することができると思われる。

本論文の第 1 章では、放送権をめぐる放送体制について欧米との比較を行ったが、第 2 章以降の番組編成および放送内容についてはそのような比較が一切できていない。海外のテレビニュースの選手報道では、どのような選手がどう描かれていたのか、それは「人間ドラマ」に偏っているのか、ジェンダーバイアスがあるのか、外国人選手の取り扱いはどうなのか。例えば、在英ジャーナリストの小林恭子は、2012 年ロンドン大会におけるイギリス BBC の報道について、選手が英国人ではない限り生インタビューを行わず、金メダル銀メダルを外国選手がとり、銅メダルを英国人選手がとった場合インタビューは銅メダル獲得者のみであったと振り返っている（小林 2012:51-3）。NBC の報道についてもトンプソンが指摘しているように自国の選手に偏重した報道が行われてきた（トンプソン 2017:21-33）。具体的な報道内容を比較検討することで、日本の報道の特徴をさらに明確化できるだろう。中でもまた、公共放送である英 BBC と NHK の比較は有益であると考えられる。こうした国際比較を第 2 の課題としてあげておきたい。

第 3 に、メッセージ分析の対象とする番組をさらに拡大することである。従来、メッセージ分析の対象となる番組ジャンルは多くの場合ニュースであり、本論文も同様であった。しかし、リオ大会直前に放送された NHK およびテレ朝の事前番組、そしてリオ大会直後に放送された NHK およびフジによる総集編、以上の 4 番組の中には、本論文で明らかにした様々なステレオタイプ、バイアスがより露骨に表現されていたとともに、バラエティ番組だからこその特殊な表現も散見された。特にバラエティ番組に関しては、テレビ研究の中でも周縁の存在としてとらえられてきたが、こうしたジャンルにも光を当てる必要があるだろう。

引用・参考文献

【学術論文、書籍等刊行物】(アルファベット順)

阿部潔, 2002, 「スポーツ・ドキュメンタリーのポリティクス―女子マラソン番組における『感動の物語』と『凄さの衝撃』」, 伊藤守編『メディア文化の権力作用』, せりか書房: 98-126.

————, 2008, 『スポーツの魅惑とメディアの誘惑: 身体/国家のカルチュラルスタディーズ』世界思想社.

————, 2018, 「「2020」から「1964」へ」『〈ニッポンのオリンピック〉』青弓社, 19-216.

青木紀美子, 大竹晶子, 小笠原晶子, 2022, 「連載メディアは社会の多様性を反映しているか ①調査報告 テレビのジェンダーバランス」『放送研究と調査』72 (5): 2-28.

————, 2022, 「今、テレビがジェンダーについて考えるべき理由」放送批評懇談会編『GALAC』(633): 30-3.

有馬明恵, 2007, 『内容分析の方法』ナカニシヤ出版.

————, 2012, 「メディアとスポーツ」国広陽子・東京女子大学女性学研究所編『メディアとジェンダー』勁草書房, 109-43.

ベーリンガー, ヴォルフガング著, 髙木葉子訳, 2019, 『スポーツの文化史 古代オリンピックから 21 世紀まで』法政大学出版局.

ベズニエ, ニコ他, 川島浩平他訳, 2020『スポーツ人類学ーグローバリゼーションと身体』共和国.

Billings, Andrew et al, 2014, "Fanfare for the American: NBC's Prime-Time Broadcast of the 2012 London Olympiad", *Electronic News*, 8(2), 101-19, August 13, 2014, (Retrieved December 30, 2022, https://journals.sagepub.com/authored-by/Billings/Andrew?startPage=0&pageSize=10)

Billings, Andrew , Jennifer Hargreaves, Ian McDonald, 2008, *Olympic Media：Inside the Biggest Show on Television*, Abingdon: Routledge.

ブルデュー, ピエール監修, 櫻本陽一訳, 2000=2008, 「付録 オリンピック――分析のためのプログラム」『シリーズ〈社会批判〉 メディア批判』藤原書店, 140-5.

ブルース, トニー, 2017, 「メディアの中のスポーツウーマン―オリンピック報道と日常的報道の国際的動向についての分析」『スポーツとジェンダー研究』15, 40-52.

Coad, David, 2008, *The Metrosexal：Gender, Sexuality, and Sport*, New York: State University of New York Press, Albany.

Coche, Roxane & C. A Tuggle, 2017, "Men or Women, Only Five Olympic Sports Matter: A Quantitative Analysis of NBC's Prime-Time Coverage of the Rio Olympics", *Electronic News*, 12(4), 199-217, November 12, 2017, (Retrieved December 30, 2022, https://journals.sagepub.com/doi/abs/10.1177/1931243117739061?journalCode=

enxa)
Creedon, Pamela J.，1994，*Women, Media and Sport: Challenging Gender Values*, London: Sage Publications.
ダヤーン，ダニエル，エリユ・カッツ，浅見克彦訳，1996,『メディア・イベント—歴史をつくるメディア・セレモニー』青弓社.
藤田多恵，2016,「視聴者から　リオデジャネイロから東京へ～オリンピックはどう見られたか～」TBS メディア総合研究所『調査情報』(533): 29.
藤原健固，1988＝2009,「スポーツとコマーシャリズム」森川貞夫・佐伯聰夫編著『スポーツ社会学講義』大修館書店, 113-23.
深沢弘樹，2009,「北京オリンピック報道における『物語』」山梨学院大学『山梨学院大学経営情報学論集』(15): 155-70.
コ，ウナ，2015,「韓国の神話的イコン『キム・ヨナ』——『企業ナショナリズムの台頭』——」土佐昌樹編著『東アジアのスポーツ・ナショナリズム　国家戦略と国際協調のはざまで』ミネルヴァ書房，27-46.
後藤和彦，1963,「編成批評を提唱する」放送批評懇談会『放送批評懇談会ニュース』2:3.
————，1963,「編成批評を提唱する」放送批評懇談会『放送批評懇談会ニュース』3:3.
萩原滋編著，2007,『テレビニュースの世界像——外国関連報道が構築するリアリティ』勁草書房.
浜田幸絵，2016,『日本におけるメディア・オリンピックの誕生　ロサンゼルス・ベルリン・東京』ミネルヴァ書房.
春原昭彦，2008,『【ゼミナール】日本のマス・メディア［第 2 版］』日本評論社.
橋本純一，1988=2009,「スポーツ・ジャーナリズム」森川貞夫・佐伯聰夫編著『スポーツ社会学講義』大修館書店, 246-9.
————，2002=2009,『現代メディアスポーツ論』世界思想社.
————，2011,「新たなスターの誕生に向けて——ヒーロー・ヒロインとメディア」『月刊民放』41(4): 22-5.
橋本一夫，1992,『日本スポーツ放送史』大修館書店.
橋本政晴，1997,「スポーツ番組の制作現場からみた『テレビ・スポーツ』に関する研究　擬似的なせめぎ合いとしてのテレビ・スポーツ」『スポーツ社会学研究』(5): 71-84.
早川武彦，2000,「テレビの放映権料高騰と放送・通信業界の再編」一橋大学スポーツ科学研究室『研究年報』: 30-41.
————，2005,「“メディアスポーツ”その概念について——スポーツの本質にねざすメディアスポーツ論に向けて」『一橋大学スポーツ研究』24: 3-12.
林晋子，2017,「オリンピック選手に対するステレオタイプ内容の探索的検討」『飯田女子短期大学紀要』34 集: 27-35.
樋口耕一，2014,『社会調査のための計量テキスト分析: 内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版.
平田竹男，2011,『なでしこジャパンはなぜ世界一になれたのか？』ポプラ社.

広瀬一郎，1997,『メディアスポーツ』読売新聞社.
日吉昭彦・黄允一，2011,「オリンピック前後における視聴者の対中国意識調査 インターネット調査の結果報告」『北京オリンピック報道』国際テレビニュース研究会: 6-27.
————・音好宏，2013,「テレビ番組の放映内容と放送の『多様性』その 3: 地上波放送および BS、CS 放送の内容分析調査」『情報研究』49: 19-42.
Ho, Michelle H. S.，2013，“Is Nadeshiko Japan “Feminine?，　Manufacturing Sport Celebrity and National Identity on Japanese Morning Television”，SAGE journals，December 16，2013，（Retrieved December 30，2022，https://journals.sagepub.com/doi/abs/10.1177/0193723513515891）
飯田貴子，2001,「シドニーオリンピックにおける新聞報道の分析」『日本体育学会大会号』社団法人日本体育学会: 216.
————，　2003,「新聞報道における女性競技者のジェンダー化:菅原教子から楢崎教子へ」『スポーツとジェンダー研究』(1): 4-14.
————，　2008，　「スポーツジャーナリズムにおける『女性』の不在: デスクへの調査から見えてくるもの」『日本体育学会大会予稿集』(58): 141.
————・井谷恵子編, 2004，『スポーツ・ジェンダー学への招待』明石書店.
池田勝・守能信次編, 1998，『講座・スポーツの社会科学 1　スポーツの社会学』杏林書院.
稲葉佳奈子，2001,「時の話題　表象としての女性アスリート」『現代スポーツ評論』(5): 172-8.
————2005,「スポーツとジスポーツとジェンダー研究のオルタナティヴに向けて:『ジェンダー・トラブル』論の視点から」『スポーツ社会学研究』13: 53-67.
————，2011,「なでしこジャパンのメディア言説:『震災後』とヘテロセクシズム」『現代スポーツ評論』(25)，140-4.
稲垣康介，2016,「矛盾までのみこんでいく五輪の魔力 問われる開催国メディアの視座」朝日新聞社『Journalism』(314): 15-23.
伊藤守編，2002,『メディア文化の権力作用』せりか書房.
————編，2006,『テレビニュースの社会学: マルチモダリティ分析の実践』世界思想社.
上瀬由美子，2007,「オリンピックにおける外国関連報道——テレビニュースに現れるライバル・フレーム」萩原滋編著『テレビニュースの世界像——外国関連報道が構築するリアリティ』勁草書房，271-90.
金山智子，2008,「数値だけでは分からない——ニュースの質的分析の手法」，小玉美意子編者『テレビニュースの解剖学——映像時代のメディア・リテラシー』新曜社，83-93.
神原直幸，2001,『メディアスポーツの視点 疑似環境の中のスポーツと人』学文社.
鹿島 我，2011,「テレビ番組におけるバラエティ番組の位置づけ」『京都光華女子大学短期大学部研究紀要』49: 69-80.
———，2013,「テレビ番組におけるバラエティ番組の分類 ： 創成期」『京都光華女子大

学短期大学部研究紀要』51: 19-26.
———, 2014,「テレビ番組におけるバラエティ番組の分類 ： 成長期」『京都光華女子大学短期大学部研究紀要』52: 13-24.
川喜田尚，2012,「多チャンネル時代のスポーツ専門放送」黒田勇編『メディアスポーツへの招待』ミネルヴァ書房, 57-75.
川本信正監修，1984,『オリンピックの事典』三省堂.
Kinkema, Kathleen M. & J.C Harris，1998, “Media Sport Studies: Key Research and Emerging Issues” , L. A. Wenner ed., *Media Sports*, London: Routledge, 27-56.
北原伸之・橋本茂，2012,「ロンドンオリンピック ジャパンコンソーシアム（JC）技術概要」『映像情報メディア学会誌』，66(12): 1016-22.
小林恭子，2012,「ソーシャルメディアの利用拡大——英国の五輪報道　現地リポート」日本新聞研究協会編『新聞研究』(734): 51-3.
小林直美，2016,「北京・ロンドンオリンピック開会式前後のニュース・フレーム ： 日本のテレビニュース報道の内容分析」『山形大学紀要. 社会科学』47(1): 35-67.
————, 2017,「ロンドンオリンピックにおける選手のジェンダー表象 ： テレビニュース内容分析」『山形大学紀要. （社会科学）』48(1): 19-48.
————, 2019,「SNS 時代におけるオリンピック報道 ～選手のダイバーシティはいかに表象されたか～」『平成 30 年度 ジェンダー問題調査・研究支援事業報告書』北九州市立男女共同参画センター.
————, 2020, 「オリンピックニュースとジェンダー ： 日本の報道傾向と新たなコミュニケーションの構築に向けて」『関西大学人権問題研究室紀要』(80): 2-24.
小玉美意子編，2008,『テレビニュースの解剖学　映像時代のメディア・リテラシー』新曜社.
————他，2012, 『北京オリンピック報道　テレビニュースは何を伝え、視聴者の対中国意識はどう変化したか』平成 20～22 年度科学研究費補助金研究成果報告書（20530484）,国際テレビニュース研究会.
小寺智和, 2022, 「テレビ朝日の取り組み」『映像情報メディア学会誌』76(2): 187-190.
古閑忠通，2013,「情報・バラエティ番組の演出要素 定量分析の試み ： プライムタイム番組の分析調査から」『放送研究と調査』63(5): 68-81.
国広陽子・東京女子大学女性学研究所編，2012,『メディアとジェンダー』勁草書房.
黒田勇，2005,『送り手のメディアリテラシー——地域からみた放送の現在』世界思想社.
————，2012,「メガイベントとメディアーオリンピックとワールドカップを中心に—」『メディアスポーツへの招待』ミネルヴァ書房, 35-53.
黒須朱莉，2022,「オリンピック・ムーブメントの主導者としての IOC とオリンピック」『現代スポーツ評論』(46): 116-28.
李光鎬，1998,「メッセージ分析による送り手研究: 主な研究事例と今後の課題」『マスコミュニケーション研究』53: 53-64.
Liao，Judy, Pirkko Markula，2009, “Reading Media Texts in Women’s Sports: Critical Discourse Analysis and Foucauldian Discourse Analysis”, *Olympic Women and The Media: International Perspectives*, England: Palgrave Macmillan, 30-

49.
マカルーン，ジョン・J 編，高山宏解説，光延明洋ほか訳，1988,『世界を映す鏡—シャリヴァリ・カーニヴァル・オリンピック』平凡社.
松本英士, 稲川俊一郎, 2022, 「オリンピック中継に関わる組織の概要」兼六館出版編『放送技術』75(3): 60-2.
松本賢二，2022, 「東京オリンピック中継 フジテレビの取り組み」『映像情報メディア学会誌』76(2): 197-200.
松瀬学，武藤芳照，金子えり子，2017,「リオデジャネイロ五輪から 2020 年東京五輪を考える—オリンピック大会の価値に着目して—」『オリンピックスポーツ文化研究』2: 87-97.
松瀬学，冨田幸祐，2022,「オリンピックの肥大化に関する社会学的研究 ：1980 年代の放送権料の高騰に着目して」『2022 オリンピックスポーツ文化研究』7: 101-13.
松山秀明，2017,「日本のテレビ研究史・再考～これからのアーカイブ研究に向けて～」NHK 放送文化研究所編『放送研究と調査』67(2): 44-63.
三浦宏一，佐藤達也， 佐藤誠二， 泉政希， 2022,「東京 2020 オリンピック テレビ東京の取り組み」『映像情報メディア学会誌』76(2): 194-6.
宮嶋泰子，2001,「テレビはスポーツを変えていく？」『現代スポーツ評論』(5): 94-8.
三宅和子・岡本能里子・佐藤彰，2004,『メディアとことば１』ひつじ書房.
森川貞夫・佐伯聰夫編著，1988＝2009,『スポーツ社会学講義』大修館書店.
森田浩之，2007,『スポーツニュースは恐い—刷り込まれる〈日本人〉』NHK 出版.
————， 2009， 『メディアスポーツ解体:〈見えない権力〉をあぶり出す』NHK ブックス.
————，2016,「スキャンダルまみれの『東京 2020』負のスパイラルから救う道はあるか？」朝日新聞社『Journalism』(314)，24-31.
森津千尋, 2022, 「2020 年オリンピック東京大会におけるスポンサーシップと新聞報道」『スポーツ社会学研究』30 (2): 85-99.
本橋春紀，2016,「オリンピック放送権は何の権利なのか　多くは『メディア権契約』として締結」朝日新聞社『Jounalism どう報じる？五輪・スポーツ』(314): 6-13.
向田久美子, 坂元章, 村田光二, 高木栄作, 2001, 「アトランタ・オリンピックと外国人イメージの変化」日本社会心理学会『社会心理学研究』16(3): 159-169.
村田光二，2007,『アテネ・オリンピック報道が日本人・外国人イメージに及ぼす影響』平成 16 年度-平成 18 年度科学研究費補助金研究成果報告書（16530398），一橋大学.
中川敏子, 2004, 「ソニヤ・ヘニーに見る女子選手の表象: アメリカにおける『銀盤の女王』の誕生をめぐって」『日本スポーツ社会学会』12: 81-9.
中小路徹，2012,「スポーツ取材実践論」『メディアスポーツへの招待』ミネルヴァ書房，171-87.
中正樹，日吉昭彦，小林直美，2015,「ロンドンオリンピック開催期間における日本のテレビニュース報道に関する内容分析」『ソシオロジスト:武蔵社会学論集』17(1): 147-82.

————，2011，「北京オリンピック開催期間におけるテレビニュース内容分析 1～ニュースの量的分析～」『北京オリンピック報道』国際テレビニュース研究会: 37-65.
中村敏雄，1995，『スポーツ文化論シリーズ④　スポーツメディアの見方、考え方』創文企画.
————，2001，「『スポーツは普遍か』の問い方」『現代スポーツ評論』(4)，108-19.
日本メディア英語学会メディア英語談話分析研究分科会訳，2012，『ディスコースを分析する　社会研究のためのテクスト分析』くろしお出版.
日本民間放送連盟，1961，『民間放送十年史』日本民間放送連盟.
————編，2001，『民間放送 50 年史』日本民間放送連盟.
————編，2017，『日本民間放送年鑑 2017』コーケン出版.
日本スポーツ社会学会編，2013，『21 世紀のスポーツ社会学』創文企画.
大橋充典・西村秀樹，2020，「日本におけるメディア・スポーツ研究のパースペクティブ」九州大学健康科学編集委員会『健康科学』42: 47-55.
岡田直紀, 藤雅樹, 星勇次, 橋詰聖仁, 村上洋平, 2022,「東京 2020 日本テレビユニ中継政策概要」『映像情報メディア学会誌』76(2): 183-6.
岡井崇之，2004，「言説分析の新たな展開: テレビのメッセージをめぐる研究動向」『マス・コミュニケーション研究』64: 25-40.
大川戸元昭，2011，「テレビ朝日における水泳中継の変遷」『映像情報メディア学会誌』(65)2: 166-70.
大野晃，1996，『現代スポーツ批判――スポーツ報道最前線からのレポート』，大修館書店.
小野善邦，2005，『放送を学ぶ人のために』世界思想社.
太田眞希恵，2011，「ウサイン・ボルトの”I”はなぜ「オレ」と訳されるのか: スポーツ放送の「役割語」」金水敏編『役割語研究の展開』くろしお出版，93-125.
————，2017，「再考 オリンピック放送の「役割語」："日本人選手を主人公とした「物語」"という視点から」NHK 放送文化研究所編『放送研究と調査』67(3): 26-45.
大谷順子，2013，「混合研究法の国際的動向」『社会と調査』(11): 12-21.
ポストマン，ニール，石川好監修，1995，『TV ニュース七つの大罪　なぜ、見れば見るほど罠にはまるのか』クレスト社.
Rosalind, Gill ，2007，*Gender and the Media*, UK: Policy Press.
Rose, Gillian，2007，*Visual Methodologies: An Introduction to the Interpretation of Visual Materials*，London: Sage Publications Ltd.
坂上康博，1998，『権力装置としてのスポーツ』講談社選書メチエ.
————，2015，「メガスポーツイベントのテレビ中継考」放送批評懇談会編『GALAC』556: 12-5 .
————・來田享子編，2021，『東京オリンピック 1964 の遺産—成功神話と記憶のはざま』青弓社.
佐久間勲，日吉昭彦，2017，「ロンドン・オリンピック大会と国民イメージの変化」『社会情報学』6(1): 19-32.
笹生心太，2020，「日本代表には『組織力』があるのか」『体育学研究』 65 (0): 659-76.

————, 2020,「スポーツと『認識的ナショナリズム』: 先行研究のレビューから」東京女子体育大学東京女子体育短期大学『紀要』55: 91-100.
————, 2021,「日本人選手は『身体能力』に劣るのか」『体育社会学』2: 77-88.
清水泰生・岡村正史・梅津顕一郎・松田恵示, 2006,「スポーツとことば:『古館伊知郎』とスポーツ実況」『スポーツ社会学研究』(14): 25-45.
下窪拓也, 2021,「オリンピックの開催が外国イメージに与える影響のメカニズムに関する一考察」『日本体育・スポーツ・健康学会予稿集』71: 65.
白井隆二, 桑原宏, 松田浩, 塩沢茂, 1964,「何が新方針を生ませたのか　オリンピック体制か？問題は――貫き通すかどうかにかかっている」放送批評懇談会『放送批評懇談会ニュース』16:6.
須藤春夫, 2005,「スポーツとメディアの融合: スポーツコンテンツの問題性」『スポーツ社会学研究』(13): 23-37.
杉本厚夫, 2005,『映画に学ぶスポーツ社会学』世界思想社.
杉山茂, 2011,『スポーツは誰のためのものか』慶応義塾大学出版会.
————, 2013,「『テレビスポーツ』、その進歩と発展の道程」『調査報道』510: 42-5.
砂川浩慶, 2016,「メディアは五輪をどう伝えるべきか」朝日新聞社『Journalism』(314): 13-4.
高木栄作, 坂元章, 1991,「ソウルオリンピックによる外国イメージの変化 ： 大学生のパネル調査」『社会心理学研究』6(2): 98-111.
高橋徹, 2006,「スポーツとニュース: その接続性の凡庸さにひそむ政治」伊藤守編『テレビニュースの社会学—マルチモダリティ分析の実践』世界思想社, 103-27.
滝口隆司, 2008,『スポーツ報道論—新聞記者が問うメディアの視点』創文企画.
多木浩二, 1995,『スポーツを考える: 身体・資本・ナショナリズム』ちくま新書.
トンプソン, リー, 1998,「スポーツとマスメディア」池田勝・守能信次編『講座・スポーツの社会科学 1　スポーツの社会学』杏林書院, 138-60.
————, 2008,「日本のスポーツメディアに見られる人種言説」『スポーツ社会学研究』(16): 21-36.
————, 2017,「史上もっとも成功したメディア・イベント ： アメリカにおける 2016 年リオ五輪のテレビ放送」『スポーツ社会学研究』25(1): 21-33.
————,　2013,「スポーツとメディアの長〜い付き合い: 明治期の新聞と大相撲の優勝制度の形成」, 日本スポーツ社会学会編『21 世紀のスポーツ社会学』創文企画, 195-217.
東京放送編, 2002,『TBS50 年史』東京放送.
トムリンソン, アラン, 1998,「スポーツ文化の社会学: ブリティッシュ・カルチュラル・スタディズの視点から」『変容する現代社会とスポーツ』世界思想社: 68-82.
鶴島瑞穂, 斉藤孝信, 2017,「2020 東京オリンピック・パラリンピックへの期待と意識〜『2016 年 10 月東京オリンピック・パラリンピックに関する世論調査』の結果から〜」NHK 放送文化研究所編『放送研究と調査』67(12): 2-29.
内田隆三, 2013,「スポーツの夢と社会過程:神話作用とその消失点をめぐって」日本スポーツ社会学会編『21 世紀のスポーツ社会学』創文企画, 41-65.

上杉慎一，東山一郎，2022,「コロナ禍の五輪　ニュースはどう伝えたか」NHK 放送文化研究所編『放送研究と調査』72(2): 2-29.
渡会環，2017,「リオデジャネイロオリンピック開会式にみる〈ブラジル〉の表象」愛知県立大学多文化共生研究所編『共生の文化研究』11: 6-12.
Wenner, Lawrence, 1998, *MediaSport*, London: Routledge.
八木真, 2022,「TBS ユニとしての東京オリンピックへの取り組み」『映像情報メディア学会誌』76(2): 191-3.
山本浩，2012,「スポーツ実況論」黒田勇編著『メディアスポーツへの招待』ミネルヴァ書房，189-206.
山本清文，2015,「ソチオリンピックにおける新聞報道の分析」花園大学文学部『花園大学文学部研究紀要』(47): 115-38.
————・武内麻美，2017,「ソチオリンピックにおける新聞報道の分析紀要 3 報：スキー競技における伝統種目と新種目に着目して」花園大学文学部『花園大学文学部研究紀要』(49): 1-13.
山本夏生，2018,「テレビのバラエティ番組がスポーツ／スポーツ選手を取り込む過程とその理由 ： スポーツバラエティ番組の制作者の意図を中心に」『一橋大学スポーツ研究』37: 37-52.
山本教人，2010,「オリンピックメダルとメダリストのメディア言説」『スポーツ社会学研究』(18): 5-26.
Yin, Robert K, 2003, *Case Study Research: Design and Methods*, California: Sage Publications.
横山滋，2007,「オリンピック・ニュースはなぜ“応援放送化”するか」萩原滋編著『テレビニュースの世界像——外国関連報道が構築するリアリティ』勁草書房, 291-310.
米倉律，2015,「テレビ番組における訪日外国人、国内在住外国人の表象 ： 地上波民放の『外国、外国人関連バラエティ番組』を中心に」『ジャーナリズム&メディア ： 新聞学研究所紀要』(8): 189-205.

【報道資料】

NHK 広報局，2012,「2014 年・2016 年オリンピック放送権の合意について」，日本放送協会，(2022 年 12 月 30 日取得, https://www.nhk.or.jp/pr/keiei/otherpress/120203.html).
日本放送協会，2016,「リオデジャネイロオリンピック放送計画」2016 年 7 月 20 日，（2018 年 4 月 1 日取得，https://www.nhk.or.jp/pr/keiei/shiryou/soukyoku/2016/07/008-1.pdf)
日本民間放送連盟，2012,「井上会長会見」，2012 年 9 月 20 日, (2022 年 2 月 23 日取得, https://j-ba.or.jp/category/interview/jba100871)
日本民間放送連盟，2014,「(報道発表）2018 年～2024 年のオリンピック放送権の獲得について」，日本民間放送連盟ホームページ，(2022 年 12 月 30 日取得，https://j-ba.or.jp/category/topics/jba101364).
日本民間放送連盟，2015,「リオデジャネイロオリンピック 民放テレビの主要中継種目に

ついて」，2015 年 12 月 17 日，（2018 年 4 月 1 日取得，https://www.j-ba.or.jp/category/topics/jba101643）.
日本民間放送連盟，2016，「（報道発表）リオデジャネイロオリンピック　民放テレビ放送の概要および共同ＰＲ展開について」，2016 年 7 月 7 日，（2018 年 4 月 1 日取得，https://www.j-ba.or.jp/category/topics/jba101909）
日本民間放送連盟, 2016, 「井上会長会見」, 2016 年 9 月 15 日(2022 年 10 月 31 日取得, https://j-ba.or.jp/category/interview/jba101941)

【参考ウェブサイト URL】
朝日新聞デジタル，2012，「ロンドン五輪、民放全体で初の赤字　放送権料高騰響く」，2012 年 9 月 21 日 0 時 13 分, (2021 年 10 月 9 日取得, http://www.asahi.com/olympics/news/TKY201209200429.html)
朝日新聞デジタル, 2016, 「リオオリンピック　国別メダルランキング」, 2016 年 8 月 22 日 12 時 15 分,(2022 年 12 月 30 日取得, http://www.asahi.com/olympics/2016/results/medal/)
Briam，Lowry，2016，“Five takeaways from NBC`s Rio Opympics coverage” CNNMoney，August 19，2016 (Retrieved，Nov 30，2020, https://money.cnn.com/2016/08/19/media/nbc-olympics-coverage-takeaways/index.html）.
Enos ，B，2022, “How Media Coverage Contributes to the Development of Sports and eSports” ENOS TECH , May 10, 2022, (Retrieved, Dec 30, 2022, https://www.enostech.com/how-media-coverage-contributes-to-the-development-of-sports-and-esports/)
藤原庸介，2016，「放送権とスポーツ」，笹川スポーツ財団，2016 年 10 月 17 日，（2022 年 12 月 30 日，https://www.ssf.or.jp/ssf_eyes/history/olympic_legacy/25.html）.
Huffpost Newsroom，2016，「日本の報道の自由度ランク 72 位、順位 10 以上後退」，2016 年 4 月 20 日 17 時 1 分，（2023 年 3 月 20 日取得，https://www.huffingtonpost.jp/2016/04/20/japan-journalism-liberty_n_9735558.html）.
International Olympic Committee，2017，「MARKETING REPORTS Rio2016」（2022 年 10 月 31 日取得，https://stillmed.olympics.com/media/Documents/Olympic-Movement/Partners/IOC-Marketing-Report-Rio-2016.pdf）.
International Olympic Committee，2021，「FUNDING」，（2023 年 1 月 10 日取得，https://olympics.com/ioc/funding）.
International Olympic Committee，2023，「Olympic Games Rio 2016 」(2022 年 10 月 31 日取得，https://www.olympic.org/rio-2016).
木村健一，2021，「競泳、北京以来の午前決勝　米 NBC がゴールデンタイム放送希望で」，朝日新聞デジタル，2021 年 7 月 24 日 11 時 50 分，（2022 年 12 月 30 日取得，https://www.asahi.com/articles/ASP7S3STSP7QOIPE02L.html）.
小林恭子, 2012, 「ロンドンの五輪のテレビ放送とは」日刊ベリタ，2012 年 07 月 29 日

18 時 24 分，（2023 年 1 月 31 日取得，
http://www.nikkanberita.com/print.cgi?id=201207291824580）
込山駿, 2022,「北京 2022 オリンピック『得するのはＮＨＫだけ』と五輪を嘆く人気アナ…民放はいつか活路を見いだせるのか」，読売新聞オンラインホームページ，2022 年 3 月 9 日 11 時 15 分，（2022 年 12 月 30 日取得，
https://www.yomiuri.co.jp/olympic/2022/20220308-OYT1T50192/3/）.
内閣府男女共同参画局総務課，2023,「世界経済フォーラムが『ジェンダー・ギャップ指数 2016』を公表」，男女共同参画局，（2023 年 3 月 1 日取得，
https://www.gender.go.jp/public/kyodosankaku/2016/201701/201701_04.html）
内閣府男女共同参画局，2022,「ジェンダー・ギャップ指数（GGI）2022 年」男女共同参画局(2023 年 3 月 1 日取得，
https://www.gender.go.jp/research/weekly_data/01.html)
NHK, 2022, 「報道の自由度 日本 世界 71 位“大企業の影響力 ”自己検閲促す」, 2022 年 5 月 4 日 6 時 14 分（2023 年 3 月 20 日取得，
https://www3.nhk.or.jp/news/html/20220504/k10013610921000.html）
日本経済新聞，2016,「報道自由度、日本 72 位に後退　特定秘密法など影響」，2016 年 4 月 20 日 20 時 42 分，（2023 年 3 月 20 日取得，
https://www.nikkei.com/article/DGXLASDG20H90_Q6A420C1000000/）
日本オリンピック委員会，2014,「1100 億円で IOC と合意 18～24 年の五輪放送権」，2014 年 6 月 19 日，（2021 年 1 月 30 日取得，
https://www.joc.or.jp/news/detail.html?id=5504）.
日本オリンピック委員会，2021,「オリンピック憲章」，（2022 年 12 月 30 日取得，
https://www.joc.or.jp/olympism/charter/pdf/olympiccharter2021.pdf）.
日本オリンピック委員会，2023,「日本代表選手団　編成数」（2022 年 12 月 30 日取得，
https://www.joc.or.jp/sp/games/olympic/riodejaneiro/japan/）.
日本パラリンピック委員会，2016,「大会概要 リオ 2016 パラリンピック競技大会概要」，日本パラリンピック委員会ホームページ，（2022 年 10 月 31 日取得，
https://www.parasports.or.jp/paralympic/rio/info/outline.html）.
ニホンモニター，2016,「リオ大会の競技中継総放送時間」（2018 年 4 月 20 日取得，
http://www.n-monitor.co.jp/pressreiease/2016/0825.html）.
日刊スポーツ，2014,「五輪選手を発掘へ合同トライアウトに 69 人」，2014 年 11 月 1 日 19 時 33 分，（2022 年 11 月 23 日取得，
https://www.nikkansports.com/sports/news/f-sp-tp0-20141101-1390601.html）.
Reporters without borders , 2022, 「2022 PRESS FREEDOM INDEX」(2023 年 3 月 20 日取得， https://rsf.org/en/index)
新聞通信調査会，2022,「メディアに関する全国世論調査」，新聞通信調査会ホームページ，（2022 年 12 月 30 日取得，
https://www.chosakai.gr.jp/project/notification/）.
スポーツ庁，2023,「2016 年リオデジャネイロオリンピック・パラリンピック競技大会の結果等について」（2023 年 1 月 22 日取得，

https://www.kantei.go.jp/jp/singi/tokyo2020_suishin_honbu/kaigi/dai5/sankou2.pdf).
スポニチ，2016，「リオ五輪民放収支は赤字、2 大会連続 放送権料高騰や治安対策で」2016 年 9 月 15 日 16 時 56 分配信(2022 年 10 月 9 日取得，https://www.sponichi.co.jp/entertainment/news/2016/09/15/kiji/K20160915013361970.html)
鈴木直，2021，「日本は『オリンピック神話依存症』　招致に明け暮れ 52 年 8 カ月」，毎日新聞，2021 年 5 月 26 日 8 時 00 分，（2023 年 2 月 22 日取得，https://mainichi.jp/articles/20210525/k00/00m/050/243000c）.
Video Research,2023,「沿革」（2019 年 4 月 20 日取得，https://www.videor.co.jp/company/history.html#06）.
Video Research，2023，「夏季オリンピック大会平均」（2022 年 12 月 30 日取得，https://www.videor.co.jp/tvrating/past_tvrating/sport/olympic-summer/03/post-9.html）
Video Research，2023，「2016 年年間高世帯視聴率番組 30（関東地区）」（2022 年 12 月 30 日取得，https://www.videor.co.jp/tvrating/past_tvrating/top30/201630.html）.
渡辺史敏，2021，「IOC に多大な影響力、米 NBC ユニバーサルの東京五輪放送計画」日経 XTECH，2021 年 7 月 13 日，（2022 年 2 月 22 日取得，https://xtech.nikkei.com/atcl/nxt/column/18/00729/00048/）.
山田健太, 2022, 「NHK は『五輪報道』で何を伝えようとしているか」毎日新聞, 2022 年 2 月 8 日,(2023 年 1 月 21 日取得，https://mainichi.jp/premier/politics/articles/20220205/pol/00m/010/008000c)

聴き取り調査の概要

2016 年 9 月 10 日（土）
　在ウィーンジャーナリスト稲木せつ子氏
　電子メールを通じた聞き取り調査（2016 年 9 月 9 日発信、2016 年 9 月 10 日受信）
2018 年 6 月 5 日（火）14 時 00 分～15 時 20 分
　テレビ東京社員 K 氏
　対面式による聞き取り調査（於六本木一丁目喫茶店）
2023 年 3 月 20 日（月）
　在ロンドンジャーナリスト小林恭子氏
　電子メールを通じた聞き取り調査（2023 年 3 月 20 日発信、2023 年 3 月 20 日受信）
2023 年 3 月 21 日（日）
　在ニューヨークジャーナリスト津山恵子氏
　電子メールを通じた聞き取り調査（2023 年 3 月 20 日発信、2023 年 3 月 21 日受信）
2023 年 3 月 28 日（火）
　在ウィーンジャーナリスト稲木せつ子氏

電子メールを通じた聞き取り調査（2023 年 3 月 14 日発信、2023 年 3 月 28 日受信）

謝辞

本論文の執筆、並びにここまで学生生活を送ることができたのは、スポーツ社会学という学問を通して、たくさんの方々と出会い、議論をしてきた日々のおかげであるとともに、家族の支えあってのものである。と、こうして自身を振り返った文章をサラリと書いてみると、キーボードで自然に「家族の支え」と打ってしまっており、人間が頑張れる理由には、やはり周囲の人間の存在が大きいということが、私の博士論文執筆という体験を通しても明らかになってしまった。ここでは少しだけ自身がなぜこのテーマに臨もうと思ったのか、私自身の“競技力”がどう育ってきたのかを回顧させていただければと思う。

一橋大学の大学院でスポーツ社会学を本気で勉強しようと思うまでの道のりはとても長かった。大学は上智大学の新聞学科、修士課程は東京大学大学院の学際情報学府、メディアやジャーナリズムのことを学び、考えることがとても楽しかった。大学の成績を首席で卒業したことで謎の自信を得た私は、その浮かれた気持ちのまま修士課程に進んでしまい、合格したときの私の研究テーマは、「日韓中のメディアの国際比較」であった。中国語も韓国語も喋ることができないのに、である。まだまだ学びたいという気持ちで進学してしまった修士課程での 2 年間は今思い返しても厳しい日々だった。周りの学友たちは研究したいものがハッキリしているからこそ進学してきたなかで、自分は違った。先行研究を検討しながら、自分で生み出さなければならないものの大きさにとても苦しんだ。そして修士 2 年目の春、やっと私はスポーツに向き合うことを決意したのである。その理由は序章の問題意識でも述べたとおりで、自身の体験をフル活用しなければ、修了できないと半ば危機感から選択したものだった。2014 年の夏、坂上康博先生に直接連絡させていただき、修士論文の相談にお伺いしたことを今でも鮮明に覚えている。尾崎正峰先生もいらっしゃって、お二人で、私の修士論文執筆の相談に寄り添ってくださり、ご指導いただいた。この 1 日のほんの数時間がなかったら、今の私はいないと強く思う。坂上先生には指導教官として、尾崎先生には論文指導委員として、親身にご指導いただきました。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

2014 年の春に決まった修士論文のテーマで、2015 年 1 月に修士論文を提出し修了、その 1 年後の 2016 年の春、満を持して一橋大学の大学院の博士後期課程でスポーツ社会学に全力で向き合う日々が始まった。大学院在学中も、ゼミ幹事や TA、日本スポーツ社会学会の世話人を 2 年間務めさせていただいたり、白梅学園大学での非常勤講師を勤めさせていただいたりと、環境に恵まれ、たくさんの刺激を受けることができた。2017 年には突然思い立って、イギリス・ロンドンで行われたロンドン、リオ、東京オリンピックに関するシンポジウムに参加し英語で発表して帰ってくるなどという無謀なこともした。日本スポーツ社会学会でも数回発表を行わせていただき、2021 年度には第 30 回大会で学生研究奨励賞（発表部門）に選考していただいたことで、博士論文執筆の背中をさらに押していただいた。体当たりでの発表を聞いてくださった方々から、たくさんの示唆を得、叱咤激励をいただいた日々でした。

その一方で、2015 年から NPO 法人放送批評懇談会という団体で職員としても働き始め

ていた。主な仕事はテレビとラジオの批評誌『GALAC』の編集担当であるが、この雑誌作りでの数々の人々との出会いがますます私の博士論文執筆への意欲を掻き立てた。ふつうには会えないようなテレビやラジオの制作者の方々に直接会い、取材したり、原稿を執筆してもらうことで、制作者がどんな思いで番組を制作しているのかを学ぶことができたのである。放送批評懇談会での批評活動に間近で接し、過去に大学院の先輩がおっしゃっていた「アカデミックとジャーナリズム、メディアの現場には乖離があるのではないか？」という言葉の意味を少しずつ理解していったように思う。私が研究できているのはテレビ番組が放送されているからであって、まずはその番組に感謝をしなければならない、と思うと同時に、もう少し違う表現やデータの示し方が可能なのであれば、それを分析し学問の立場から提示し続けることが必要なのではないか、と思うのである。

実は私が初めて有名人の取材に立ち会った人物が、松岡修造さんだった。今回、リオ大会の報道を見ていると、8 月 10 日放送のテレ朝「報ステ」で彼はこんなことを言っていた。「オリンピックを見たらコロンブスになれる。カヌー、7 人制ラグビー、日本で目にしない競技を見ました。実は日本では知らない競技でも世界で見ればメジャーな競技。実際見たらめちゃくちゃ面白い。気づいてなかっただけなんです。オリンピックとは、そのスポーツの新しい魅力とか見方を発見させてくれる。僕たちをコロンブスにさせてくれる。どうして気づけたのか？日本選手の頑張りですよね。選手達にとってオリンピックも大きなチャンス。自分の競技の魅力を僕たちに発見させる場でもある。コロンブスなんです」。すこし真っすぐすぎる言葉ではあるが、オリンピック報道を通して世界を見られることは、素敵なことであると思っている。「スポーツウォッシング」という言葉に注目が集まり始めた今の時代だからこそ、その機会を大切にしてほしい。

それは私自身が、フィンスイミングという競技で世界大会に出場し、リレーで銅メダルを獲得して日本の国旗が掲揚されたり、日本男子リレーが金メダルを獲得し、異国の地での国歌斉唱の経験もしたことで、日本を背負って世界で戦うという経験をほんの少し体験してしまったからでもあると思う。日本の国旗がマークされたジャージを着ていれば、自分は日本の代表なのだと、どうしたって強く認識させられる。世界の選手たちと競うことで、その体格差を目の当たりにした一方で、リレーで日本男子はフィンスイミング強豪国と言われるロシアに勝利して金メダルを獲得し、番狂わせを起こしたりもした。国際大会での経験は、まさにスポーツニュースの中に繰り広げられる物語を、私自身に経験させてくれたのである。

スポーツ経験だけでなく、多様なジャンルの番組制作者たちへの取材経験を含め、メディアの中で語り尽くされてきたキーワードの数々を私自身が実体験してきたことから、決して自分本位の論文とならないよう、たくさん軌道修正していただきながら最後まで書き進めてこられたことに、心から感謝しております。執筆中には、結婚出産とライフステージがガラリと変わり、このコロナ禍を経験しました。それでも博士論文だけは絶対にあきらめずに書き上げたいと踏ん張ってこられたのも、私の学生生活を支えて応援してくださった方々のおかげです。すべての方々のお名前を挙げることはここでは差し控えますが、この場を借りて、厚く御礼申し上げます。感謝の気持ちをずっと忘れないように、これからの自分ができることを追求し、考え、実践し続けたいと思っています。

2023 年 3 月　山本夏生